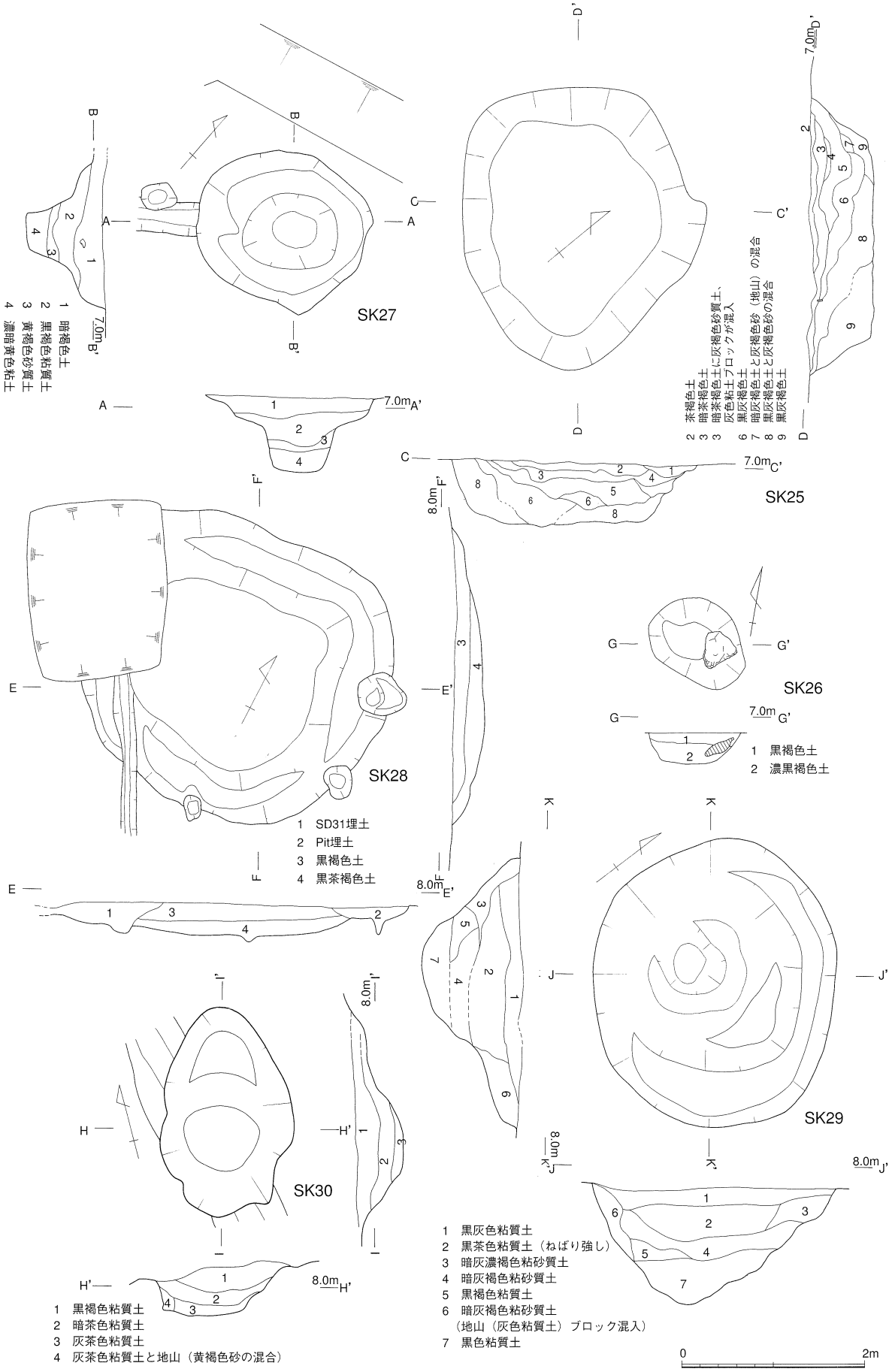
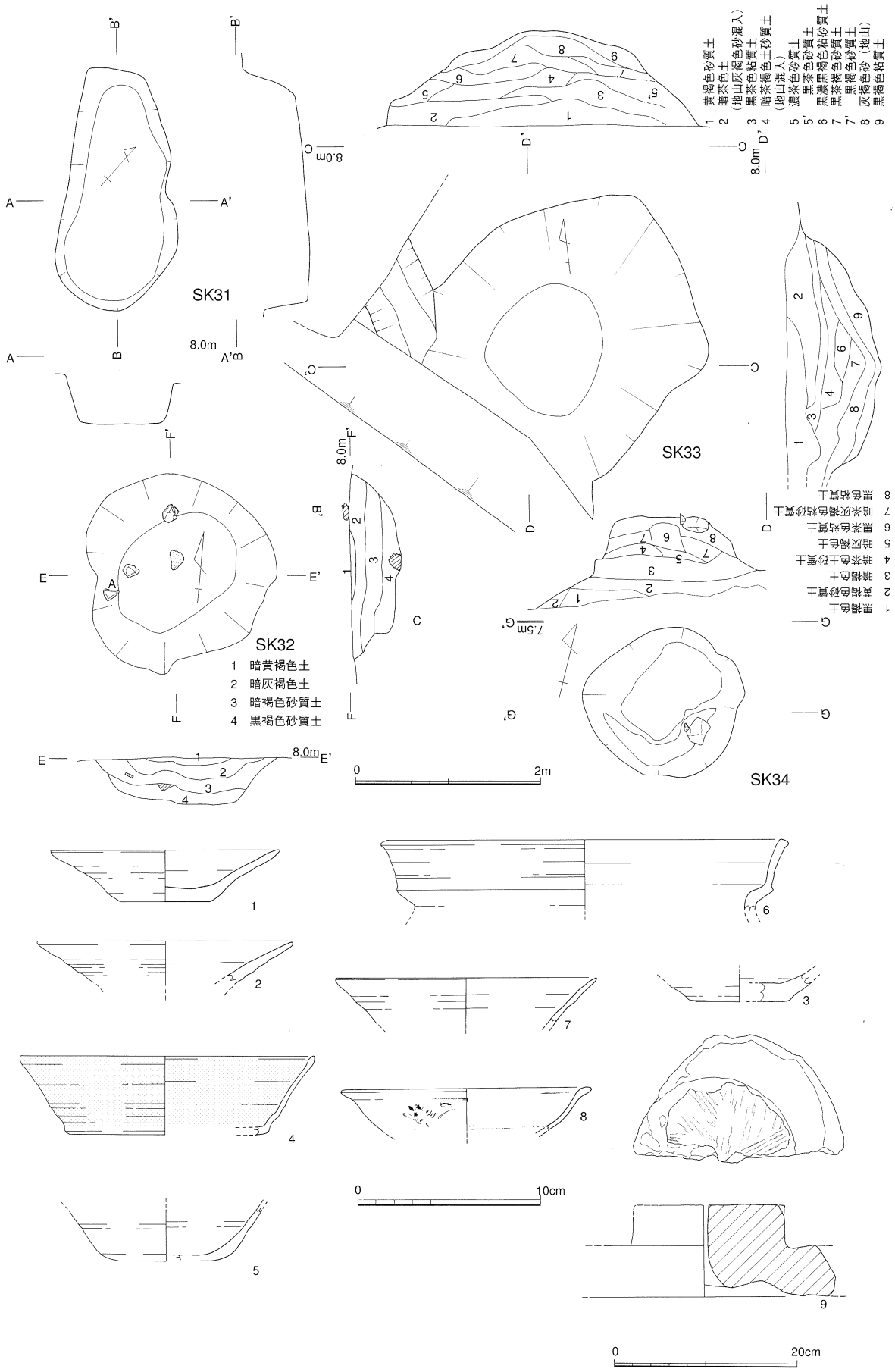
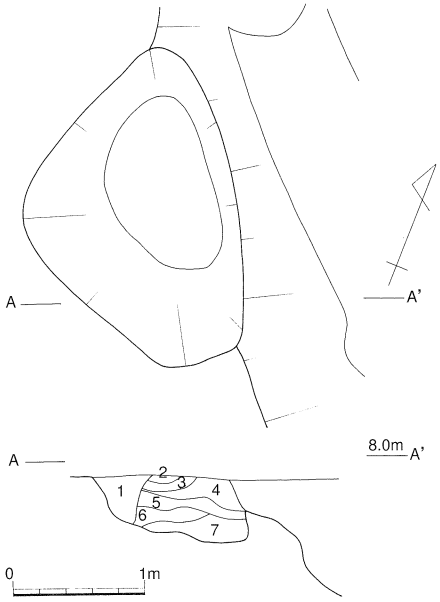


第95図　古志本郷遺跡SK25～34実測図1　（S=1／60）



第96図　古志本郷遺跡SK25～34実測図2・出土遺物実測図　（遺構S=1／60　遺物S=1／3）

が想定される。調査時にも多量の湧水があった。このような前提に立つと、２段にみえる上部第１・２層部分は、井戸の廃棄にかかかる掘削を示す可能性もある。



第97図 古志本郷遺跡SK35実測図 (S=1／60)

ＳＫ２８（第９５図）

規模・構造　Ｃ区中央北寄りにあり、規模は、推定で長径３.５ｍの楕円形をなす。深さは４０cm程度の浅い土壙で、ＳＤ３３に切られる。

出土遺物（第９６図－１・２）　１・２は土師質土器坏である。１は立ち上がりが急で途中から外反するタイプで、典型的な土師質土器Ⅳ期中段階の坏である。

年代・性格　ＳＫ２８の時期は出土遺物から土師質土器Ⅳ期に当たる。

ＳＫ２９（第９５図）

規模・構造　Ｃ区中央南端、ＳＥ０５の東に位置し、石群がない点を除くと、形態などＳＥ０５に類似する。規模は上端で長径３ｍ、短径２.６ｍほどで深さは１.３ｍを測る。断面は半円形をなし、底部の標高は６.４ｍである。なお、いくつかのステップを中間に持っている。

土層堆積状況　ＳＫ２７同様、最初の掘削とは別に再度掘削があったことが推測される（第１・２層）。ただし、最初の掘削から上部のステップ（第６層）はあったと考えられ、再掘削はその部分まで及んでいない。

年代・性格　出土遺物（第９６図－３）は小片であるが、中世の土師質土器であることは明らかである。性格については素掘りの井戸がまず想定される。ただし、上部の再掘削については、全体が埋没した後に行われているので、素掘り井戸の廃棄に伴うものとは考えづらい。

ＳＫ３０（第９５図）

規模・構造　Ｃ区中央やや南寄りに位置する。規模は長径２.２ｍを測る楕円形で、深さは６０cmほどである。ＳＤ３６に切られており、第９５図第１・２層はＳＤ３６の堆積土である。

土層堆積状況　第３・４層で中央と側に区分され、側は地山に近い砂質土である。

出土遺物（第９６図－４）　４は土師器坏で、底部を除き内外面赤彩である。

年代・性格　ＳＫ３０の時期は奈良・平安時代と考えられる。土壙墓の可能性がある。

ＳＫ３１（第９６図）

規模・形態　Ｃ区中央南寄り、ＳＫ３０の西に位置する。規模は長径２.６ｍ、短径１.３ｍ、深さ０.５ｍを測り、ＳＫ３０に類似する。なお、埋土は黒褐色系の土であった。ＳＤ３７を切る。

出土遺物（第９６図－５）　５は、回転ナデによって整形される土師器坏で、底部外面を除き内外面赤彩である。底部は最終的にはナデられている。

年代・性格　出土遺物からＳＫ３１の年代は、奈良・平安時代と考えられる。性格については、ＳＫ３０同様、土壙墓の可能性がある。

ＳＫ３２（第９６図）

規模・形態　Ｃ区西側中央に位置する。直径２ｍ前後のほぼ円形をなし、深さは０.５ｍを測る。底部も直径１.２ｍほどの円形で、断面は半円形をなす。径３０cm大の石が埋土に含まれていた。ＳＤ３８を切る。

年代・性格　出土遺物はなく、年代は不明であるが、ＳＤ３８を切ることから、古墳時代前期以降であり、埋土などからは中世の遺構と推測される。

ＳＫ３３（第９６図）

規模・構造　Ｃ区調査区西片に位置する。規模は上端で直径３ｍの不整円形をなし、下端で直径１.５ｍ、深さは１.０ｍ程度で、底部の標高は６.７ｍ前後である。ＳＤ３９を切る。

出土遺物（第９６図－６）　６は口径２２cmを測る大型の複合口縁の甕で、草田６期に相当する。この他、出土遺物には図化できなかったが土師質土器小片が若干存在する。

年代・性格　ＳＫ３３の時期はＳＤ３９を切ることと、土師質土器小片の出土から、中世以降である。遺構の性格としては素掘り井戸が想定される。

ＳＫ３４（第９６図）

規模・構造　Ｃ区南西隅に位置する。直径１.８ｍ深さ１.０ｍを測り、底部の標高は６.４ｍ前後である。なお、図示していないが、上面には多数の石が埋め置かれていた（図版３０）。完全にＳＤ１８埋土上に掘り込まれている。

土層堆積状況　上層の第１～３層と下層６～８層に別れる。下層は６層と７層の間に木質の土壌化した個所があり、この部分が井筒であったと考えられる。

出土遺物（第９６図－７～９）　７は土師質土器坏である。８は磁器碗で内面に３条の界線を廻らし、外面に染付する。９は茶臼である。高さ１０.５cm、擦り面の直径１８cmを測り、擦り面は６区に別れ４～５条が施条される。

年代・性格　年代は出土した遺物から中世末～近世初頭のものと推測される。遺構の性格は井戸と考えられ、廃棄時に上部を破壊されたものと思われる（第１～３層、上層の石群）。

ＳＫ３５（第９７図）

規模・構造　Ｃ区西側中央に位置し、長辺２.５ｍ、短辺２.０ｍの三角形状をなし、深さは５０cm程度で、黒褐色系の砂質土が堆積していた。ＳＤ１７に切られている。

年代・性格　出土遺物はなく、遺構の時期は明確でないが、ＳＤ１７に切られていることから、古墳時代前期以前である。性格は不明である。

Ｈ、大溝

ＳＤ１６（第６２、９８～１０３図）

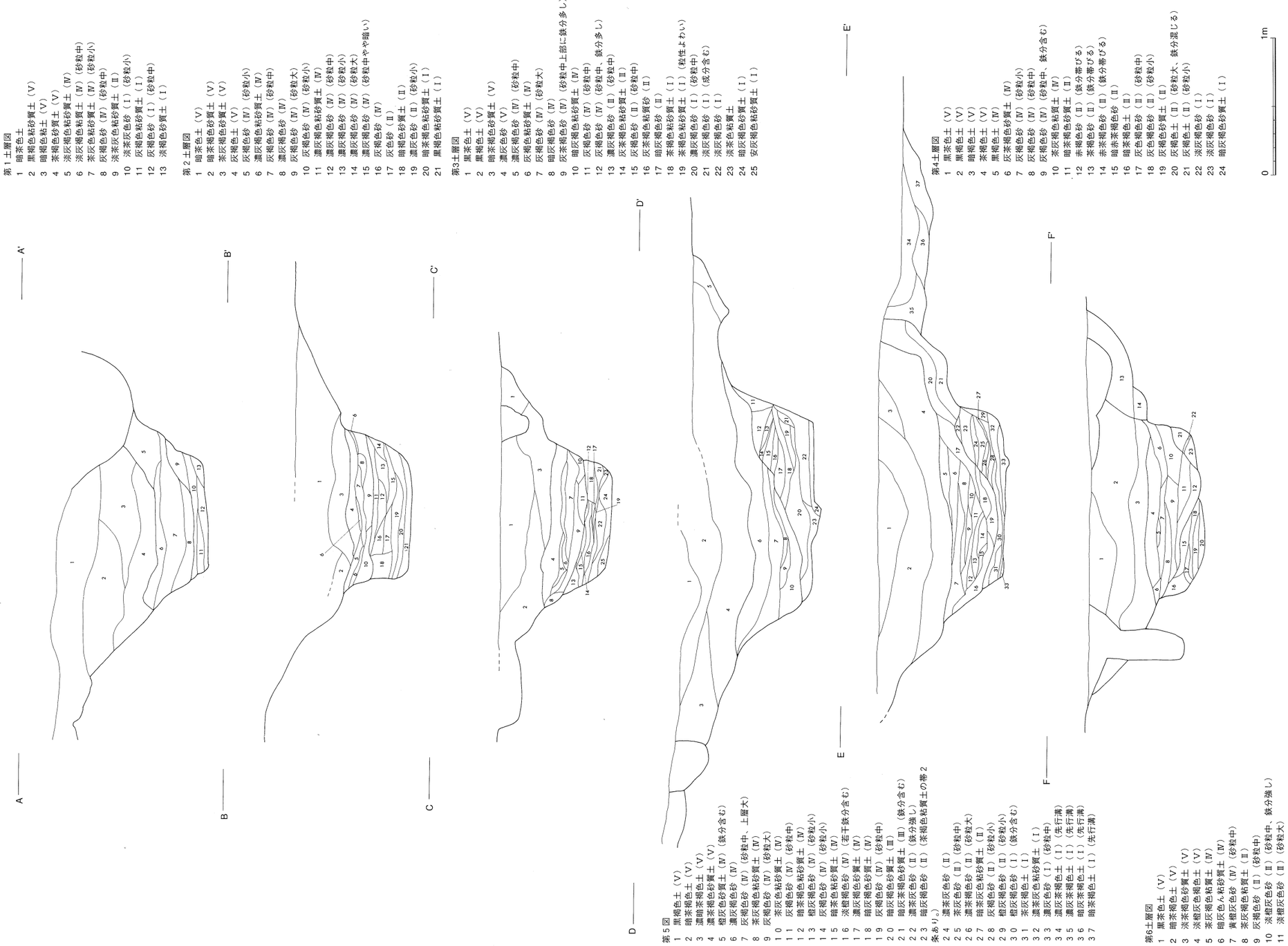
規模・形態　Ｃ区中央を、南東から北西に向かって貫流する大型の溝である。全体で５０ｍ程を検出しており、航空写真では南側に連続すると思われる、土壌の黒い部分が検出されている（図版４９）。溝はちょうど調査区の中央付近でくの字状に西側に約３０°振れ、おおむねＮ－４０°－Ｗを指向する。ただし、基本的には直線的な溝ではなく、若干蛇行するものである。規模は、基本的には上幅で２.０～２.５ｍ、底部で０.５～１.０ｍ前後で、深さは１.２～１.５ｍを測り。底部の標高は、南側で６.８ｍ、北側で６.６５ｍである。問題となるのは、調査区中央、第１０２～１０３図付近で、ここでは、上幅が３.５～５.０ｍに広がり、断面ＥＥ'（第９８図）で見るように浅い溝状の遺構が東側に位置し、溝の本体部分に切られていることがわかる。この東側に広がる浅い溝状遺構については、出土遺物なども異なっていることから、ＳＤ１６先行溝（以下先行溝と略）と仮称する。

この東側に広がる部分を除くと、断面は逆台形に統一されているが、これは最初の掘削段階の形状で、掘り返し時の形状はそれぞれに異なっている（後述）。また、南側には長径２.６ｍほどの楕円の土壙状の部分があるが、この土壙状の遺構は完全にＳＤ１６に切られており、出土遺物もないことからＳＤ１６との関係、機能等は不明である（第１０３図参照）。

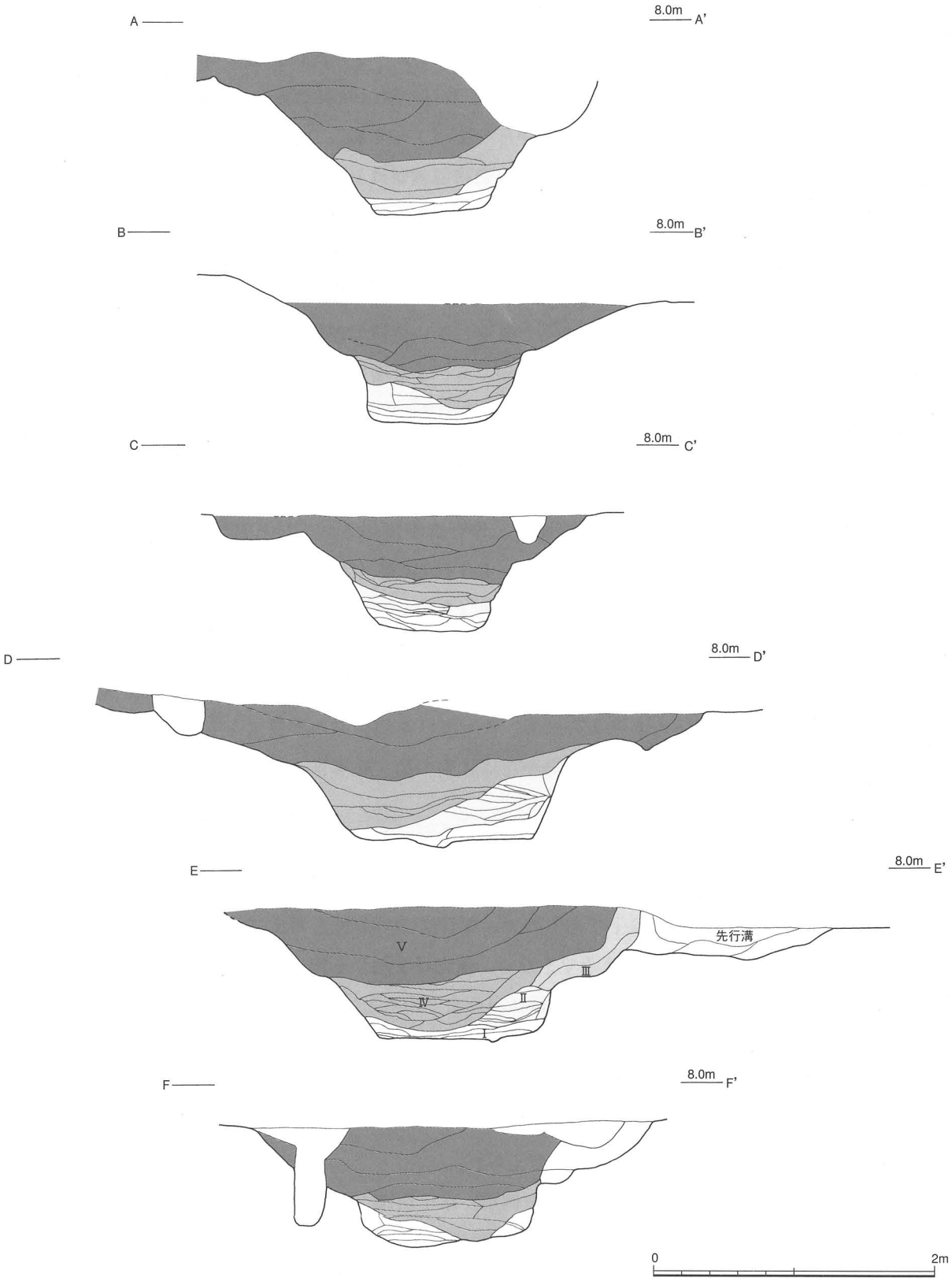
土層堆積状況　土層堆積状況は合計６カ所で確認した。第９８図はすべて南側から見通した図面になっているが、実際の観察は北側から行ったもの（ＣＣ'・ＤＤ'・ＥＥ'）があり、それらの写真図版と第９８図は左右が逆になっている。また、確認した地点の設定が不適切なものがあるが（ＣＣ'・ＤＤ'）これらの部分でも、実際の幅に大差はない。なお、ＡＡ'とＢＢ'の間をＩ区とし、以下Ⅵ区（ＦＦ'以南）までを設定した。最初に概要を述べると、本大溝は最後に埋没するまでに最低４回の再掘削が認められる（先行溝除く）。これに、最初の掘削の埋土が加わるので土層は５層に大きく分けることができる。以下、最初の掘削の埋土をＩ層、第一回目の再掘削層をⅡ層とし、都合Ⅴ層までを設定し、土層ＡＡ'～ＦＦ'に説明を加える。

ＡＡ'　調査区北片で確認した土層図である。地山以上はすぐに調査区の堆積土層（奈良・平安時代以降）が及んでおり、本来の溝の上端は検出できないことがわかる。また、ＳＤ３２がＳＤ１６を切る様子も見ることができる。土層は上からⅤ層（２～４層）、Ⅳ層（５～８層）、Ⅱ層（９層）、Ⅰ層（１０～１３層）が堆積する。Ⅴ層は黒褐色系の土で粘性もあり、遺物を包含する。一方砂層は見られないことから、この時点ではほぼ流水はなかったと推測される。調査時にも湧水はほとんどなかった。断面は半円上を呈し、Ⅳ層以下の溝の上端を切っていることから、この時点でＳＤ１６は幅的には最大に達したものと考えられる。Ⅳ層以下は無遺物層である。Ⅳ層は褐色系の粘砂質土と、砂層が堆積する土層で、ＡＡ'では上層のみが粘性を持っている。９層はその標高からⅡ層と考えられる。粘砂質土である。Ⅰ層は砂層と粘質土層の互層をなし、確実に流水があったと考えられる土層である。１３層のように、溝内部で局所的に現れる層もあるが、流水によるものか、再掘削によるものかは判然としない。

ＢＢ'　北から二番目に確認した土層である。上からⅤ層（１～４層）、Ⅳ層（５～１５層）、Ⅱ層（１７～１９層）、Ⅰ層（２０・２１層）からなる。遺物を包含していたのはＡＡ'同様に第Ⅴ層のみである。この地点では、Ⅳ層を詳細にとらえることができた。Ⅳ層はＡＡ'と異なり、Ⅴ字状の断面



第98図　古志本郷遺跡SD16土層図1　(S=1／30)



第99図　古志本郷遺跡SD16土層図2　(S=1／40)

を呈している。また、砂・砂質土の互層から、Ⅳ層でも流水を想定できる。１２～１４で横並びに堆積する土層を確認することができ、一時期における流水の幅は１２層を形成する程度であったと考えられる。Ⅱ層は西側１８層と東側の１６・１７層に分けられる。このうち１８層は地山は異なるやや腐植土化した土層であり、溝の肩が崩れたというような状況は想定しづらく、Ⅱ層の中で再掘削が行われたことを推測させる。Ⅰ層の下から２番目の層は砂層である。

ＣＣ'は北から三番目の土層図である。上からⅤ層（１～４層）、Ⅳ層（５～１２層）、Ⅱ層（１３～１８層）、Ⅰ層（１９～２５層）が堆積する。遺物包含層はⅤ層のみである。Ⅳ層は断面図中東側に寄る。Ⅱ層１８は、ＢＢ'の１８層に対応するものであり、Ⅰ層の一部にもみえるが１７層の底部と１８層の底部のレベルが一致することからⅡ層と判断した。ＢＢ'同様にⅡ層内での再掘削を想定させる。Ⅰ層の下から２層目はＢＢ'と異なり地山に近い砂質土層である。

ＤＤ'は中央近くの土層図である。溝の軸と直交しない位置で確認したために、他の土層図より溝が広めにみえる。上からⅤ層（２～５層）、Ⅳ層（６～１０層）、Ⅱ層（１１～２１層）、Ⅰ層（２２～２４層）の順で堆積する。遺物包含層はⅤ層のみである。Ⅳ層を見るとＣＣ'までと異なり断面図中西側に寄り、７層と８・９層の間に不自然な断絶が見られ、この間に再掘削が想定できる。第Ⅰ層の下から２層目はＣＣ'同様砂質土である。

ＥＥ'中央は南寄りで確認した土層断面で、先行溝が検出されている部分である。上からⅤ層（１～４層）、Ⅳ層（５～１９層）、Ⅲ層（２０・２１）、Ⅱ層（２２～２９）、Ⅰ層（３０～３３）とすべての土層が検出され、Ⅲ層に切られる先行溝（３４～３７）が確認された。Ⅳ層は断面西側により、５～１４層までと１６～１９層までに二分することができ、両者の間に再掘削を読み取ることができる。Ⅲ層は残存する部分が少なく、元の形状を窺いづらいが、Ⅳ層に中央部を完全に切られることから浅いものであったと考えられる。先行溝は茶褐色系の砂質土を主体とする堆積で、Ⅲ層に切られるのは確実であるが、出土遺物からは弥生中期、松本Ⅳ－２期には埋没したと考えられる（後述）。

ＦＦ'は一番南で確認した土層断面である。上からⅤ層（１～４層）、Ⅳ層（５～１２層）と堆積する。Ⅳ層はまたやや東寄りに寄る。次の第１３・１４層は、位置的にはⅢ層、あるいは先行溝に当たる。堆積土は茶褐色系の砂質土であるので、先行溝の可能性を考えておきたい。その下にⅠ層（１５～２３層）が堆積し、Ⅱ層は確認できない。遺物はⅤ層から出土する。

土層堆積状況のまとめ　ＳＤ１６の土層堆積状況をまとめると、次のようなことを指摘できる。

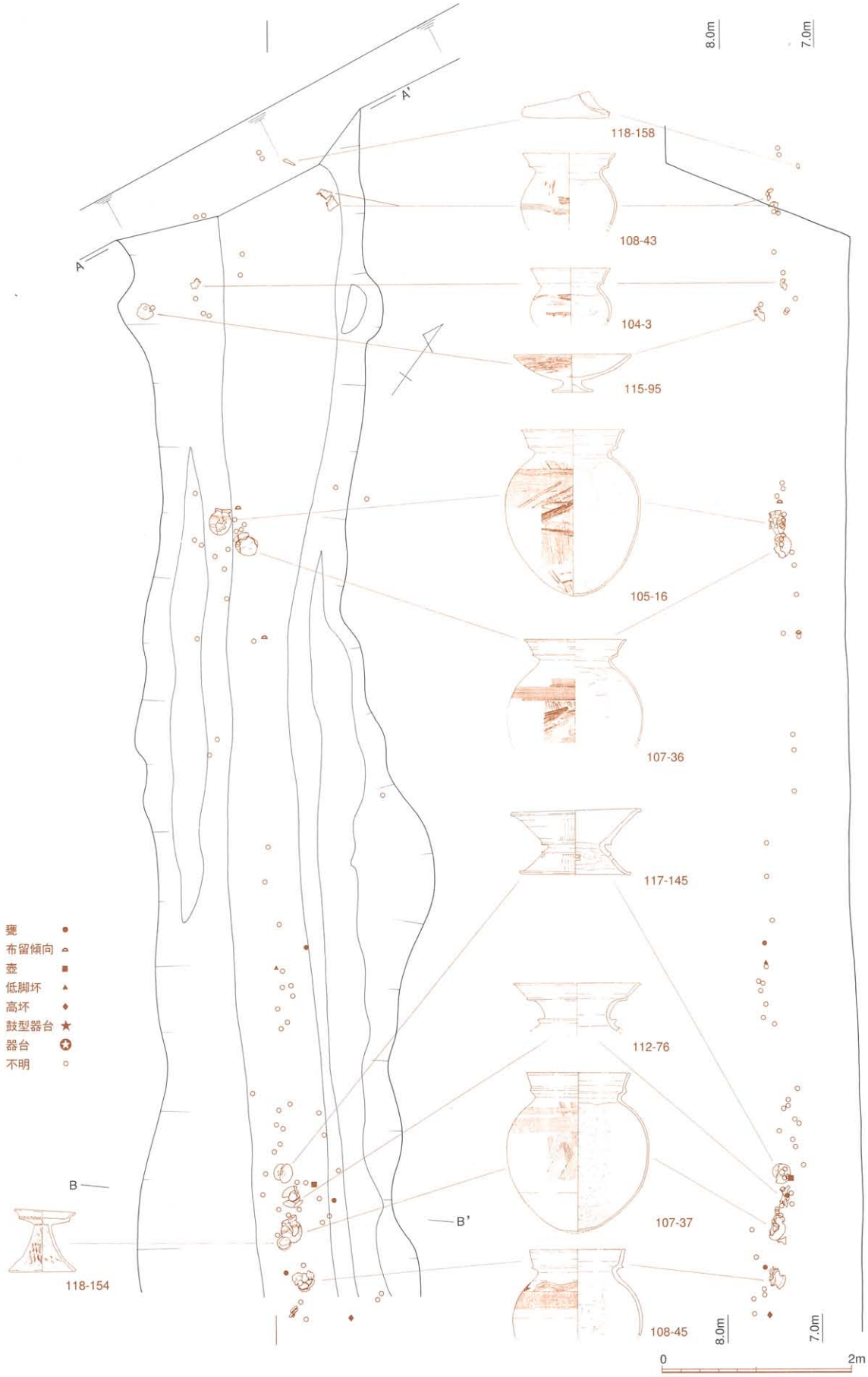
１　溝の断面形状はⅣ層でＶ字、Ⅴ層は半円をなす。Ⅱ層はⅠ層同様逆台形である。

２　遺物が出土するのはⅤ層だけである。また、Ⅴ層では流水は確認できないことことから、Ⅳ以下とは性格が異なっている。

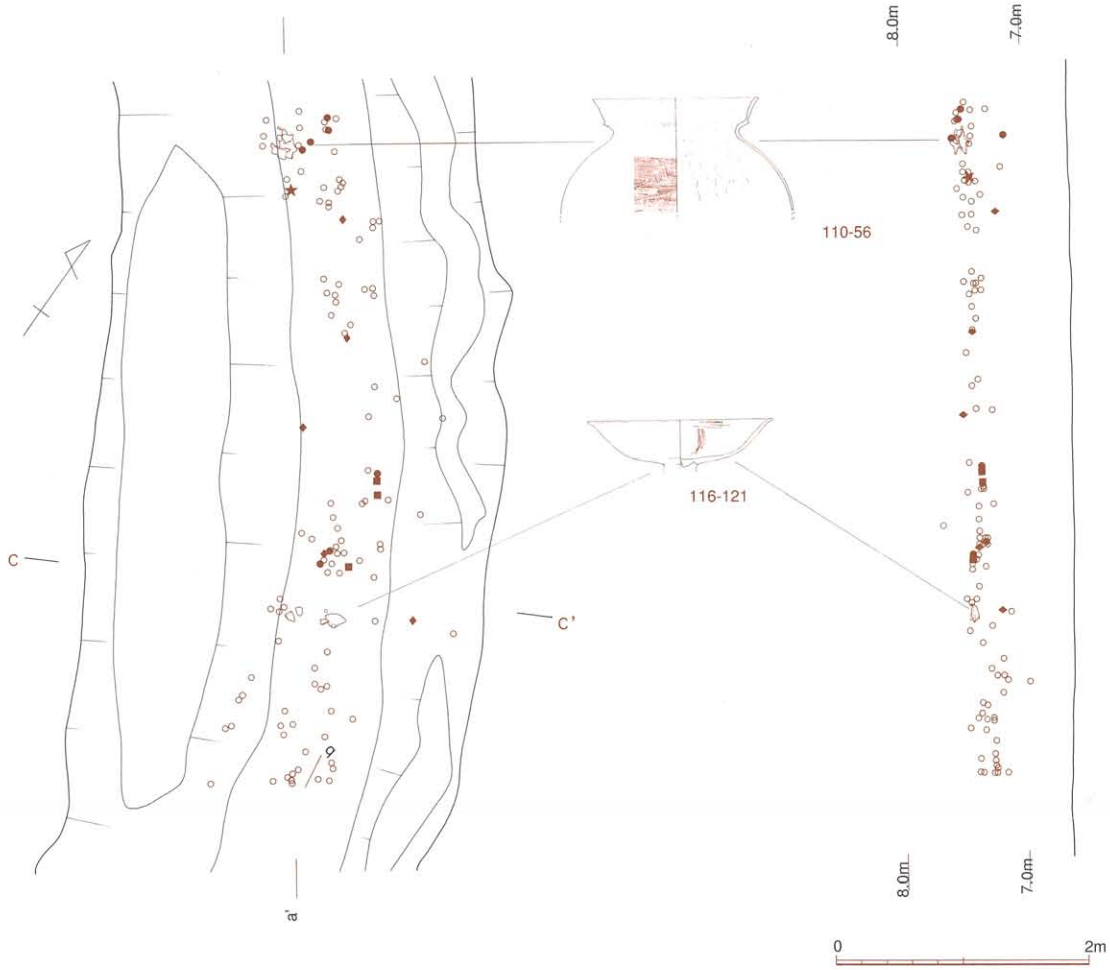
３　Ⅳ・Ⅱ層内でさらに再掘削があったと考えられ。

４　Ⅰ層の堆積状況（下から二番目の土層を例示）は土層図ごとに異なっており、これは溝の縦方向にラミナが形成されたこと、すなわち流水を想定させる。ただし、砂層の間には黒褐色化した土壌も見られるので、流水の停滞していた時期もある。すなわち、各再掘削された溝はある程度の期間、埋没せずに存在したものと考えられる。

５　流水が想定されるⅣ層までには遺物はまったく含まれていなかった。流水時には土器が流入し



第100図　古志本郷遺跡SD16遺物出土状況図1　（遺構S=1／60　遺物S=1／9）



第101図　古志本郷遺跡SD16遺物出土状況図2　（遺構S=1／60　遺物S=1／9）

ないような状態だったと考えられる。

6　Ⅲ層はＥＥ’でしか確認できなかった。すなわちⅢ層からⅣ層にかけては溝の拡張があったと見てよいものと思われる。

7　先行溝も、大部分がＳＤ１６に重なって消滅したものと思われる。

8　Ⅳ期の溝の位置を見ると、溝全体が西にふれる部分では東寄りに（Ａ～Ｃ、Ｆ）、溝が東に張り出す調査区中央部では東に振れており（Ｄ・Ｅ）、完掘状況より屈曲は弱く、滑らかな円弧状　をなしていたと考えられる。

9　１・２・６・８から、時期は不明であるがⅣ層の形成期、Ⅴ層の形成期に大溝ＳＤ１６の中でもの画期を認めることができるであろう。

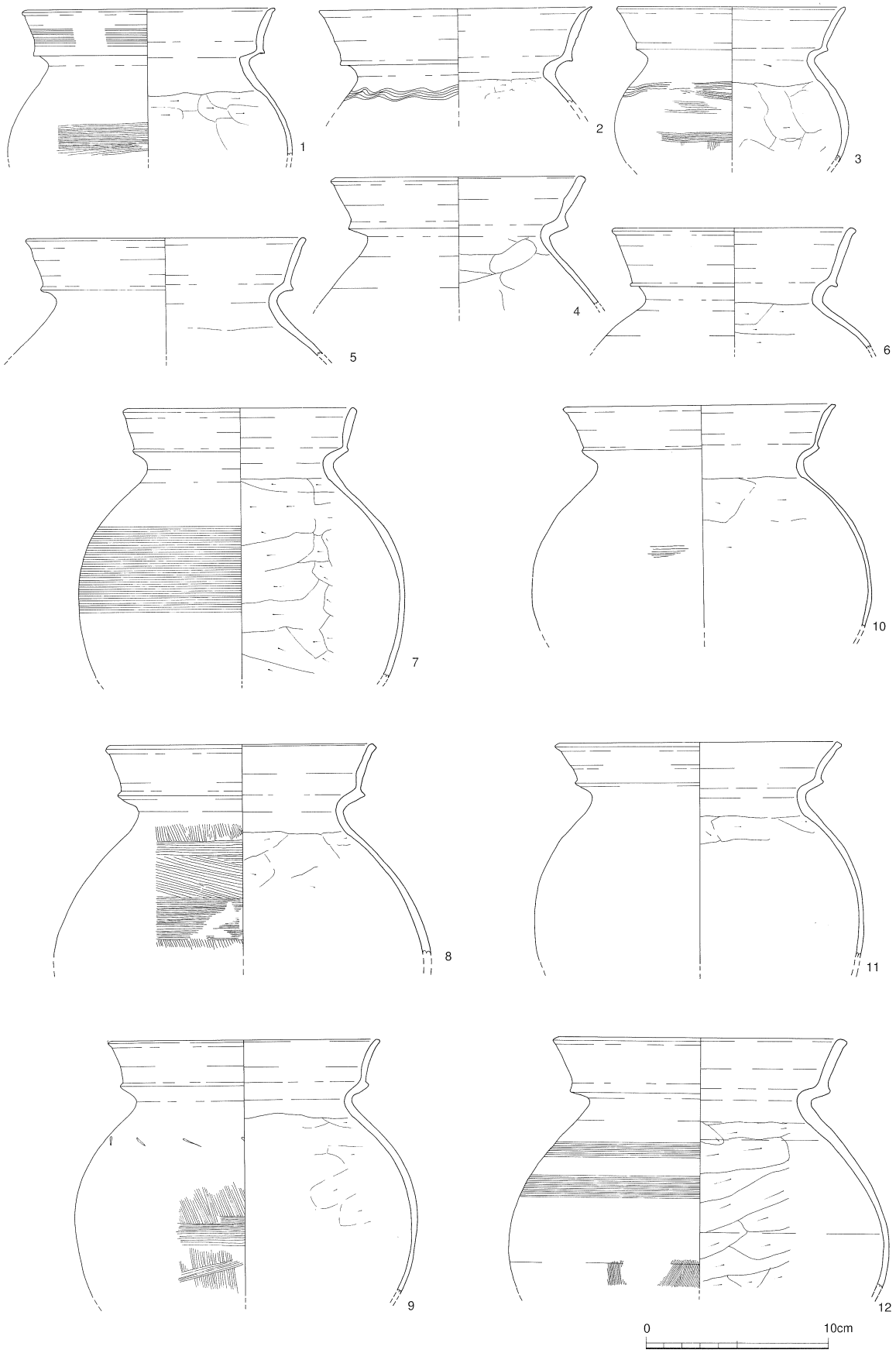
遺物出土状況（第１００～１０３図）

遺物の出土地点　遺物出土状況図の器種を記号で示してあるものは、実測図を掲載したものの出土地点である。したがって、遺物の大小にかかわらず点で示してある。特に破片が大きく出土状況がわかるものは図化した。

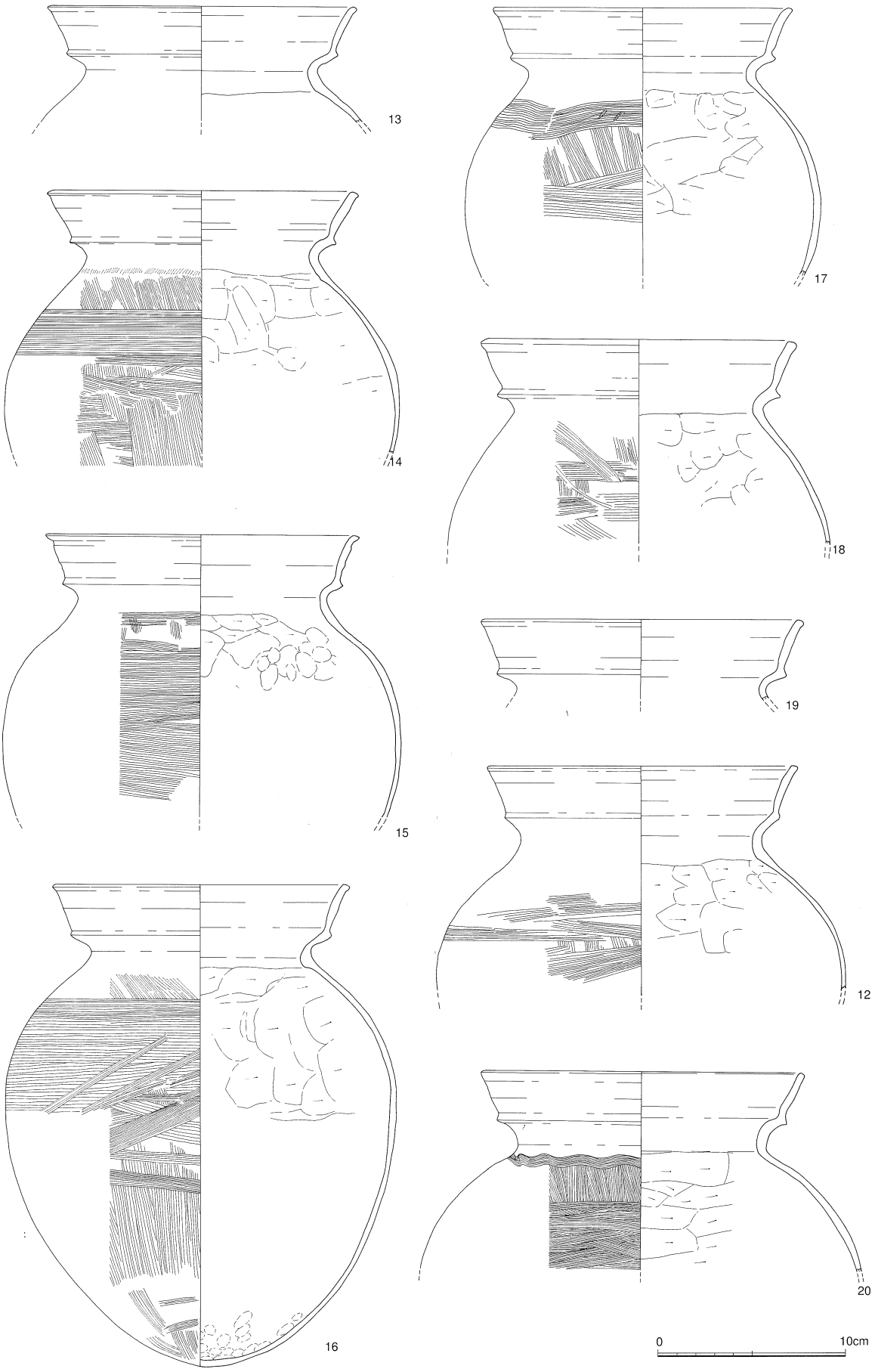
出土の形態　遺物出土状況は、溝内でも地点によって異なる。

第102図　古志本郷遺跡SD16遺物出土状況図3　（遺構S=1／60　遺物S=1／9）

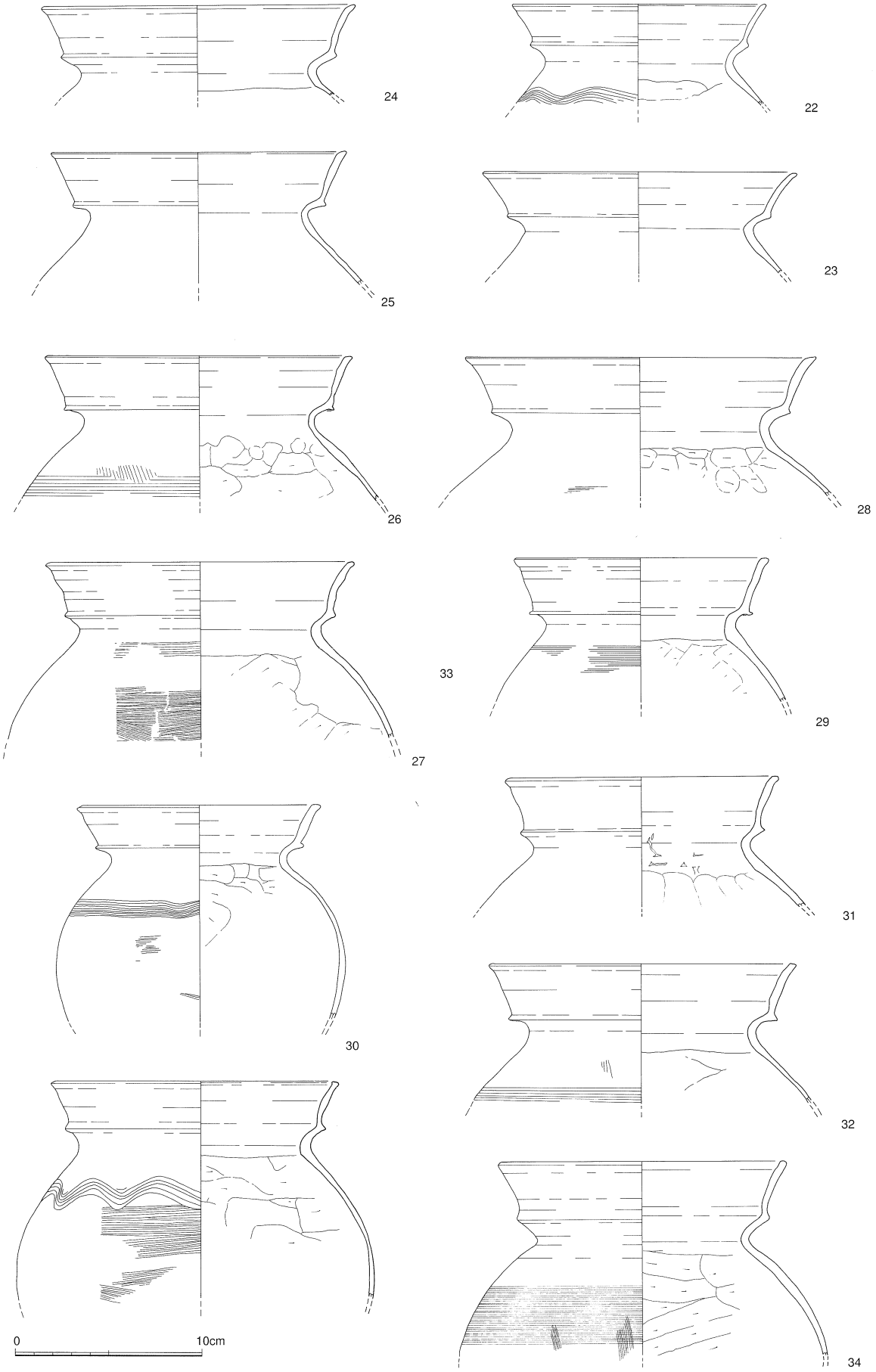
第103図　古志本郷遺跡SD16遺物出土状況図4　（遺構S=1／60　遺物S=1／9）



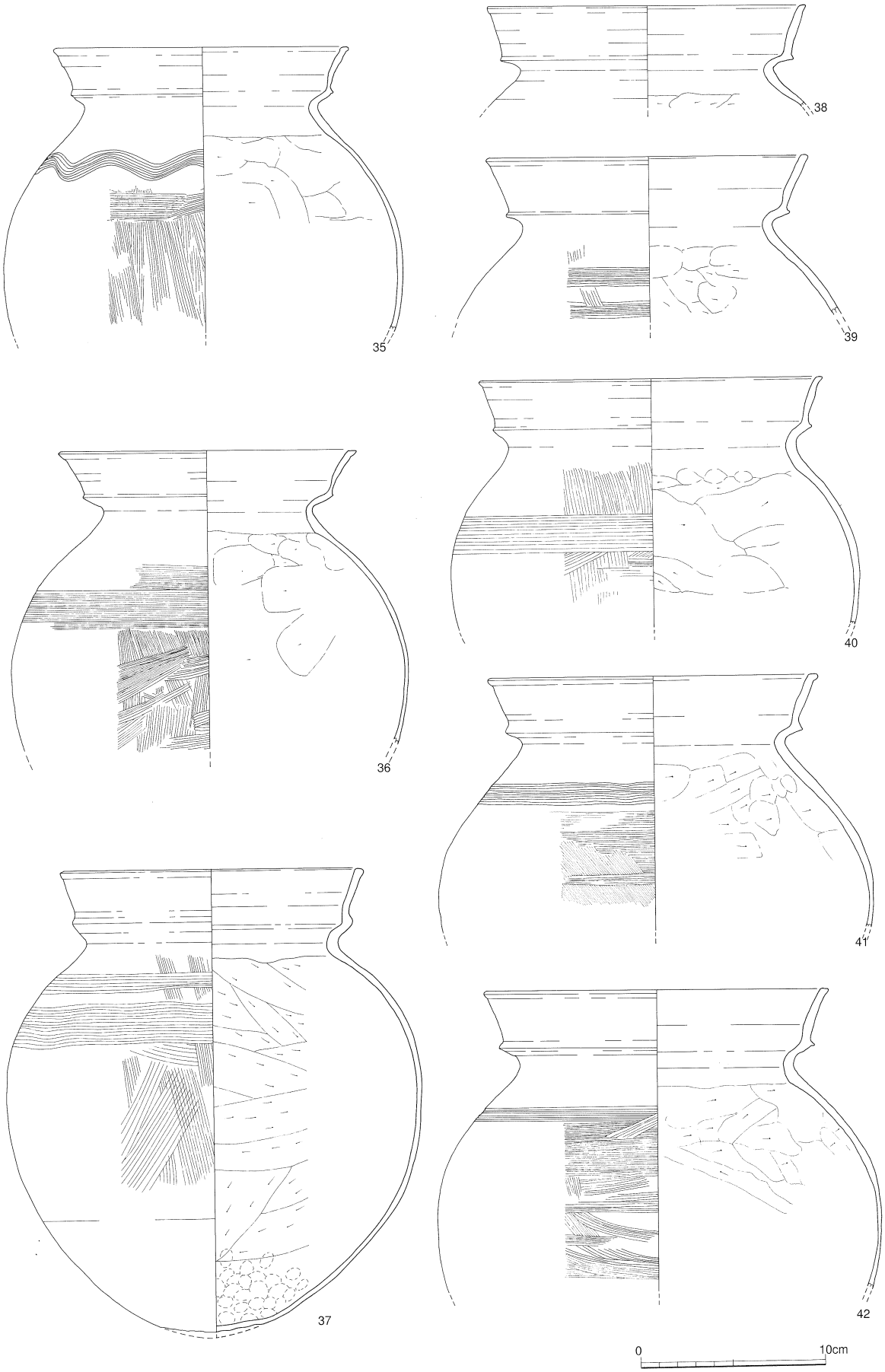
第104図　古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図1　(S=1／3)



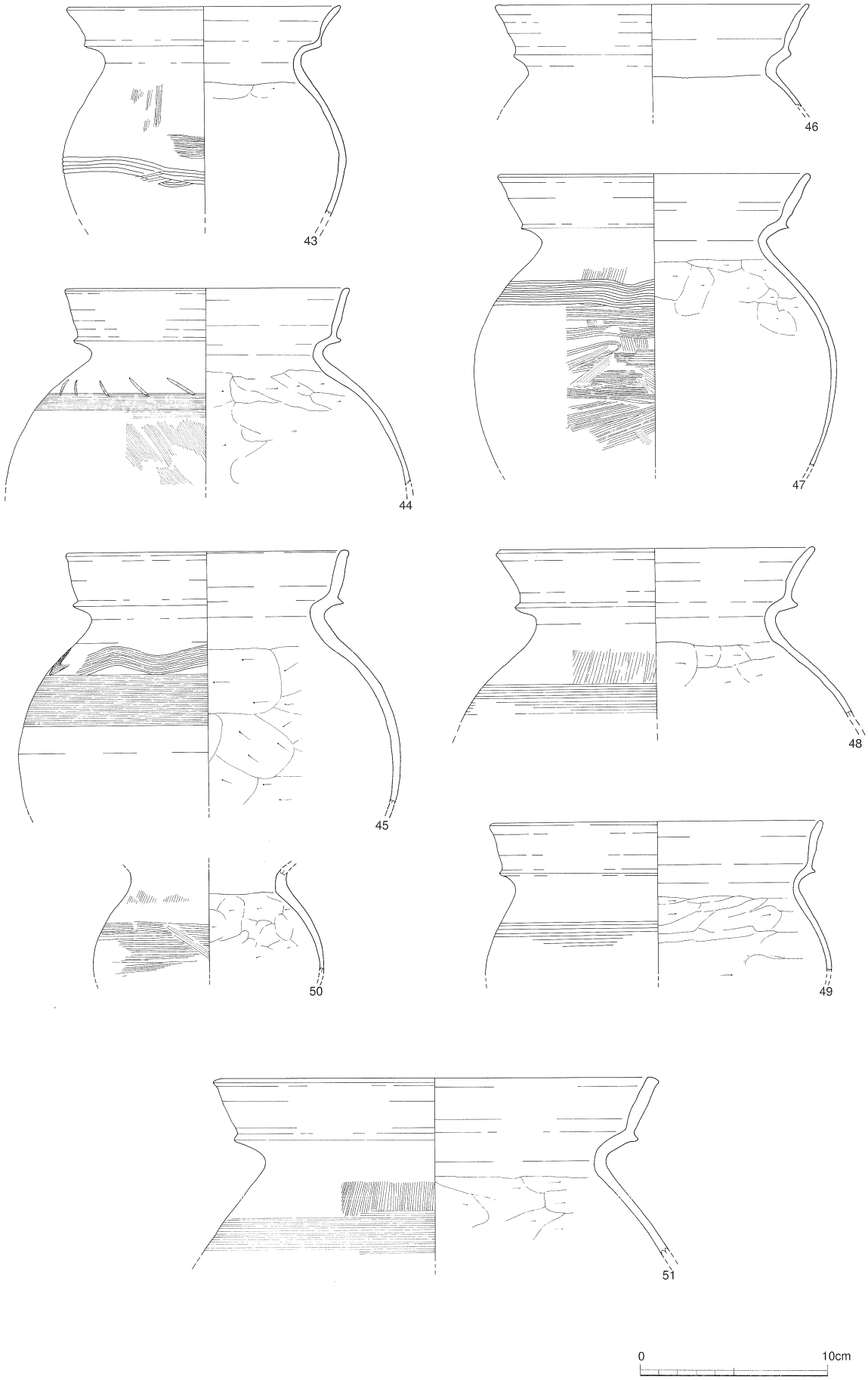
第105図　古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図2　(S=1／3)



第106図　古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図3　(S=1／3)



第107図　古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図4　（S=1／3）



第108図　古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図5　(S=1／3)

A　完形品がまとまって出土する部分　ア第１００図中央北より、イ同南端、ウ第１０２図中央、エ南端、オ第１０３図北端などで、いずれも甕２～３個体と鼓型器台、小型器台などが完形品で出土している。

B　完形品に限らず出土量の多い部分　第１０２図南端と第１０３図北端で、溝の屈曲部に相当する。ただし、屈曲の下流側からも出土すること、土層堆積状況でも示したように流水が考えられないことからすると、いわゆる流水の良くない地点である、ということではないようで、溝の屈曲部には何か意味があったと考えたい。

接合関係　出土下遺物の接合関係は、実測したものの中でも主要なもののみを図１００～１０３に示した。全体としてみると同一個体は同一個所にまとまっており、上下で接合されるものは多いが、水平距離が離れているもの同士が接合する例は、第１０３図の甕片（１０９－５４）が１０ｍに渡って３カ所で出土した例、同じく、第１１３図７９の壷が３ｍ離れて２カ所で出土した例を除くと他にはあまり見られない。むしろ例示した二つは、接合するとかなりの部分が復元できたにもかかわらず、完全に粉砕されて出土しており、特異な廃棄形態と見ることができる。また、遺物が集中する部分の第１０２図南部分、第１０３図北部分などを見ると、出土した土器には地表に対して直立した状態のものがあり、水中に沈降したり、長期間風雨にされされたとは思えないとの指摘も受けた。

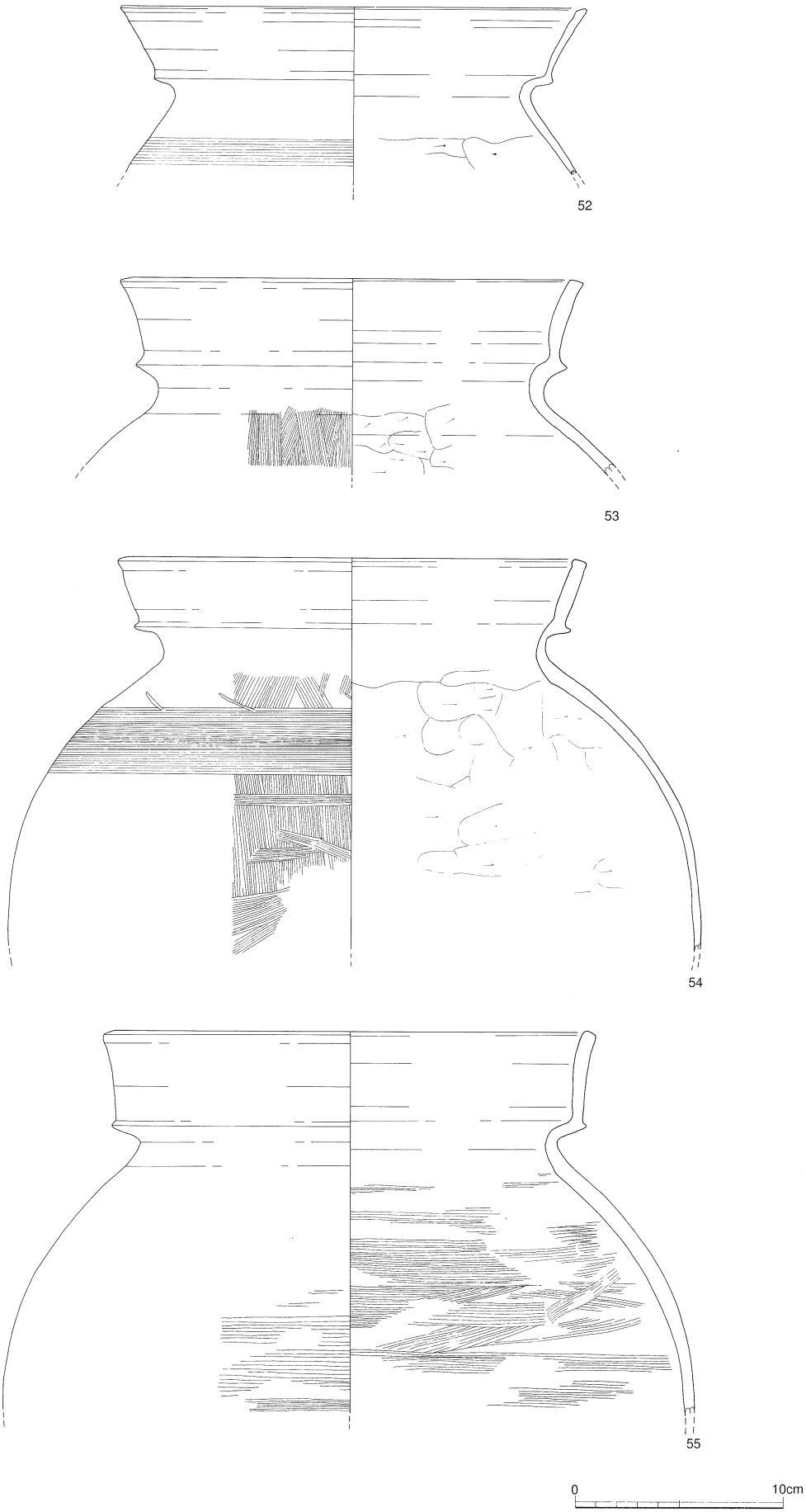
器形と出土状況　壷は、広く外反する口縁を持つものと（７６～８１）、口縁が内傾するもの（８２～８５）がある。前者には完形品があるが、後者は小片のみであり、出土状況に差がある。ただし、後述するＳＤ１７には後者にも完形品がある。

遺物の廃棄について　総体としては、完形に近い土器を、一括的に廃棄し（ただし廃棄の回数は不明）、溝を埋めたものと思われる。

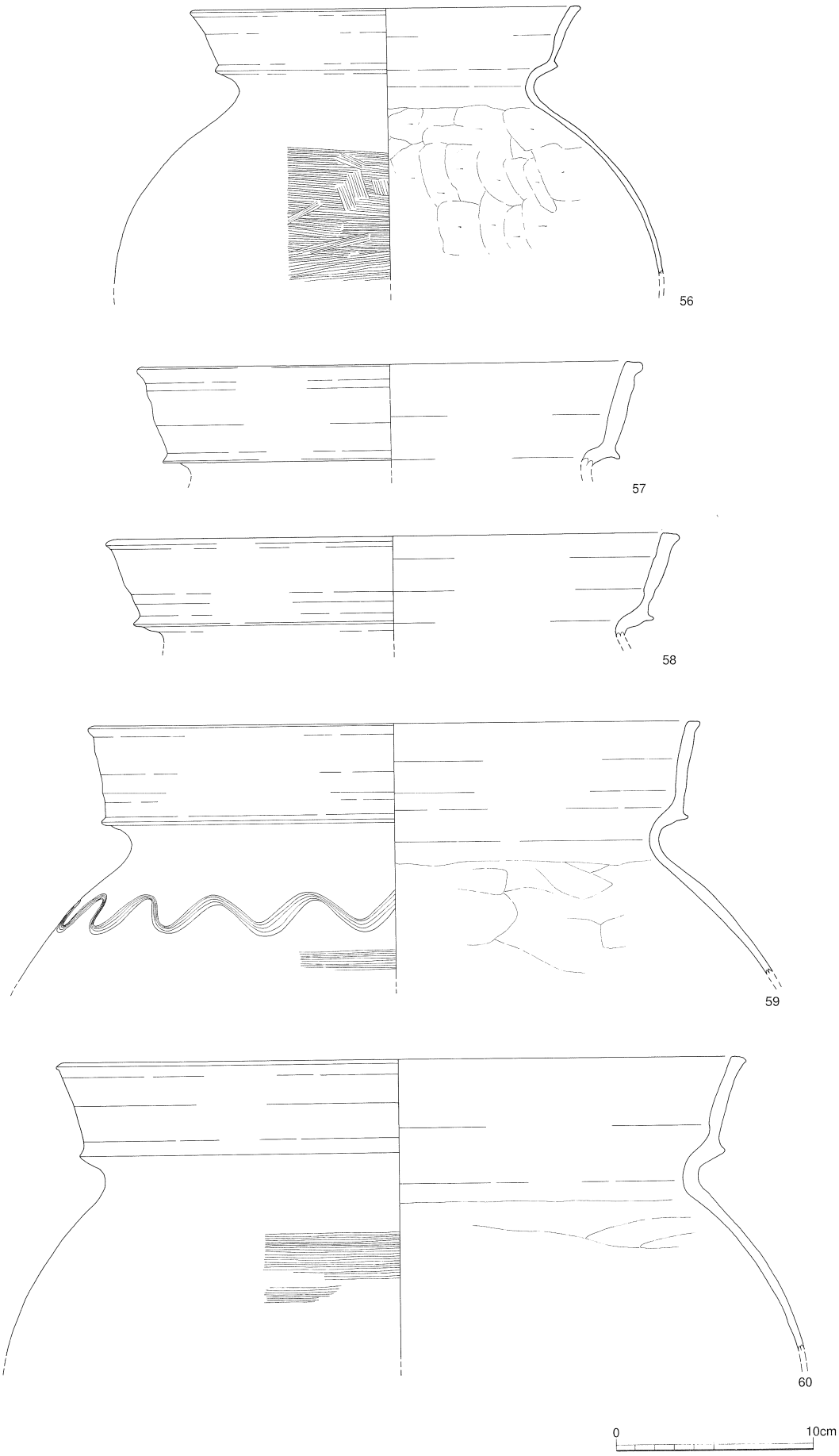
出土遺物（第１０４～１１９図）

ＳＤ１６からは、多量の土器片が出土しており、実測図を掲載したのは主要なものである。

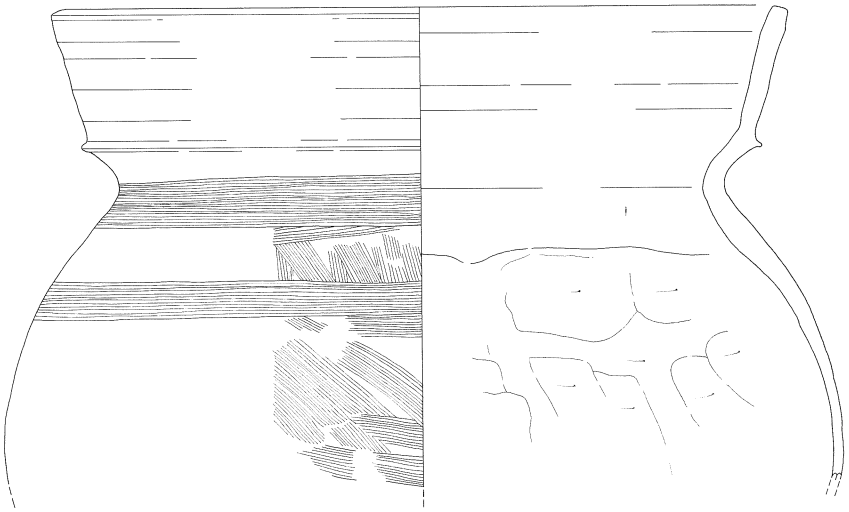
１～６３は複合口縁を持つ甕である。１～３は口縁部を薄く引き伸ばしやや外反させる一群である。１は複合口縁部に平行沈線を残し、ナデ消すもので、本遺構出土の甕片では最も古い様相を残すものである。２は頸部に波状文を施す。１～３は草田４期に相当する。４～２１は口縁端部を外に折り、外側に面を持つ一群である。３・４・６・７は口径が１５cm以下の小型の甕で、７は口縁部を比較的直立させるタイプである。５、８～２１は口径１６～１７cmの中型の甕で、普遍的な大きさのものである。８・１２・１４・２０・２１は口径と最大径との差が大きいタイプである。８は体部縦ハケの後、肩部に横ハケを廻らすが、横ハケに別な原体を使用したか否かは明らかでないものである。１２・１４も同様で、１２は横ハケを二条に別けて施す。２１は頸部近くに波状文を廻らし、さらに体部上面は横ハケで仕上げるものである。９～１１、１４～１８は体部が倒卵形をなすと考えられる一群で、９は頸部に列点文を廻らす。原体はハケ状工具の小口か。１４は一旦縦ハケを施した後、逆向きに傾く縦ハケを施したもの。１６は完形品で底部には指頭圧痕が残る。底部は尖る倒卵形をなす。１７は球胴化の進んだ個体で、肩部に右回りの横ハケを廻らす。２２～２８は口縁端部を外側に折り、口縁端部内面が平坦になるグループである。２２・２３は口縁がやや外反するもので、２２は肩部に波状文を施される。２９～４２は、口縁端部上方に面を持つグループである。２９・３０・３２は口径１５cm以下の小型の甕である。３１は余り例のない口縁端部を

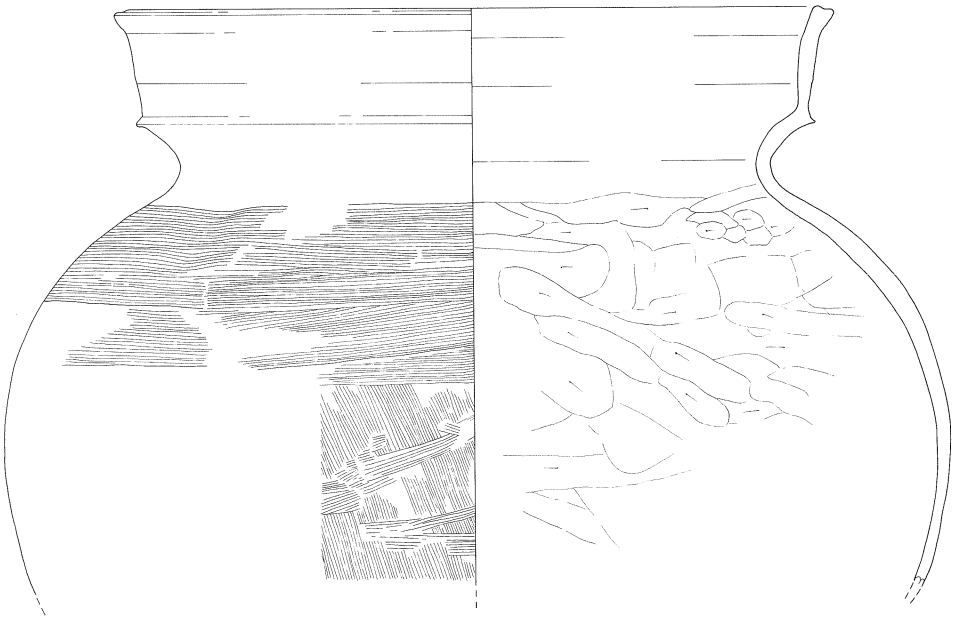


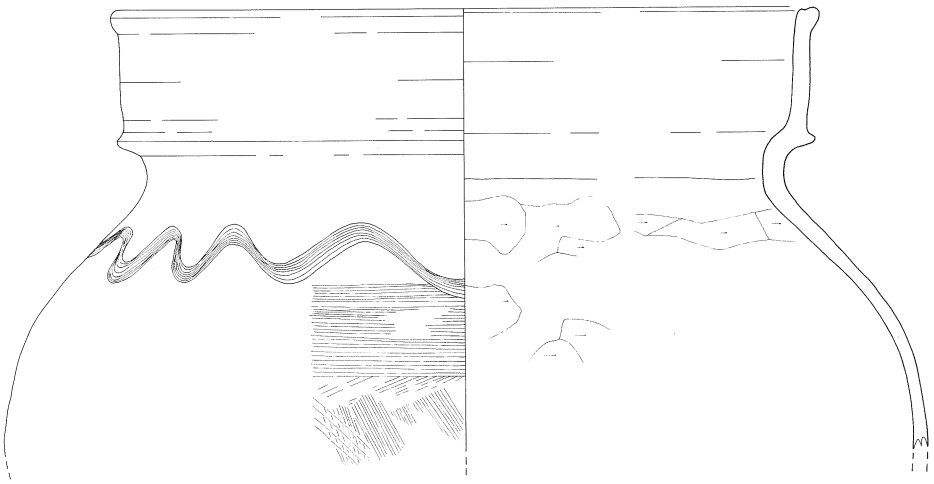
第109図　古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図6　(S=1／3)



第110図　古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図7　(S=1／3)

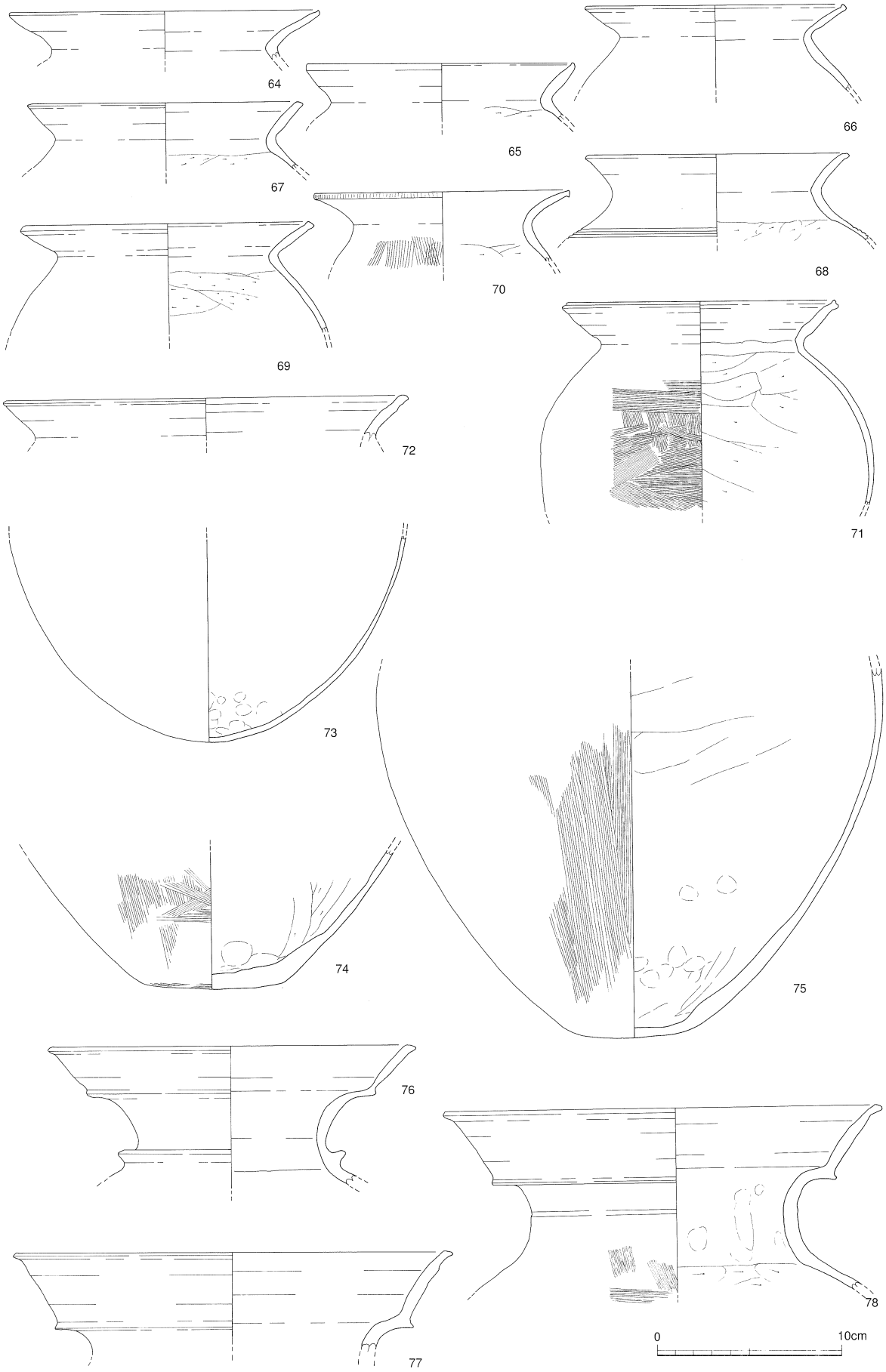






0 10cm

第111図　古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図8　(S=1／3)

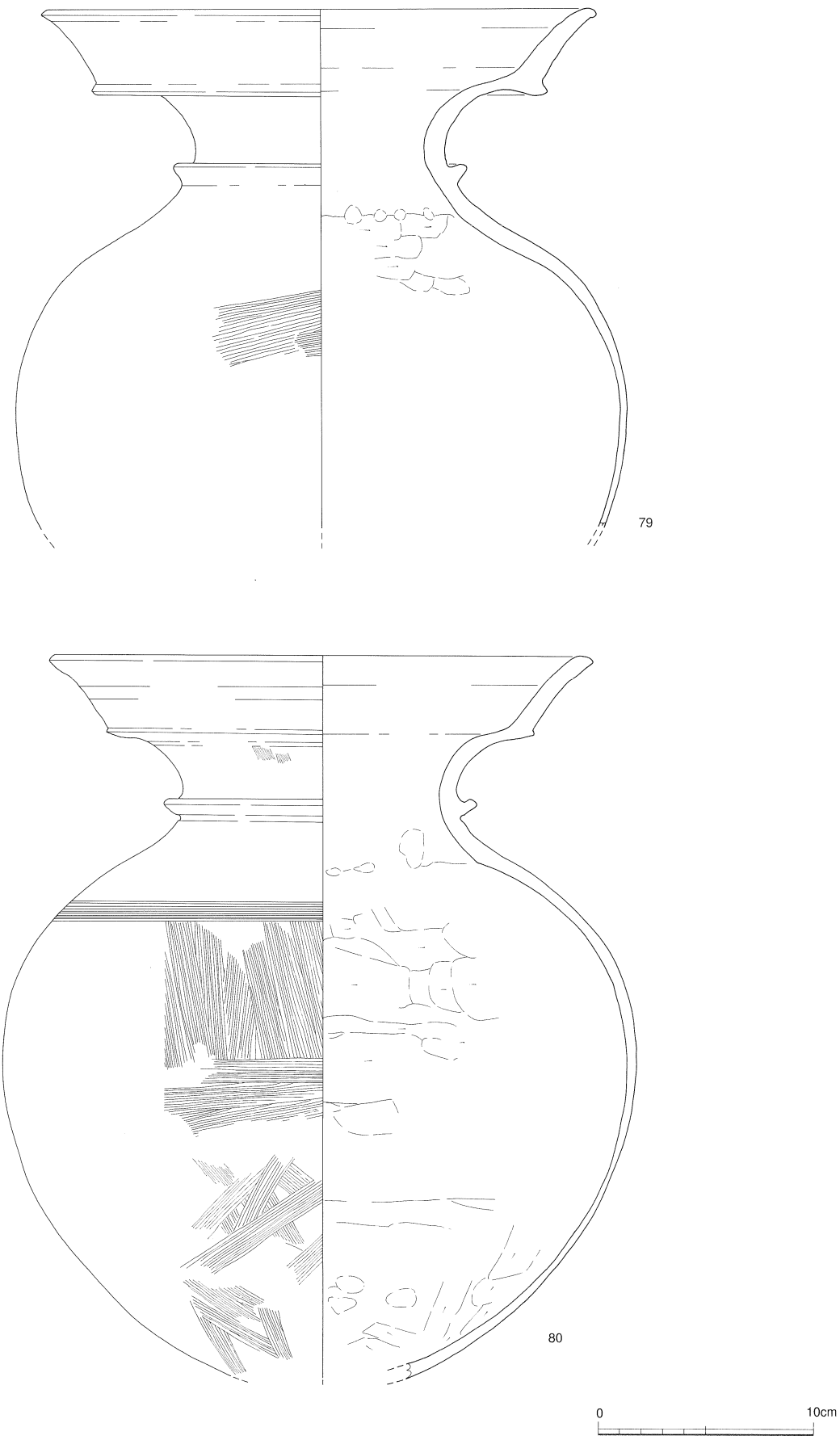


第112図　古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図9　(S=1／3)

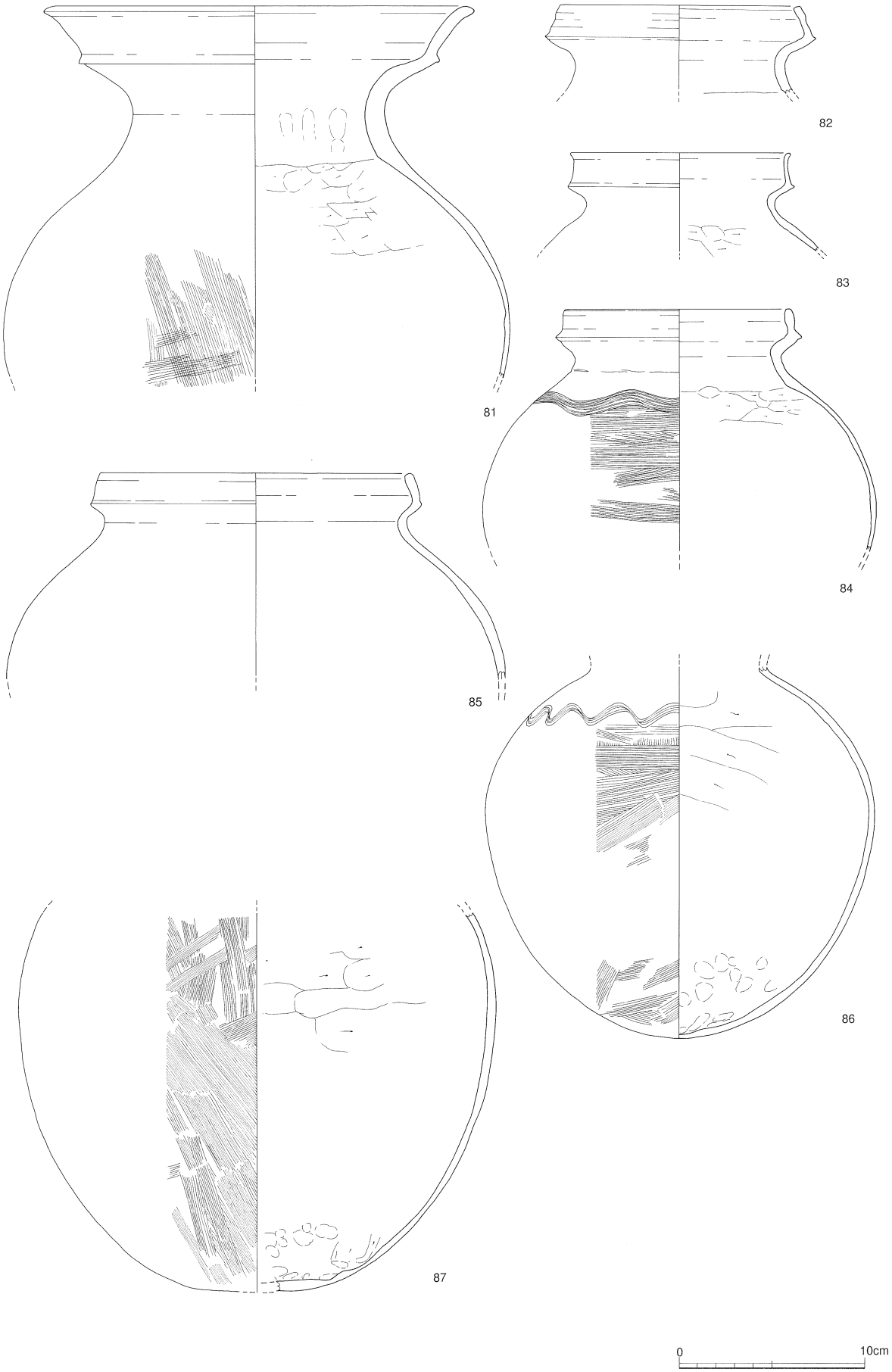
内側に肥厚させるもので、比較的明瞭な波状文を肩部に廻らしている。３４はやや頸が長くなり、複合口縁部の突出も鈍いものである。３５・３６は体部最大形が口縁に比して大きくなる器形のもので、４０は逆に口径が大きく、体部最大形との差の小さいものである。３７は完形品で、複合口縁部も突出しない。ただし、底部は１６などに比して球胴化しているとはいえ、未だに倒卵形をなす個体である。底部は火を受けたのか、剥離していた。３７は第１００図・図版３５にみえるように１５４の小型器台とセットで出土した。４３～４９は摩耗によって、口縁端部の調整が明らかでないものである。４３・４６・４８など口縁が外反するものは、草田４期頃に位置づけられる可能性もあろう。４９は口径が大きく体部最大径と余り変わらないもので、全体にいびつな甕である。他の甕が明褐色の胎土を持つ中で、本個体のみが茶褐色の胎土であった。５１～６３は口径２０cmを越える大型の甕である。これら大型の甕は、５１・５２・５６のような比較的薄い器壁を持ち、口縁も外反するものと、口縁が厚く口縁端部に明確な面を持つ５３～５５、５７～６３に分別される。なお、後者には口径３０cmを越える超大型が含まれる。５５・５９～６３はこれらの中でも口縁が直立するもので、５５は内面をハケによって調整する。５９・６３は肩部に波状文を廻らす。６４～７１は単純口縁のいわゆる布留傾向甕である。７２を除くといずれも口径は１５cm以下である。６４～６６、６９のように口縁端部を内側にやや突出させるものだけでなく（次山淳氏ａ類）、外反させるもの（６８・７０）、溝状になるもの（次山ｂ類・７１）などがある。６８には肩部に沈線が４条引かれるなどバラエティーに富んでいる。これらの胎土は、いずれも淡褐色で複合口縁の甕と同色である。７０は図では口縁部に刻目文を入れたが、痕跡は明瞭でなく、傷の類の可能性もある。７３～７５は甕・壷の底部である。

７６～８７は壷、あるいは壷と考えられる底部破片である。７６～８０は大きく外反する口縁を持つ壷で、このうち７６・７９・８０は肩部に凸帯を廻らす。また、７９・８０が複合口縁部の内側を滑らかにするのに対し、７６～７８は比較的しっかりした段を有している。８１は７９・８０に近いが頸部上半が、やや外側にふくらむ。８０は第１０２図・図版３８にみえるように完形のままおしつぶされた状態で出土した。ただし、底部の復元が完全でないため、底部穿孔の有無は不明である。８２～８５は、内傾する口縁を持つ壷のグループである。８４は肩部に波状文を廻らす。８２が頸部が長いのに対し、８５のように頸部がほとんどない個体もある。なお、口縁が内傾する壷は、すべて小片であり、７６～８１までとは出土状況も異なっている。８６・８７は壷の体部である。８６は肩部に波状文を廻らす。８８～９１は直口壷である。特に完形品の９１は、これら４点の中でも特に口縁端部の張出が鈍いもので、９０とともに口縁端部は外反する。

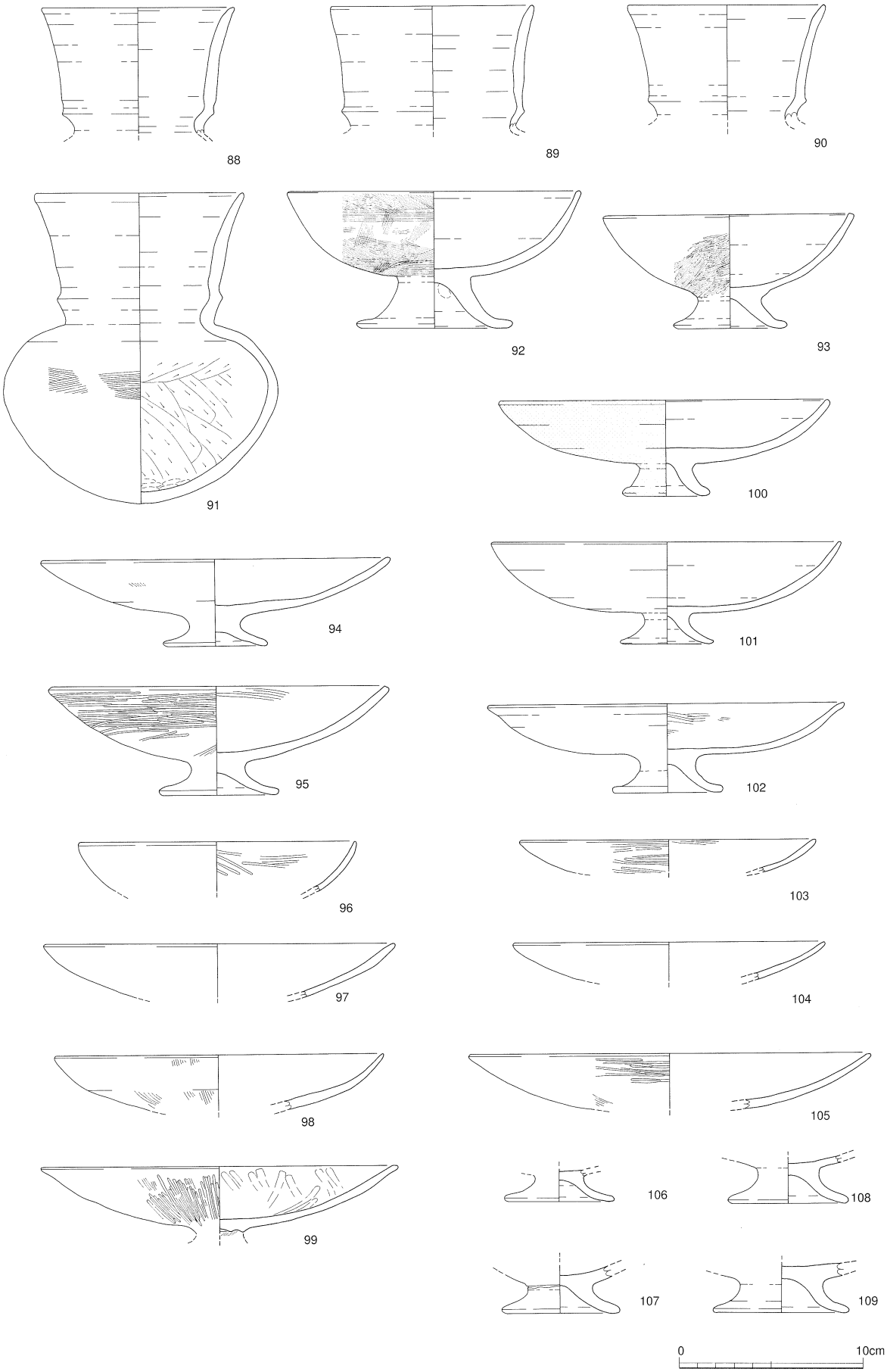
９２～１０９は低脚坏である。９２・９３は器高が高く、口径が小さいタイプで、９２は外面に縦ハケののち横ハケを施し、９３は横方向に幅１～２mmの細かいミガキを施す。９４～１００までは、低平なタイプの低脚坏である。多くは内面ミガキ、外面ナデの調整を施されるが、内面のミガキは単位が明確でない。９５は逆に外面に幅２mm程度のミガキを横方向に施し、内面はハケのちナデの調整を施すものである。１０３・１０５も外面に横方向のミガキを施す。９９は外面に縦方向のミガキを施すもので、口縁端部が外反するのも特徴である。口縁の外反するものには、この他に１０２がある。なお、低脚坏の胎土は、甕・壷のように淡褐色系にしぼられるわけではない。図版１１０、口絵カラー図版１に示されるように茶褐色のものもある（９２・９３・９８・１００・１０３・１０７）。また、１００は外面が赤彩されている可能性がある。



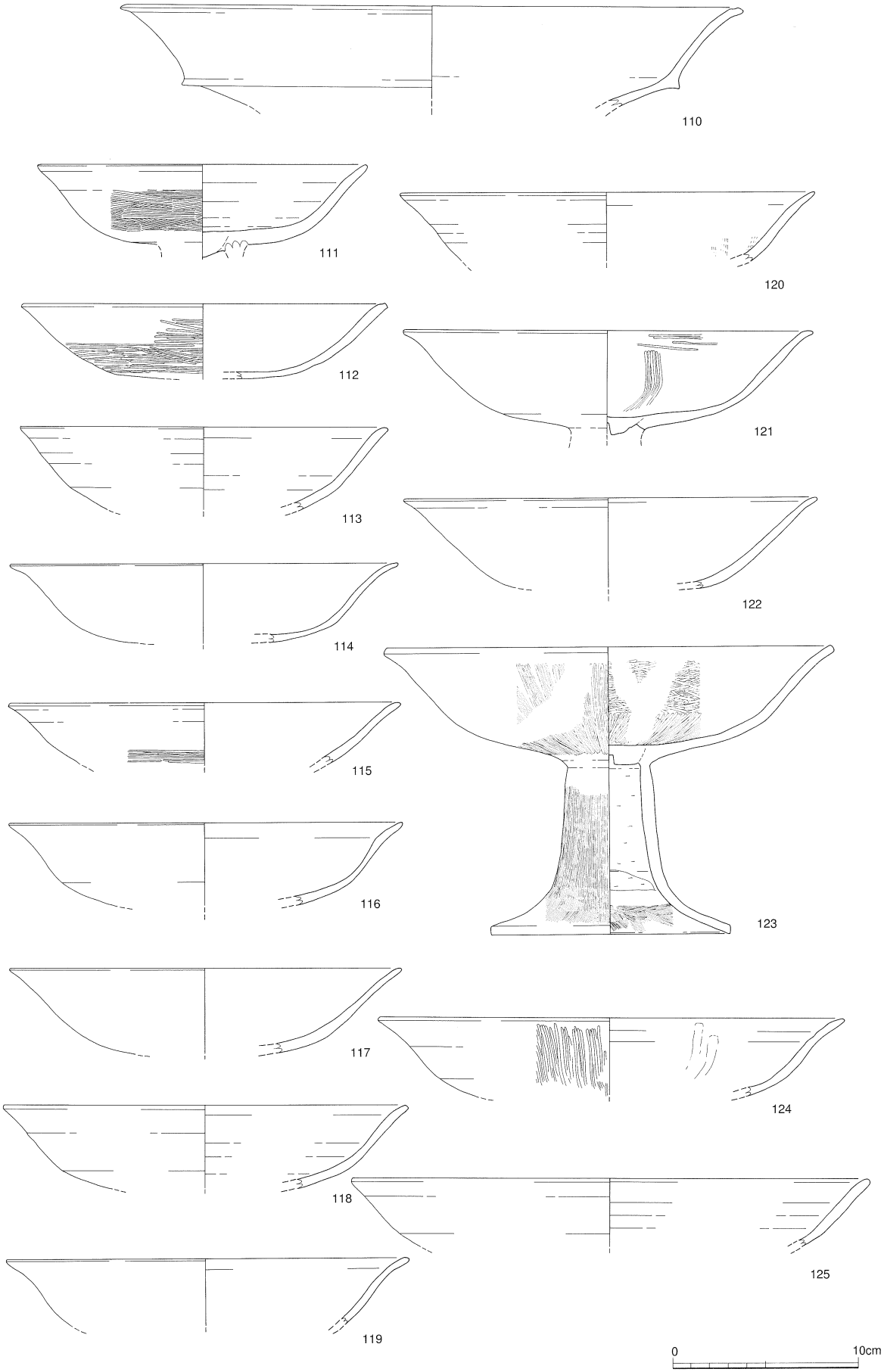
第113図　古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図10　（S=1／3）



第114図　古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図11　(S=1／3)



第115図　古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図12　(S=1／3)



第116図　古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図13　(S=1／3)

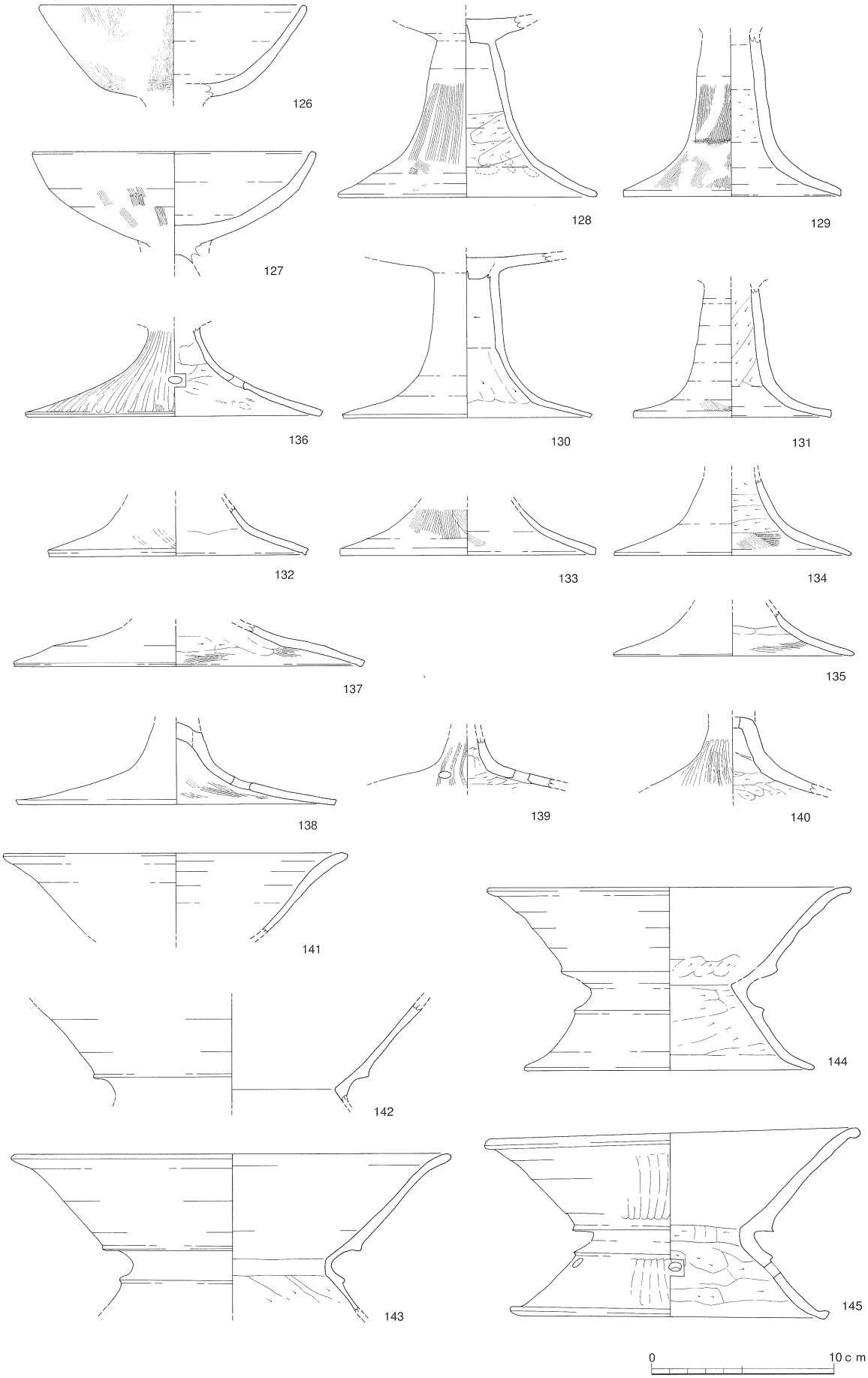
１１０～１３５は高坏である。なお、１１０は段の下がややふくらむ形状から高坏坏部の可能性を想定したが、、口径の大きさなどから、壷口縁部の可能性もある。[18] １１１は外面に横ハケを施すもの、１１２は横方向のミガキを施すものである。１１１は松山接続法αによって坏部が充填されている。１３～２１は、高坏坏部小片で、これらの中には同一個体のものもあるであろう。１１６・１１８・１１９は口縁部がやや外反するもの。１１３は坏下部に段を有するものである。１２３は、脚部及び坏部外面が縦方向のハケ、坏部内面底部は縦方向のミガキで、上部は横方向のミガキを施す丁寧な作りの高坏である。１２４は内外面に縦方向のミガキを施す。松山接続法αによって充填されている。１２５・１２６は深さの大きい高坏で、共に外面には縦方向のハケが見られる。１２８～１３５は高坏の脚部である。１２８・１２９は外面に縦ハケを施すもの、１３４・１３５は脚部内面にハケを施すものである。１３６～１４０は低脚高坏である。１３６・１３９は脚部に穿孔されている。１３６・１４０は外面に縦方向のミガキ、１３９は同ハケ目を持つ。

１４１～１５３は鼓型器台である。１４２・１４４は受部・台部接続部に平坦面を持たず、稜線になっているもので、特に１４２では受部内面のナデが下方で省略され、ケズリが残存している。なお、１４２はほぼ完形でＳＤ１６南部分（第１０３図・図版４０）から出土した。１４５・１４７は台部に透かしを持つタイプである。１４５は外面は縦方向のミガキを加え、６方向に透かしを持つ比較的丁寧な作りのものである。同様の器形、調整、穿孔を施すものは山持川川岸遺跡ＳＩ０１からも出土している。[19] １４７は四方向に穿孔するが穴の位置は均等でに割りつけられてはいない。また、穴の内側が欠けているものがあり、焼成前穿孔であることを考えると興味深い。１４６は受部内面に横方向のミガキを施すものである。１５４～１５７は小型器台である。１５４は受部が一部欠ける以外は完形で、甕３７と一緒に出土した（図版３５）。松山接続法αによって接続されており、受部には人間の爪痕が残る。脚部は縦方向のハケ目の後に縦の方向のミガキが施される。胎土は明褐色である。１５５は同受部で、内面にミガキがみえる。１５６・１５７は同台部で、１５６は穿孔・横方向のミガキが施されており、胎土も暗茶褐色を呈し、近畿地方の小型器台の作りに忠実なものである。１５９・１６０はワイングラス型の土器である。１６０は内外面に横ハケを施されていた。類似のものは本遺跡のＳＤ１７、東出雲町勝負遺跡ＳＩ０５などからも出土している。[20] １５８は注口土器の注ぎ部である。

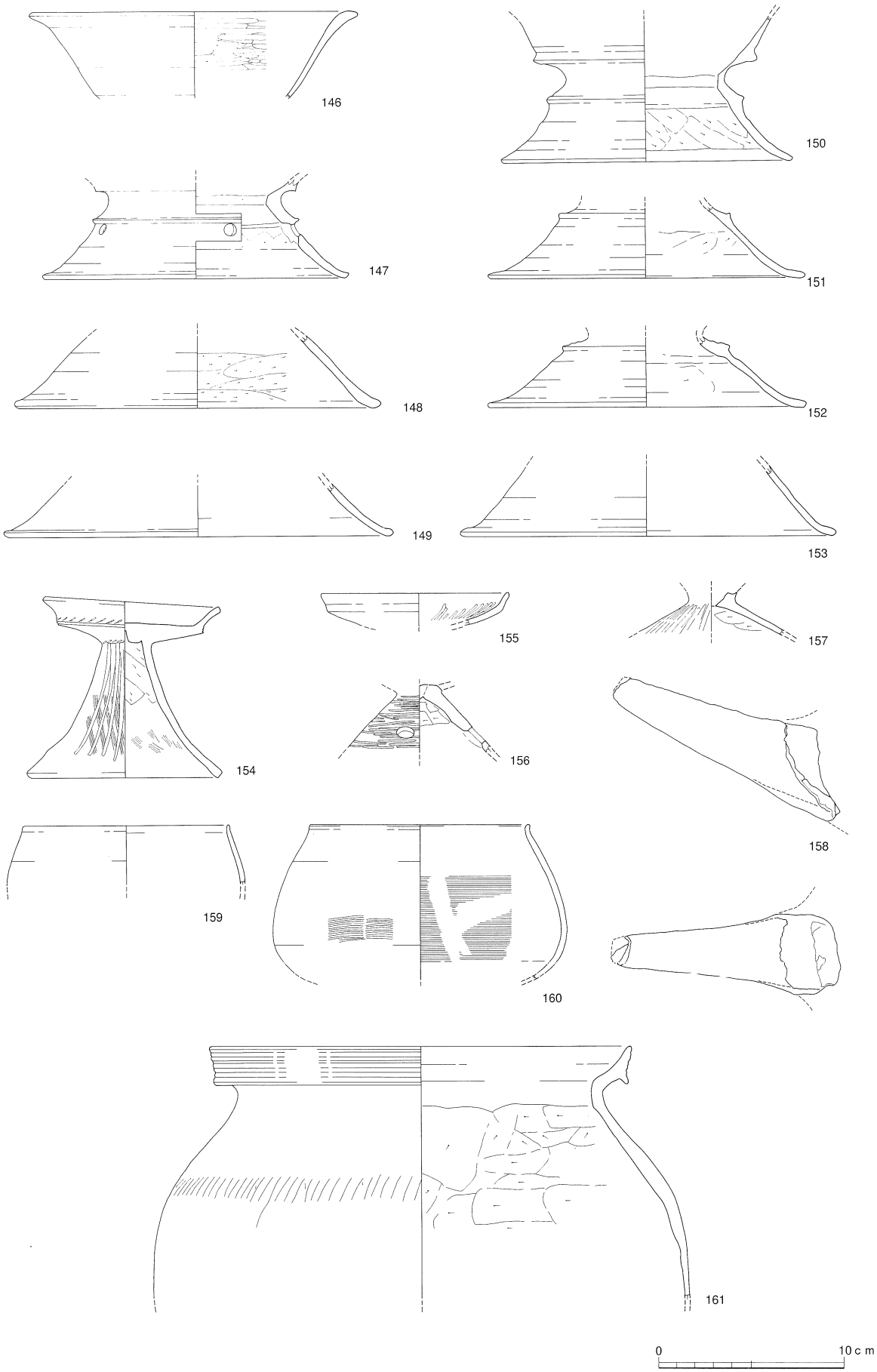
１６１～１７０は混入品など、１６０までの遺物との時代の異なる遺物である。１６１・１６２は口縁部に擬凹線をもつ甕で草田１期に相当するものである。１６１は明らかに上層から出土しており、ＳＤ１６の掘削年代を示すものではない（第１０３図）。１６３は口縁端部に凹線を持つ弥生土器広口壷口縁部で、松本Ⅳ－２様式のものであろう。この遺物は、遺物出土状況図には図示していないが先行溝から出土した唯一の遺物である。１６４、１６５は松山Ⅱ期新段階に当たり、[21] 古墳時代中期の遺物に降るものである。１６６は甑把手、１６７・１６８は土師器碗、１６９は須恵器低脚無蓋高坏、１７０は土師質土器皿である。

大溝ＳＤ１６の年代　遺物の出土状況で説明したとおり、遺物は先行溝から出土した１点（１６３）を除き、すべてＶ層堆積土から出土している。

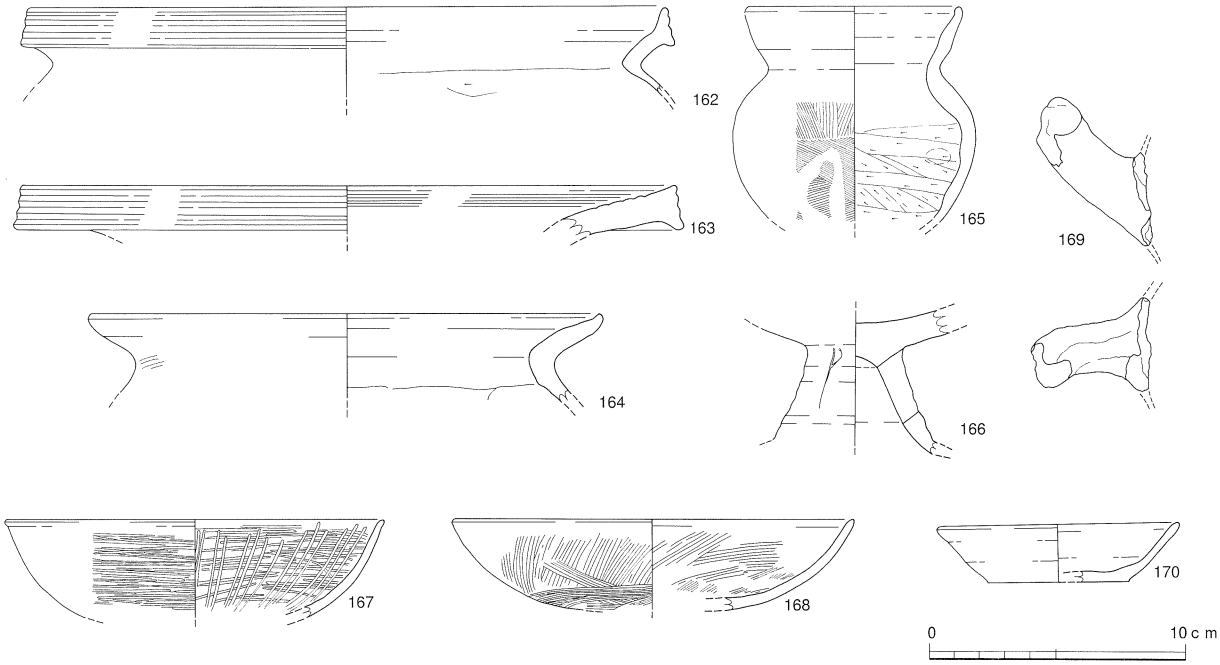
まず、先行溝の年代は、１６３から弥生中期末、松本Ⅳ－２期には埋没したと考えられる。出土遺物は１点であるが、古志本郷遺跡全体の中で、弥生中期末が画期となり、西側に集落が営まれること、同時期の溝ＳＤ４０でもほとんど遺物が見られない点が類似することから、この時期と考え



第117図　古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図14　(S=1／3)



第118図　古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図15　(S=1／3)



第119図　古志本郷遺跡SD16出土遺物実測図16　(S=1／3)

てよいと思われる。したがって、ＳＤ１６本体部分の最初の掘削は、もっとも古く遡って考えて、弥生時代後期初頭になろうか。

一方、ＳＤ１６が機能を停止し、埋没する時期に当たるＶ層の遺物の年代は１～１６０までの土器群によって捉えることができる。まず、複合口縁の甕であるが、最も古い様相を持つのが口縁が外反し、先細りになる１～３、４４・４６などで草田４期に当たる。ただし、これらの土器は極めて少数といってよく、状態の良いものが小型品に限られることも特徴的である。これに対し、口縁端部を外側に折り内側に面を持たせる１３～２８が数量的にも意味のある一群となる。次いで、口縁端部を外に折り、外側に面を持つ４～１２、口縁上部に平坦面を持つ２９～４２が位置する。これらの時期は、草田５期の新段階から草田６・７期に当たると思われる。次に壷を見ると、頸部に凸帯を廻らすもの（７６、７９・８０）が含まれること、複合口縁部の直立するもの（草田５期）がないことが注目される。凸帯を持つものは草田遺跡ではＦ－３区出土土器にみえ、７期に位置づけられている。ただし、Ｆ－３区出土の甕に比して７６、７９・８０の凸帯のつき方は定型化している言うことができ、複合口縁部の甘いＦ－３区出土壷のおそらく前に位置づけられよう。直口壷は、いずれも複合口縁部の突出が甘く、口縁が外反することから草田７期に相当する。低脚坏は、低平なものが主流を占めており、草田６・７期と見てよいであろう。これらの遺物総体としては、草田６・７期を中心としたものであると見てよく、草田７期が溝の最終的な廃絶時期と見てよいように思われる。ただし、器種によっては年代がさらに限定されるものがあるのも事実であり、これは後述のＳＤ１７の廃棄状況などとも考え合わせ、器種ごとの土器の利用状況、廃棄の契機などをなどを反映している可能性もある。

最後に、単純口縁の甕、及び小型器台などの年代観であるが、直接近畿地方からの搬入と断定きるものはなく、初期の布留式土器の類似するものである。[22]

大溝ＳＤ１６の性格　遺構の性格については、第３章まとめで考察を加える。

ＳＤ１７（第６２図、１２０～１２４図）

規模・形態　ＳＤ１７はＣ区西側三分の一の地点東南から北西に向かって貫流する大溝である。溝の規模は上幅２.０～２.４ｍ、下幅が０.４～０.７ｍで、深さは１.０ｍほどで、約３５ｍ分を検出した。全体の断面は逆台形を示しているが底部幅が狭く、Ｖ字状に近い部分もある。調査区の中でＳＤ１６が存在する部分の地山は褐色の砂礫で、大変崩壊しやすい環境であることから、本来はＶ字溝を指向したものかもしれない。ＳＤ１６同様、再掘削が認められ、その度に断面形状は異なる。底部の標高は南側で６.９５ｍ、北側で６.７ｍと、ＳＤ１６より２０cmほど高い。Ｃ区調査区北端の土層（第６３図）で確認するかぎり、地山面より上は、奈良・平安時代の包含層に覆われる状況であり、溝本来の上端は確認できなかった。溝は南から１０ｍほどの地点で東側に張り出すように蛇行する。溝は、おおむねＮ－３０°－Ｗ前後を指向している。

土層堆積状況（第１２０・１２１図）　土層断面は合計６カ所で確認した。このうちＤＤ’は北側から観察を加えている。最初の掘削の後、都合４回以上の再掘削が認められる。以下、ＳＤ１６同様に、上からＶ層とし、再下層の最初の掘削埋土をＩ層とする。以下、北側の土層断面図ＡＡ’から検討を加えていくこととする。なお、ＳＤ１６同様、ＡＡ’とＢＢ’をＩ区とし、南端のⅣ区まで設定した。

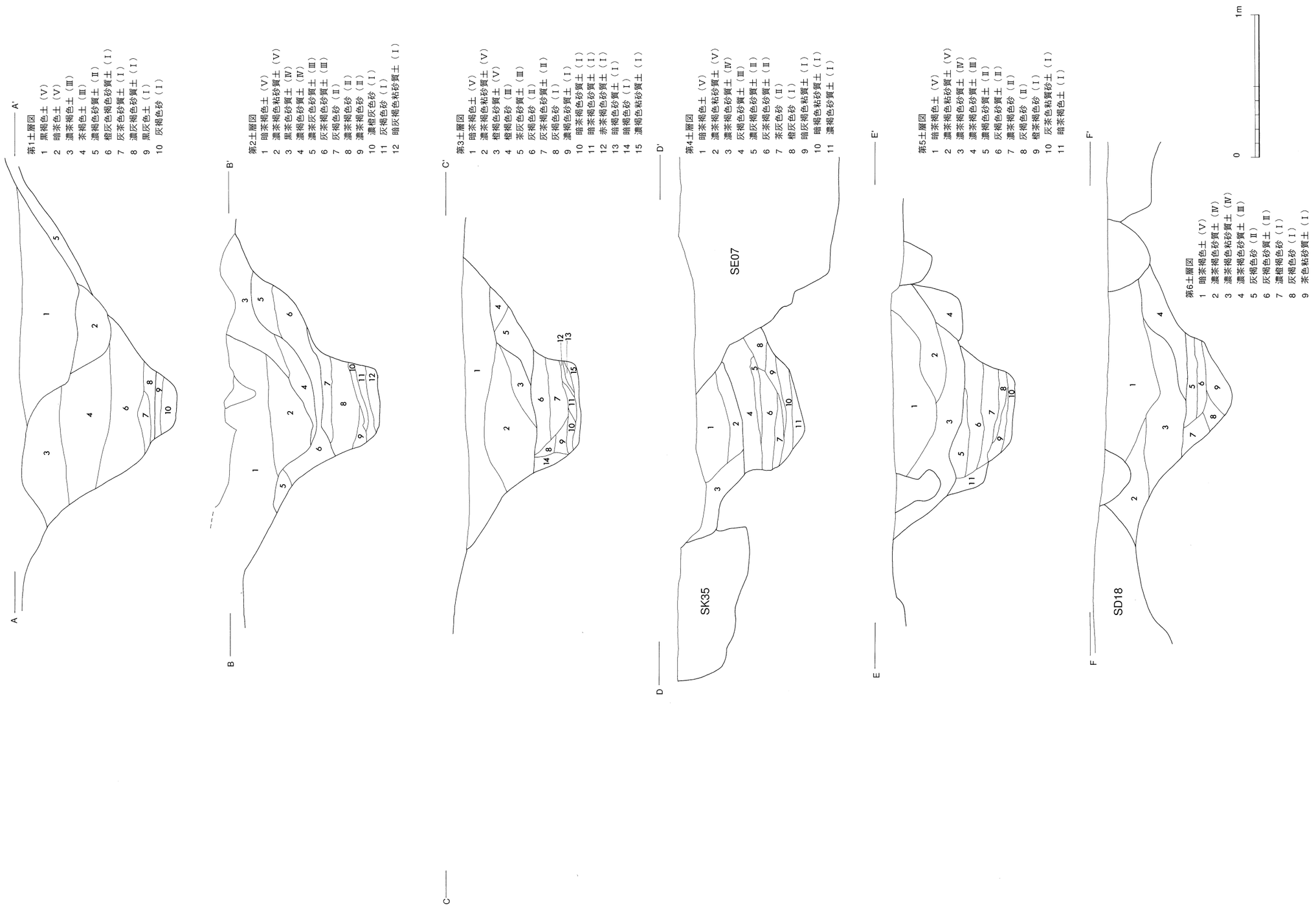
ＡＡ’　Ｃ区調査区北壁での検出状況である。上から、まず黒褐色系の土が含まれるＶ層（１・２層）が堆積する。Ｖ層はこの北端では東に寄っており、断面形状は半円状をなしている。次いでⅣ層については、次の第２土挿図でみるようにＶ層とほとんど合致するものであり、ＡＡ’では明確に認めることは出来なかった。第５層があるいはⅣ層である可能性がある。次いで茶褐色系の土を主とするⅢ層（３・４層）が堆積する。その下にⅡ層（６～８層）あるが、ここでは地山に近い灰褐色砂が主要な堆積物となる。最下層Ｉ層は地山灰褐色砂（下）と黒色化した黒灰色土の薄い二層からなる。遺物はＶ層からは確実に出土している。

ＢＢ’　北から二番目の土層図で、Ｉ～Ｖ層が比較的明瞭に確認できる（口絵図版３）。上からＶ層（１・２層）、Ⅳ層（３・４層）、Ⅲ層（５・６層）、Ⅱ層（７～９層）、Ｉ層（１０～１２層）と堆積する。本土層図ではⅣ層が比較的明瞭に確認できる。すなわち、Ⅳ層は黒茶色系の砂質土を主体とし、形状がＶ層と同様の断面半円状で底部標高もほぼ同じであることが理解される。Ⅲ層は砂質土ではあるが、茶灰色を呈し、ある程度土壌化が進行しているようである。遺物はＶ・Ⅳ層から出土しているが、Ⅲ層からも若干の遺物の出土が認められた。

ＣＣ’　北から三番目の土層図でＩ層の細分が可能であった。全体としては、上からＶ層（１～３）、Ⅲ層（４・５層）、Ⅱ層（６・７層）、Ｉ層（８～１５層）が堆積する。Ｉ層は再下層に１５層の褐色粘質土層があり、その上に１０～１３層が東側から堆積し、流水が想定される。１４・１５層と８～１３層の間に再掘削があった可能性がある。

ＤＤ’は調査区中央付近で確認した土層図である。ＳＤ１７は東側でＳＥ０７に切られ、西側ではＳＫ３５を切っている。上からＶ層（１～３層）、Ⅲ層（４・５層）、Ⅱ層（６・７層）、Ｉ層（８～１１層）が堆積する。これらの土層のうち第３層はⅣ層の可能性があり、Ｉ層は８・９層、１０・１１層で二分され、ＣＣ’Ｉ層同様、Ｉ層の中での再掘削があった可能性がある。

ＥＥ’は上からＶ層（１・２層）、Ⅳ層（３層）、Ⅲ層（４層）、Ⅱ層（５～８層）、Ｉ層（９～１１層）がある。第１１層は褐色粘質土で、地山褐色砂礫の崩落は想定できず、９・１０層とは異なる



第120図　古志本郷遺跡SD17土層図1　（S=1／30）

掘削によるとみられる。

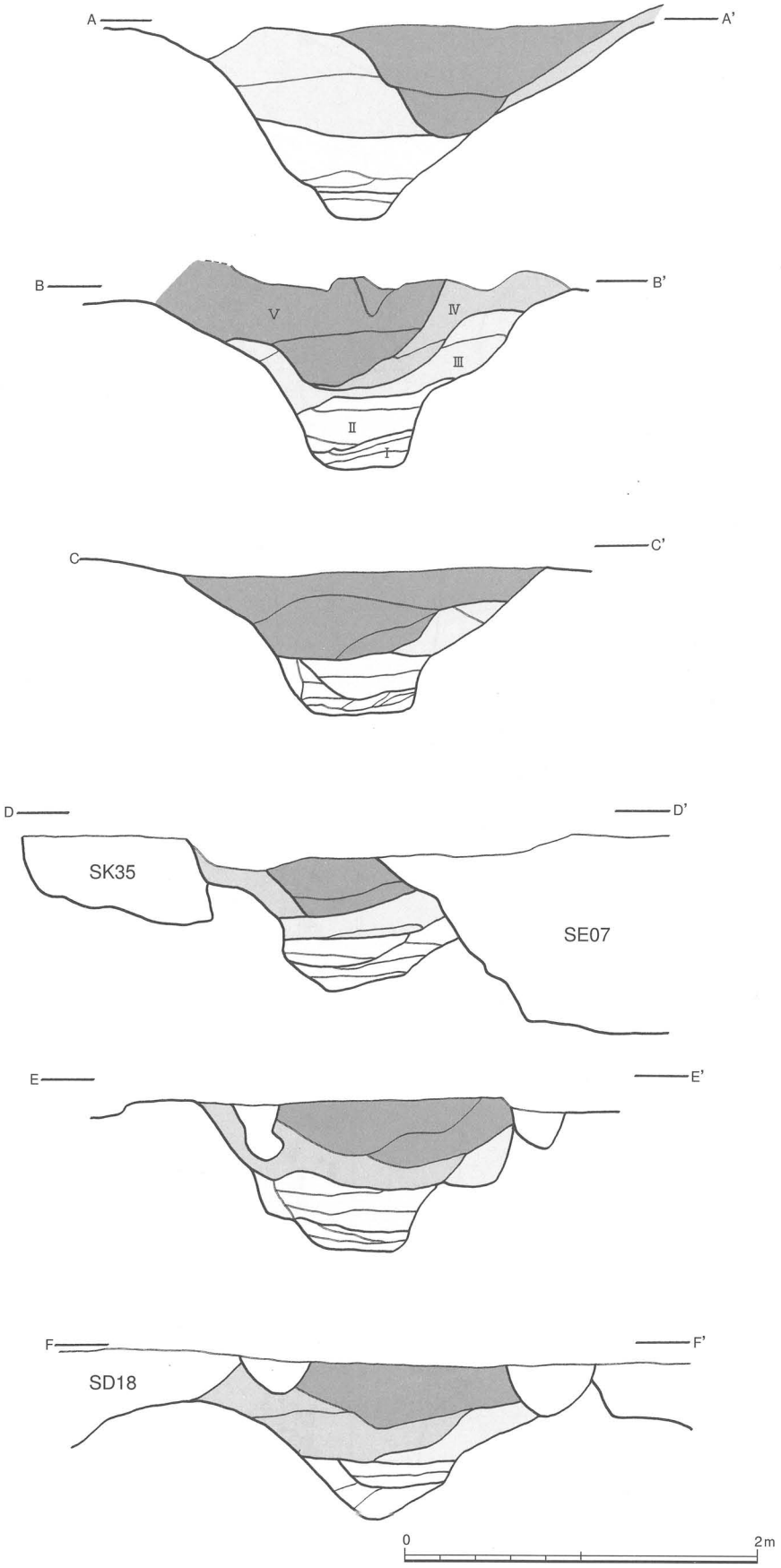
ＦＦ'は一番南端で観察した土層である。ここでは後述するＳＤ１８にＳＤ１７Ｖ層が切られていることがわかる。上からＶ層（１層）、Ⅳ層（２・３層）、Ⅲ層（４層）、Ⅱ層（５・６層）、Ⅰ層（７～９層）が堆積する。

土層まとめ　以上の観察から、ＳＤ１７について、以下の点を指摘できる。

１　ＳＤ１７は最低４回の再掘削が行われた。最後の二回、Ⅳ・Ⅴ層が形成された時の溝は断面半円状で、規模も同規模であった。

２　Ⅴ・Ⅳ層はいずれも土壌化が進んだ堆積土で、この時点での溝内の流水は想定しづらい。Ⅲ層も類似した状況である。

３　一方、Ⅱ層以下は、地山に近い褐色砂が含まれており、流水が考えられる。



第121図　古志本郷遺跡SD17土層図2　(S=1／40)

第122図　古志本郷遺跡SD17遺物出土状況図1　（遺構S=1／60　遺物S=1／9）

4　主要な遺物包含層はⅤ層で、Ⅳ・Ⅲ層にも若干の遺物が含まれている。遺物の出土状況は後述するものとして、ＳＤ１６と同様に流水の有無と遺物の有無には相関関係がある。

5　以上のことから、ＳＤ１７は、流水を前提に掘削、おそらく管理された時期と（Ⅰ・Ⅱ層堆積時)、流水がなく、遺物が廃棄されるようになる時期（Ⅲ～Ⅴ層堆積時）に大きく区分できる。

6　ＳＤ１６とは遺物が廃棄されるようになっても、２回の再掘削があった点が異なっている。

遺物出土状況（第１２２～１２４図）　遺物出土状況図は、ＳＤ１６同様、実測した遺物について器種ごとに記号を用いて表現し、出土状況を理解できるもののみ図化した（以外の遺物は○で表現)。この記号は出土地点を示すもので、出土した土器の大きさなは無関係であることを指摘しておく。また、主要な遺物の接合関係のみ図中に示した。なお、第１２２～１２４図は引き出し線が交差しないように、中央より左側の遺物を左側に、右側の遺物を右側に配置している。

出土土層　前述のようにＳＤ１７ではⅢ～Ⅴ層から遺物が出土しているが、遺物の大部分は中央より、すなわちⅤ層から出土している。Ⅴ層は北端では東側に寄るが、第１２２図にみるように出土遺物も東側に寄っている。Ⅳ層はほとんど存在せず、Ⅲ層の遺物はごく少量であるので再掘削による撹乱を考慮に入れても、Ⅲ層とⅤ層の遺物の投棄は明らかに異なっていたとみるべきである。

出土の形態　２～３個体の甕を中心に、高坏などが関係品で出土する部分（第１２２図北側、ＳＤ１６のＡに当たる)、破片が多数出土する部分（第１２２図南側、第１２３図ＳＥ０７付近、ＳＤ１６のＢに当たる）に加え、特定の器種が集中する部分がある（甕は除く)。

器種と出土状況　すなわち、第１２２図の南側では壷が３個体まとまって完形に近い状況で出土している（図版４４)。壷は、この他にも第１２３図でも出土するが、こちらは頸部破片であって、上記の出土状況とは異なる。また、その北側では低脚坏３個、ワイングラス型土器１個が同様に完形に近い状況で出土している（他に完形でないもの２個体)。本遺構出土遺物の中心をなす草田６・７期に普遍的にみられる鼓型器台が１点も出土しない点も、器種によって出土地点が異なることと関係すると思われる。なお、ＳＤ１６では口縁部が内傾する壷に完形品はなかったが、ＳＤ１７では確認されている（第１２２図)。ただし、口縁が開く甕とはやや離れて出土する。

接合関係　上下で接合するものはあったが、水平距離が離れて接合されるものはなく、その点はＳＤ１６よりも顕著であった。第１２９図４９の大甕は、第１２３図中央付近甕２４の下層から小片に別れて出土した。個々の破片は小さいため図化してはいないが、接合によってほぼ完形近くまで復元できた。意図的な破砕の上、廃棄された可能性がある。

遺物の廃棄　総体としてはＳＤ１６同様に、完形に近い遺物を一括的に廃棄したものと思われる（廃棄回数は不明)。前述のようにⅤ層にみえる投棄はⅢ層ではみられないことから、やはり、これらの廃棄状況は溝の機能停止とかかわるものであるとみられる。また、器種別の廃棄についても、器種の用途、廃棄の契機などとかかわることが想定される。

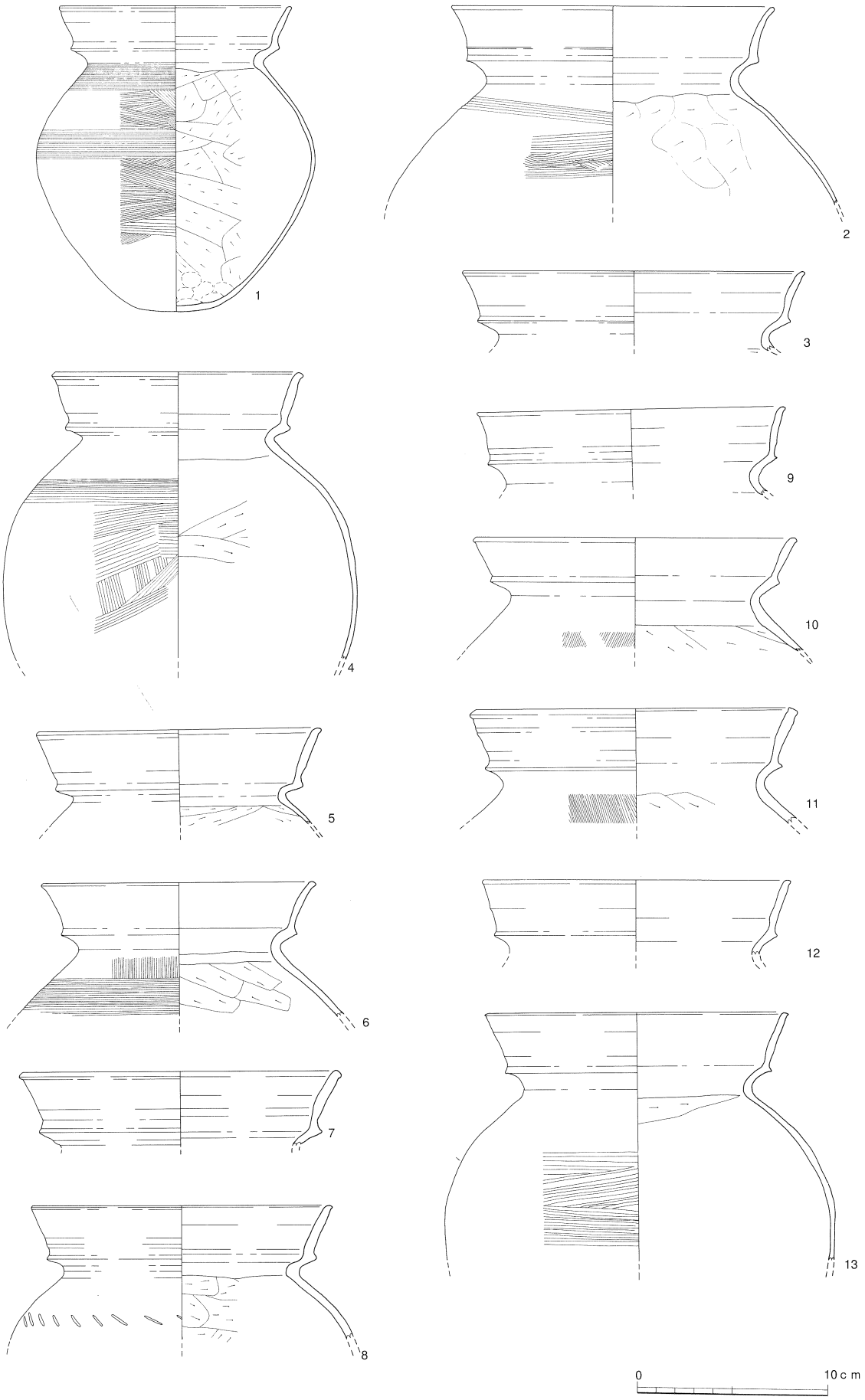
出土遺物（第１２５～１３２図）　出土遺物は図化できるものはすべて図化した。

１～５３は複合口縁を持つ甕である。１～３は、口縁端部に面を持たない一群で、２・３は複合口縁部を外反させる。１は口径１２cmの小型品で、体部がソロバン玉状をなし、明瞭な平底を残す。４～１７は、口縁部端部を外に折り、外側に面を持つもので、８は肩部にハケ状工具小口のようなもので列点文を廻らすものである。１４は底部には平底は残らず、内面に指頭圧痕を残す。肩部の横ハケは、縦方向のハケに比して間隔が荒いようであるが、縦方向のハケも多様であり明確な区別

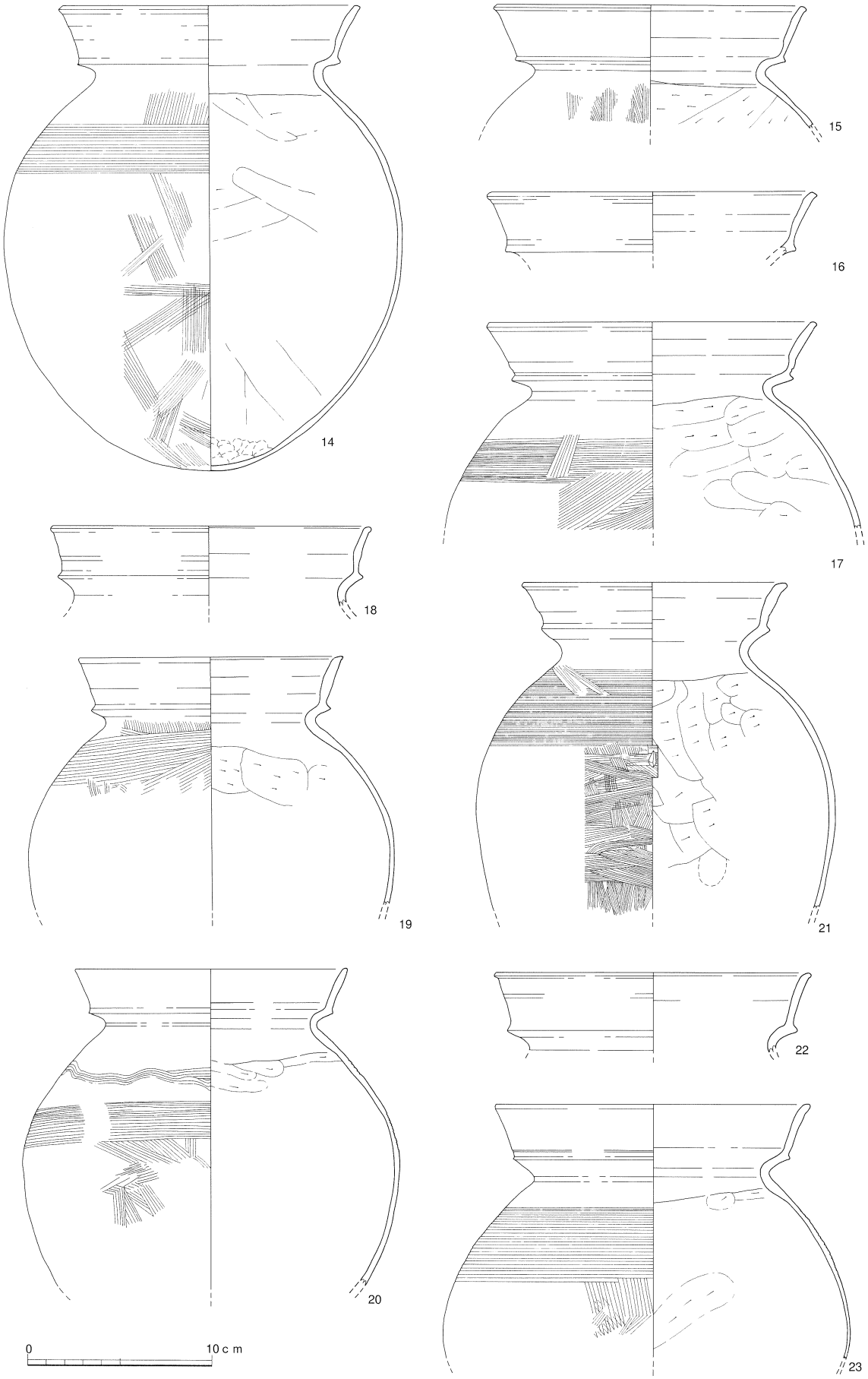
第123図　古志本郷遺跡SD17遺物出土状況図2　（遺構S=1／60　遺物S=1／9）

第124図　古志本郷遺跡SD17遺物出土状況図13　（遺構S=1／60　遺物S=1／9　135-96のみ1/18）

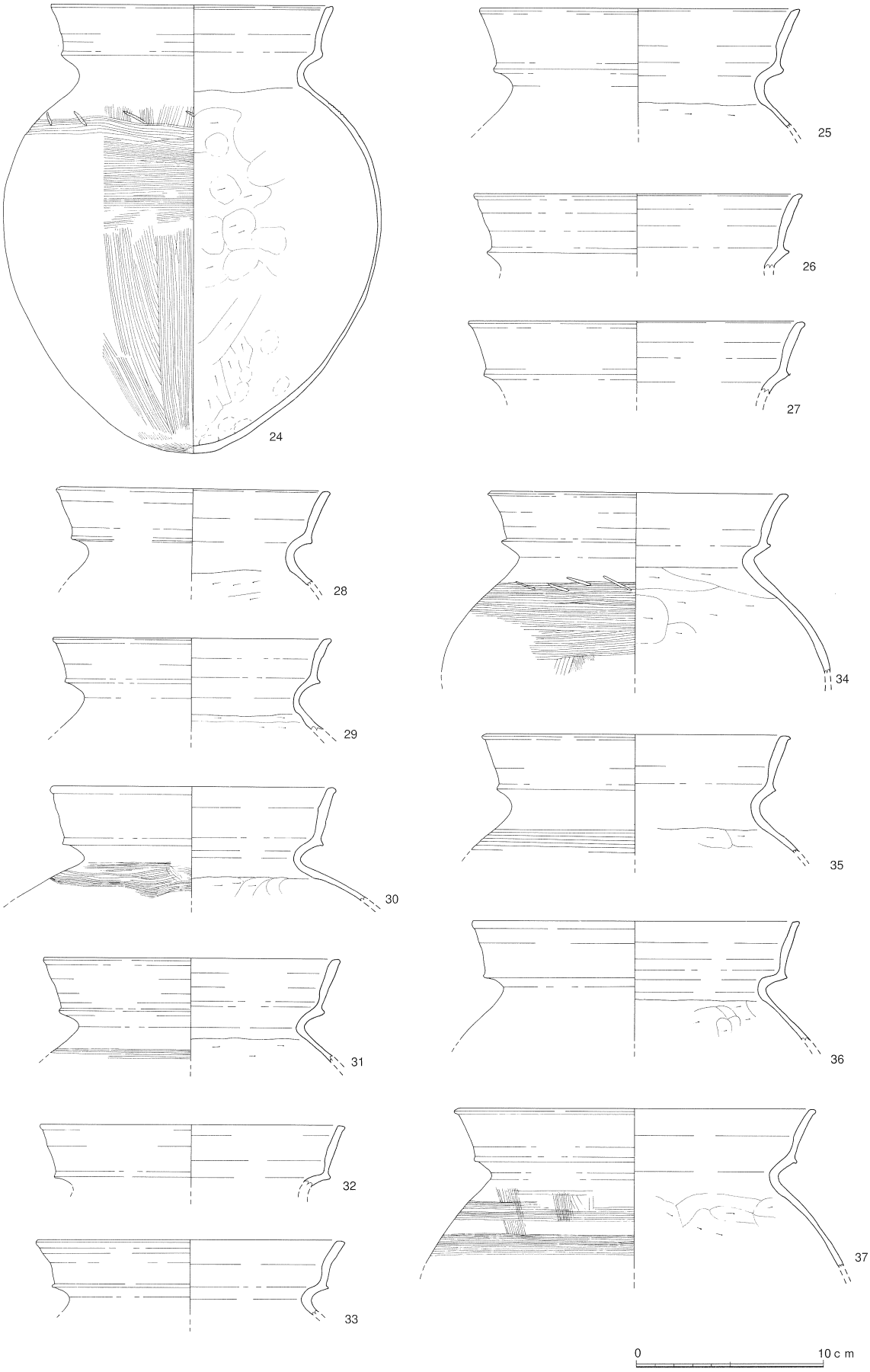
はつけづらい。潰れた状態で出土した（第１２３図）。１９～２９は口縁端部を外側に折り、内側に面を持つ一群である。端部は外側に細く引き出されている。この一群のうち、１９・２０などは、口縁端部を引き伸ばす形態であり、２１・２９も複合口縁部全体が外反するなど１～３にあげたものに類似する。２０は肩上部に乱れた波状文を施す。２４は口縁端部内側が凹線状になるもので、肩部には若干波打つ波状文を廻らしその上からハケ状工具の木口と思われるもので列点文を廻らす。底部は若干の平底を残している。潰れた状態で出土した（第１２３図）。３０～４２、４４は口縁端部上面に面を持つグループである。３０は肩が張る体部で、肩部上面に崩れた波状文を施す。３７は口径２０cm近い大型甕で、肩部上面に２廻りの横ハケを廻らす。上のものは右回りである。３３は複合口縁部の中ほどで折れて外反するもの。４０は外面が摩耗するが肩部に列点文が廻らされていることがわかる。４２・４３、４５～５５は口径２０cmを越える大型の甕である。これらは、複合口縁部が外反し器壁の薄いもの（４２・４３・４５・４６・４８・５０）と、口縁が直立気味で器壁の厚いもの（４７・４９、５１～５５）に別けられる。第１２９図４９は後者の最大のもので、口径２９.５cm、器高４７cmを測る。口縁は直立し、肩部は横ハケの上に波状文を廻らす。そして、内部もケズリの後ハケを施すものである。前述のように破砕された可能性がある。



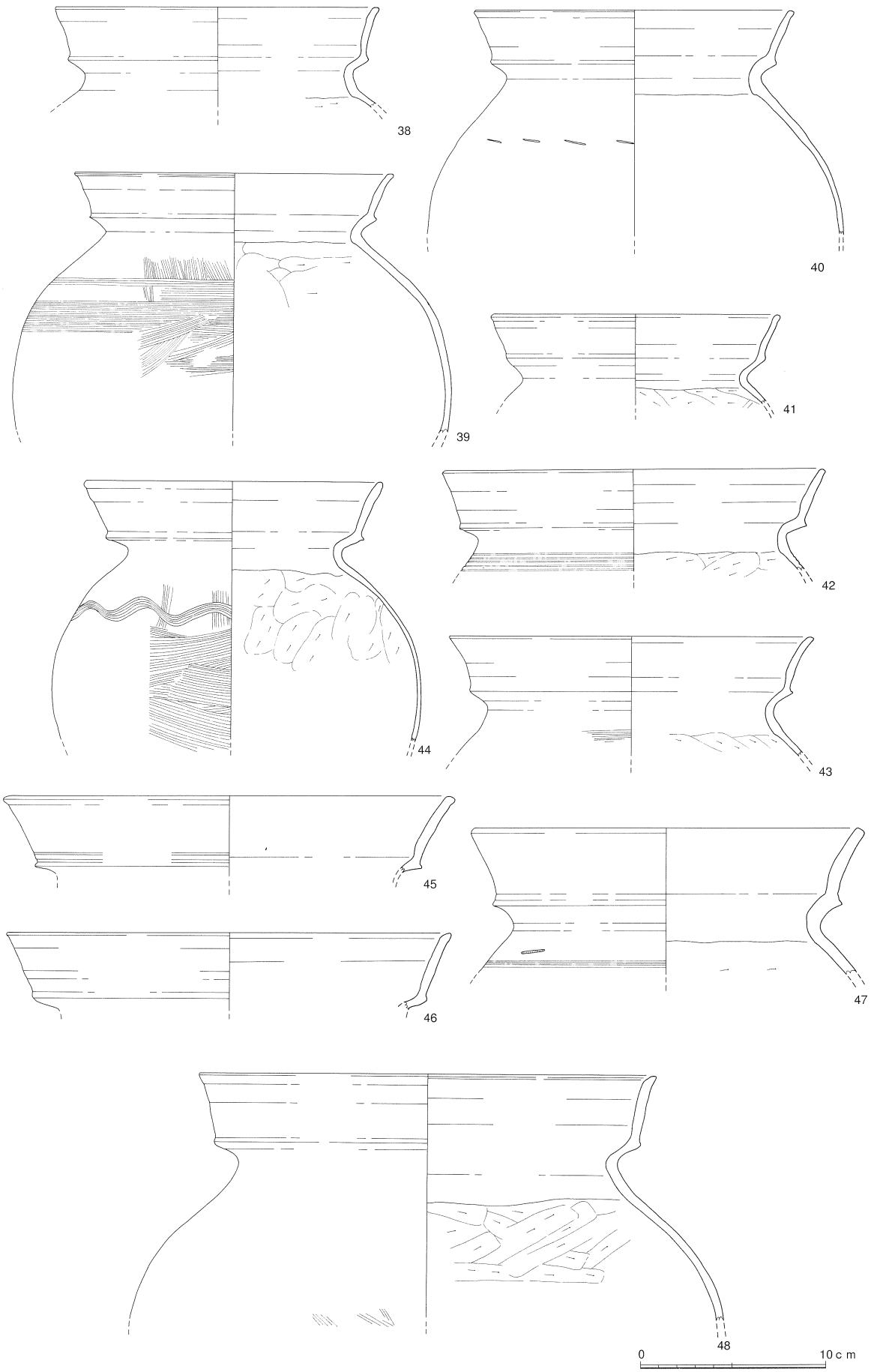
第125図　古志本郷遺跡SD17出土遺物実測図1　(S=1／3)



第126図　古志本郷遺跡SD17出土遺物実測図2　(S=1／3)



第127図　古志本郷遺跡SD17出土遺物実測図3　(S=1／3)



第128図　古志本郷遺跡SD17出土遺物実測図4　（S=1／3）

第129図　古志本郷遺跡SD17出土遺物実測図5　(S=1／3)

５４～５９は単純口縁をもついわゆる布留傾向甕である。このうち５４・５６は完形で出土している（図版４５）。内傾する口縁、端部が内面肥厚するものはなく、全体に口縁の外形がきつく、外反気味である。５７は口縁端部を折り曲げ面を持たせるもので（次山ｅ類）[23]、複合口縁の端部の調整と酷似する。以上４点の胎土は、複合口縁甕と同じ明褐色である。これに対し５８は茶褐色の胎土で、口縁中途がやや厚くなるものである。６０は底部が平底になる甕で、肩部に波状文を廻らす。胎土は他の甕と異なり茶褐色であった。６１は口縁部の欠損する複合口縁の小型の甕で、肩部に次山氏の述べる米粒状列点文が３個みられる。また頸部に穿孔される。６３は大型の甕、あるいは壷の底部である。４８と接合する可能性が高い。

６４～７０は壷である。６５は頸部に余り目立たない縦方向のハケを施す。６６・６８・６９は頸部に綾杉文を廻らせる一群である。ただし、６８の綾杉文は、６６・６９に比べて相当乱れてい

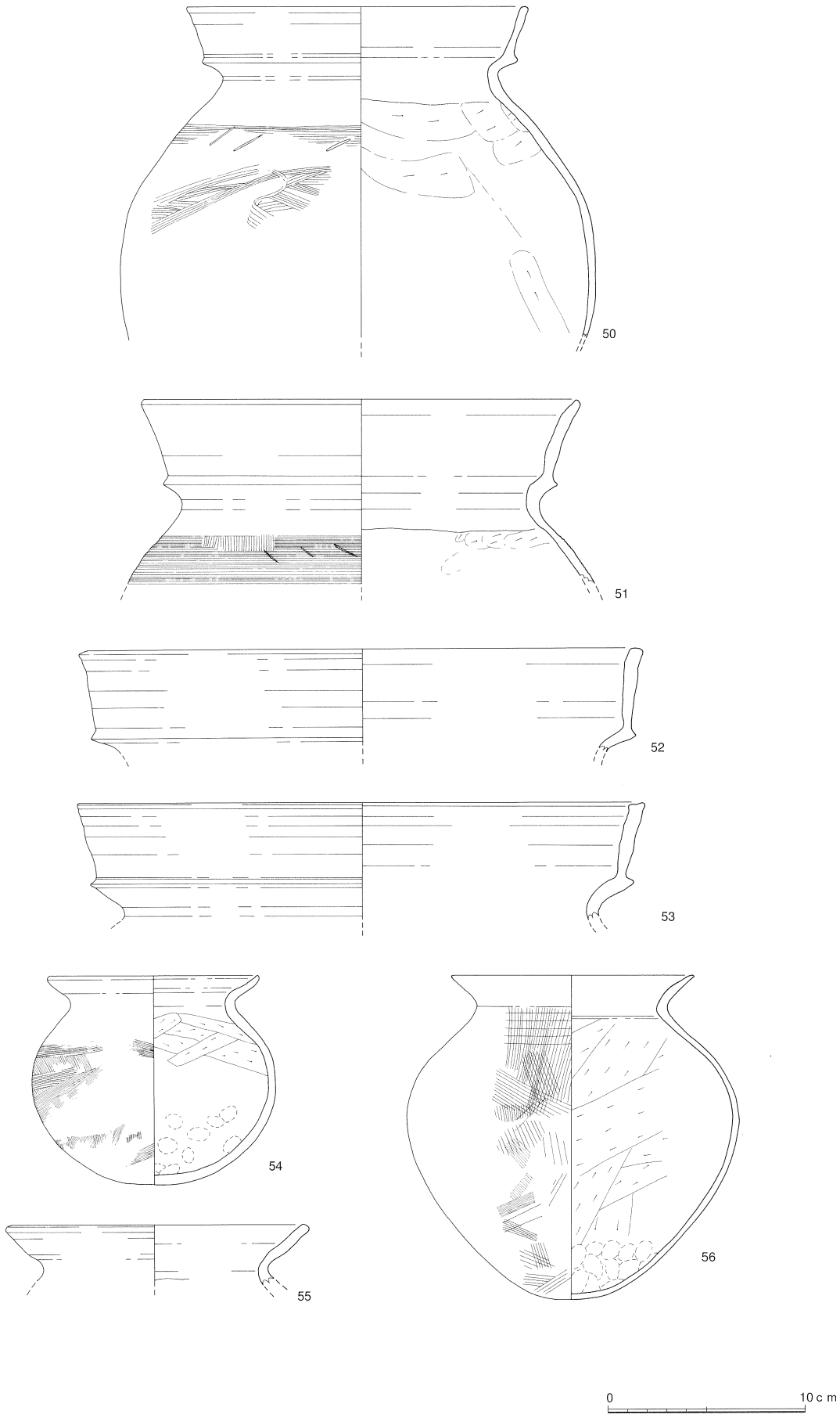
る。７０は口縁部が内傾する壷で、肩部には３条の横ハケとハケ工具小口による列点文が廻らされる。７１は直口壷で、完形品。ＳＤ１６出土のものに比して、複合口縁部の突出が鋭い。口縁部はやや外反する。７２～８０は低脚坏である。７２・７３は口径が１５cm以下と小さく、器高が７cm程度と高いグループである。７４～８０は反対に低平なものである。７４・７７は外面に縦方向のハケを入れ、その後に横方向のミガキを加えるもの。ただし両者ではハケの施す方向が異なる。７５・７６・７８は内面に単位不明のミガキを施す。７９は内外面ミガキで外面は縦ミガキの後横ミガキを施すものである。７４のみが赤褐色の胎土を持ち、他は甕と同じ明褐色の胎土であった。

８１～９３は高坏である。８１は口径２９cm、高さ１４cmを測る大型の高坏で、坏下部に段を持ち底部は肥厚する。松山接続法γによって坏部と脚部が接合されるもので、脚部が外面ミガキ、内面一部ハケ目で四方向に透かしを持つ。坏部のみ割れた状態で、甕１・２０・５０など一緒に出土した（第１２２図参照）。なお、他の高坏が明褐色の胎土をもつのに対し、本高坏のみ茶褐色である。８２・８３は同様に坏下部に段をもつ高坏坏部である。８４は８１の北側で出土した高坏で、坏下部には屈曲部が認められる。８５～８８は高坏坏部片であり、これらの中には同一個体もあるかと思われる。８５は外部に横方向の細かいミガキを施す。８９～９３は高坏脚部で内面ケズリ、外面は縦ハケを施す。９４は低脚高坏脚部で、外面ハケ後縦ミガキ、四方向に透かしをもつ。９５はＳＤ１６でも出土しているワイングラス型土器である。ただし、９５は口縁が外側につまみ出され、縁状をなすこと、外面が幅広の縦ミガキの後横ミガキを受け、内面が細かいにミガキによってよって調整されており、全体にＳＤ１６出土のものより丁寧な作りであるといえる。また、底部には円盤充填によって足がついていた痕跡が認められる。胎土は甕などと同じく明褐色である。

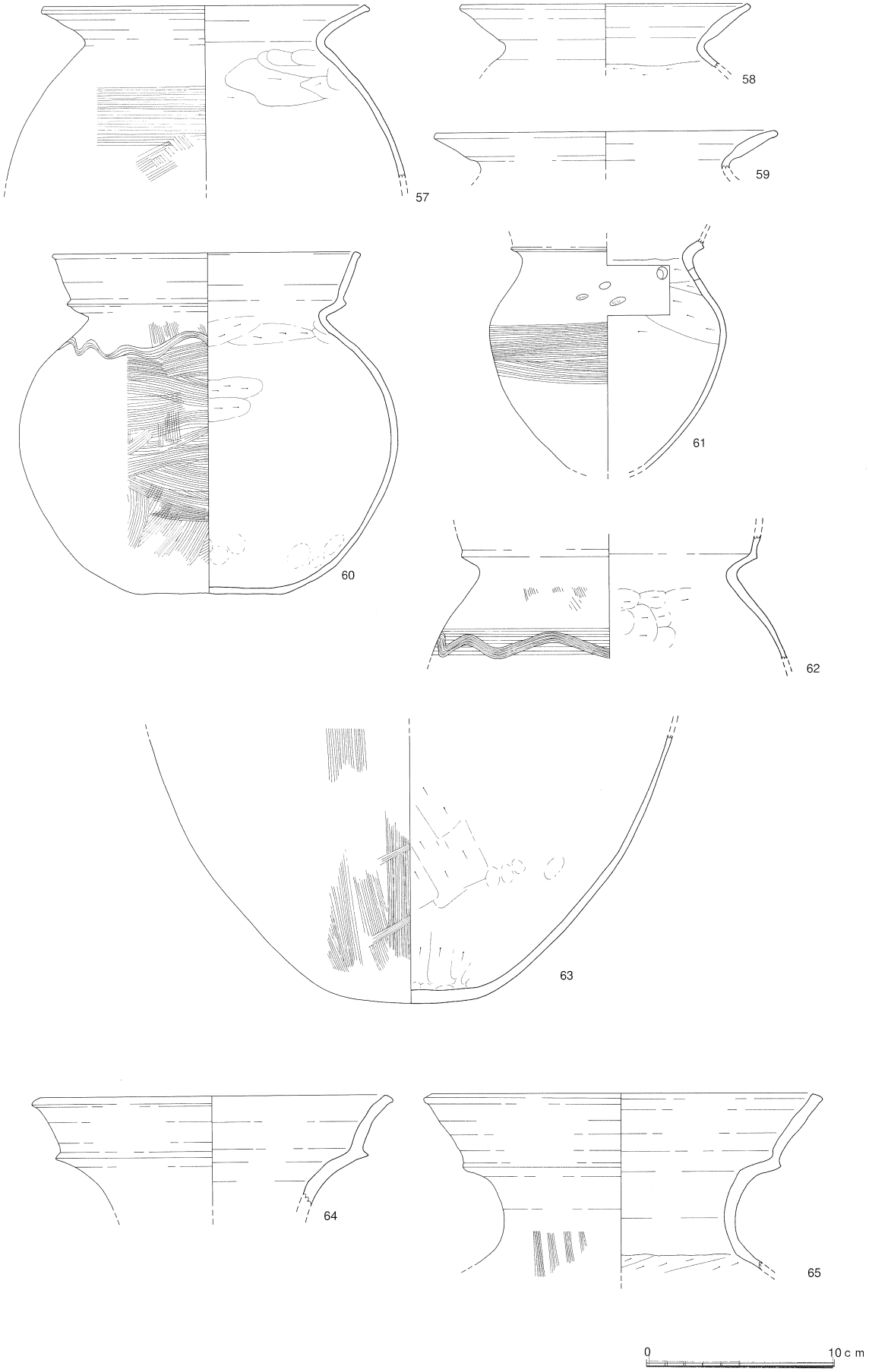
９６はいわゆる甑型土器である。ＳＤ１７の調査区南寄りで、１個体が四散した状態で出土した（１２４図）。上部と下部から復元したが、両者は厳密には接合しない。図では示していない上部の把手も、欠ける部分に存在したと思われる。上部径１１cm、底径４７cmを測る。外面は縦方向のハケが施され、内面は上部が縦方向のケズリ、下部が横方向のケズリを施されていた。なお、内外面ともに煤などの付着は認められなかった。

９７～１０１は混入品と思われる他の時代の遺物である。９７は口縁部に凹線をもつ弥生土器甕で松本Ⅳ様式に当たる。９８～１００は口縁をくの字状にする土師器の甕で、１００は口縁部内面にハケを施す。１０１は高台をもつ土師質土器坏で、本報告では余り扱うことのない器形である。

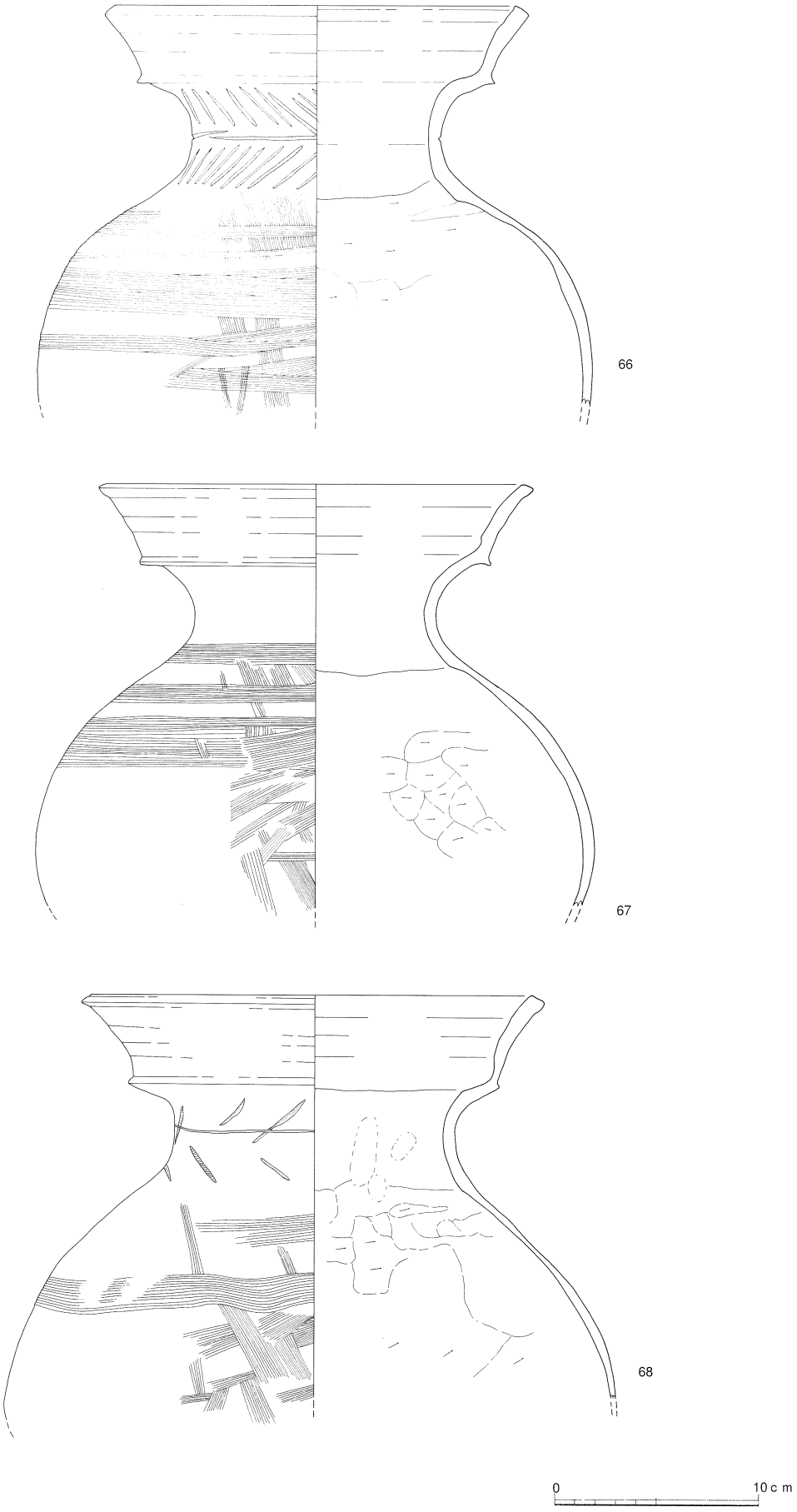
大溝ＳＤ１７の年代　これまで説明を加えてきた遺物は、Ⅴ層出土のものが主体であり、確実にⅢ層出土の年代の推定できる土器がないことから、Ⅲ層の他積年代で明確には出来ない。Ⅴ層の年代はＳＤ１６同様、１～９６までの土器群から考察することができる。まず甕であるが、ＳＤ１６から出土する複合口縁部に平行沈線を施すもの（第１０４図１）はみえないが、口縁端部が先細りになるもの等は同じように出土し、口縁端部を外に引き伸ばすように折り、内側に面をもたせるもの（１９～２９）、口縁端部を外に折り外側に面をもつもの（４～１７）、口縁端部上方に面をもつもの（３０～４１・４４）が同様に出土している。したがって、出土土器の中心は草田６・７期に収まることになる。低脚坏などの状況も同じである。また、布留傾向甕の年代も初期の布留式～布留Ⅰ期に当たり、ＳＤ１６と大差はない。しかし、壷だけはやや様相が異なって折り、ＳＤ１７ではＳＤ１６にはない頸部に綾杉文を施すものがみられ、逆にＳＤ１７では頸部に凸帯を廻らせるものがみ



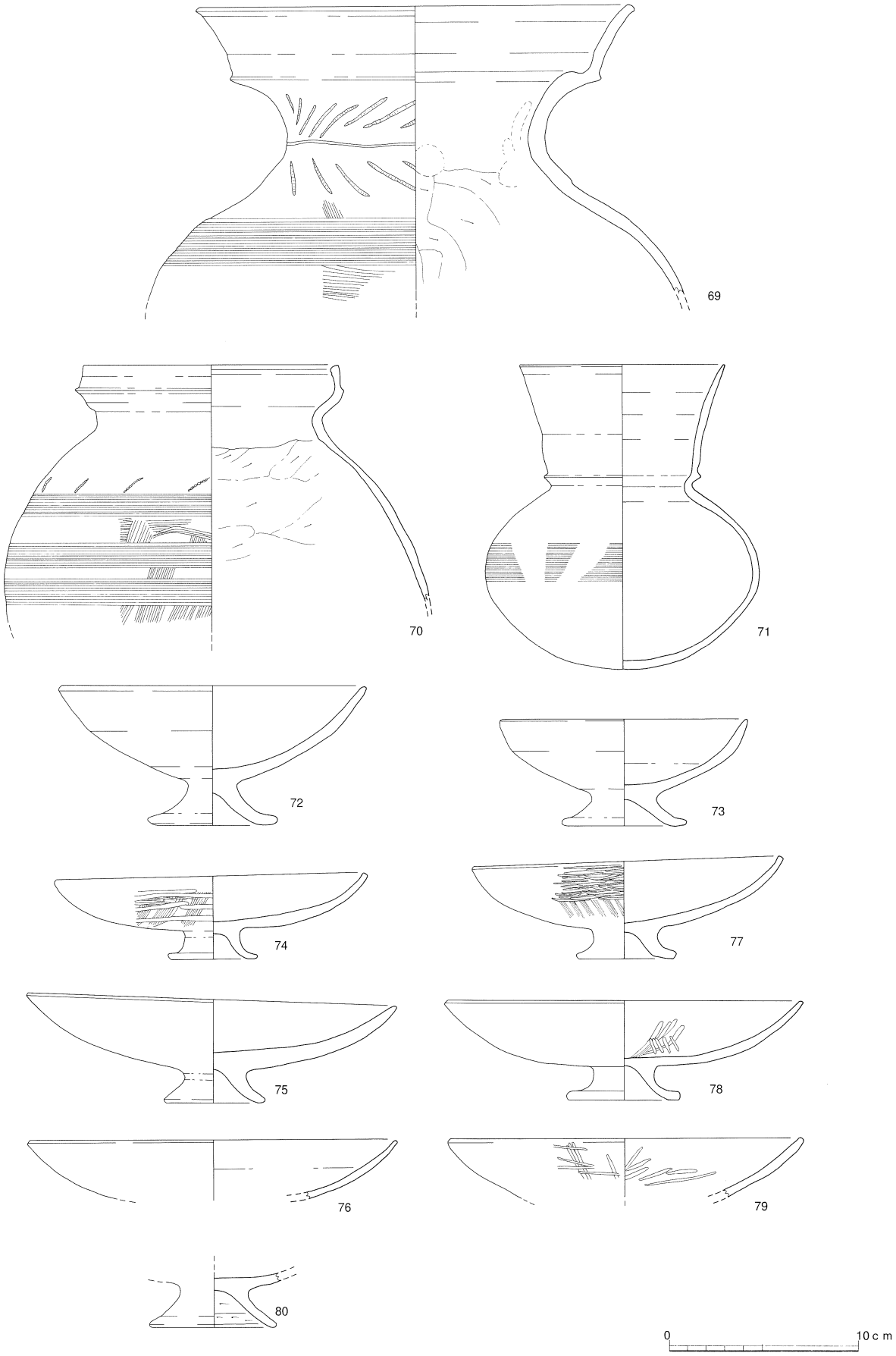
第130図　古志本郷遺跡SD17出土遺物実測図6　(S=1／3)



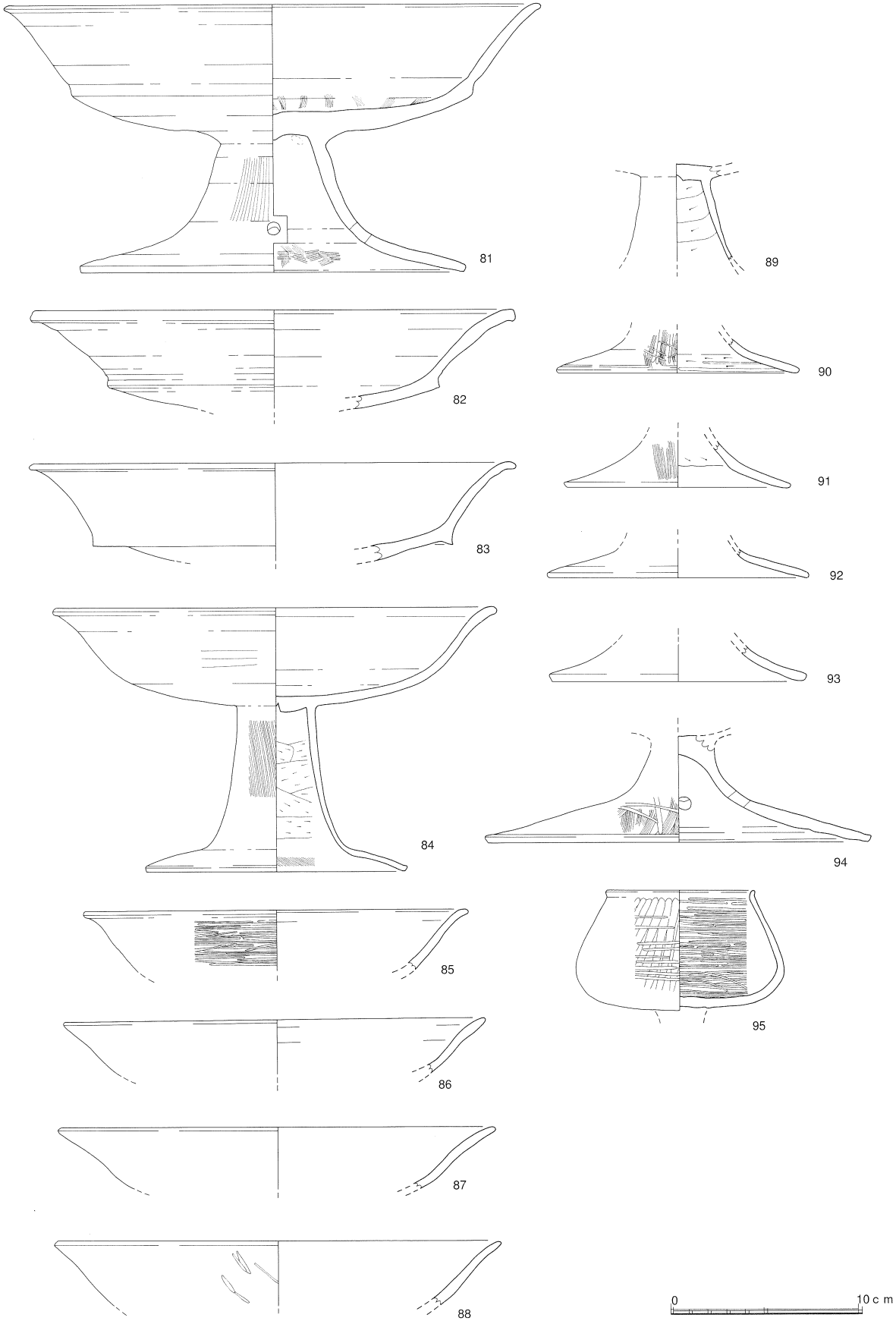
第131図　古志本郷遺跡SD17出土遺物実測図7　(S=1／3)



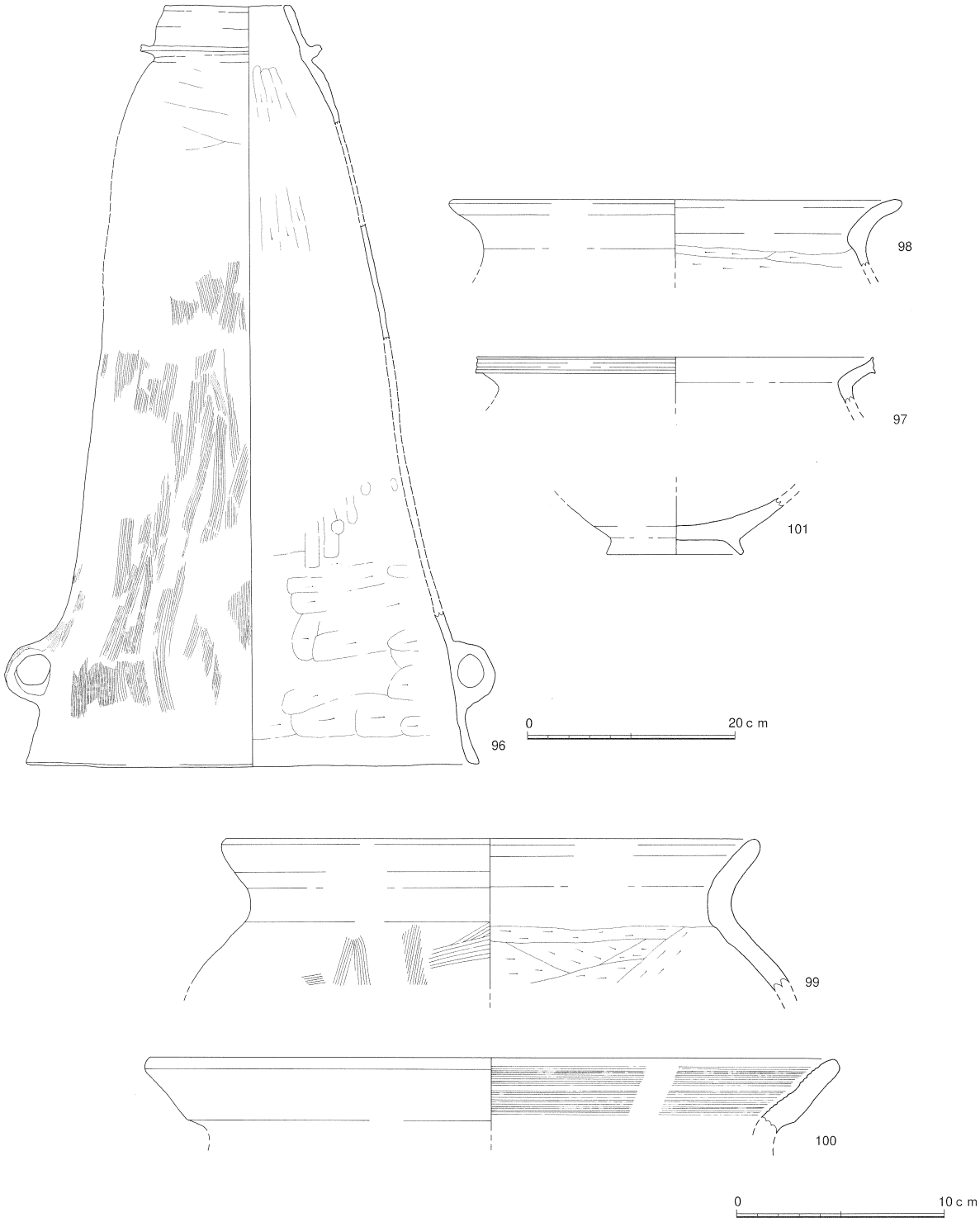
第132図　古志本郷遺跡SD17出土遺物実測図8　(S=1／3)



第133図　古志本郷遺跡SD17出土遺物実測図9　(S=1／3)



第134図　古志本郷遺跡SD17出土遺物実測図10　(S=1／3)



第135図　古志本郷遺跡SD17出土遺物実測図11　(S=1／3、96のみS=1／6)

えない。ただし、これらいずれの器形も草田６・７期の範疇に入るものであるので、この両者の差が時期差であるかは不明である。このように大溝ＳＤ１７のＶ層の形成時期、すなわち溝の廃棄の時期は、ＳＤ１６とほぼ同じ草田７期になる。また、ＳＤ１７の掘削開始年代もＳＤ１６の掘削開始年代以上に手がかりがなく、おおむね、弥生時代後期のある時期と考えるより他はない。このように、ＳＤ１７の機能した年代はほぼＳＤ１６と重なるとみられるのである。

大溝ＳＤ１７の性格　ＳＤ１６同様、第３章まとめで考察を加える。

ＳＤ１８（第６２、１３６～１３８図）

規模・構造　ＳＤ１８はＣ区西寄りに位置し、南東から北西へ貫流する大溝である。後述するように完掘状況で断面逆台形の溝となるが、平成８年度の調査部分では地山に類似する砂質土の堆積層を堀残したまま調査を終了してしまい、第１３８図ではその部分には遺構下端を入れていない（同図ＤＤ’以南の部分）。

溝の規模は、本報告中でも最大級で、上幅４.０ｍ、深さ１.０ｍを測り、完掘状況で断面は逆台形を呈する。底部の標高は南側で６.８ｍ、北側で６.７ｍほどである。調査区内で約３０ｍ分を検出する他、航空写真を見ると、南側水田部にはにはさらに連続するソイルマークがみえる（図版４９）。溝は調査区内ではほぼ直線的に掘削されており、おおむねＮ－３５°－Ｗを指向する。

なお、ＳＫ３４、ＳＢ２０は本遺構の上に作られている。加えて、南端ではＳＤ１７との切り合いがあるが（第１２０図ＳＤ１７土層断面図参照）、この点については後述する。

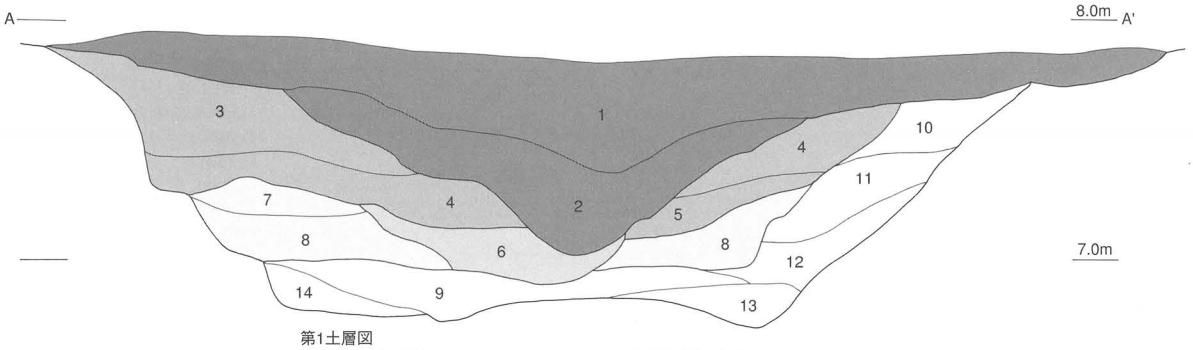
土層堆積状況（第１３６図）　土層断面は合計４カ所で確認したが、前述の様に、南側ＤＤ’についてはⅠ・Ⅱ層を未確認であった。したがって、残る三カ所の土層図のみを提示する。なお、第４土層断面ＤＤ’の堆積状況については図版４７を参照されたい。

土層堆積状況の概要を述べると、最低４回の再掘削が認められる。以下、最後の掘削時の埋土をⅤ層とし最初の掘削時の埋土をⅠ層とし、北側の土層断面から順次説明を加える。

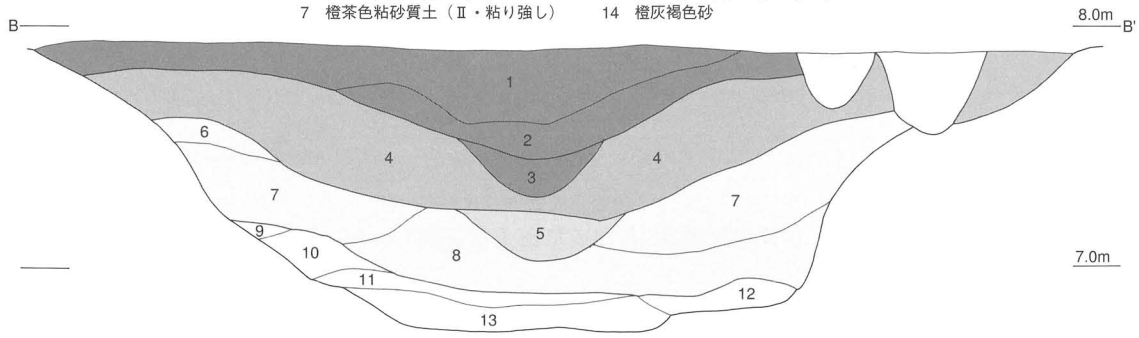
第１土層図（ＡＡ’、口絵カラー図版３参照）　調査区北壁で確認した土層図である。したがって、溝と直交せず、断面がやや長めになっている。第６３図でもわかるように、本遺構の地山より上の部分は奈良・平安時代の遺物包含層であり、本来の遺構掘り込み面は確認できなかった。上からⅤ層（１・２層）、Ⅳ層（３～５層）、Ⅲ層（６層）、Ⅱ層（７～９層）、Ⅰ層（１０～１４層）の順に分層できる。Ⅴ層は黒茶色系のやや粘り気のある締まった土が堆積する。断面形状はⅤ字を呈する。底部の標高は７.０５ｍであった。次いで、Ⅳ層は茶褐色系の砂質土が堆積する。断面は箱状で底部の標高は７.２５ｍである。Ⅲ層は、Ⅳ層に切られ、再下層のみが逆三角形状の形状に残る溝で暗灰褐色の粘砂質土が堆積する。幅広なⅣ層にほとんど切り取られ、Ⅴ字の先端のみが残っているものと思われる。底部標高７.９ｍである。Ⅱ層は幅という観点から言うとＳＤ１８がもっとも拡張された時の溝の埋土で、鉄分を含んだ粘砂質土と、流出した地山の灰褐色差からなる。この土層が形成される時期には流水があったものと考えられる。断面は逆台形をなし、底部の標高は７.８ｍである。Ⅰ層は一部のみが残存する。堆積物には地山砂層がを含むものが複数あり、流水があったものと思われる。断面は逆台形と推定され、底部標高は７.８ｍを測る。

第２土層図（ＢＢ’）　溝の主軸方向と直交しない角度で確認ししたため、若干横方向に長くなっている。上からⅤ層（１～３層）、Ⅳ層（４層）、Ⅲ層（５層）、Ⅱ層（６～８層）、Ⅰ層（９～１３）に分層できる。Ⅳ層の最上層になる第６層では、ＡＡ’同様に茶褐色の砂質土が確認され、Ⅳ層の上部は土壌化した堆積土をもっていたことが窺える。またⅠ層でも最上層第９層で茶灰褐色砂質土がみられ、ある程度土壌化した土によって埋まったことが窺える。Ⅰ層の１１層と１２・１３層の間に、再掘削の可能性がある。

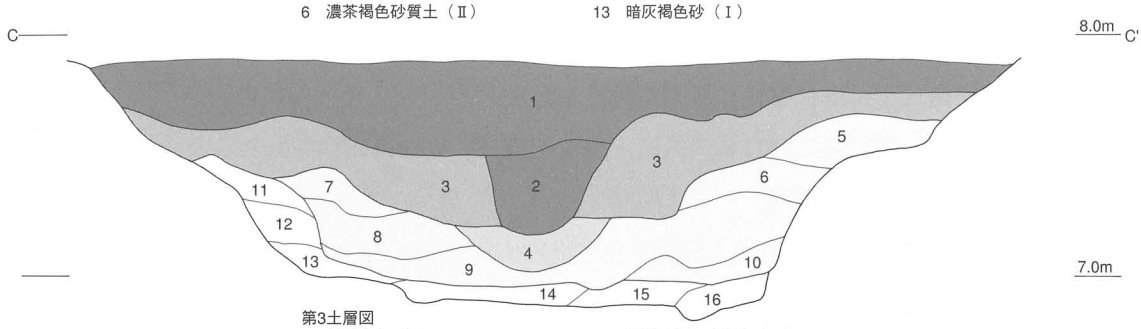
第３土層図（ＣＣ’）　第１～３の中で一番溝に直交して確認した土層図である。上からⅤ層（１～２）、Ⅳ層（３）、Ⅲ層（４）、Ⅱ層（５～９）、Ⅰ層（１０～１６）に分層できる。Ⅳ層は下端の幅が１.５ｍ、Ⅱ層が２.５ｍ、Ⅰ層も２.５ｍを測る。Ⅰ層の堆積層は分層することができ、左から



第1土層図
1　黒茶色土（V）
2　濃黒茶色土（V）
3　暗茶色砂質土（Ⅳ）
4　濃茶色砂質土（Ⅳ）
5　茶褐色砂質土（Ⅳ）
6　濃灰茶褐色砂質土（Ⅳ）
7　橙茶色粘砂質土（Ⅱ・粘り強し）
8　橙灰褐色砂（Ⅱ）
9　濃灰褐色砂（Ⅱ）
10　暗褐色土
11　黒茶色砂質土
12　橙茶灰色粘砂質土
13　橙灰色粘砂質土（粘り強し）
14　橙灰褐色砂



第2土層図
1　黒茶色土（V）
2　濃黒茶色土（V）
3　暗茶色土（V）
4　濃茶色砂質土（Ⅳ）
5　暗灰褐色粘砂質土（Ⅳ）
6　濃茶褐色砂質土（Ⅱ）
7　茶褐色砂質土（Ⅱ）
8　橙灰褐色砂（Ⅱ）
9　茶灰褐色砂質土（Ⅰ）
10　橙茶灰色粘砂質土（Ⅰ）
11　濃灰褐色砂（Ⅰ）
12　橙灰褐色砂（Ⅰ）
13　暗灰褐色砂（Ⅰ）



第3土層図
1　黒茶色土（V）
2　濃黒茶色土（V）
3　濃茶色砂質土（Ⅳ）
4　暗灰褐色粘砂質土（Ⅲ）
5　濃茶色粘砂質土（Ⅱ）
6　茶褐色粘砂質土（Ⅱ）
7　橙茶色粘砂質土（Ⅱ・粘り強し）
8　茶褐色砂質土（Ⅱ）
9　橙茶灰色粘砂質土（Ⅱ）
10　暗茶色砂質土（Ⅱ）
11　茶灰褐色砂質土（Ⅰ）
12　黒茶色砂質土（Ⅰ）
13　橙茶灰色粘砂質土（Ⅰ）
14　濃灰褐色砂（Ⅰ）
15　暗灰褐色砂（Ⅰ）
16　橙灰褐色砂（Ⅰ）

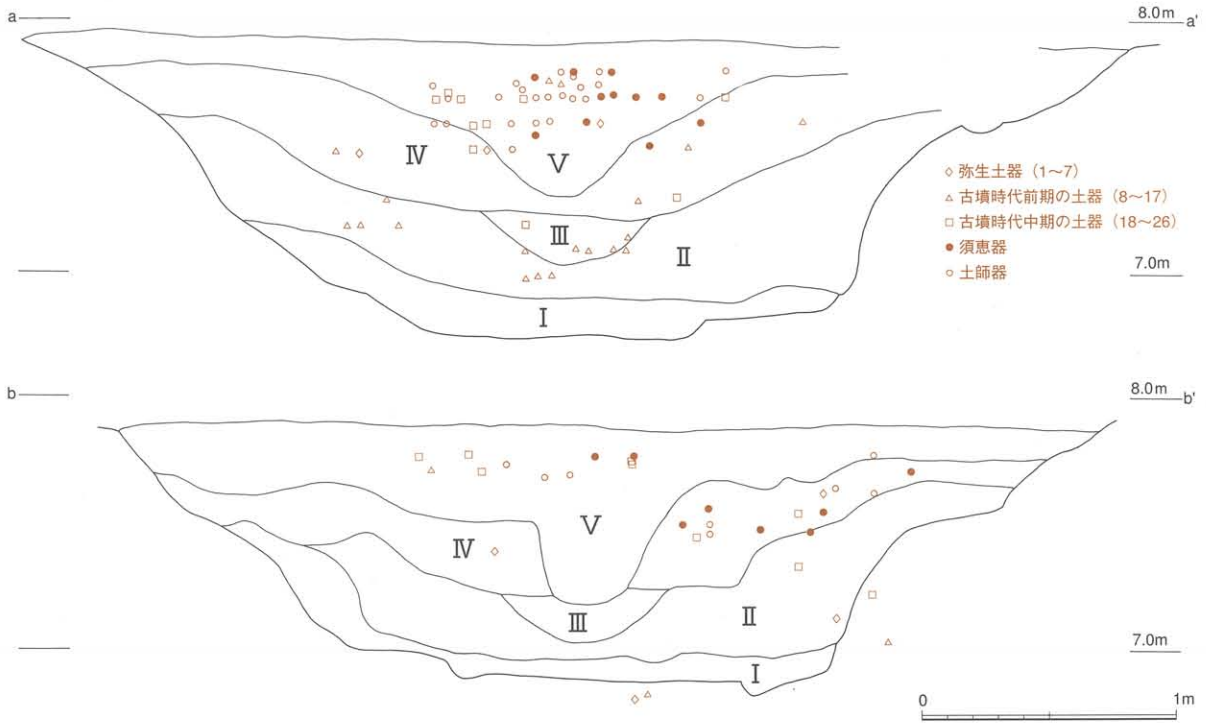
0　1m

第136図　古志本郷遺跡SD18土層図　（S=1／30）

右に堆積していった様子がよくわかる。ここでも流水が想定できる。

土層堆積状況のまとめ　以上の堆積状況をまとめると、次のことが指摘できる。

1　溝は、最初の掘削時（Ⅰ層堆積）、第１回目の再掘削時（Ⅱ層堆積）は逆台形をなしていた。この時点では溝内での流水が考えられる。なおかつ上層には土壌化した砂質土が堆積することから、



第137図　古志本郷遺跡SD18遺物出土状況図1　(S=1／30)

流水がなくなり、溝が埋まった段階でほぼ同じ規模に再掘削されたと考えられる。

2　第２回再掘削時（Ⅲ層堆積）には、Ｖ字が指向される。そしてこの溝はの下層も茶灰色の粘砂質土が埋土となっていることから流水は考えづらい。

3　第３回再掘削時（Ⅳ層堆積）には再び底部の広い断面箱型の溝が指向されるが、続く第４回再掘削時にはまたＶ字の断面が指向される。最終的なＶ字溝は流水はなく埋没する。

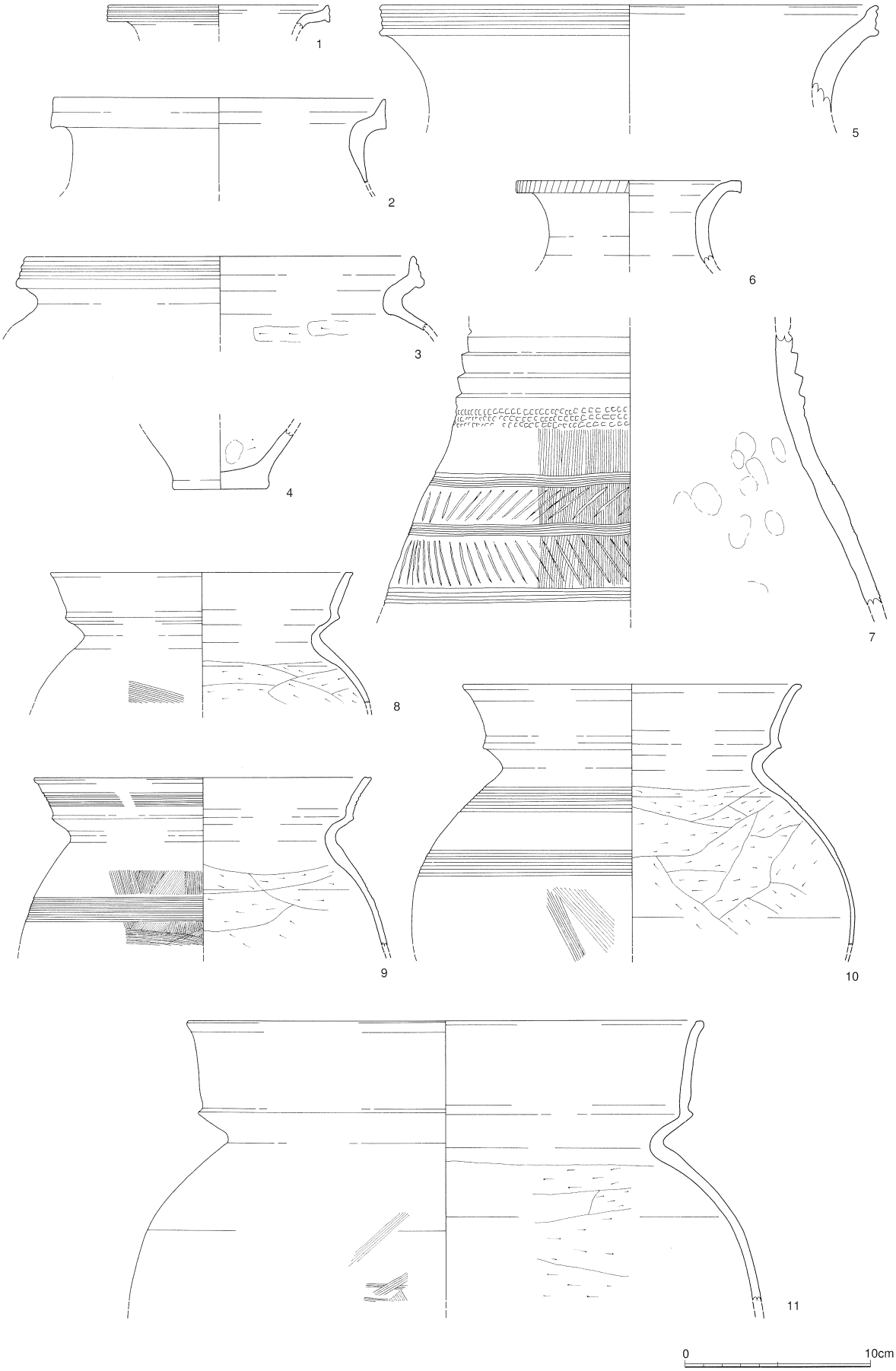
4　覆土から、平安時代には溝は完全に機能を停止し埋没していたと考えられる。

5　以上、１～３から、掘削時ごとに溝の構造・機能が変化しつつ再掘削されたことがわかる。

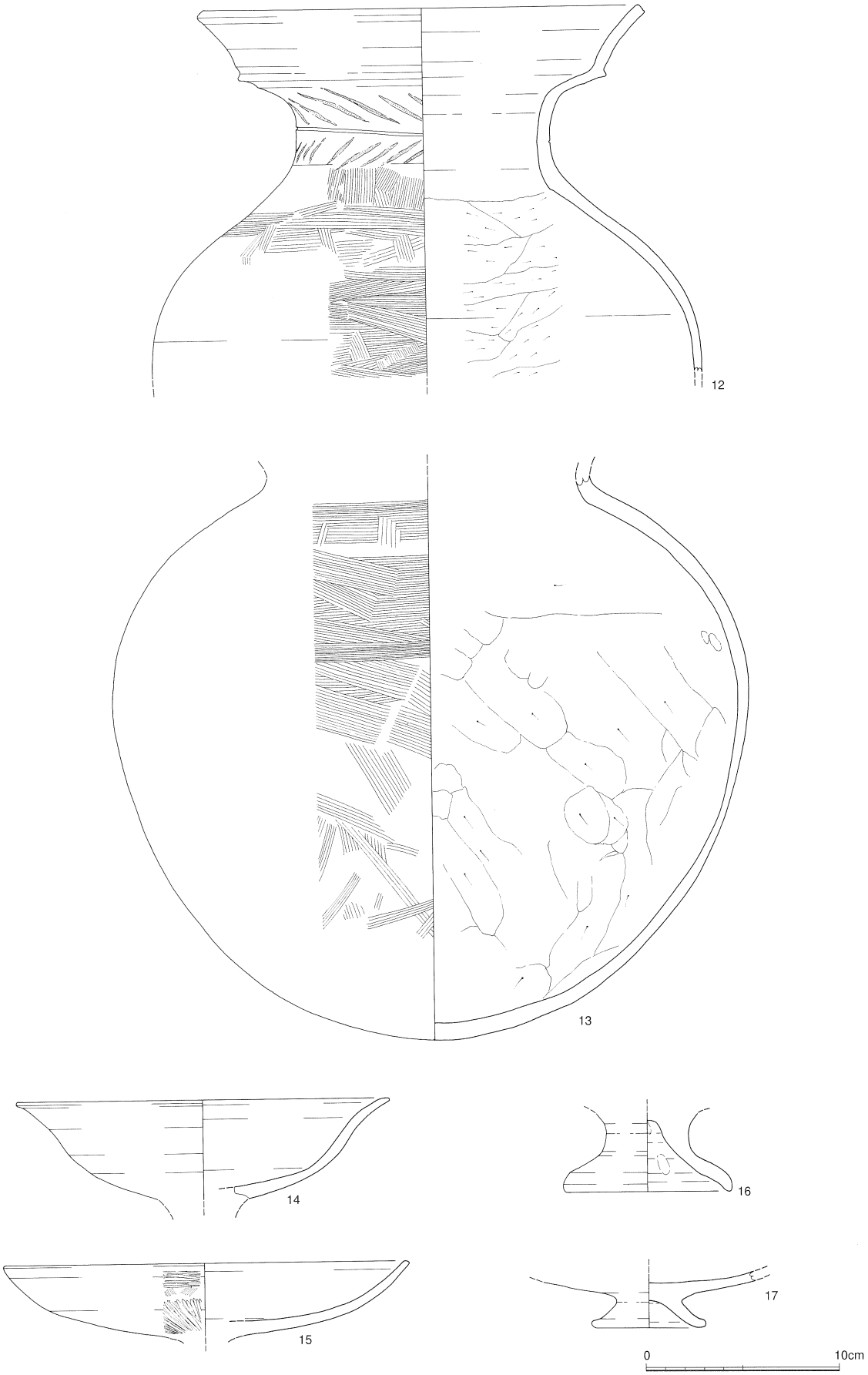
遺物出土状況（第１３７・１３８図）　ＳＤ１６、１７と異なり、大溝ＳＤ１８ではＩ～Ⅴの各層から遺物が層位的に出土した。第１３７図はそれを溝の上流方向から下流方向に対して見通した図である。第１３７図上側の垂直分布図が第１３８図の左側の平面分布図をａａ'に直交する方向から見たもの、下側が同右側をｂｂ'に直交する方向から見たものである。ただし、第１３８図ＤＤ'以南についてはＩ・Ⅱ層を調査していないので、その部分の出土土器はその上層のものも含めて第１３７の下側の図面に入れていない。凡例で時期区分の後にかかれた番号の遺物が、その記号の地点から出土したことになる。なお、時期不明の土師器片については垂直分布図では煩雑になるため省略している。また、第１３７図には出土遺物と土層の関係がつかみやすいようにＢＢ'　ＣＣ'での土層を入れてある。

第１３７図を見ると、弥生土器が上層、下層から散在して出土するのに対し、古墳時代前期・古中期の土器は明らかに出土する土層に対応関係がある。須恵器・土師器の出土土層についても同じことが言える。すなわち、Ⅰ・Ⅱ層からは古墳時代前期の土器が出土し、Ⅲ・Ⅳ層からは古墳時代検出面近くからまとまって出土した（図版４８）。また、第１４８図９６・９７は第１３８図南側の

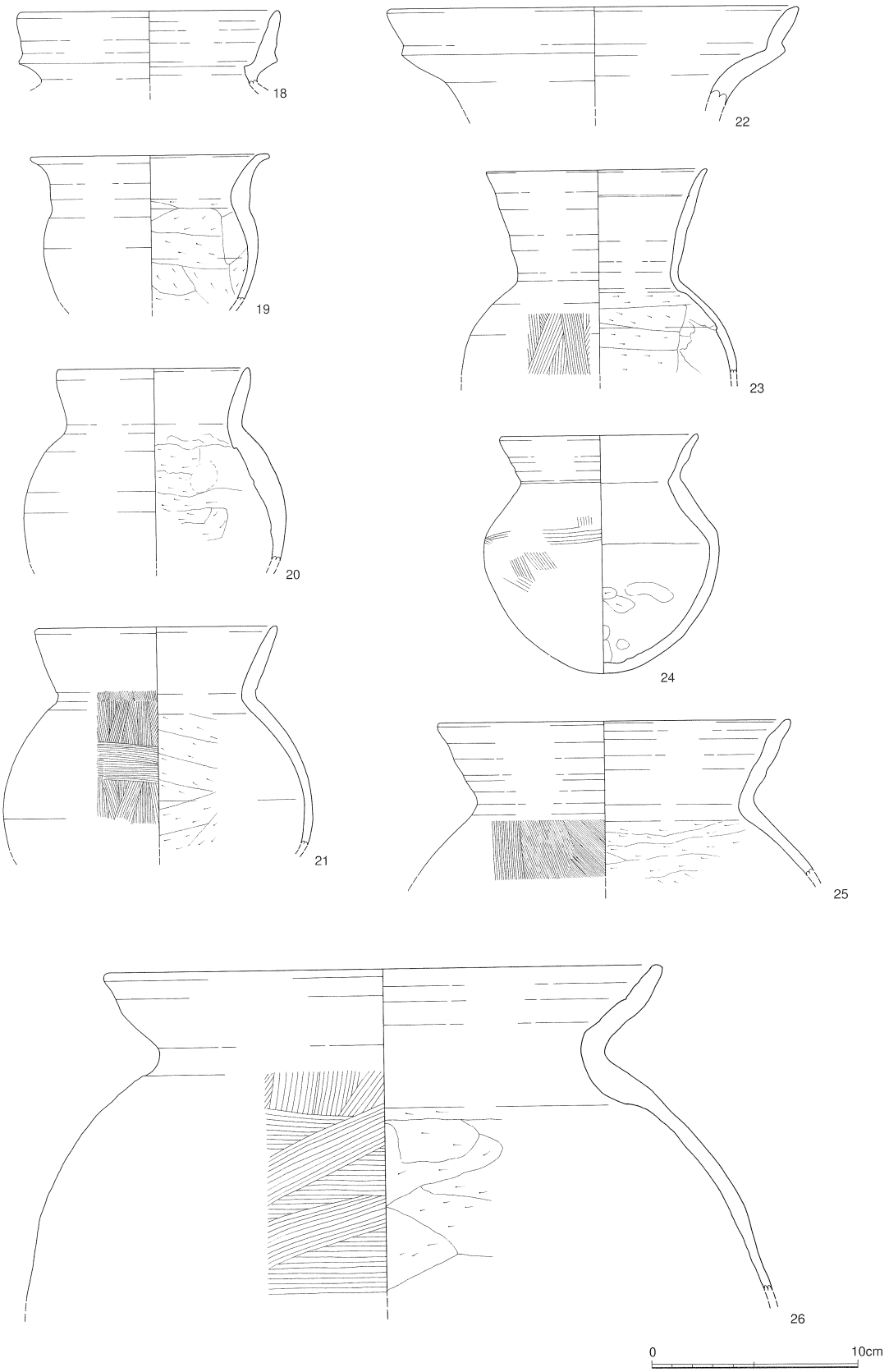
第138図　古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図2　(S=1／90)



第139図　古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図1　(S=1／3)



第140図　古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図2　(S=1／3)



第141図　古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図3　（S=1／3）

竈片の集中する部分から出土し、約半分ほど復元できた。

各層の年代　土層堆積状況と遺物の出土状況の対応から、Ⅰ・Ⅱ層が古墳時代前期に埋没、Ⅲ・Ⅳ層が古墳時代中期に埋没、Ⅴ層が古墳時代後期以降、奈良時代までに埋没したことがわかる。ＳＤ１８は、形状、性格を変えながら長期間に渡って利用され続けられたのである。

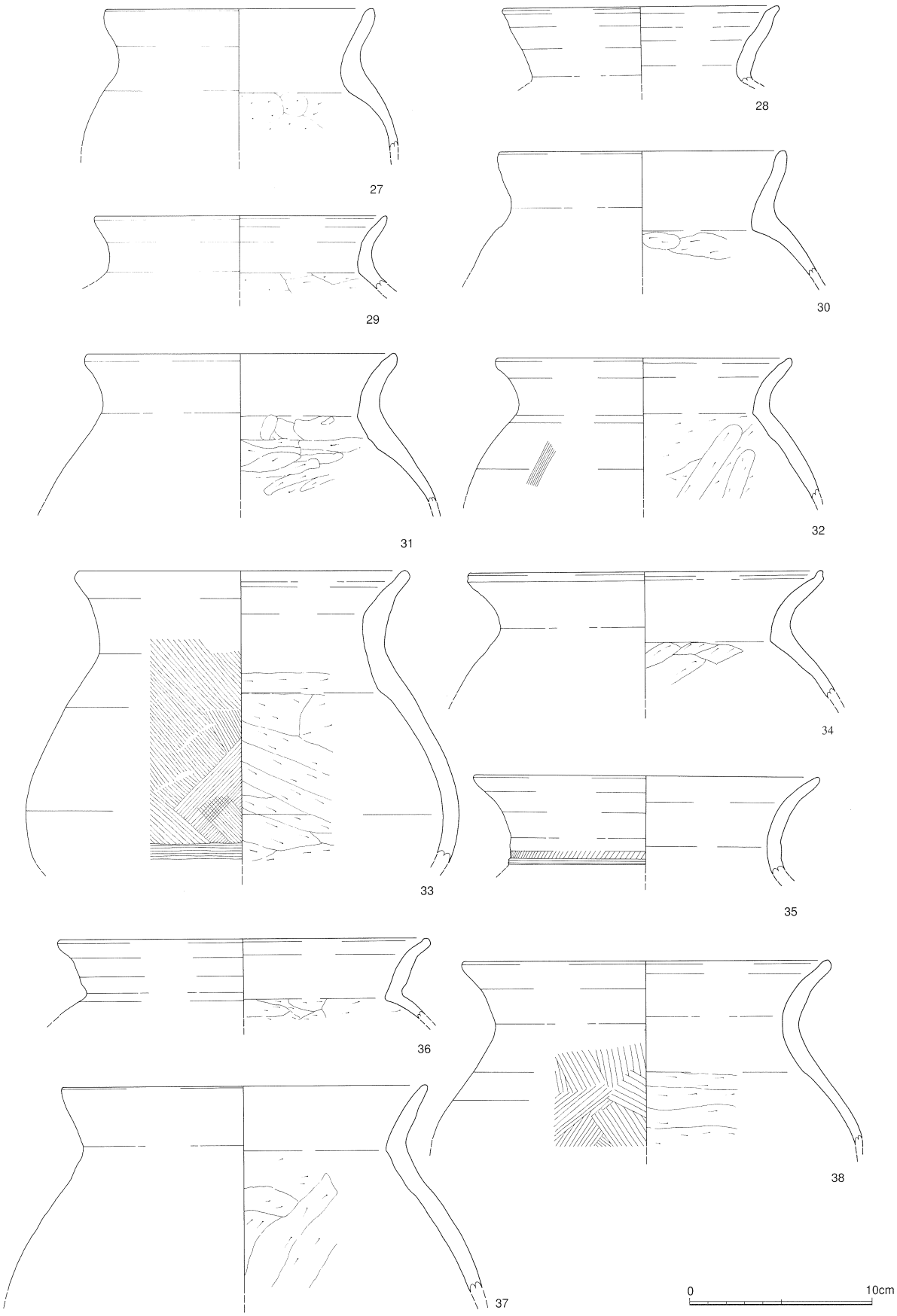
出土遺物（第１３９～１５０図）　出土遺物は、弥生土器～古墳時代中期の土器、須恵器は実測可能なもののすべてを実測し、古墳時代後期以降の土師器ついては主要なもののみを掲載した。

１～７は弥生土器である。１・６は小型の広口壷、５はやや大きな広口壷である。口縁部には３条程度の凹線・擬凹線を廻らす。６は口縁部に斜めの刻目文を施すもの、２は凹線のないものである。４は甕などの底部。７は肩が余り張らず、背の高い広口壷の肩部である。頸部には４条以上のヘラ描沈線が施され、その下に列点文帯、その下は、縦ハケの後３条の沈線帯で区分して、綾杉文を施している。これらの土器は松本Ⅳ－２様式のものである。

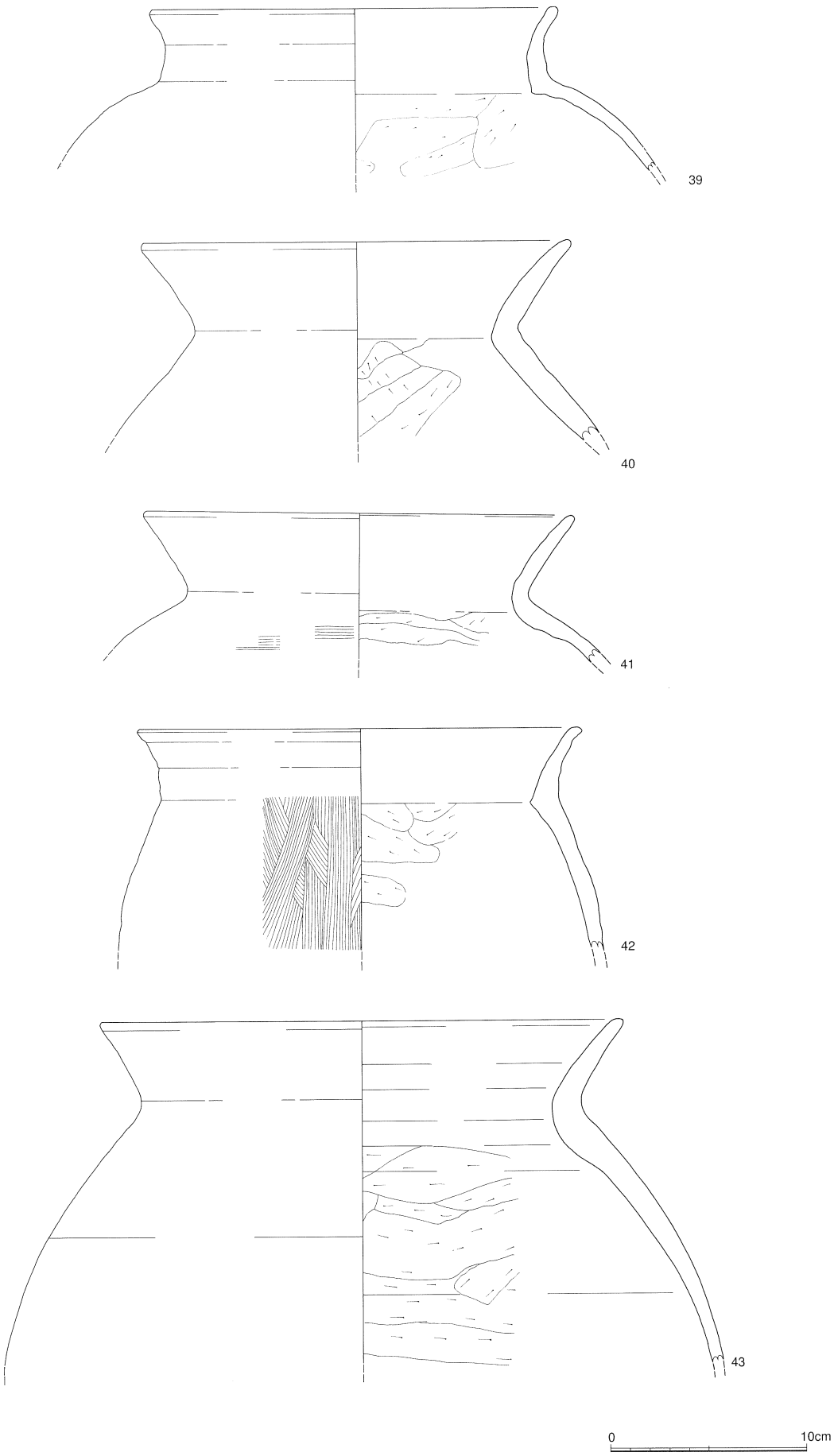
８～１７は弥生時代末から古墳時代前期の土器である。８～１０は、複合口縁部が外反するもので、９・１０は肩部に沈線の幅がやや開く原体を用いた横ハケがみられる。９は口縁内側に凹線状になるナデ跡を残し、複合口縁部外面にも平行沈線が施されものである。１１は大型の甕で、直立する口縁部をもつ。１２・１３は壷である。１２は頸部中央にくし描沈線を廻らし、その両辺に綾杉文を展開させる。１３は頸部のない壷の破片である。１４は高坏片で、坏底部は円盤充填によって接合される。口縁部は外反する。１５～１７は低脚坏である。１５は外上部を横方向の細かいミガキ、下部をやや幅の広いミガキによって調整する。１６・１７は脚部である。以上の土器は８～１０が草田４～５期、１３～１７が草田６～７に該当するものである。

１８～２８は古墳時代前期後葉～中期の土師器である。１８は複合口縁を残す口径１３cm程度の小型の甕である。１９は口縁部が外側広がり、端部は外に引き出される土器で、内面は甕同様ケズリが施される。小型丸底壷・鉢等の影響を受けたものであろうか。２０・２１・２４は小型丸底壷である。２１は外面に横ハケを施す。２３は直口壷で、複合口縁部が完全に退化したものである。２２は複合口縁部が鈍化した壷である。２５、２６は単純口縁の甕で、２６は口縁部が内湾する。２５は外面に横ハケはみられない。以上の土器群の時期は、２３が松山Ⅰ～Ⅱ期、１８・２１・２４・２６が同Ⅱ期古段階、２０・２５が同新段階、１９・２２が同Ⅲ期であろう。

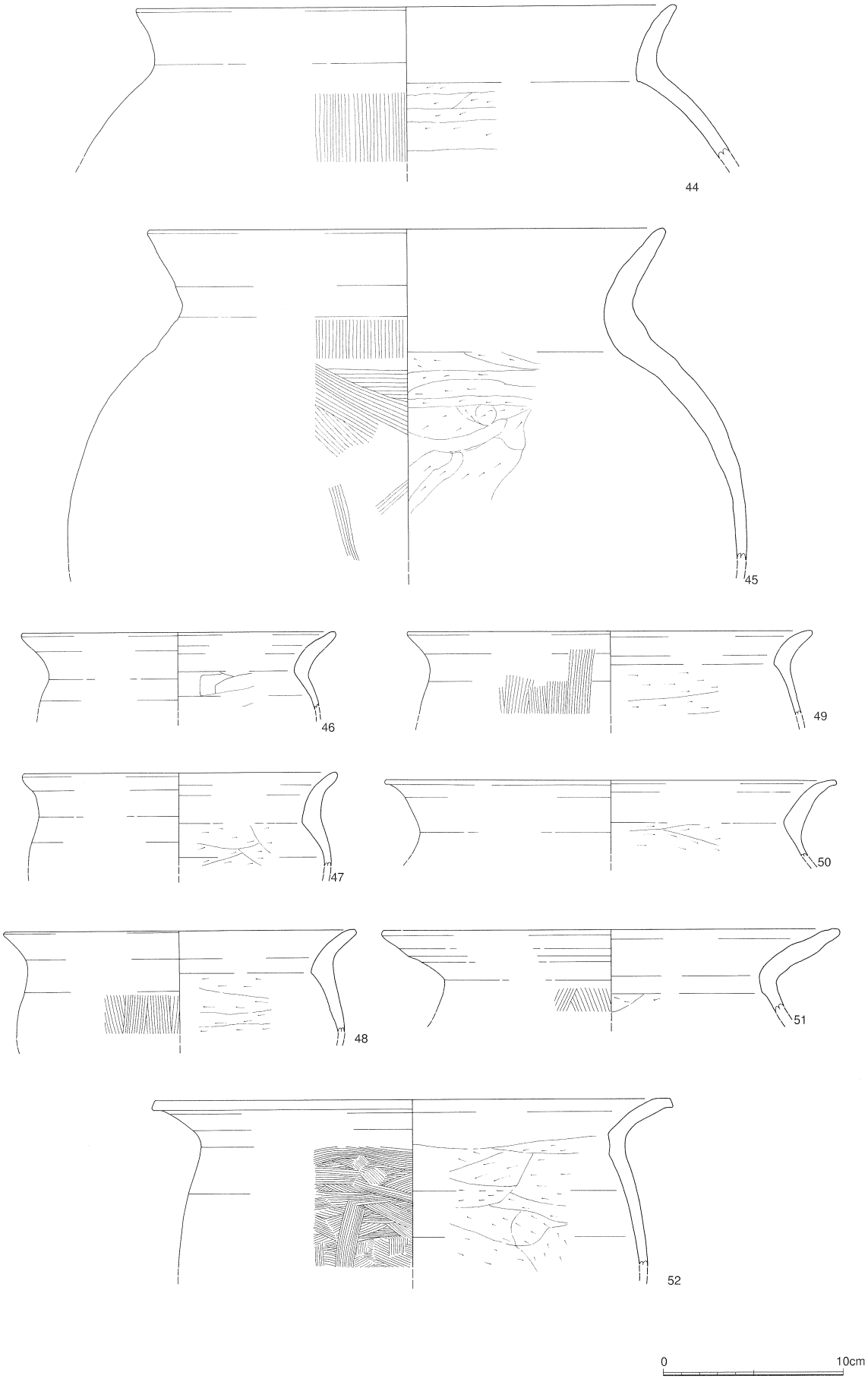
２９～５８は古墳時代後期以降の土師器甕である。口縁部と体部の境界が明らかでなく、くの字状に外反するものを中心とする。２９・３３は口縁がやや直立気味で、頸部があり下脹れになるタイプの甕である。３３は代表的なもので、外面ハケ、内面は頸部以下に斜め上方へのケズリが施される。２８・３６は口縁と体部の境が稜をなすもので、ともに口縁端部を若干外反させる。３４は２８・３６の程口縁と体部の境は明瞭でないが、口縁端部を上方につまみ出している。３９～４５、は口径２０cm以上のやや大型の甕で、３９は口縁が直立するもの、他はくの字状をなすものである。いずれも頸部内面付近までは横方向のケズリで調整する。４２は外面に顕著な縦ハケを残し、４４は口径３０cm、４５も口径２７cmを測る大型の甕である、両者共に肩部に縦ハケを施し、４５では体部には斜め方向のハケが認められるを施す。４６～５５は体部が余り張らず、口縁部をは水平に近い角度で外側に折るるものの一群である。４８・４９・５９は外面に縦ハケを施す。５２は口縁端部に面をもち、体部は方向不定のハケを丁寧に施している。これらは、いずれもの体上部以上が残存するが、内面は横方向のケズリを施す。５５～５８は口縁部くの字の甕で、外面には縦方向の



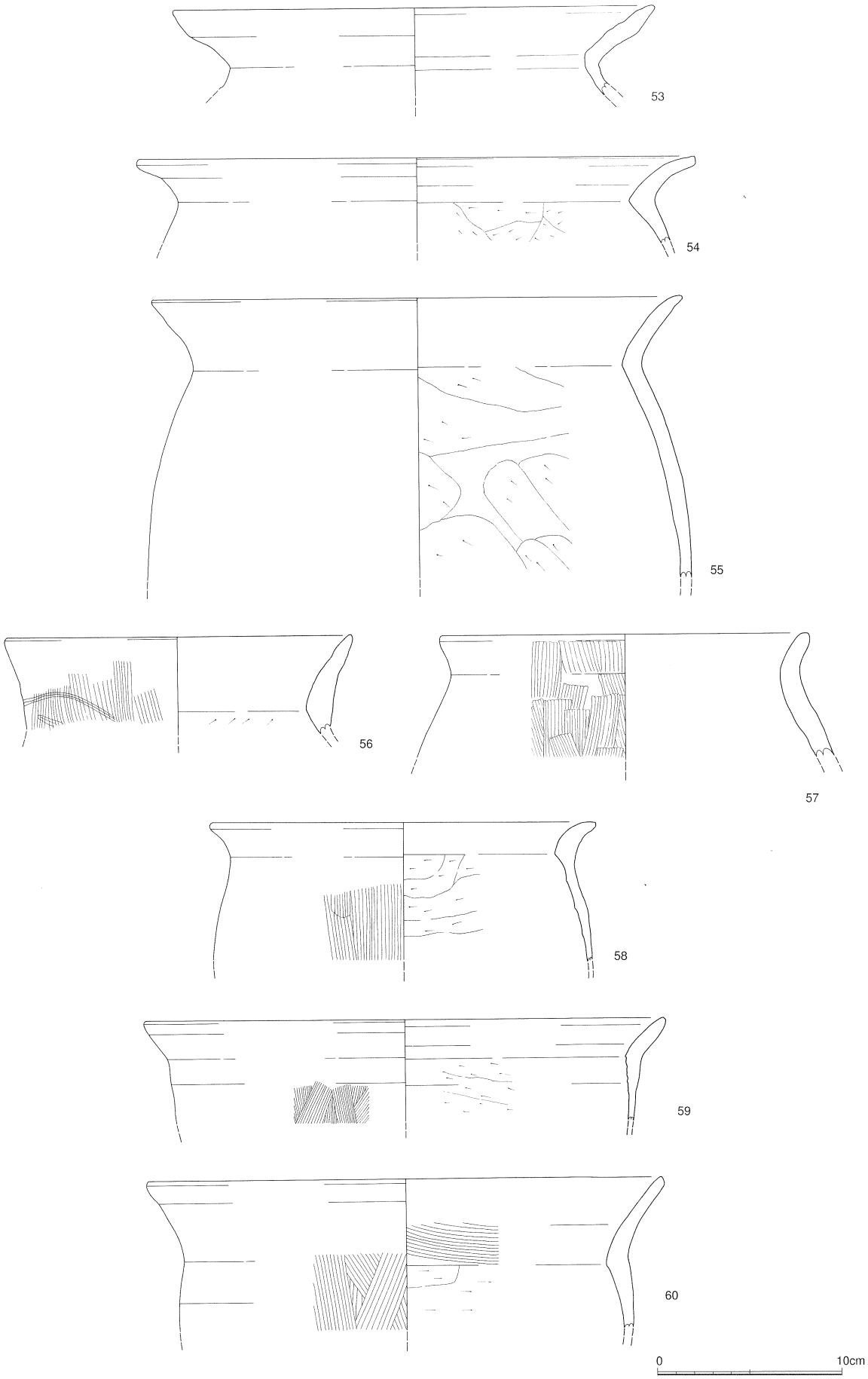
第142図　古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図4　(S=1／3)



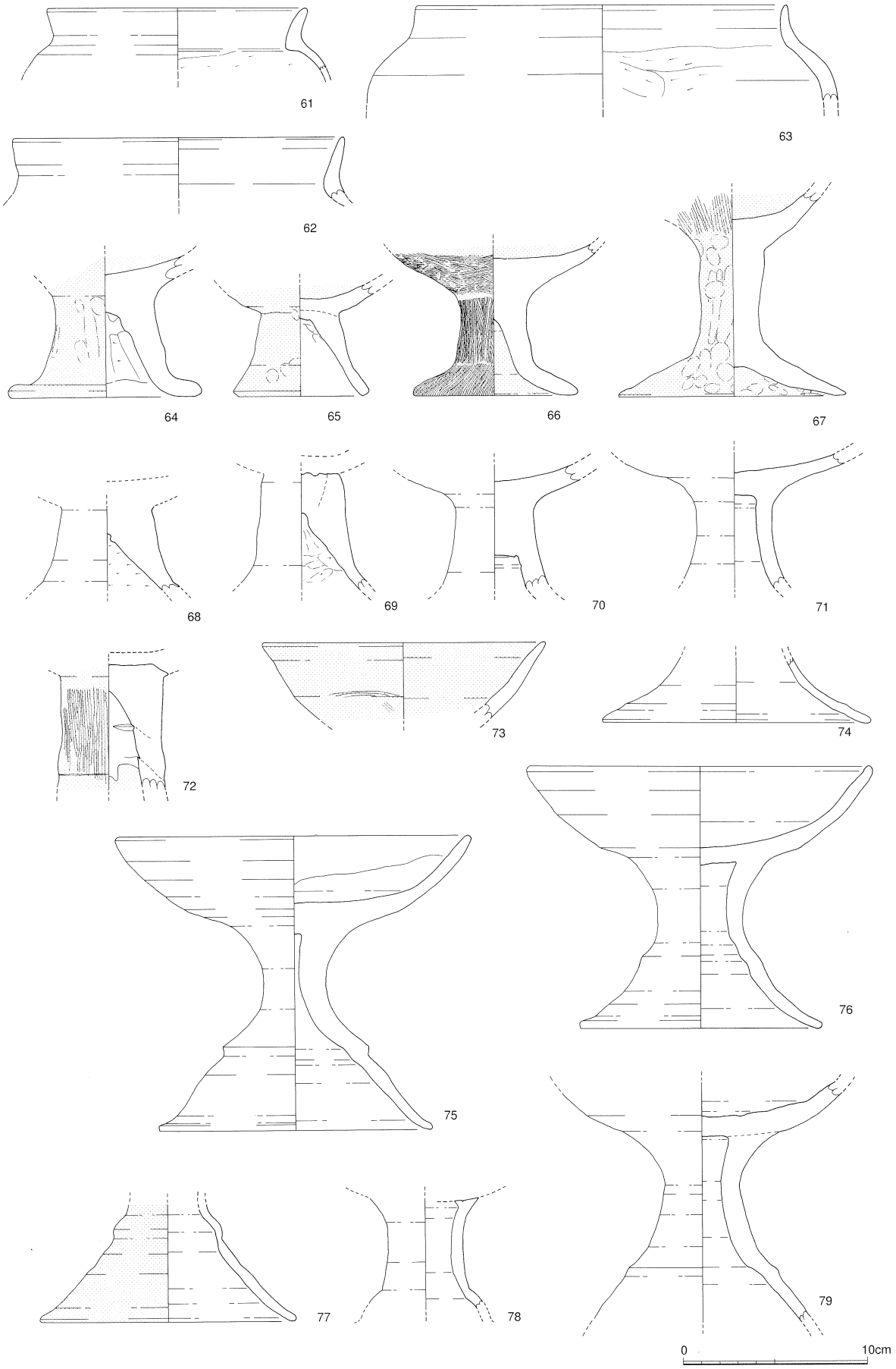
第143図　古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図5　(S=1／3)



第144図　古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図6　(S=1／3)



第145図　古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図7　(S=1／3)



第146図　古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図8　(S=1／3)

ハケがみられる。５９・６０は口径が最大径となるもので、甑であろう。共に外面に縦ハケが残り、６０は頸部内面にもハケを施す。６１～６３は土師器の短頸壺である。古墳時後期以降代の土師器の年代観は明確になっていないが、４４～５４は７世紀後半まで降るものであろう。

６４～７９は土師器高坏である。６４～６６は低脚の高坏で、６４・６５は脚部内面を除いて赤彩する。６６は外面に精緻なハケを施しており、内外全面に赤彩する。６７は棒状の脚部をもつもので脚部には指頭圧痕が多数残る。坏部には縦ハケが施されていた模様である。脚部内面も含め全面赤彩する。６８～７１は赤彩されないものである。７０は脚部上方はケズリが及ばず、下方内面がケズリである。７１は脚部有段高坏であろうか。７２は厚い筒状の脚部で、外面に縦ハケ、沈線が施される。内側は下部のみ赤彩する。７３は高坏坏部で内外面赤彩である。７４は高坏脚部で、内外面ナデである。

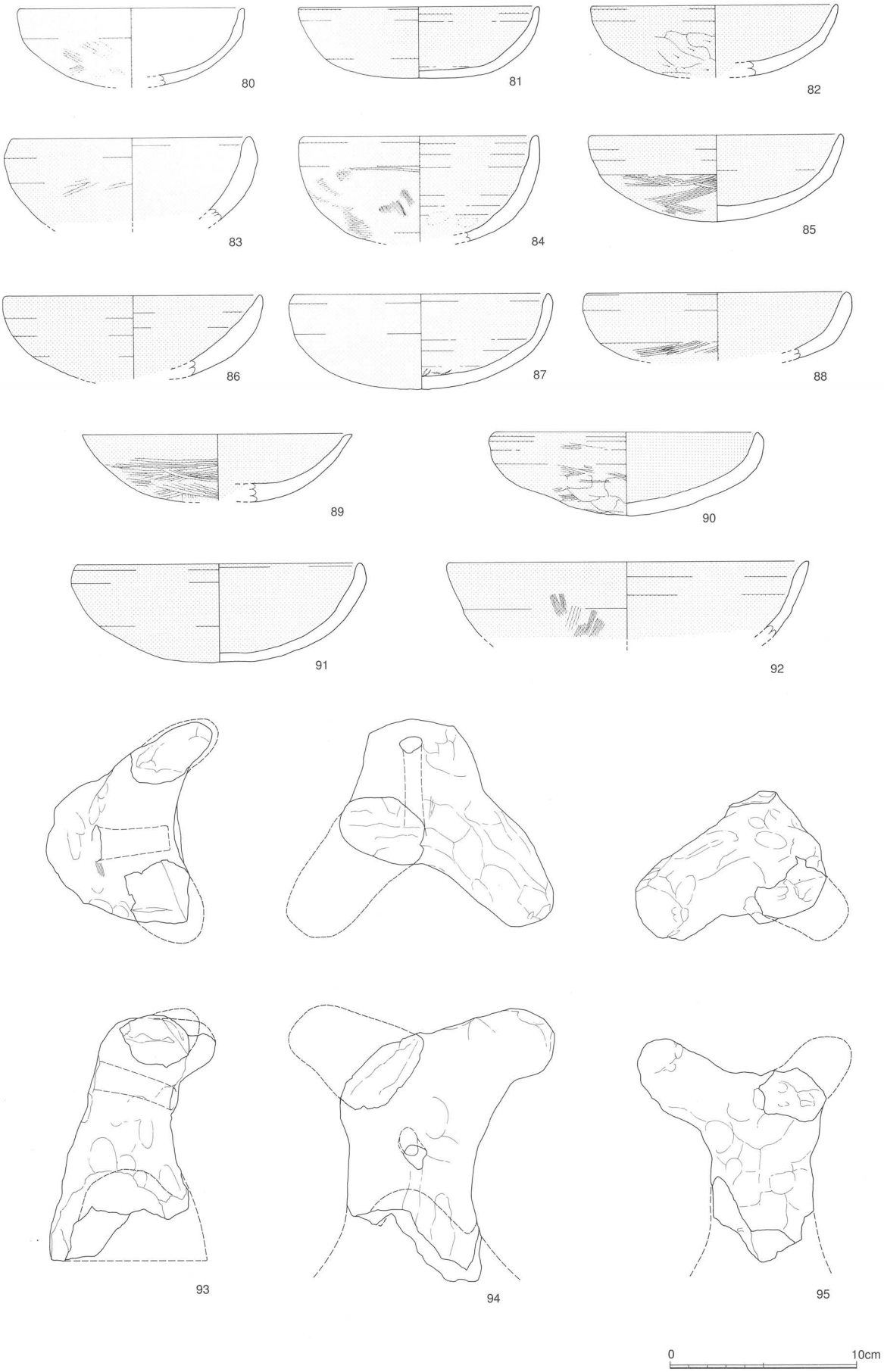
７５～７９は土師器底部有段高坏である。遺物出土状況で示したように、ＳＤ１８検出面でまとまって出土した。７５は口径１９.４cm、器高１５.８cm、底径１４.６cmを測り、脚部最小径は３.４cm程度と非常に細くくびれた脚部をもつ。脚部の段以下は外側にふくらむ形態である。７６は１８.４cm、１４.２cm、底径１３.０cmを測る。７５に比較して、太い脚部をもちくびれもそれほどではない。段以下は反り返る点が７５とは異なる。なお、坏部内面は激しく剥離している。７７は７６と同様の形態をもつもので、脚部外面に赤彩が施される。７８はくびれのない個体で、坏部は剥離している。脚部有段高坏は７８に限らず、松山接続法γによって接続されているようである。また、胎土は明褐色（７６）あるいは茶褐色（７５・７９）で、２～３mm大の砂粒が含まれるような胎土が使用されている。７９は７５と同様のタイプであろうか。外面が赤彩されていた可能性もある。

８０～９２は赤彩の土師器碗である。８０・８４・８８は口縁が直立するタイプで、下部の碗状になっている部分にハケが施される。８１・８２・８５・８７は口縁がやや外反するタイプで、８２は下部にケズリが、８５にはハケが施される。８３・９１は口縁部が厚くなり、内湾するもので、内外面ナデを施す。８９は底部外面に横ハケを施し、９０はヘラによるナデの後に横ハケを施す９２は口径１８cmを越えるもので、高坏の坏部である可能性もある。

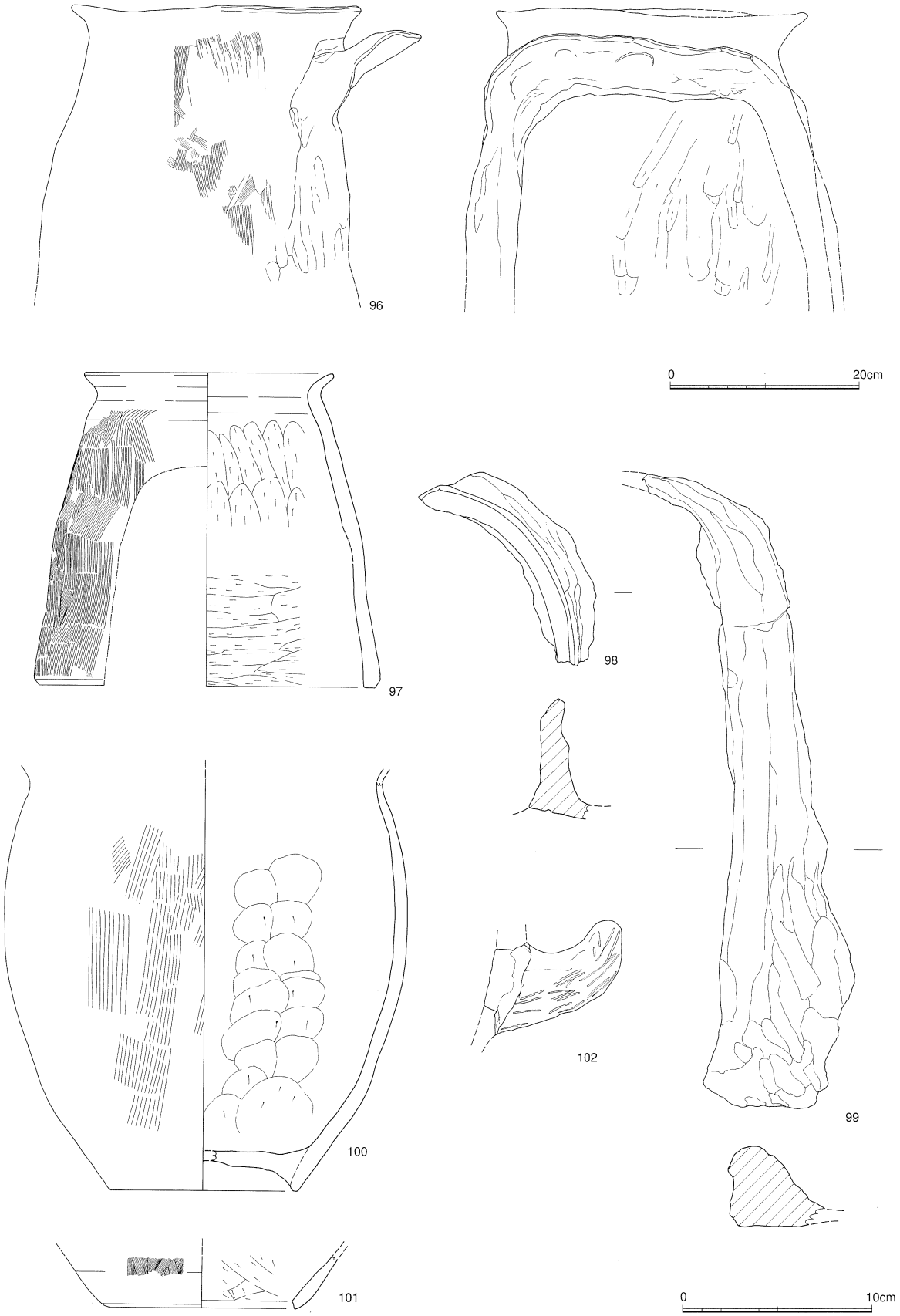
９３～９５は土製支脚である。９３・９４は突起を２本もち、前後に穿孔される。９４の穴は直径１cm程度と細い。９５は突起２本をもち、穿孔の確認できなかったものである。

９６～９９は竈である。９６は受部径３０cm前後で、外面に縦ハケを施し内面は縦方向のケズリがあるもの。庇部分が本体径を上回る。９７は受部径２０cm程度で、外面には丁寧な縦ハケが施される。内面は上部が縦方向のケズリ、下部が横方向のケズリである。また、接地部外側の面取り調整がされていた。９８・９９は竈の庇である。１００～１０２は甑である。１００・１０１は同じく底径１０cmを測り、外面に縦ハケが施される。１００はおそらく高さ２５cm前後になる個体で、内側に一本のブリッジ痕跡がある。また、内面にはハマグリ状のケズリがみられ、切り合いと砂粒の移動状況から、下から上へ削っていった過程が窺える。１０２は甑の把手である。全体にやや細いミガキが施される。基軸部と胴部の接合関係が明確にわかる資料で、把手基軸部を胴部に差し込んだ後、接合部外面に粘土帯を巻つけた痕跡が残る。

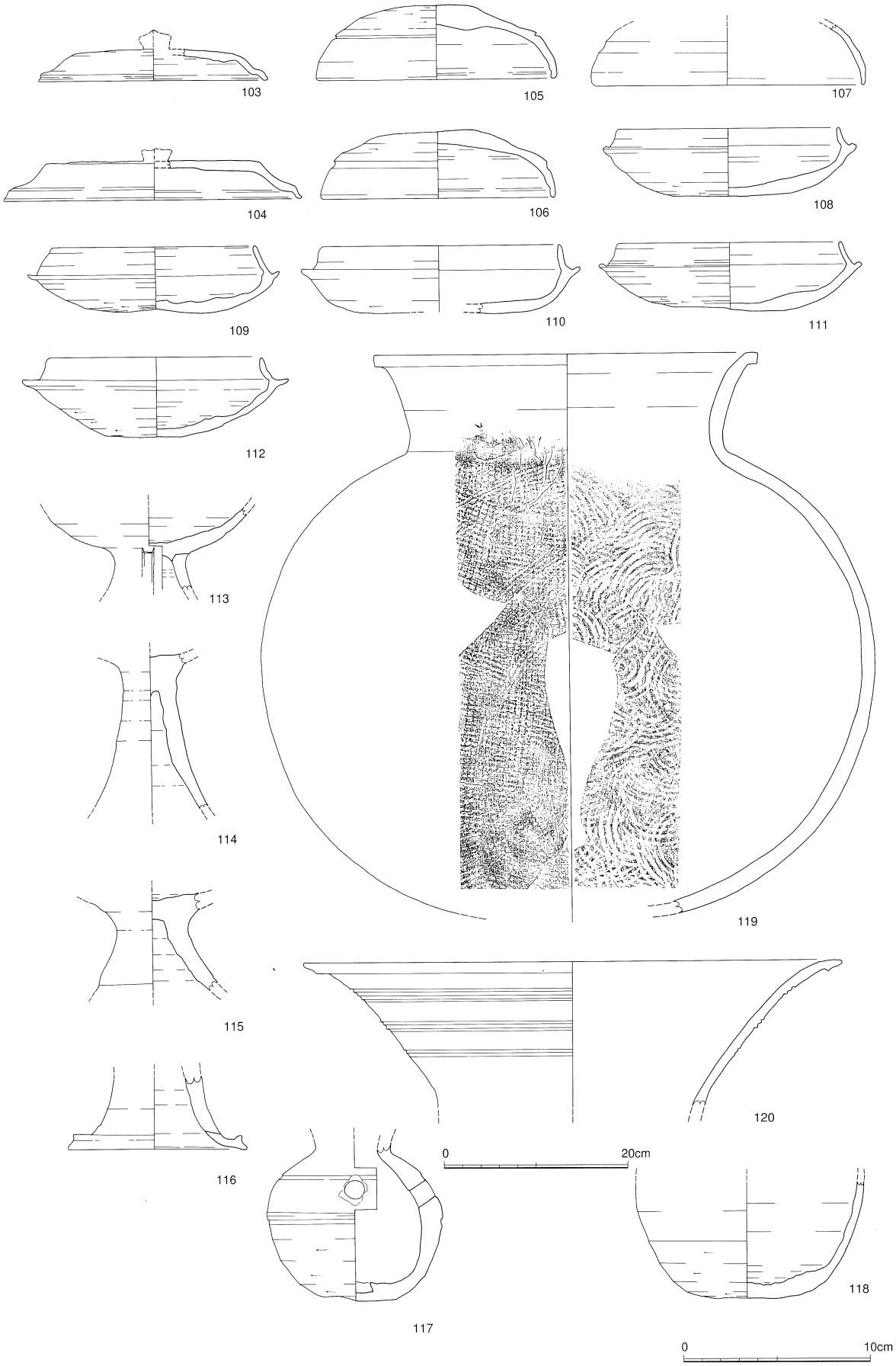
１０３～１２２は須恵器である。１０３・１０４は蓋で返りの残るもので、高広ⅣＡ期に相当する、奈良時代のものであろう。１０５～１０７は須恵器蓋坏で、１０５・１０６は内面に段を有し



第147図　古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図9　(S=1／3)



第148図　古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図10　（S=1／3）



第149図　古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図11　（S=1／3　96・97のみS=1／6）

外面頂部にはケズリ痕跡を残す。大谷出雲Ａ４・５類の範疇に入る。１０８～１１２は坏身である。１０８は底部のケズリが不十分であり、１０９～１１２は底部にやや雑なケズリが施されるもので、１０８は中心部のケズリが省略されるものである。前者が大谷Ａ４類、後者が同Ａ５類の坏に当たる。１１３・１１５・１１６は低脚無蓋高坏で、１１３は透かしをもつ。１１４は長脚の高坏である。１１７、１１８は甕である。１１７は下半をケズリのままとし、沈線を２条廻らす。個々の遺物の年代についてはふれないが、おおむね大谷出雲５期前後の遺物である。１０９は口径２１cm、器高３１cm以上を測る須恵器甕であり、外面には格子目敲き、内面に青海波文の当て具痕が残る。１２０は口径２９．５cmを測る大甕の口縁部である。口縁端部は外側に縁を形成し、頸部外面には上から４条・４条・３条の平行沈線が廻らされている。１２１、１２２は長頸壺である。１２１は肩に沈線、波状文を廻らし、沈線の区画内に列点文を施す。１２２は小型の脚のつくもので、列点文と沈線の組み合わせが肩に２組、下部に１組みられる。脚の取り付けはゆがんでいた。１２３は製塩土器である。１２３は口径１２cmを測る大型の製塩土器で、口縁部は円く収められている。

１２４～１２８は土師質土器である。１２４～１２６は坏で土師質土器Ⅳ期に当たる。１２７・１２８は皿で、１２７は土師質土器Ⅲ期に該当する。いずれも、底部は回転糸切りによって切り離されている。１２９・１３０は擦石かと考えられる石である。

以上、大溝ＳＤ１８の出土遺物は弥生時代中期後葉から中世までのものが含まれ、遺物出土状況で述べたような層位から出土する。

ＳＤ１７との前後関係　問題となるのは、Ⅰ・Ⅱ層に含まれる草田４～７期の遺物である。ＳＤ１７の第６土層図（第１２０図）では、ＳＤ１８埋土がＳＤ１７を切っているからである。しかし、切る側のＳＤ１８の土層は、Ⅳ・Ⅴ層（古墳時代後期以降）であり、Ⅰ・Ⅱ層（草田４～７期）が切っていることが確実なわけではなく、出土遺物に矛盾はない。ＳＤ１７との関係で言えば、ＳＤ１７が断面半円形で流水のない溝（Ⅳ・Ⅴ層）に移行した後に、その西側すぐの場所にＳＤ１８が掘削され、両者は草田７期まで併存したと考えるのが妥当であろう。

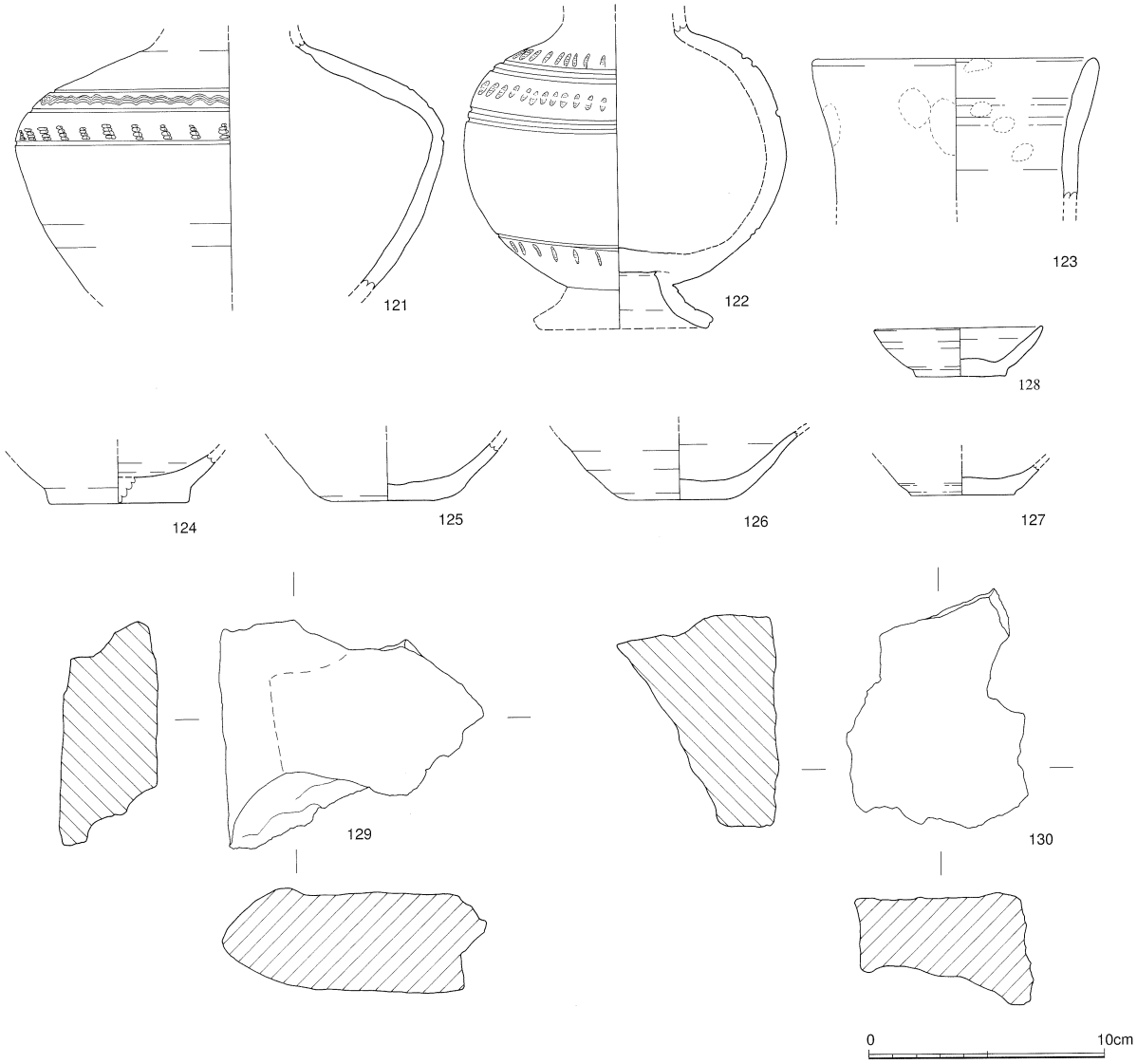
大溝ＳＤ１８の性格　ＳＤ１８の性格については、第３章まとめで、ＳＤ１６・１７共々考察を加える。

Ｇ、溝

ＳＤ１９（第６２・１５１図）

規模・形態　Ｃ区東側南寄りで検出した。Ｔ字状をなし、南から北に貫流する部分と、西から東に流れる部分がそれぞれ約１０ｍほど検出された。規模は上幅が５０cm～７５cm、底部幅が３０cm前後である。底部の標高は７.２ｍである。溝の西側は調査区内に消えているが、これは西側に行くに従って溝の底部標高が高くなり、最終的には地山への掘り込みがなくなってしまい、それと同時に溝自体も検出できなくなったためで、本来的には溝は西に連続していたものと思われる。東側については、第６２図ＳＢ１１付近を南から北に貫流する溝がＳＤ１９と連続するとみられる。なお、本遺構はＳＤ２４・２６に切られている（第６２図ではＳＤ２４を切るように表現さるが、誤り）。

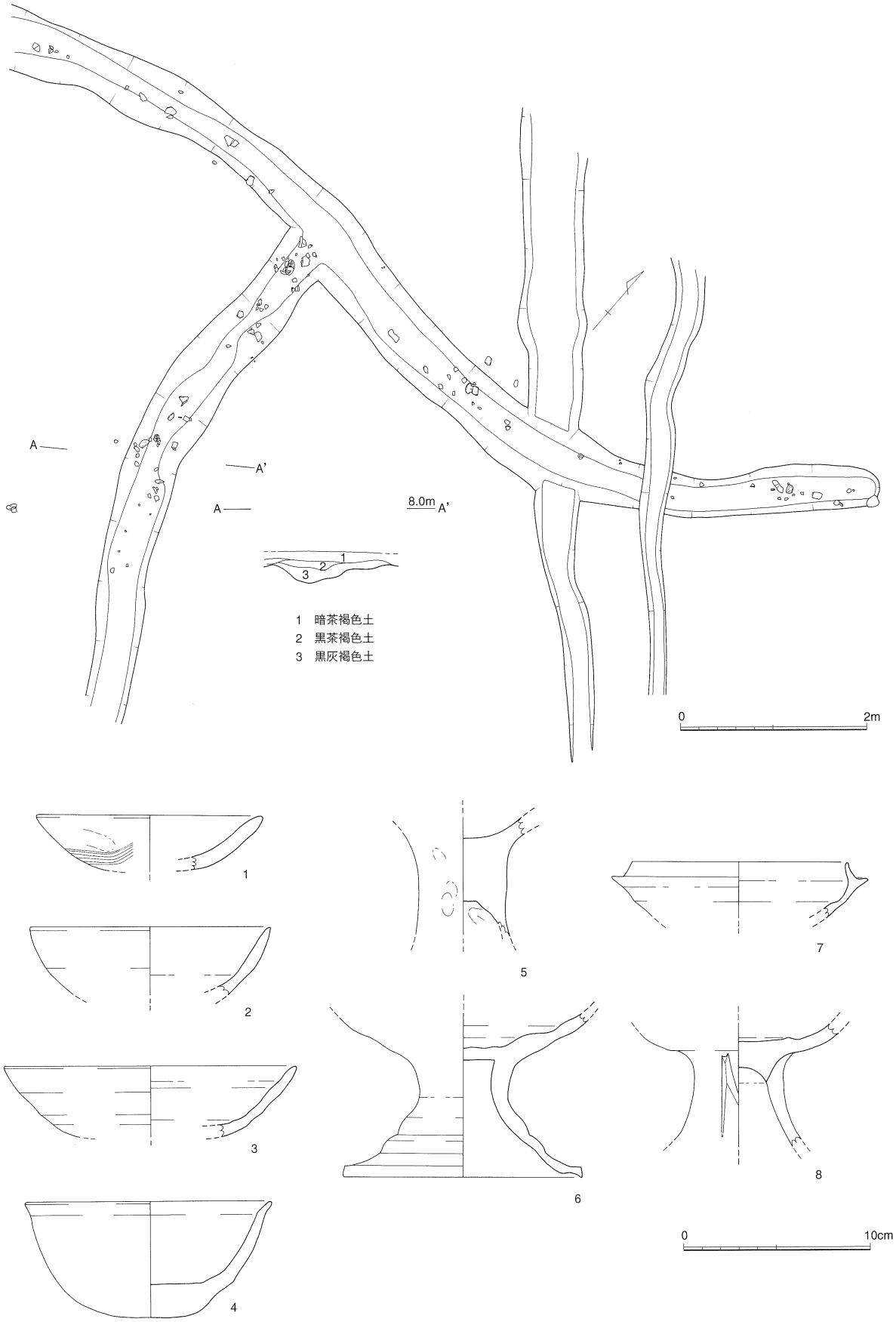
土層・遺物出土状況　堆積土は上層が精緻な暗茶褐色土で、下層がより土壌化の進んだ黒茶褐色土であった。遺物はＴ時の交差点部分の上流側、及び東西方向の流路の交差点より西側で多く検出さ



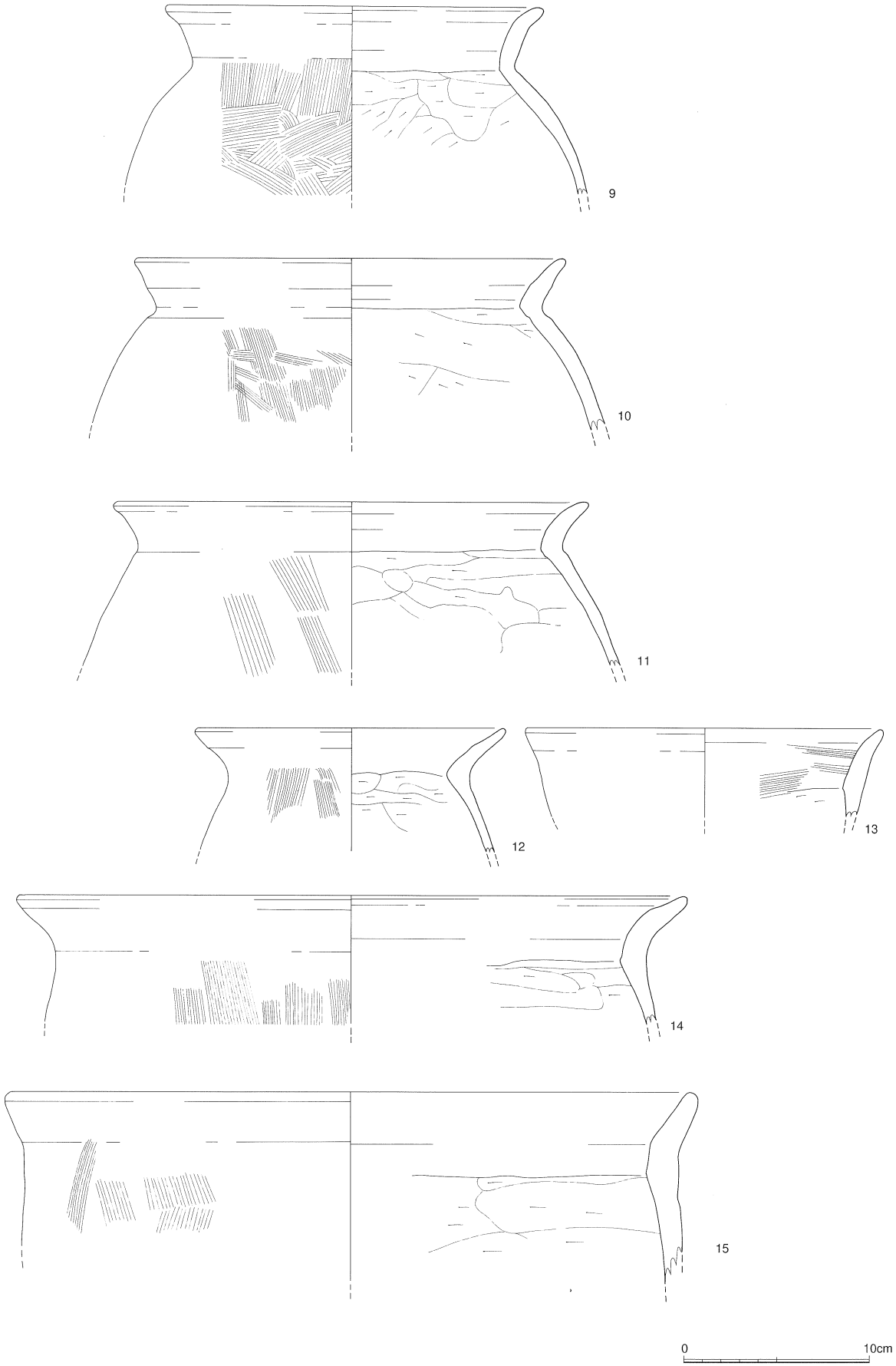
第150図　古志本郷遺跡SD18出土遺物実測図12　(S=1／3)

れた。なお、碗・高坏などにはローリングを受けたと思われるものが多い。

出土遺物（第１５１・１５２図）　図化した遺物は全体の中の主要なもののみである。１・２は土師器碗か高坏の坏部であろう。１は口径１２cmで、下部に横方向のハケを施すもので、内外面赤彩である。２は口径１３cmで、深さが現存する部分で３.６cmを測る碗である。口縁部がやや厚くなり内湾する。３は高坏の坏部で、口径と深さ、砂粒を多く含む胎土などから脚部有段高坏の坏部と考えられる。４は口径１３.６cm、器高６.２cmを測る土師器碗で、口縁端部が外反しつまみ出される。大変荒い作りで、外面には焼成時にできたものか無数のひびが入っている。胎土は１mm大の砂粒を多量に含んでいる。５は土師器高坏である。脚部内面を除き内外面赤彩される。６も土師器高坏であるが、脚部に他に例を見ない２つの段のを有し、脚部先端は内側が溝縁状を呈す。坏部は松山接続法γによって接続され、内面には螺旋状のナデ跡が残る。胎土は明褐色で、１mm大の砂粒を多量に含んでいる。脚部は短いが、全体のプロポーションなどから、脚部有段高坏に類するものであろう。７は須恵器坏身である。８は須恵器低脚無蓋高坏で２方向に透かしをもつ。大谷出雲Ａ５



第151図　古志本郷遺跡SD19遺物出土状況・出土遺物実測図1　（遺構S=1／60　遺物S=1／3）



第152図　古志本郷遺跡SD19出土遺物実測図2　(S=1／3)

類の範疇に含まれ。以上の遺物のうちで１・２・６・７がローリングを受けている。９～１２は土師器甕である。９は口縁と体部が明確に別れ、口縁が直立するものである。体部上面は縦ハケで、下部は方向不定のハケが施される。１０・１１はくの字状の口縁をもつ甕で、体部には縦ハケが施される。１２は口径１６cmの小型の甕で、外面は縦ハケが施される。以上の甕は皆、内面については横方向のケズリが残る。１３は口縁が外傾する鉢であろうか。口縁部内面に横ハケを施し、下部はケズリである。１４・１５は口径３５cm越える大型の土器で、甑あるは甕であろう。共に外面縦ハケ、内面横方向のケズリである。碗・高坏に対して、甕類にはローリングを受けた痕跡は顕著ではない。

年代・性格　出土した遺物は、須恵器などはから大谷出雲５期に当たると思われる。土師器甕類と、碗・高坏類の出土状況が異なりことは、溝が機能を停止し、埋められる前に煮沸・貯蔵具が廃棄されたことを考えさせる。

ＳＤ２０（第６２・１５３図）

規模・形態　Ｃ区東側に位置し、南から北に貫流する。規模は幅７０cm、深さ３０cmほどで、断面は箱形をなす。底部の標高は6.6ｍ（下層）、6.9ｍ（上層）である。ＳＤ２１に切られる。

土層堆積状況　上層第１・２層と、下層第３層がらなり、前者は箱形で深く、後者は幅広で浅い。ただし、下層が検出されたのは南側３ｍほどのみであった。

出土遺物（第１５３図１）　出土遺物には土師器片があり、第１５３図１が図化できた。１は土師器甕で、口縁はくの字状をなし、下脹れになる。口縁端部を内側に曲げる。

年代・性格　ＳＤ２０の時期は１から古墳時代後期以降になろう。性格については不明であるが、上層はＡ区ＳＤ１４、あるいはＳＤ１２との接続も考えられる。

ＳＤ２１（第６２・１５３図）

規模・形態　Ｃ区東側に位置し、南東から北西に貫流する。規模は幅４０cm、深さ２０cmを測り、底部の標高は6.9ｍである。ＳＤ２０を切っている。

土層堆積状況　埋土は濃褐色の粘質土であった。

出土遺物　出土遺物は土器小片のみである。

年代・性格　年代・性格は不明であるが、溝の下流ではＡ区ＳＤ０２あるいは１４と接続する可能性がある。

ＳＤ２２（第６２図・１５３図）

規模・形態　Ｃ区東側を南東から北西に貫流する。規模は幅４０cm、深さ２０cmで、底部の標高は6.8ｍである。

土層堆積状況　堆積土は茶褐色系の土であった。

年代・性格　出土遺物は土器小片のみで、遺構の年代や、性格は不明である。ただし、後述するＳＤ２６などと方向を揃えるので、これらに関わる溝である可能性はある。

ＳＤ２３（第６２図・１５３図）

規模・形態　Ｃ区東側に南寄り位置する。南側は調査区外に伸び、北側は調査区内で終わる。規模は上幅１ｍ、深さ０.５ｍを測るが、ＳＤ２０同様、浅く広い上層（１層）と断面箱形で深い下層（２～４層）からなる。底面の標高は６.８ｍと６.５ｍである。

土層堆積状況　上層は黒褐色径の粘質土が堆積するが、下層は地山の流出したような灰色径の粘質土が堆積する。

年代・性格　出土遺物はなく、年代は不明である。下流になると思われる北側で溝が調査区内で終わっていることから流水目的の溝ではないであろう。

ＳＤ２４（第６２図・１５３図）

規模・形態　Ｃ区東側に位置し、東南から北西に貫流する。規模は、上幅２０cm、深さ１０cm程度である。底部の標高は７.１ｍ。ＳＢ１１、ＳＤ１９を切る（第６２図ではＳＤ１９に切られるように表現されているがこれは誤り）。

年代・性格　出土遺物土器小片のみで、年代・性格とも不明である。

ＳＤ２５（第６２図・１５３図）

規模・形態　Ｃ区東側に位置し、ＳＤ２４とＳＤ２６に挟まれる。東南から北西に貫流する。規模は幅２０cm、深さ１０cm程度で、上流端、下流端とも調査区内で消えている。遺構検出は地山でしか行えなかったので、本来の規模はさらに大きく、当然東南・北西方向連続するものと思われる。底面の標高は、７.１ｍである。

出土遺物（第１５３図３）　３は土師質土器でⅣ期に当てはまる。

年代・性格　ＳＤ２６と位置を東に変えてほぼ同方向に作られており、ＳＤ２６に関連するものと思われる。

ＳＤ２６（第６２図・１５３図）

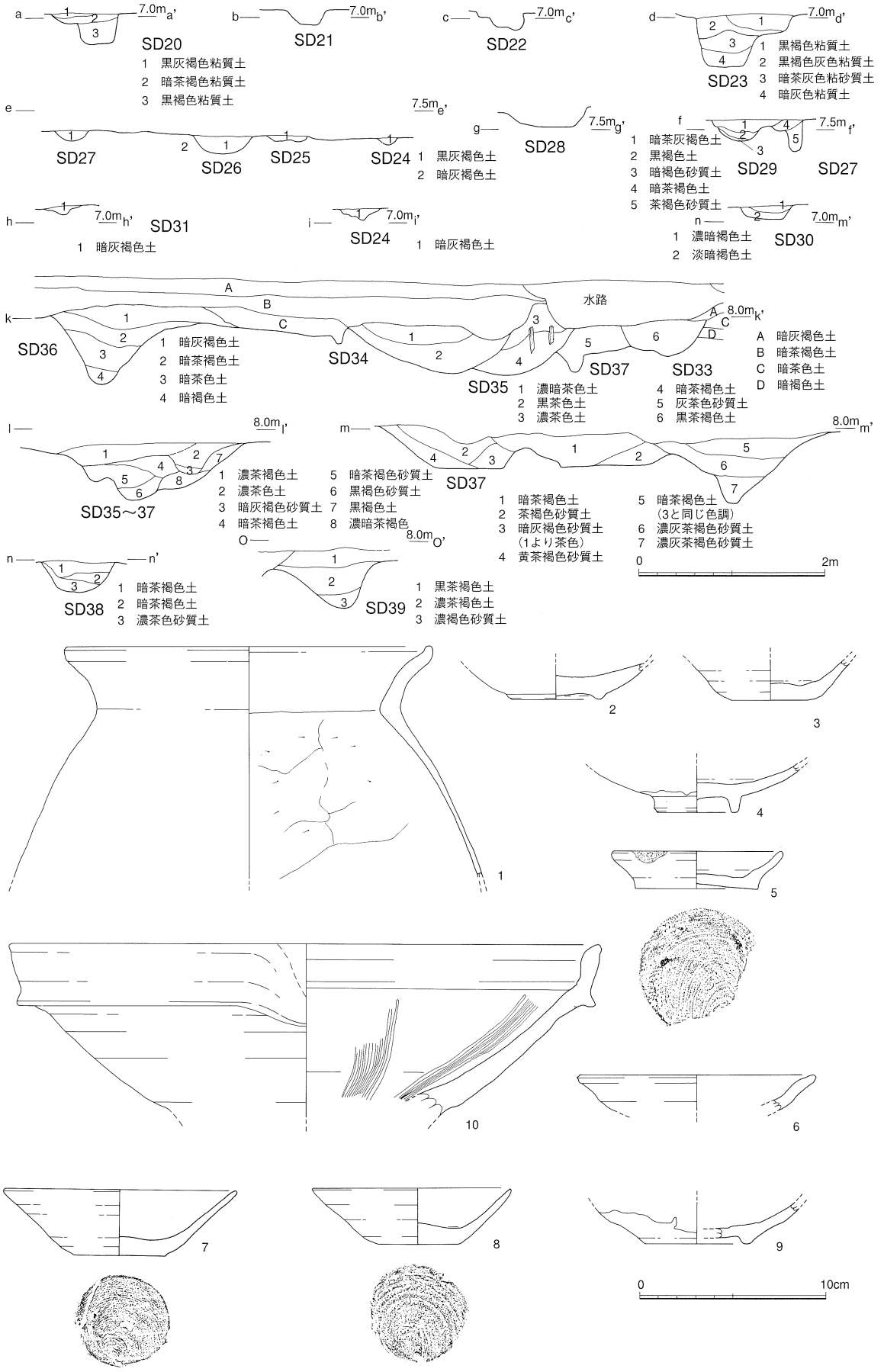
規模・形態　Ｃ区東側三分の一の地点に集中する、東南から北西に貫流する溝の中でもっとも規模の大きい、中心となるものである。規模は上幅５０cm、深さ３０cm、底部の標高は７.０ｍである。ＳＤ１９を切る。北側は、ＳＤ３２に連続するものと考えられる。黒褐色土が堆積する。

出土遺物（第１５３図２）　２は土師質土器である。底部内面をやや繰り高台状にする。類例は少ないが、中世のものと見てよいであろう。

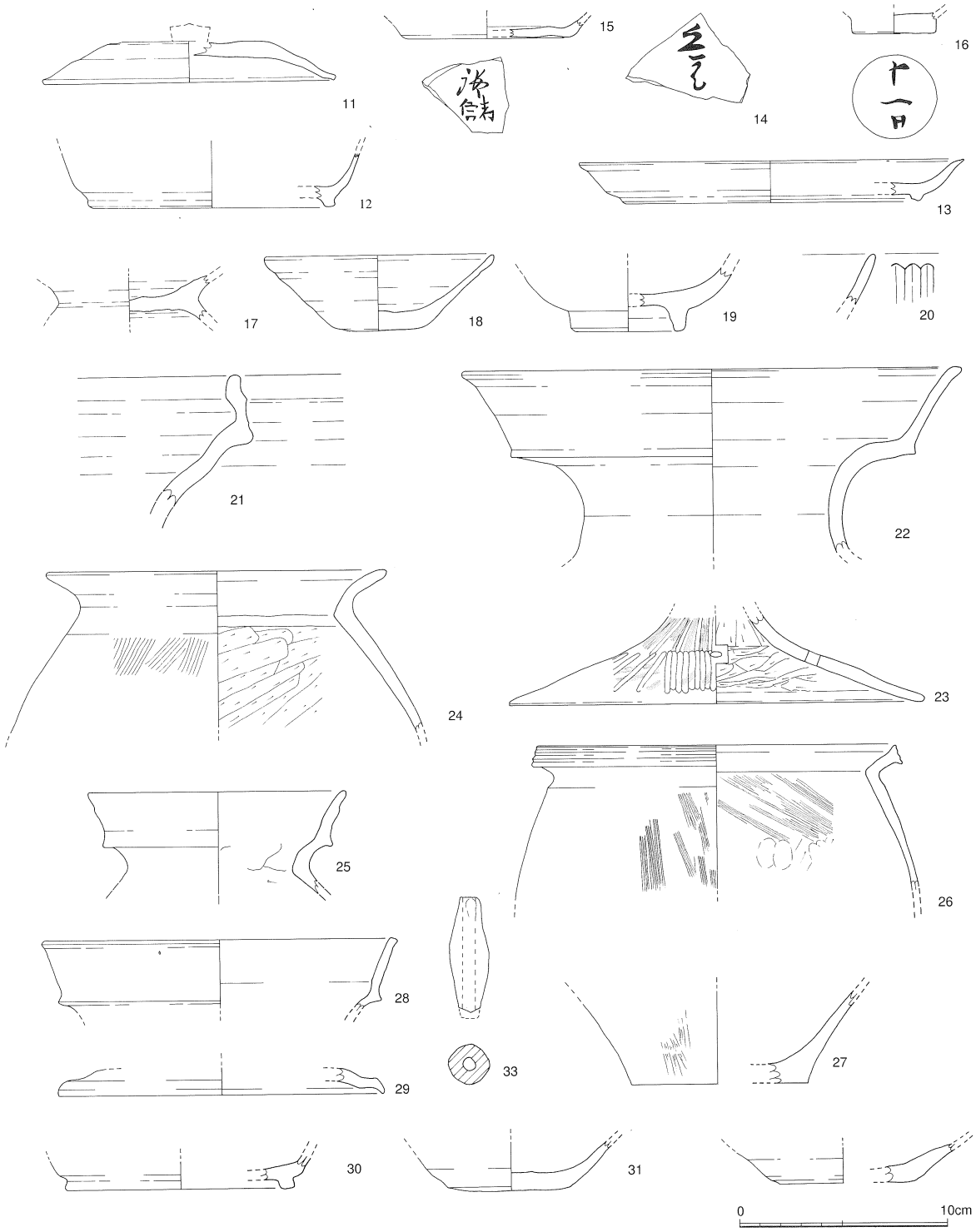
年代・性格　ＳＤ２４～ＳＤ２６は、第５図で道で表現される部分に当たり、上層遺構では、杭が打たれ、耕作地の境界になっていたようである（第６４図）。ＳＤ２４～２６は近世以降のこれらの遺構に先行する道路の側溝や、土地を区分する溝である可能性がある。

ＳＤ２７（第６２図・１５３図）

規模・形態　Ｃ区中央を調査区に沿って南から北に伸び、ＳＤ２６付近で北西に折れる。規模は幅３０cm程度で、底部の標高は７．２ｍほどで一定している。堆積土は暗灰色土で、近世以降の堆積土（第６３図）と類似する。ＳＤ２８、ＳＸ０２を切っている。



第153図　古志本郷遺跡SD20～39土層図・出土遺物実測図1　（土層S=1／60　遺物S=1／3）



第154図　古志本郷遺跡SD20～39出土遺物実測図2　(S=1／3)

出土遺物（第１５３図４・５）　４は肥前系磁器の粗製の皿で、乳青白色の釉が施される。５は土師質土器で、Ⅵ期のものである。

年代・性格　出土遺物や堆積層から、近世１７世紀後半頃の溝と推定される。時代は異なるもののＳＤ２６などと抵触しない位置で北西に曲がっており、第６４図で杭列、図５で道になる部分の区画に関わる溝であったと推定される。

ＳＤ２８（第６２図・１５３図）

規模・形態　Ｃ区中央、調査区南端に位置し、東側で調査区外に伸びる。規模は幅６０cm深さ２０cmを測り、底部の標高は７.５ｍである。ＳＥ０５を切る

出土遺物（第１５３図６～９）　６は、黒斑・白斑の混じる濃灰色の釉が施された陶器で、李朝陶器の皿と推測される。７・８は土師質土器でⅣ期の資料である。９は肥前系陶器皿で、砂目積みが見込みに残る。ただし、９は混入品の可能性がある。

年代・性格　出土遺物は９を除くと土師質土器Ⅳ期、１６世紀代のものと考えられ、ＳＤ２８の埋没年代もおおむねこのころであろう。位置などからして、ＳＤ２８がＳＤ２７に作り替えられた可能性がある。

ＳＤ２９（第６２図・１５３図）

規模・形態　Ｃ区中央、南壁に沿って存在する。ＳＤ２７・２８を切る。規模は上幅８０cm、深さ３０cmで、底部の標高は７.３ｍほどである。土層は近世の堆積層と同じく黒灰色系の土である。

出土遺物（第１５３図１０）　１０は備前焼の擂鉢である。口縁端部の形状から近世のものと思われる。

年代・性格　出土遺物、切り合い関係から、近世の溝であろう。性格はＳＤ２７と同様、区画溝であろう。

ＳＤ３０（第６２図・１５３図）

規模・形態　Ｃ区東側北寄りに位置し、規模は幅４０cm、深さ１０cm程度である。底部の標高は７.１ｍ。５ｍ程を検出した。本来はこれよりも大きかったと推定される。ＳＤ３１を切る。

年代・性格　出土遺物はなく年代は不明である。性格も明確ではないが、ＳＤ２６に関連するものであろうか。

ＳＤ３１（第６２図・１５３図）

規模・形態　Ｃ区東側北寄りに位置し、ＳＤ３０に切られる。規模は幅４０cm深さ１０cm程度で底部の標高は７.０ｍ。４ｍ余りを検出した。

年代・性格　出土遺物はなく、年代、性格は不明である。

ＳＤ３２（第６２図・１５３図）

規模・形態　Ｃ区中央北側を南西から北東に向かって貫流する。規模は幅５０cm、深さ２０cmで、底部の標高は南西で７.２ｍ、北東で７.０ｍである。調査区北片でＴ字状をなし、東南に向かう溝はＳＤ２６に接続するものと思われる。大溝ＳＤ１６を切る。

出土遺物　図化していないが、備前焼擂鉢が出土している。

年代・性格　ＳＤ２６との接続などから中世のものと考えられる。

ＳＤ３３（第６２図・１５３図）

規模・形態　Ｃ区中央を南東から北西に向かって貫流する。規模は上幅５０cmほどであるが、調査

区北壁の土層図（第１５３図ｋｋ’）では幅８０cm余りであったことが確認される。溝の底部の標高は7.6ｍである。黒茶褐色土が堆積する。ＳＫ２８・ＳＤ３７を切る。

年代・性格　出土遺物はないが、ＳＫ２８を切ることからＳＤ３３の年代は中世以降である。性格は不明である。

ＳＤ３４（第６２図・１５３図）

規模・形態　Ｃ区中央を、南東から北西に貫流する。幅1.5ｍ、深さ５０cmで、底部の標高は7.4ｍである。北側の平成９年度の調査区では明瞭に検出したが、南側平成８年度の調査区では検出が不十分であったため、第６２図では南側を表記していない。実際は、整理作業中に第１５３図ｌｌ’の第１層がＳＤ２４に当たることがわかり、南側にも同様の形態で伸びていたと見られる。黒茶色系の土が堆積する。ＳＤ３５を切っている。

出土遺物（第１５４図１１～２０）　奈良・平安時代の遺物包含層の上に掘削されたためか、混入した遺物が多い。１１は須恵器蓋で、端部の返りが消失している。１２は須恵器坏で、高台が底部外周付近に寄るものである。１３は高台付杯である。１４は坏皿類の底部であろうか。外面に「足万呂」の墨書が見られる。１５は土師器の坏で、底部外面を除き赤彩し、底部はナデられている。底部外面には「御儲」の文字が墨書されている。１６～１８は土師質土器である。１６は皿で、底部外面に「十一日」が墨書される。１７は坏で、高台をもつもの。１８も坏で、体部は直線的に立ち上がる。１６は土師質土器Ⅲ期、１８は同Ⅳ期古段階に位置づけられよう。１９・２０は青磁碗である。１９は高台内施釉するもの、２０は線書き蓮弁をもつものである。上田Ｂ－Ⅳ類で、１５世紀末から１６世紀代のものである。

年代・性格　出土遺物は８世紀後半頃のものと、１６世紀のものがあるが、ＳＤ３６との切りあいなどからも、後者の遺物がＳＤ３４に本来的に伴う遺物であると考えられる。第１５３図土層断面図ｋｋ’にみえるように、後に作られる畦畔（３層）杭列に沿って、それらに先行する位置にある。区画溝であろうか。

ＳＤ３５（第６２図・１５３図）

規模・形態　Ｃ区ＳＤ３４に切られる形で、東側のみが確認されている溝である。したがって、規模は明確でないが、上幅1.0ｍほどになろうかと思われる。底部の標高は7.6ｍ程度である。
暗茶色土が堆積し、断面ｌｌ’では、第２・３層が該当する。断面ｋｋ’では杭列が見られるが、これの打ち込み面は不明で、おそらくＳＤ３５とは直接関係しないであろう。ＳＤ３６・３７を切っている。

年代・性格　出土遺物はなく、年代は明確でないが、ＳＤ３４に切られ、ＳＤ３６を切ることから１６世紀代に収まるであろう。

ＳＤ３６（第６２図・１５３図）

規模・形態　Ｃ区中央やや西よりを、蛇行しながら、他の溝と異なり北西より南東の底部標高が低い。規模は上幅1.5ｍ、深さ0.7ｍで、底部の標高はｋｋ’で7.3ｍ、ｍｍ’で7.2ｍである。断面はＶ字状をなし、黒褐色系の土が堆積する。

出土遺物（第１５４図２１）　２１は備前焼擂鉢で、間壁Ⅴ期に当たる。

年代・性格　ＳＤ３６の時期は、２１から１６世紀と判断される。性格は不明である。

ＳＤ３７（第６２図・１５３図）

規模・形態　Ｃ区中央北よりで確認される。１１’地点以北では、調査区北端を除いて、完全にＳＤ３４・３５に切られて消滅している。１１’では、７・８層がＳＤ３７に相当する埋土と思われる。一方、ｍｍ’では２～４層がＳＤ３７に相当することになるが、この部分では自然流路的な状況を呈している。黒褐色系の土が堆積する。

出土遺物（第１５４図２２～２４）　２２・２３は古墳時代前期の土器である。２２は口縁が広く外反する壷である。２３は低脚高坏の脚で、外面は縦方向のハケの後ミガキを施し、内面下部は横方向のケズリ、上部は縦方向のケズリを施す。四方向に透かしを持つ。２４はくの字状の口縁を持つ土師器甕である。

年代・性格　ＳＤ３７の年代は２４から古墳時代後半になろう。溝は他の溝に切られ、形態が不明瞭であるが、南側で自然流路的な状況になることが、性格とかかわるのであろう。

ＳＤ３８（第６２図・１５３図）

規模・形態　Ｃ区西側を南東から北西に貫流する溝である。規模は上幅８０cm、深さ３０cmで断面は逆台形をなしている。底部の標高は７.６ｍで、茶褐色系の砂質土が堆積し、ＳＢ１９・ＳＥ０６、ＳＫ２４・３２に切られている。

出土遺物（第１５４図２５）　２５は複合口縁の甕で、口縁が厚く、端部に面を持たないことから、草田４期でも古い時期のものになろうか。

年代・性格　ＳＤ３８の年代は、２５からは弥生時代後期となる。性格は不明である。

ＳＤ３９（第６２図・１５３図）

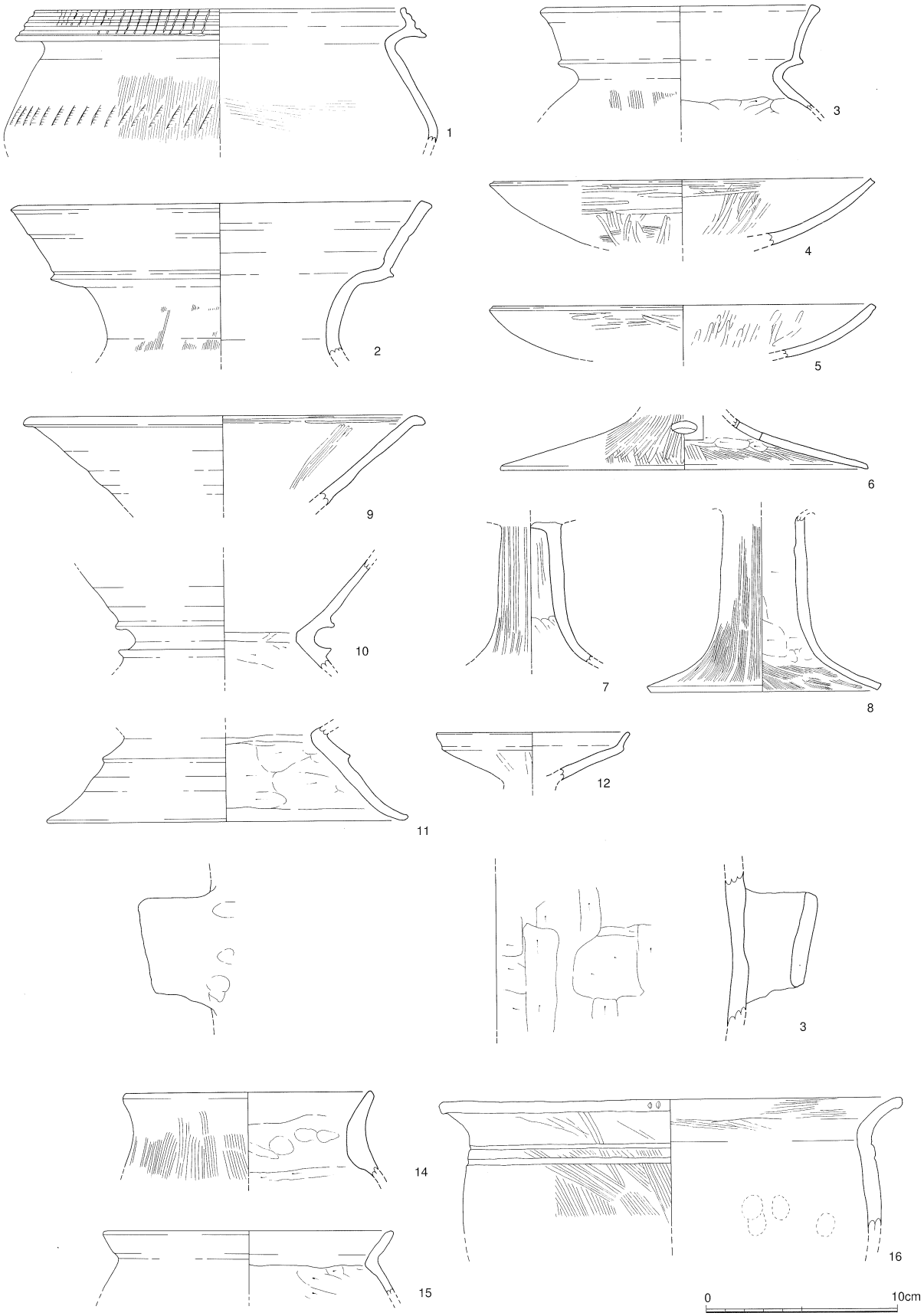
規模・形態　Ｃ区西よりで検出された。規模は上幅１.０ｍ、深さ０.５ｍ、底部の標高は７.３ｍで、ＳＥ０８の東側部分（中世）に切られている。黒褐色土が堆積する。

出土遺物（第１５４図２６～３３）　多様な時代の遺物が出土した。２６・２７は弥生土器で、口縁端部に３条の凹線をもち内面は頸部以下がハケを施す。松本Ⅳ－２様式になろう。２７は甕底部である。２８は複合口縁の甕で、草田７期に相当する。２９・３０は須恵器である。２９は返りの若干残る蓋で、３０は坏である。高広Ⅳ期に当たり、８世紀後半～９世紀にかけてものであろう。３１・３２は土師質土器Ⅳ期の土師質土器坏である。３３は管状土錘である。

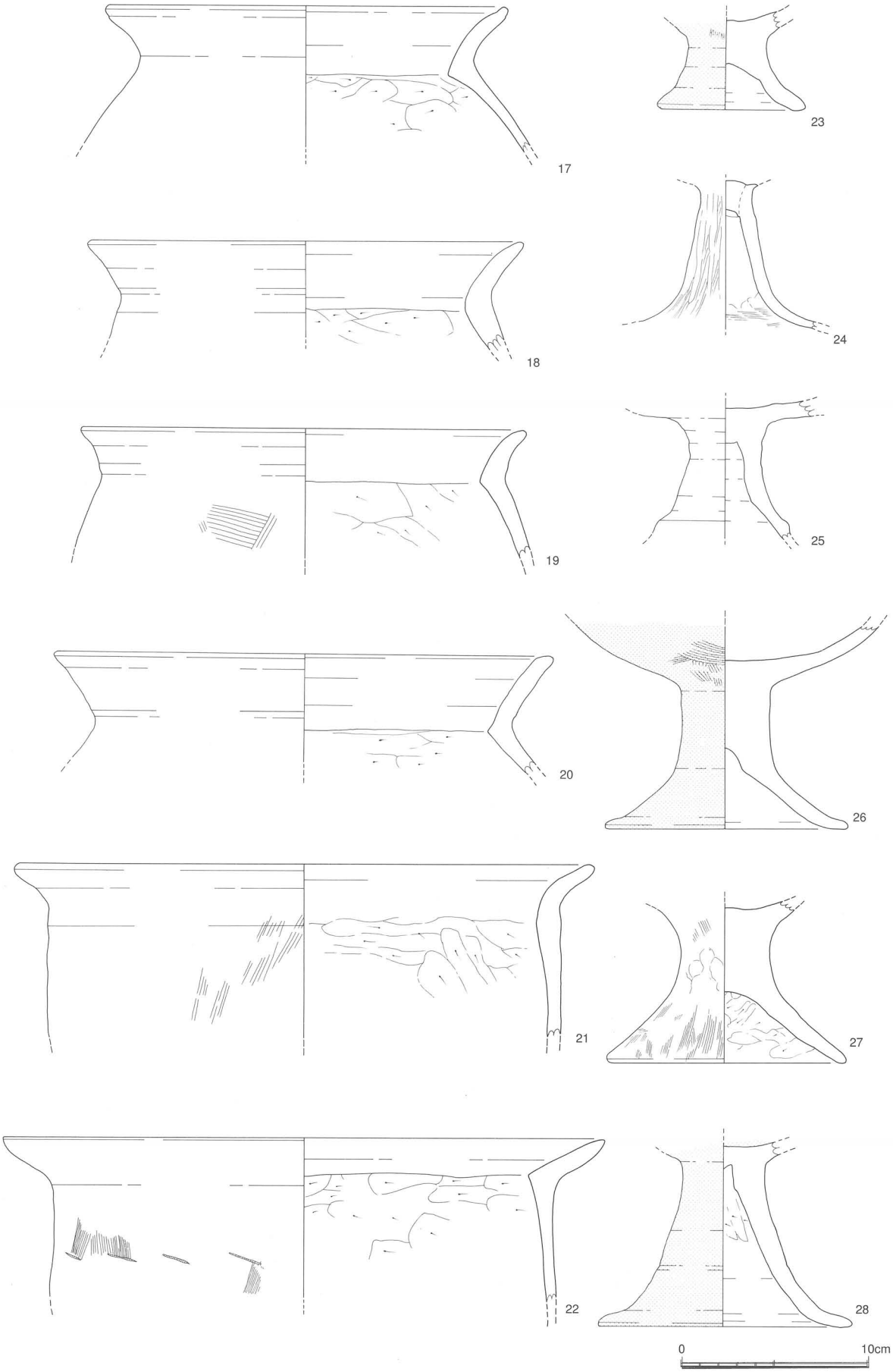
年代・性格　ＳＤ３９の時期は、切り合い関係などから土師質土器Ⅳ期と考えられる。
性格については不明である。

Ｃ区調査区出土遺物（第１５５～１６２図）

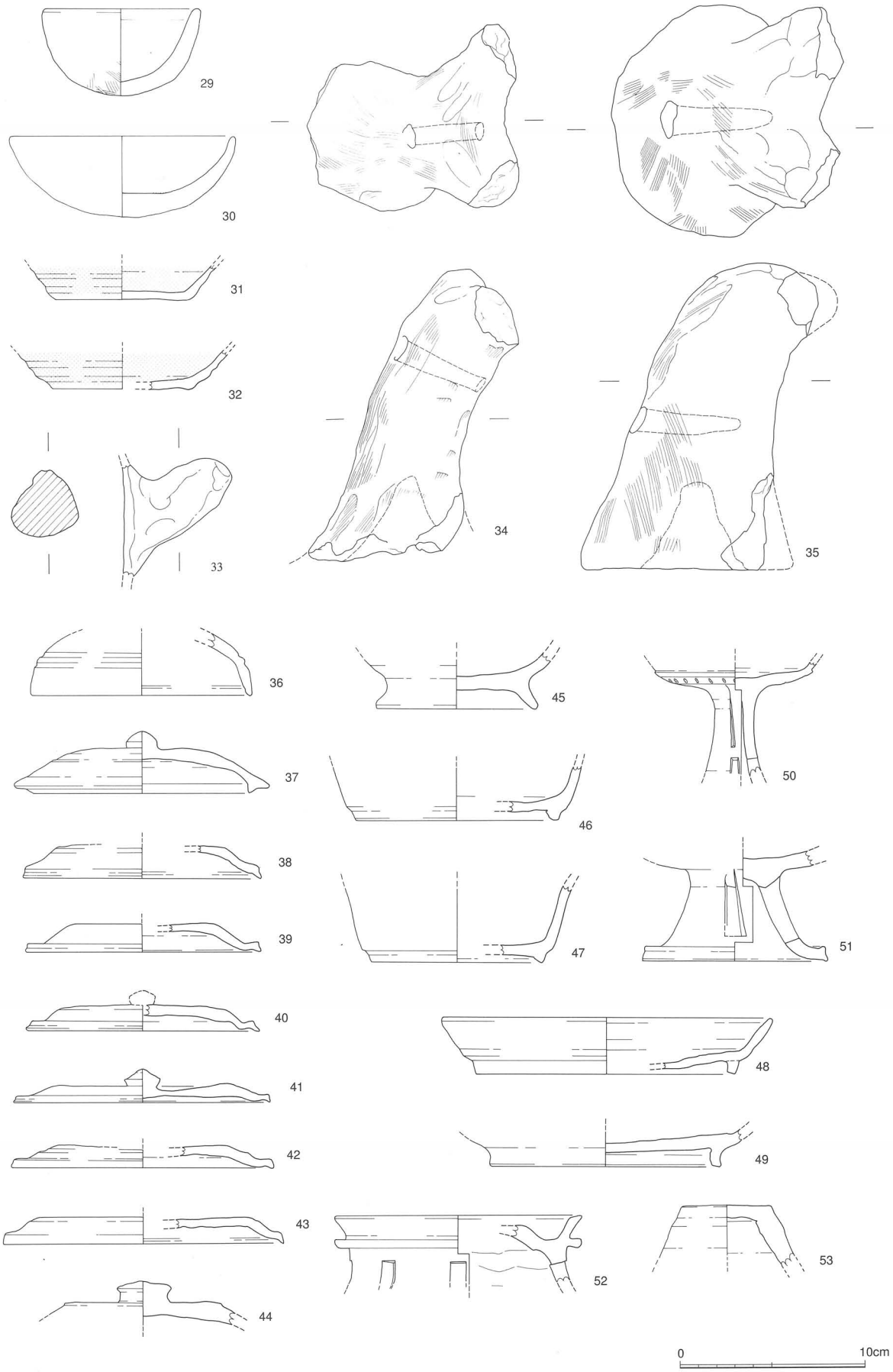
第１５５～１６２図に示した遺物は調査区出土の遺物である。基本層序で述べたように、西側に奈良・平安時代の遺物包含層が残存していたことが特徴で、特に第６２図中Ｙで示した地点周辺からの出土が多い。また、管状土錘がＸ地点からまとまって出土している（図版５３参照）。



第155図　古志本郷遺跡C区調査区出土遺物実測図1　(S=1／3)



第156図　古志本郷遺跡C区調査区出土遺物実測図2　(S=1／3)

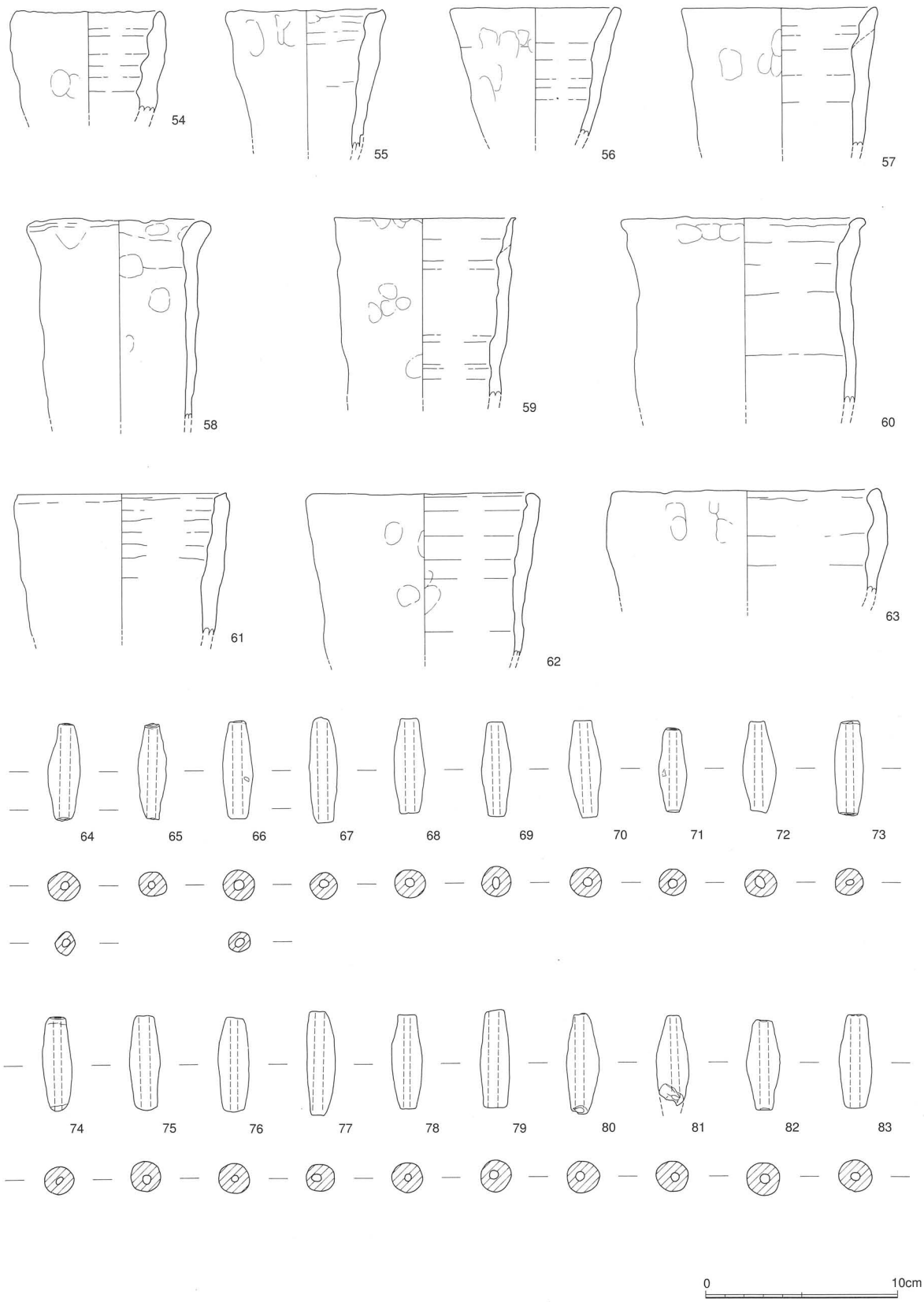


第157図　古志本郷遺跡C区調査区出土遺物実測図3　(S=1／3)

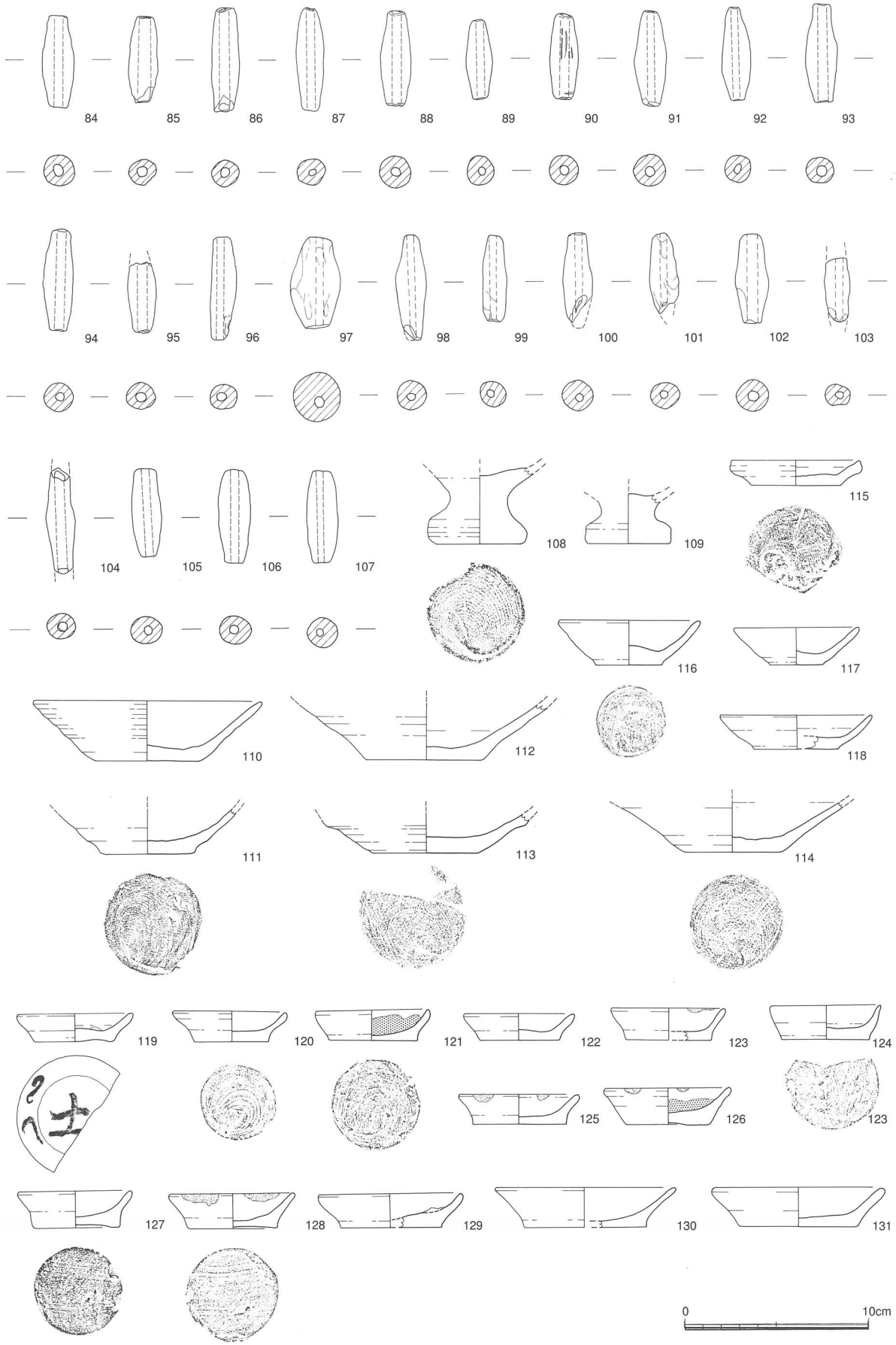
１は弥生土器甕である。口縁部には擬凹線を廻らした後、刻目を入れるが、この刻目は全周しない。外面はハケの後に貝殻腹縁によるものと思われる列点文が施される。内面にはハケが残る。松本Ⅳ－２様式のものである。２～１３は古墳時代前期の土器である。２は壷で、頸部外面に縦方向のハケを若干残す。３は口径１４.２cmを測る小型の甕である。４・５は低脚坏の坏部で、４は内外面共に底部が縦方向のミガキ、口縁部近くが横方向のミガキを施す。５は内面縦方向のミガキ、外面が横方向のミガキである。６は低脚高坏で、内外面ともにハケを施す。四方向に透かし穴がある。７・８は高坏の脚である。９～１１は鼓型器台は受部で内面にミガキを施す。１２は小型器台で、受部は直線的に構成される。胎土は茶褐色でやや精製されたものである。１３は甑型土器の把手で、横方向にまわるものである。把手の作りだし状況が明確にわかる資料で、把手部は本体から作り出され、把手部内側が後から充填されている。１６は、弥生土器の甕で、外面にハケ、沈線２条を廻らし、口縁部には刻目文が残る。松本Ⅰ－３様式、弥生時代前期のもので、第５０図１０５と並んで本遺跡では例外的に古い土器である。ただし、第５０図１０５のようにローリングは受けていない。１４は土師器の甑であろうか。１５、１７～２２は土師器甕である。１５、１７～２０は口縁部がくの字になる甕である。１７は口縁端部内側に溝状のへこみを持つ。２１・２２は口縁が水平に伸びる甕で、頸部付近は内面横方向のケズリである。２３～２８は土師器高坏で、２３・２６・２８は外面赤彩する。２５は脚部有段高坏である。２７は高坏で外面はハケが施され、内面はケズリ痕跡が残る。２９・３０は土師器碗である。２９は外底部にハケを施す。３１・３２は土師器坏で、底部外面を除き、赤彩する。底部は最終的にナデによって調整されている。３４・３５は土製支脚で、共に２個の突起を持ち、内部はケズリによって窪んでいる。３４は比較的高い位置に前後に穿孔され、穴が貫通している。３５は中間付近に穿孔するが貫通しない。３６～５３は須恵器である。３６は蓋坏である。３７～４４は蓋で、残存するものはいずれも擬宝珠つまみを持つ。３７は高広ⅡＢ期、３８～４３は高広Ⅳ期に当たるものであろう。４５～４７は高台のつく坏で、４５は坏部が内湾し、高台も大きい。４６・４７は直線的に立ち上がり、高台も退化している。４５は高広Ⅱ～Ⅲ期に、４６・４７は同Ⅳ期に当たる。４８・４９は盤で、底部が内湾する。高広ⅣＢ期に当たる。５０は長脚高坏で、２段の透かしを持つ。大谷出雲Ａ３類であろう。５１は低脚高坏で２方向に透かしを持つ。大谷出雲Ａ４あるいは５類である。５２は円面硯で、脚部八方向に透かしを持つ。第６２図の北側のＹから出土した。５３は台型土器である。５４～６３は製塩土器である。製塩土器は、口径７cm前後で、やや外反する体部を持つもの（５４～５６）、１０cm前後の中型もの（５７～９、６１）、、１０cmを越える大型のもの（６０・６２・６３）がある。中・大型品は口縁を外反気味にするもの（５８・６２）、内傾させるもの（６１～６３）などに分類できる。

管状土錘　６４～１０７は管状土錘である。これらのうち、６４～９６が第６２図Ｘ地点から出土したものである。なお、実測図を掲載しものは一部であり、図版１２８では出土した全点を掲載している。全体に、外形は紡錘形をなし、大きさは長さ４～６cm、直径１.５～２.０cm、重さ９～１５ｇで、上長浜遺跡Ａ２類に相当するものと思われる。[25]

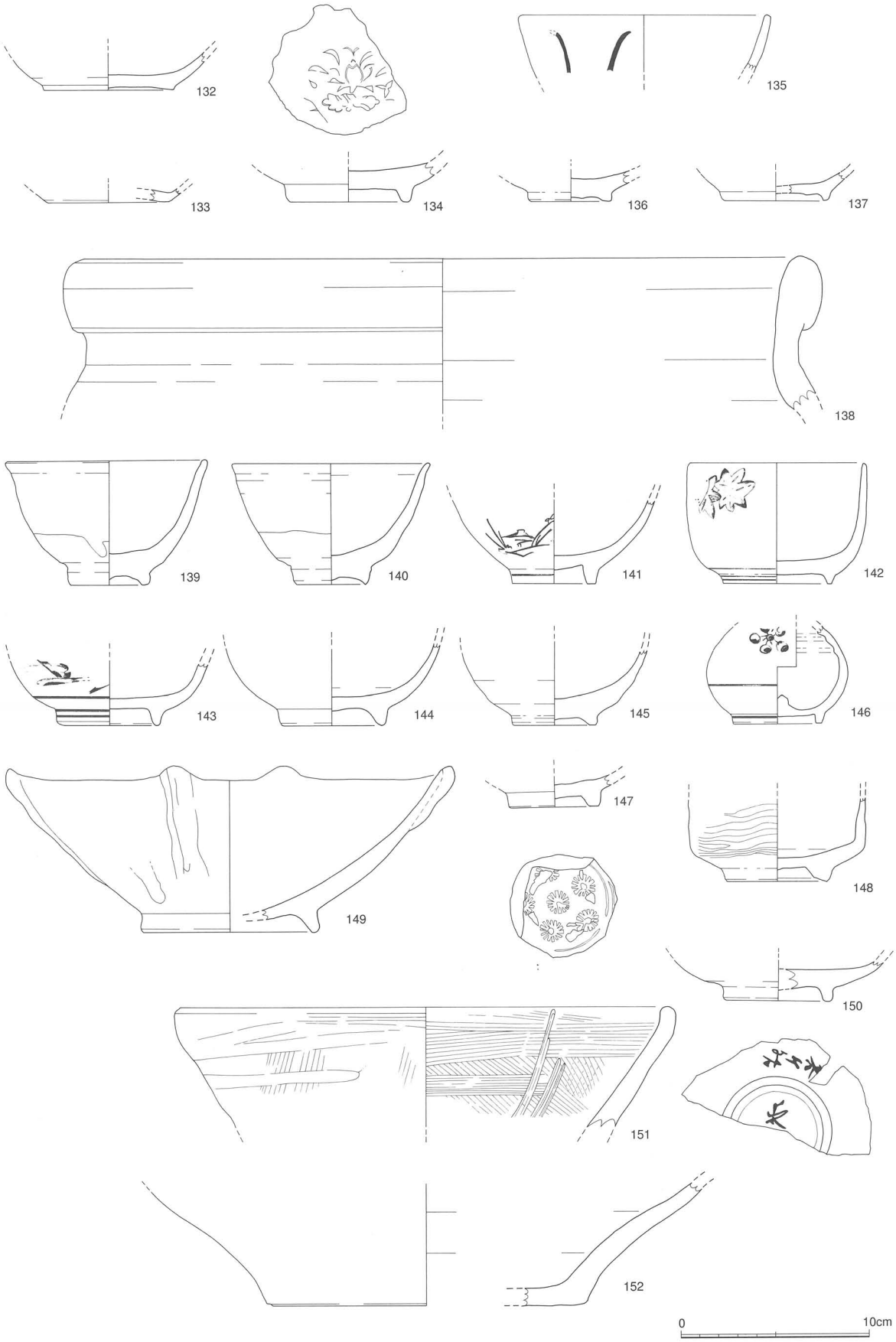
管状土錘の分類　ここでは、はその製作技法から次の２点に注目して分類した。すなわち、①端部の調整…切り落とすもの（Ａ類）、横に引き伸ばしただけのもの（Ｂ類）、②穿孔後、穴を変形させせばめるもの（Ⅰ類）、せばめないもの（Ⅱ類）である。穴の変形に関しては、両端で穴の形状が異なるものを変形させたと認識した。６７はＡⅠ類、６６・６８・７３・７５・７８・７９・８１・



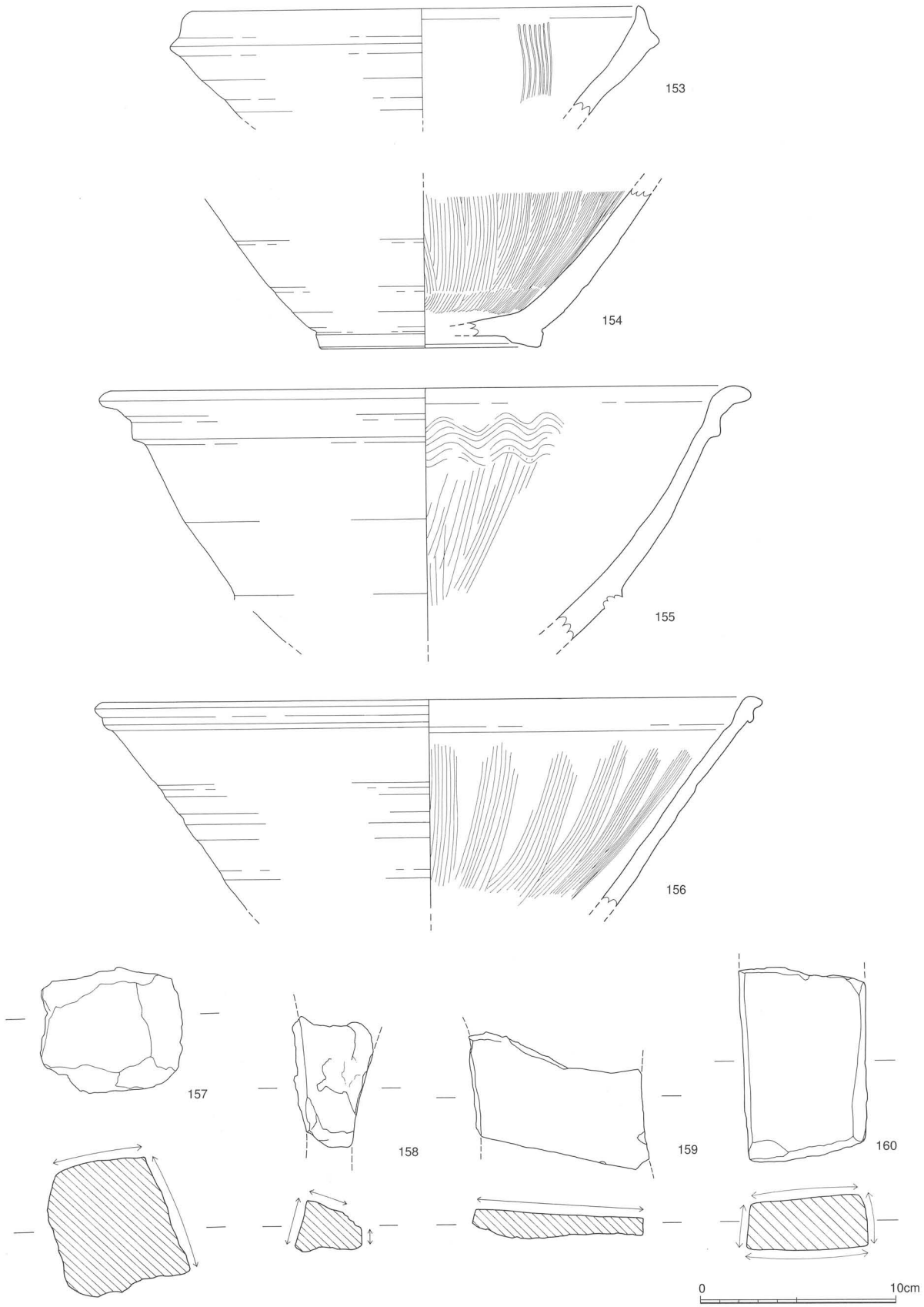
第158図　古志本郷遺跡C区調査区出土遺物実測図4　(S=1／3)



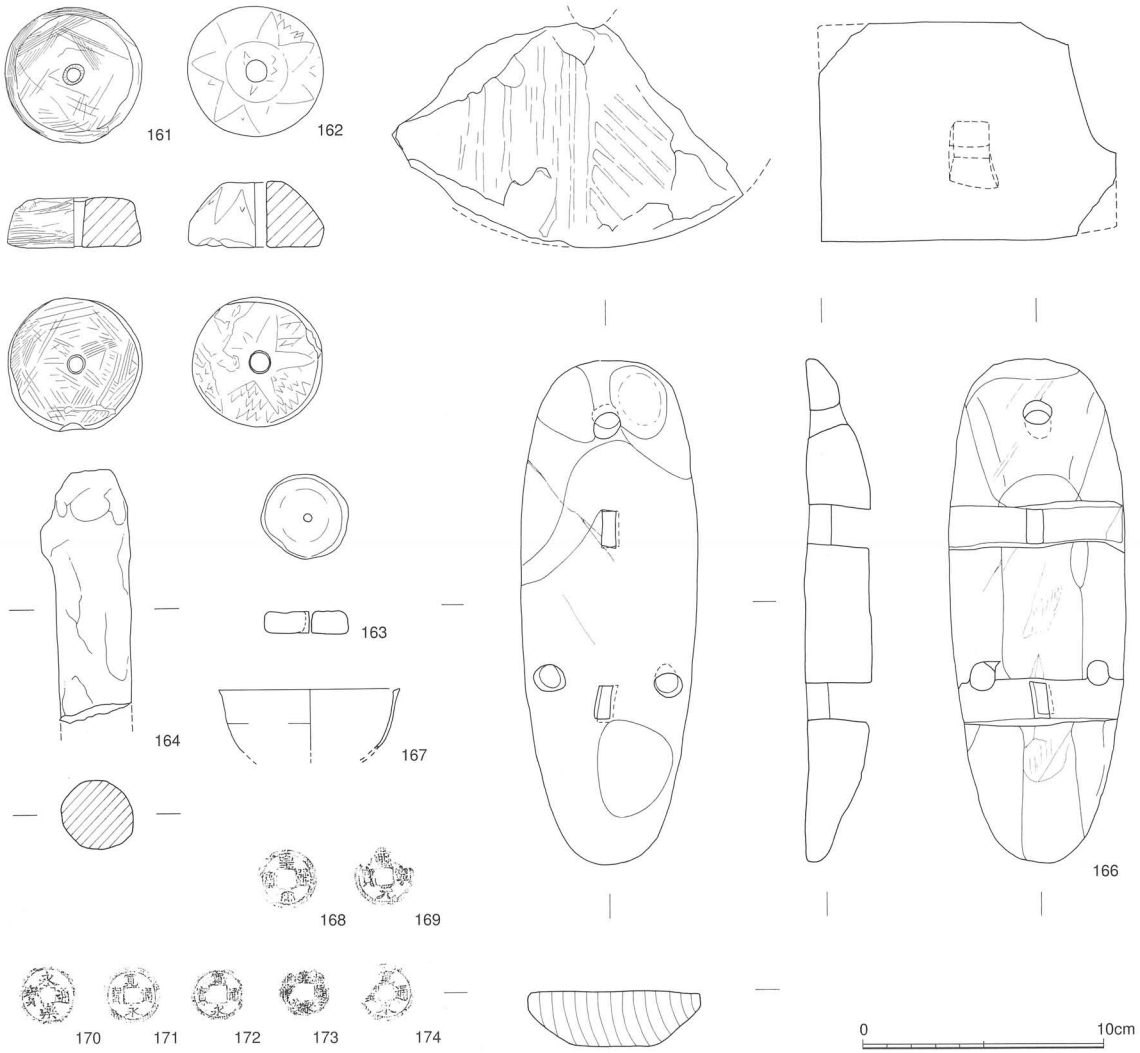
第159図　古志本郷遺跡C区調査区出土遺物実測図5　(S=1／3)



第160図　古志本郷遺跡C区調査区出土遺物実測図6　(S=1／3)



第161図　古志本郷遺跡C区調査区出土遺物実測図7　(S=1／3)



第162図　古志本郷遺跡C区調査区出土遺物実測図8　(S=1／3)

８２はＡⅡ類、６４･６５はＢＩ類、６９～７２、７４、７６・７７、８０、８３～９１、９３、９５・９６はＢⅡ類に当たる。非掲載分も含めた点数はＡＩ類１１点、ＡⅡ類３２点、ＢＩ類９点、ＢⅡ類７６点、不明２４点、計１５２点であった。管状土錘は孔径、縦横比によって刺網系の土錘、袋網系の土錘に分類できるとされるので、[26]先の分類と口径、縦横比を相関させたのが表２である。

土錘の製作技法　表２から、ＢＩ類のみが、他とはやや異なった様相を持つことがわかる。つまり、端部を伸ばしたままで、穴をせばめる製作技法は機能的差異による可能性がある（ただし、合理的意味づけは難しい）。逆に残りの３分類は、今回比較した口径・縦横

表2　Ｃ区出土土錘孔径・縦横比表

	孔径 最大分布	縦横比 最大分布	資料数
AⅠ類	5mm(7点)	3.1(3点)	11
AⅡ類	5mm(22点)	3.1(7点)	32
BⅠ類	5mm(5点)	3.3(3点)	9
BⅡ類	5mm(43点)	2.9(11点)	76

比からは意味がないもので、あるいは製作者の個性という可能性もある。

９７～１０７は以外の調査区から出土した土錘である。

１０８～１３１は土師質土器である。１０８、１０９は柱状高台を持つものである。１１０～１１４は坏で、体部が直線的な立ち上がりを持つもの（１１０・１１１）、立ち上がった後に外反するもの（１１２）、ただちに外反するもの（１１４）があり、それぞれ土師質土器Ⅳ期の古段階、新段階に対応する。１１５は皿で、形状は土師質土器Ⅰ期に近いが、淡褐色の胎土を持つ。１１６～１１８は同じく皿で、土師質土器Ⅳ期のものである。１１９～１３１は、口径に対し器高が低く低平で、口径底径の差の小さいグループである。底部を回転糸切りとするものと（１１９～１２５）、静止糸切りにするもの（１２６～１３１）に大別でき、さらに、詳細に見ると、口縁部を直線的に立ち上げるものと外反させるものがあるようである。これらの中には、内面に墨痕が残ることから墨皿に、口縁端部に油煙の残ることから燈明皿に、それぞれ利用されたと考えられるものが少なからず存在する。また、１１９は底部外面に「土」を墨書し、体部外面には「Ｓ」字の記号を墨書する。これらは土師質土器Ⅵ期のものである。

１３２は円盤高台の緑釉陶器である。胎土は淡黄褐色で、淡緑色の釉が施される。山背系緑釉陶器で９世紀段階のものであろう。第６２図中の、二つのＹの中間付近から出土した。１３３白磁の皿、１３４～１３６は青磁碗である。１３４は見込に印花を持ち、高台内は施釉しない。１３５は鎬蓮弁を持つ青磁碗である。１３６は高台内に施釉する陶器皿で、茶灰色の釉に黒・白斑が混じる。砂目積で李朝のものであろう。１３７は全面に灰釉が施釉され、灰色の胎土を持ち、瀬戸・美濃系陶器で大窯Ⅲ段階のものであろう。１３８は口径３８cm程度に復元される備前焼の甕である。

１３８～１４８は肥前系陶器である。１３９・１４０は天目に近い形の碗で、黒色の釉が施され共に露胎部分を茶褐色に化粧する（脱稿後同一個体と判明した）。三日月高台である。１６世紀末のものであろう。１４１～１４３は磁器碗で、１４１の紅葉はいわゆるコンニャク印判である。１４６は花瓶で、外面には赤い上絵が施される。１４７は白色粘土による象眼の施される碗の底部である。高台内も施釉し、砂目が残る。１４９は緑灰色釉が施される稜を持った鉢で、貝目積み痕跡が残る。１５０は高台内に「上□」、底部外面に「□□升」が墨書される。１５１～１５２は瓦質土器鉢である。１５１は淡褐色の胎土で、内面にハケ目を持つ。１５３～１５６は擂鉢で、１５３は備前焼、１５４・１５６は肥前系である。１５５は赤褐色の精緻な胎土を持ち、内外面を白斑を帯びる茶褐色に施釉される。擦り目上部に波状文を廻らす。１５７～１６０は砥石。１６１は土師質の紡錘車で１６２は石製紡錘車である。１６３は土師質土器の底部を利用したはずみ車であろうか。１６５は石臼雄臼で把手を差し込む孔が穿孔されている。１６４は石棒。１６６は差し込み歯の下駄である。１６７は銅碗の破片である。

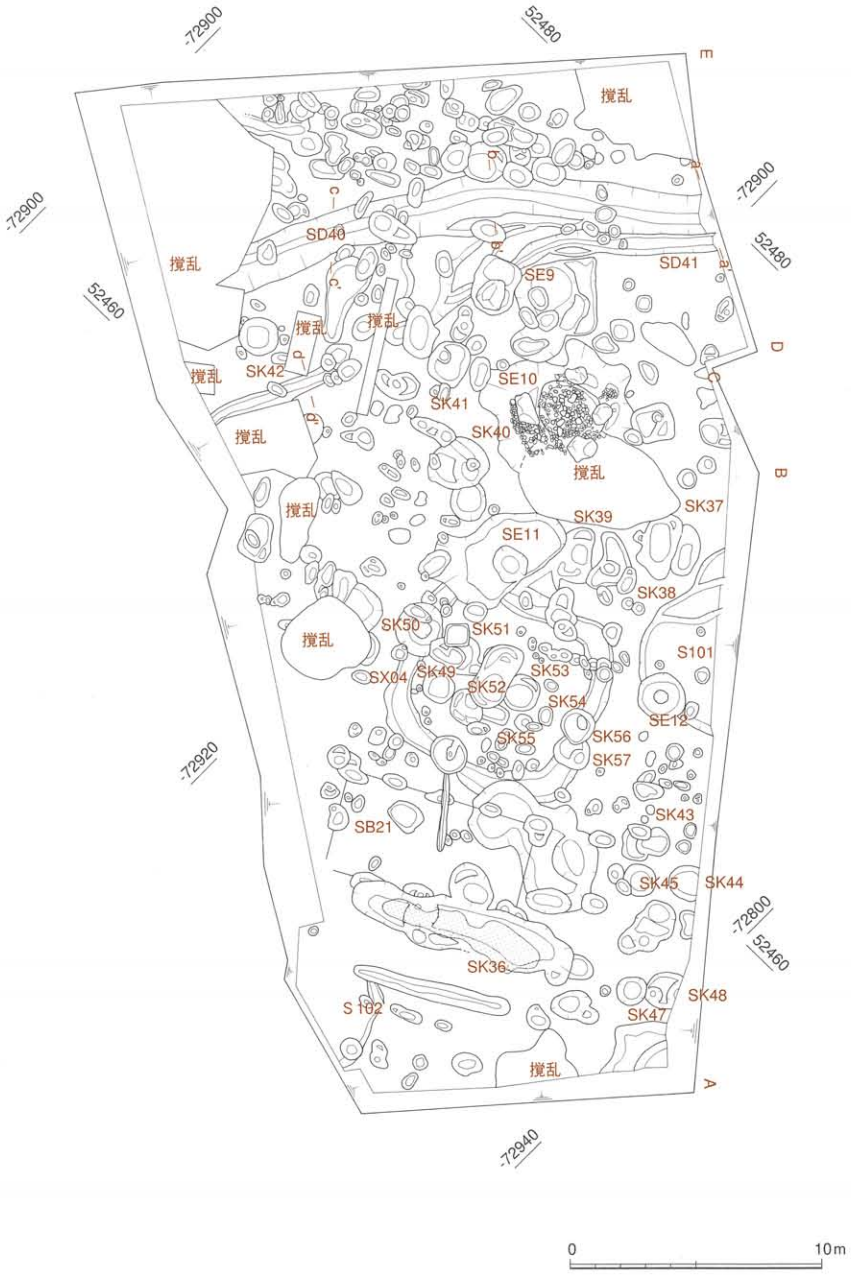
１６９～１７は貨幣である。１６８は皇宋通宝、１６９は熙寧元宝、１７０は永楽通宝、１７１～１７４は寛永通宝で、１７４のみ古寛永である。

第４節　Ｄ区の調査

調査区の立地

Ｃ区とＥ区の中間に位置し、神戸川会館から古志幼稚園に至る道の東側で、神戸側現河道よりに西南に３００ｍほど離れた地点である。調査前の表土標高は９.５ｍを測り、全調査区内でも最高である。旧正法寺境内地に当たる。

基本層序（第１６４図） 調査前まで宅地・墓地として利用され、撹乱個所が多かった。１～３の茶褐色系の土は近世以降の遺物を含む包含層である。５の暗茶色土は近世初頭の遺物を含む。地山は灰褐色砂あるいは橙褐色砂質土で、標高は８.４ｍ程度でＥ区の方が高く、現地表面の標高分布とは異なる。Ａ～Ｄ区と同様に、遺構の検出は地山面で行った。

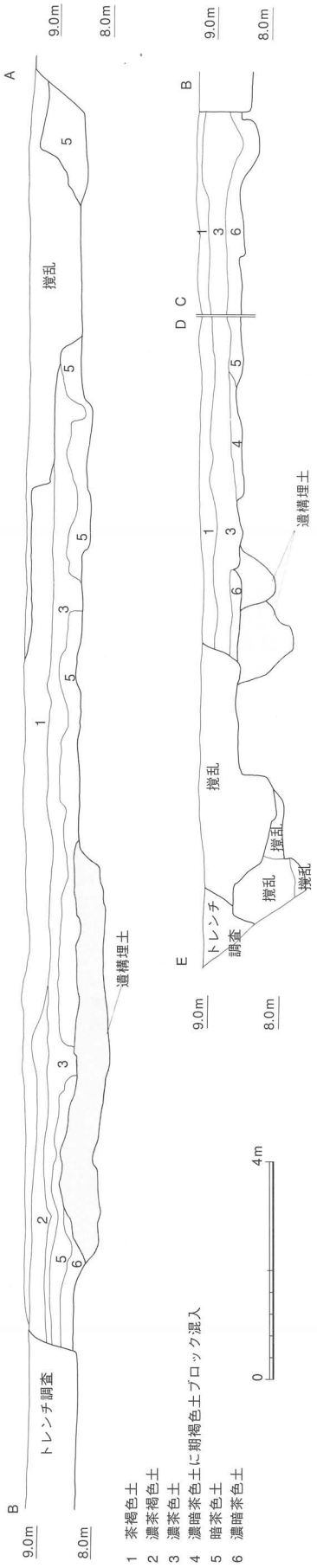


第163図　古志本郷遺跡D区遺構図　(S=1／300)

以下、竪穴建物、掘立柱建物、方形溝状遺構、井戸、土壙、溝の順に調査の概要を述べる。

Ａ、竪穴建物

ＳＩ０１（第１６５図）



第164図　古志本郷遺跡D区土層図

規模・形態　ＳＩ０１はＤ区中央南端に位置し、半分程度が調査区外にかかる。地山は橙褐色砂質土である。今回検出した竪穴建物の中では最も規模が大きく、遺存状況も良い。平面プランは円形を呈する。規模は、壁体間の直径６ｍ前後と推定される。建物の壁の掘り込みはやや甘く、丸みを帯びている。東側には約１.５ｍほどの張出部があり、ＳＩ０１はこれを切っている。この部分はＳＩ０１に先行する竪穴建物などが想定されよう。また、本体部の東側１ｍほどのところから約１０cm程度高い部分がある。なお、ＳＥ１２に切られている。貼り床上面の標高は７.９ｍほどである。

土層堆積状況　１～３は黒褐色系の埋土で、遺物はこの中から出土している。５・６層は貼り床と思われる部分で、地山橙灰褐色土と茶褐色土の混合土層であり、硬化面はなかったがよく締まっていた。

柱穴・壁体溝　柱穴は２カ所存在し、共に直径３０cm深さ２０cm程度の小規模なもので、主柱穴かどうかは不明である。壁体溝は明確な形では確認できなかった。中央ピット、焼土面などは検出されなかった。

遺物出土状況　遺物はいずれも破片で、全体から出土している。図化した遺物はいずれも貼り床直上から出土たもので、１・２層からの出土遺物は図化できなかった。

出土遺物（第１６６図）

１～５は甕である。１は口径１５.５cmの中型の甕で、口縁に３条の凹線を施す。体部最大系はかなり低い所にあり、３点から構成される列点文を１条以上廻らしている。内面は頸部近くまで部分的にケズリを施す。２は口径１９.５cmの甕で、１と似たプロポーションになるが、内面は頸部までナデである。また、頸部内面は面状をなす。４は口径１９.３cmの中型の甕で、口縁部に３条の凹線を廻らす。外面は縦ハケの後、体部最大系のやや下に４点からなる列点文１条を廻らす。内面はケズリを肩部までとする。幅広のケズリの他に細い工具痕が見られる。５は口径２１cmを測る大型の甕である。口縁部は４条の凹線を廻らし、外面は縦ハケの後、頸部近くに細い横方向のハケを廻らす。体部上面には４～５点からなる列点文を３条廻らす。体部内面はケズリを施すが、頸部まで全体に及ぶわけではなく、頸部自体も厚い。６は口

径１５cmの小型の壷で、口縁部、並びに頸部に凹線を廻らす。内面は頸部までケズリを施す。７は壷の頸部と思われるものである。外面は縦方向のハケを施した後、沈線３条からなる区画を作り、その間に綾杉文をヘラ状工具の先で施すものである。内面もハケで調整されている。

年代　床面直上の資料は、頸部内面のケズリの状況、口縁端部の状況などから松本Ⅳ－２からⅤ－１の特徴をそれぞれ備えており、弥生中期末～後期初頭の年代観が与えられる。破片であるが装飾された壷の存在を考えれば、中期的様相が強いのかもしれない。

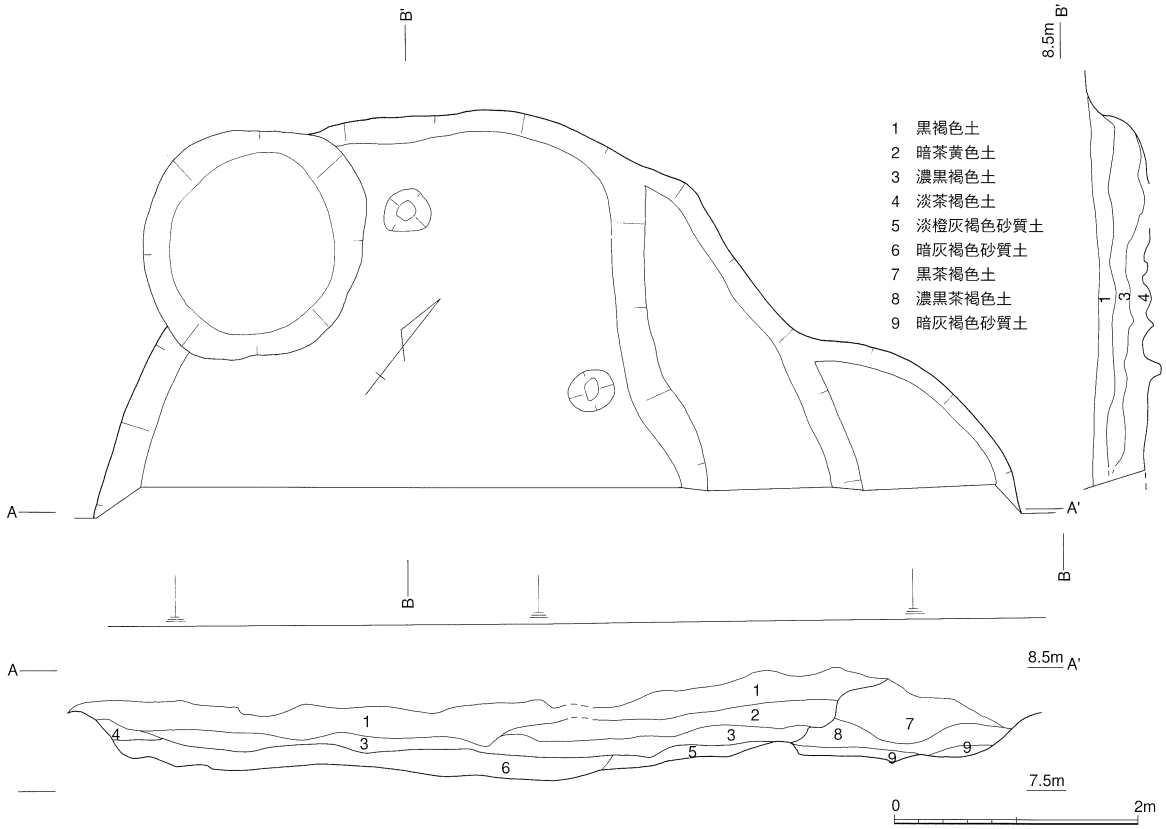
ＳＩ０２（第１６７図）

規模・構造　Ｄ区北西端で検出した。遺物が出土した段階で、調査区を拡張したがなお半分以下しか検出することができなかった。残存状況は悪く、壁の深さも２５cm程度しか検出できなかった。壁も西側では検出できたが東側では未検出で、規模は明確にできないが直径５ｍ前後の円形プランをなすと考えてよいであろう。底面の標高は８.５５ｍであった。なお、本遺構の地山は灰色砂である。

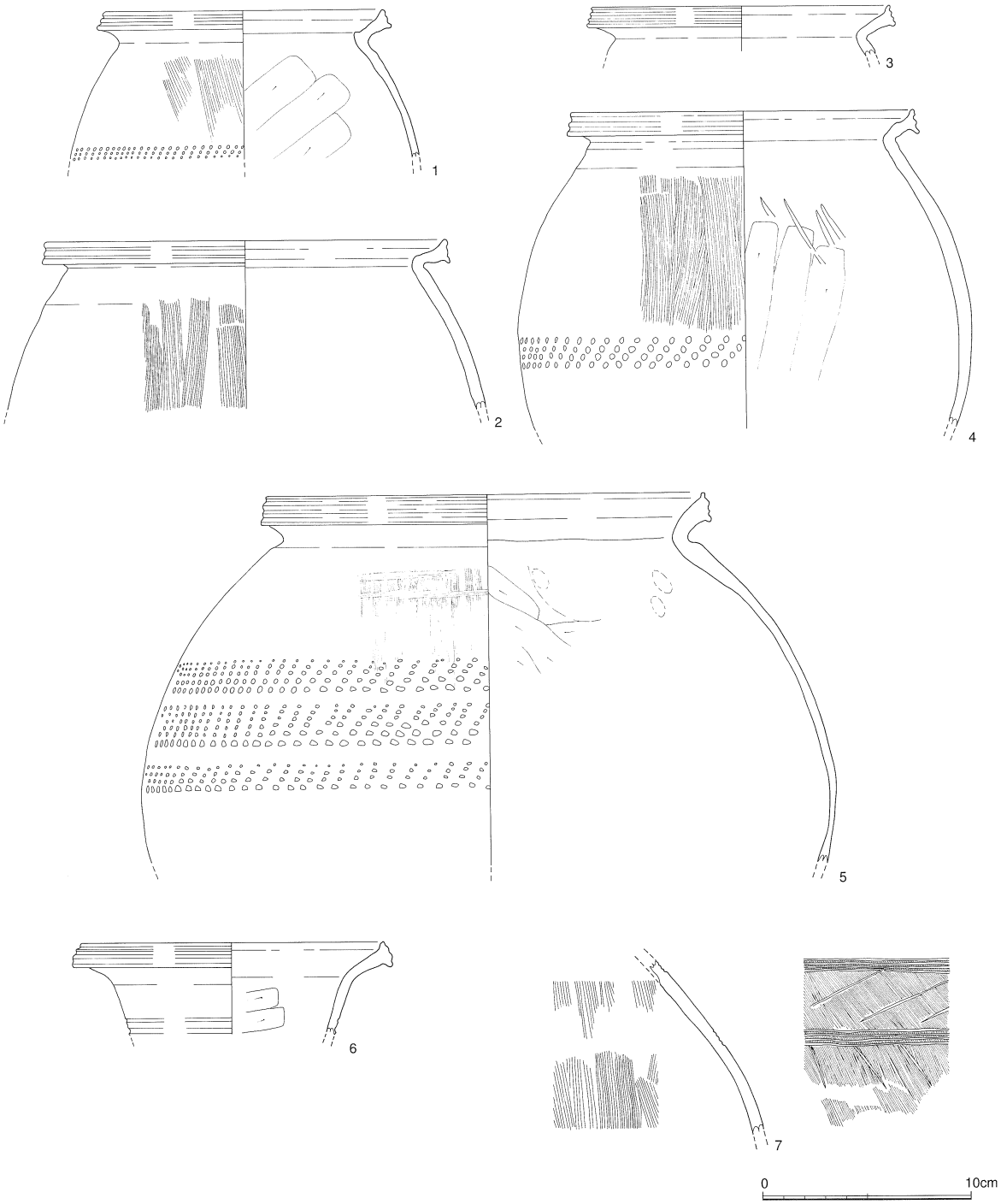
土層堆積状況　黒褐色系の土で、２層からなる。貼り床等は検出できなかった。

柱穴・壁体溝　東南側の一部で、幅３０cm、深さ１０cmほどの壁体溝を検出した。柱穴は未検出である。東南編の壁際、壁際南辺で計１ｍほどのピットを確認しているが、ＳＩ０２との関係は同時期か先行するものとしか確認できず、積極的にＳＩ０２に伴うものであるということは出来ない。

遺物出土状況（第１６８図）　遺物は図化したもののうち７・９を除いて床面から出土した。８の

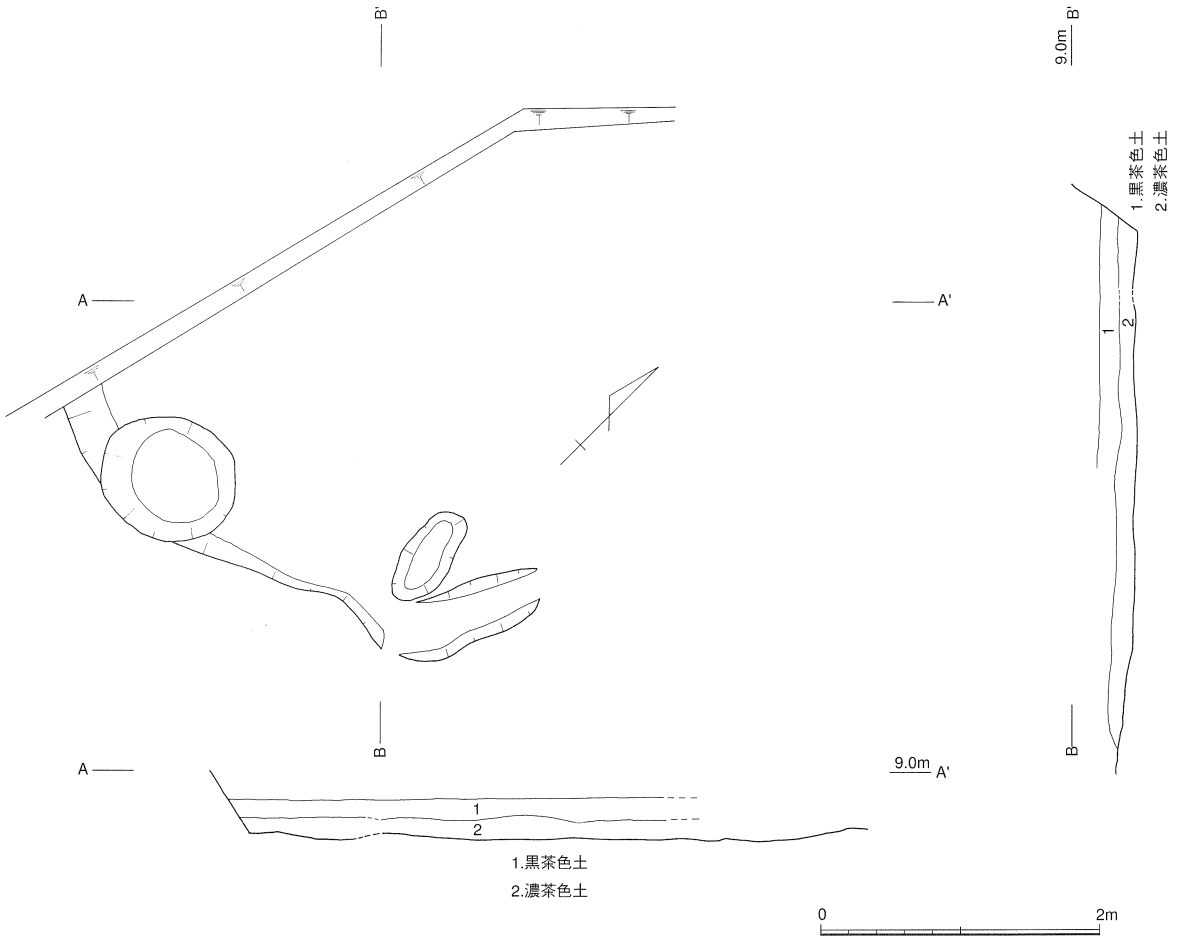


第165図　古志本郷遺跡SI01実測図　(S=1／60)



壷頸部は、第１６８図に示したように建物内から出るかとも考えられる部分から大部分が出土し、接合する部分が建物内から出土している。出土レベルは同じであるので、あるいは竪穴建物の平面は前述より広かった可能性がある。

出土遺物　１・２は編集時に誤って本図に入れてしまったが、Ｅ区Ｚ地点出土の弥生土器である。

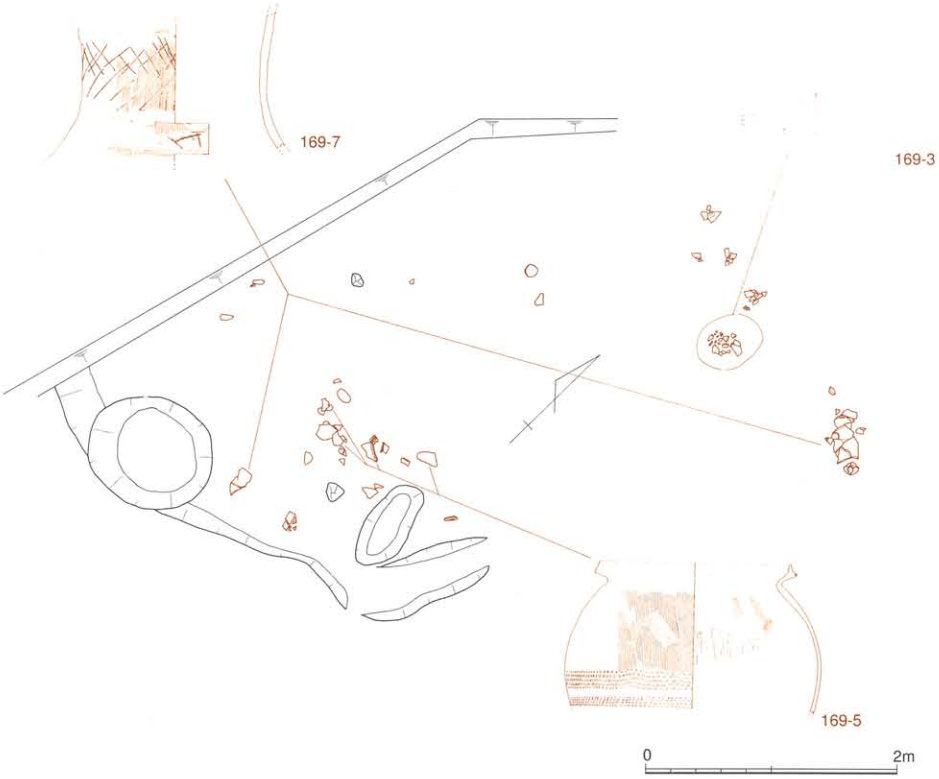


第167図　古志本郷遺跡SI02実測図　(S=1／60)

３は口径１４.２cmの肩のはるプロポーションを持ったやや小型の甕である。口縁部は内傾し、３条の凹線を持つ。外面は縦ハケの後、体部最大径付近に中央の大きい３点からなる列点文を一周させる。内面は縦方向のケズリが頸部まで届かず、肩までで止まっている。頸部は厚い。４は甕の底部である。５は口径２２.４cmを測る大型の甕で、口縁は内径し立ち上がる外面には凹線３条を廻らす。外面は縦ハケの後、頸部最大径よりやや下に１列５点程度からなる列点文を２条施す（下条は欠損している)。内面はケズリが体部上半程度で止まり、肩部までも届かない。代わって一部にハケが施されている。６は甕底部であり、５と同一個体である可能性がある。７は大型の壷の頸部である。厚さ１cm程度と厚手である。外面は上部に凹線を廻らす他、頸部に全面に立てハケを施し、その上からヘラ上工具の先で羽状文を施すが、大変荒い表現で重なり方や、引き出し位置、間隔が異なっている。頸部肩から下には横ハケも見られる。また、肩部にはヘラ状工具の先によって「#」の印がかかれており、絵画の一部である可能性もある。また、凹線部にはハケ工具小口のようなもので、列点文が施される。８は擦石の類かと思われる石で、床面から出土した。９は金属塊である。図版１３１の金属製品（煙管）と共におそらくＳＩ０２とは無関係であろう。

年代　出土土器はいずれも松本Ⅳ－２の特徴を持ち、本建物の年代も弥生中期末になろう。

Ｂ、掘立柱建物



第168図　古志本郷遺跡SI02遺物出土状況図　（遺構S=1／60　遺物S=1／9）

ＳＢ２１（第１７０図）

Ｄ区南に位置する。梁間２間（４.１ｍ）×桁行４間（８.１ｍ）の側柱建物である。第１７０図では、西側のＳＫ３７、東南の浅い窪みを完掘した状況で図化しているが、本来はこれらの遺構に切られている。梁方向の中央柱穴は北側ではそれ相当するＰ１があるのに対し、南側では浅い窪みもあって検出し得ない。ただし、ＢＢ’の断面を見るかぎり、南側にＰ６・Ｐ７大の柱穴をもつ柱があったとは想定できず、北側の柱穴も本建物とは無関係であろうか。棟持ち柱の検出されない掘立柱建物はＳＢ１５やＳＢ２０がある。また、北西隅の柱穴は検出されていないので、桁行３間となる可能性もあろう。地山は灰色砂であった。

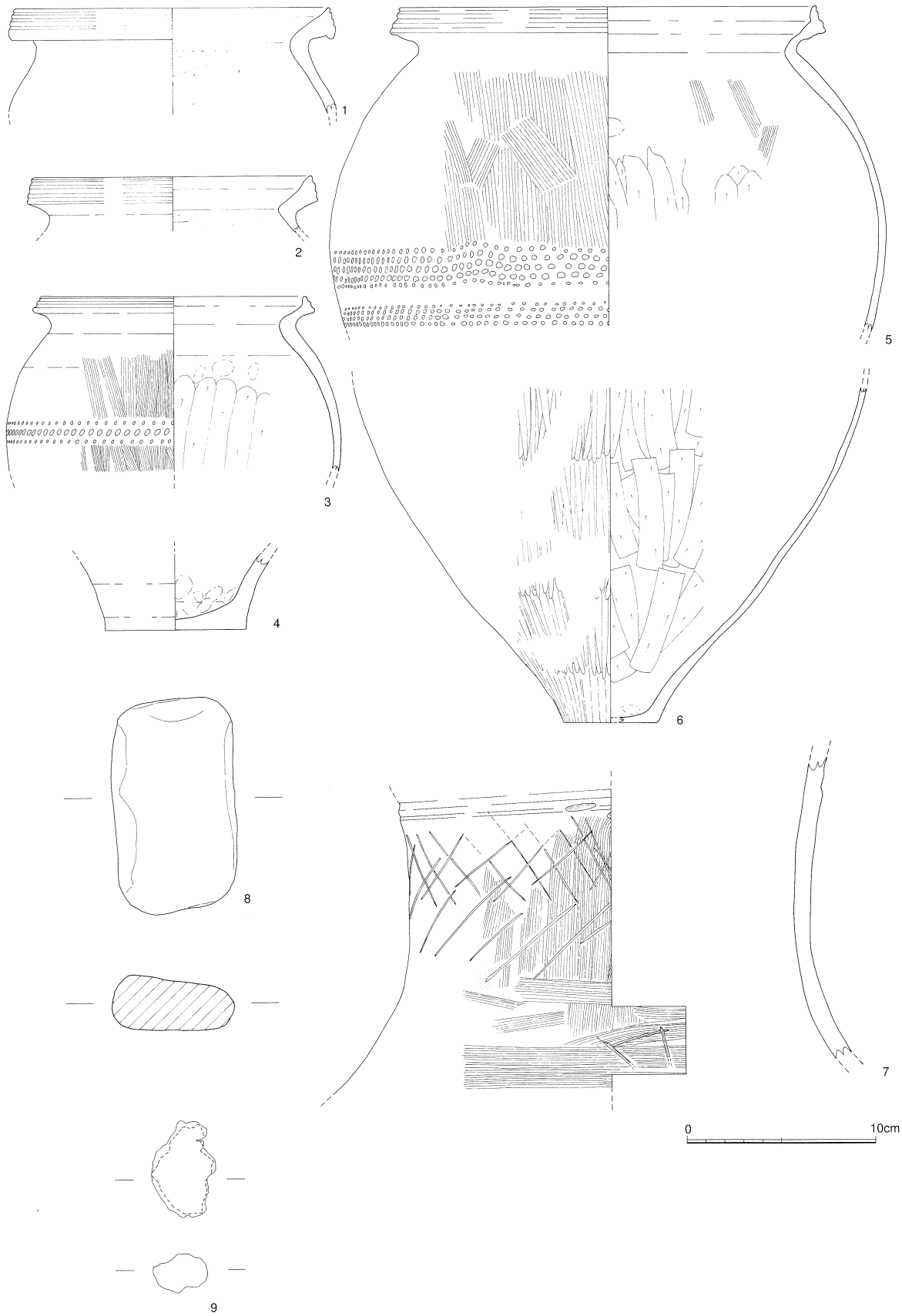
柱穴　最大長さ１ｍ幅５０cmの楕円形をなし、深さは４０～５０cmと大規模であるが、本遺跡の他の掘立柱建物のと同様、砂質の地山と関係するのであろう。Ｐ１では柱の抜き取り痕跡が、Ｐ２では柱痕跡が見られた。

年代・性格　出土遺物はないが、ＳＫ３７と浅い窪地に切られている。後者は１８世紀、前者も土師質土器Ⅵ期であり、このことからＳＢ２１は近世初頭以前と見られる。

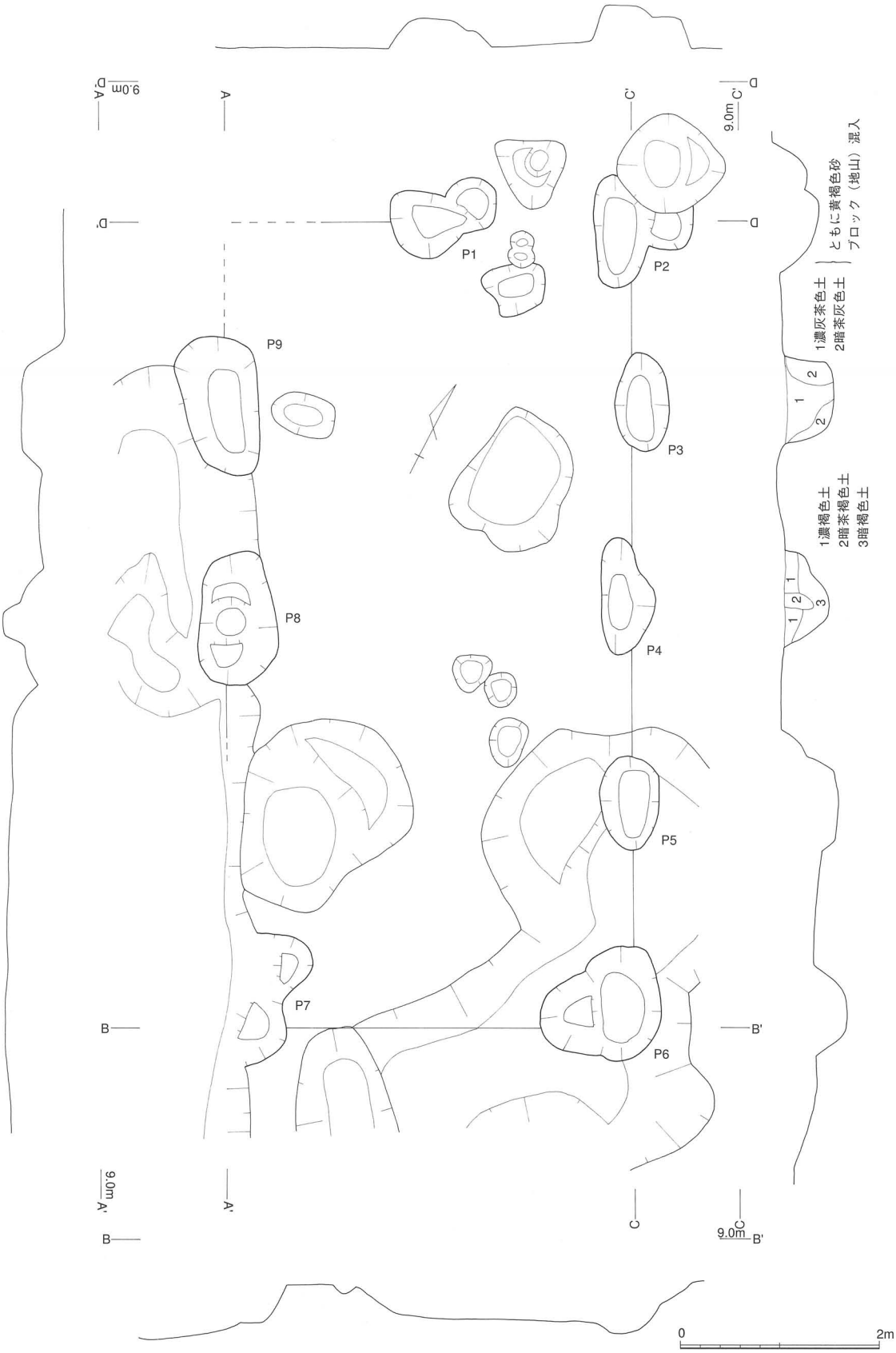
Ｃ、方形溝状遺構

ＳＸ０４（第１７１図）

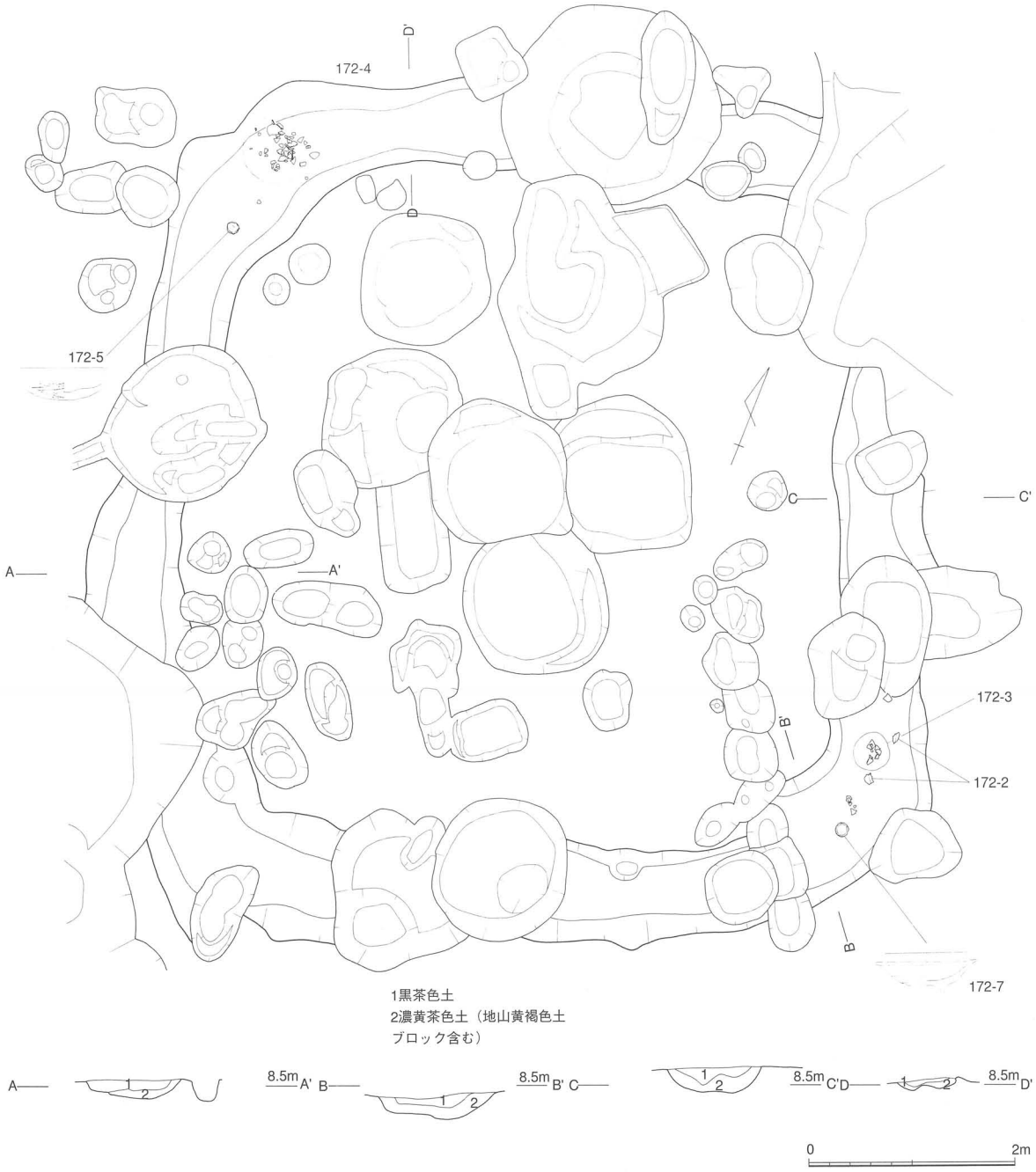
規模・構造　Ｄ区中央やや南寄りに位置する。溝の外側で１辺８ｍ前後のほぼ正方形をなす溝状の遺構である。仮に東辺を主軸とする場合、Ｎ－２０°－Ｗ前後を指向することになる。溝は狭いところで幅０.８ｍ、深さは約２０cm程度が検出された。溝の底部標高は、東西南北で各辺でやや異なっており、東南隅では８.２ｍ、それ以外では８.５ｍになる。溝には黒茶色土と地山ブロックが堆積していた。このような形態のものとしては、古墳周溝が考えられるが、中央にＳＫ４９～５５の土壙があったこともあり、溝を確認した段階ではすでに墳丘部分は掘り下げた状態であった。この掘



第169図　古志本郷遺跡SI02出土遺物実測図　(S=1／3)



第170図　古志本郷遺跡SD21出土遺物実測図　(S=1／6)



第171図　古志本郷遺跡SX04実測図　（遺構S=1／60　遺物S=1／9）

り下げの際、主体部やそれに関わる遺物は検出されなかったので、結論的に墳丘残存の有無は確認できていない。溝の部分がＳＫ５０・５６・５７に切られており、溝内部には前述のようにＳＫ４９・５１～５５が掘り込まれている。

遺物出土状況　遺物は溝の底部から出土した。出土地点は東南隅と北西隅の二カ所に限られる。東南隅からは土師器甕２個体（第１７２図－２・３）と須恵器有蓋高坏（同７）が、北西隅からは甕２個体分（同１・４）と土師器碗（同５）、須恵器坏（同６）が出土した。これらのうち１・５・７が原位置に近いと推察されることを除くと、以外はいずれも小片であった。

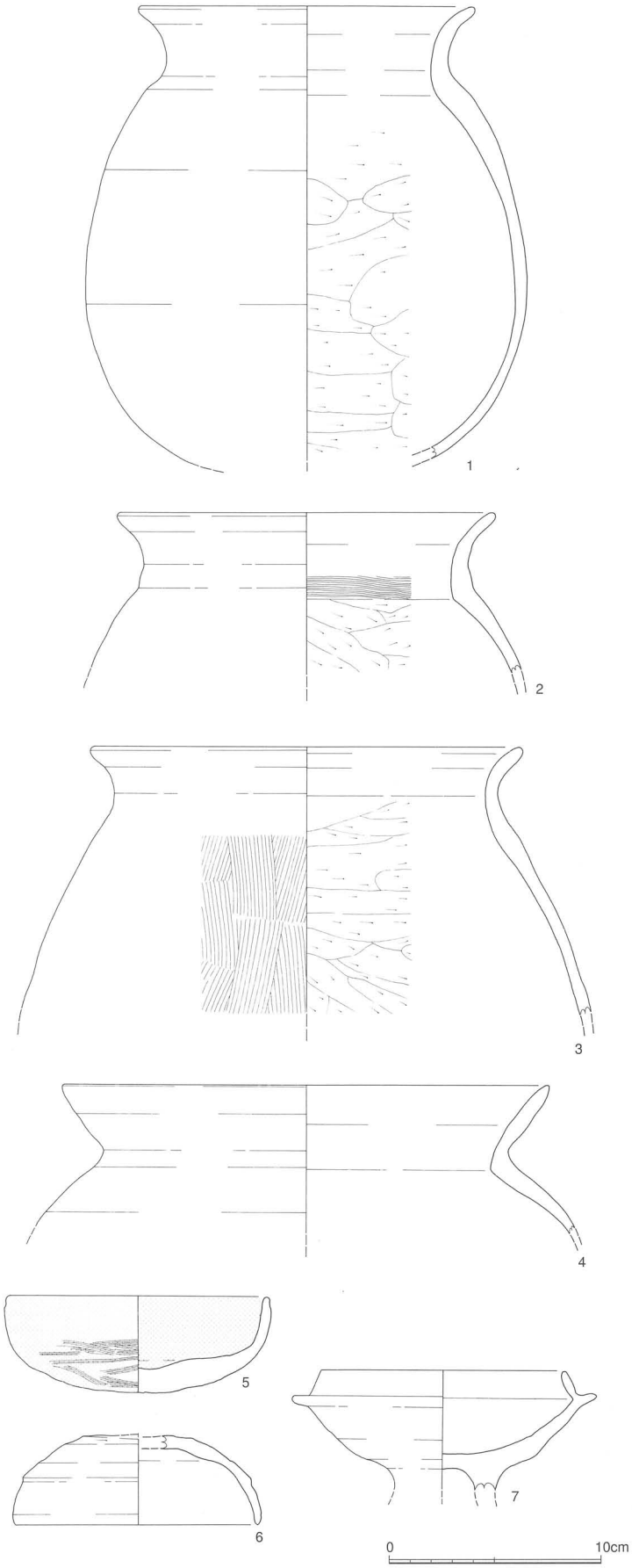
出土遺物（第１７２図）　１～４は土師器甕である。１・２はやや直立し外反する口縁を持ち、下脹れになるタイプである。２は頸部内面に横ハケを施す。３・４はくの字状の口縁をもつタイプである。３は外面に縦ハケを施す。以上の甕はいずれもない面は頸部以下横方向のケズリである。５は土師器碗である。口縁部は直立し、端部は若干のくびれを持つ。内外面赤彩され、外面下半部には横ハケが施される。６は須恵器蓋坏で、頂部外面をやや丁寧に削るもので、大谷Ａ４類に該当する。７は有蓋高坏で、三方に線状の透かしを入れる。

年代・性格　出土遺物の中の２点の須恵器は、おおむね大谷４期の所産であり、ＳＸ０の構築年代を示すものになろう。遺構の性格としては、土師器器甕が出土してはいるものの、小型の方墳の周溝と考えられる。

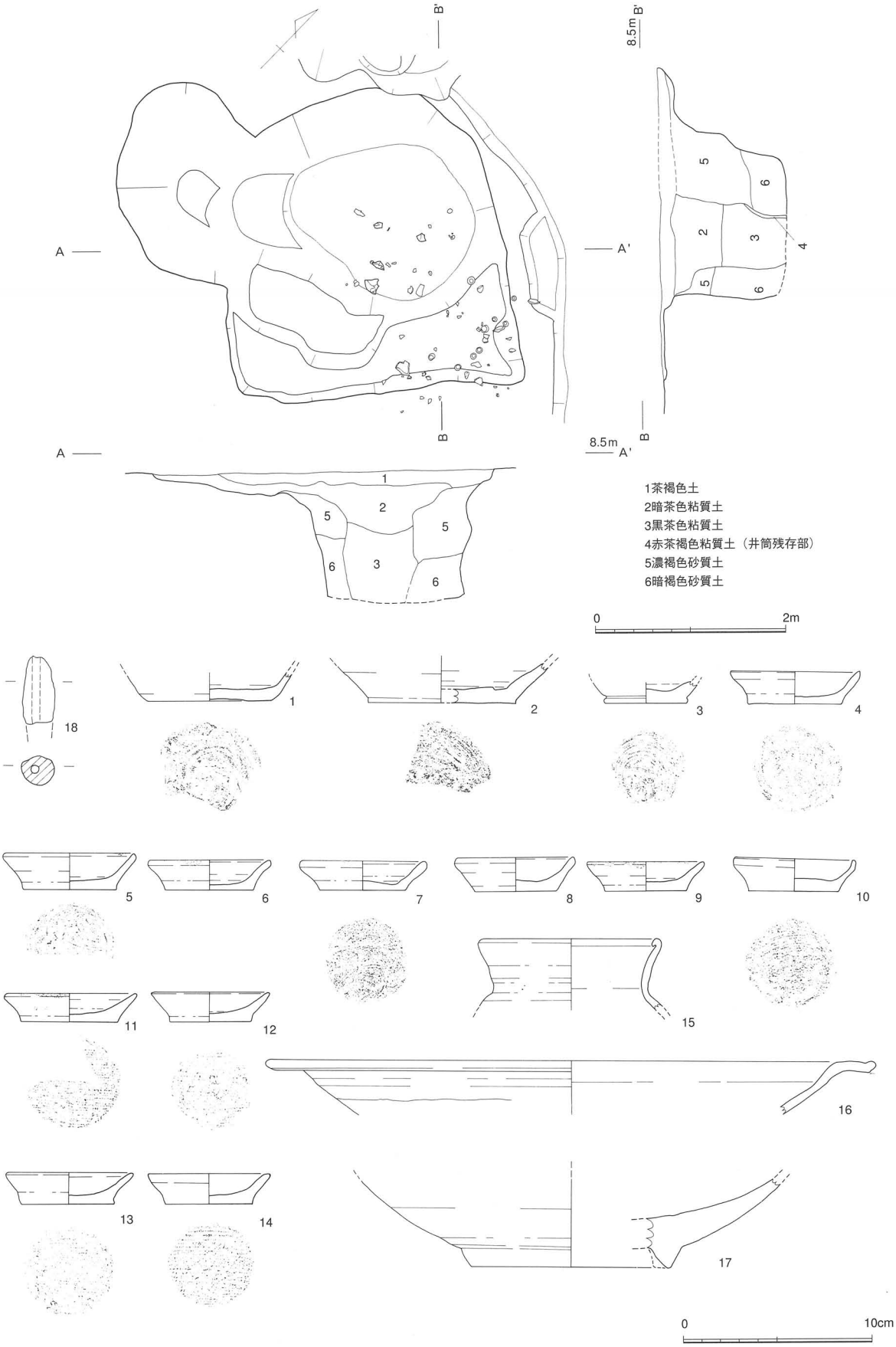
Ｄ、井戸

ＳＥ０９（第１７３図）

規模・構造　Ｄ北東に位置し、掘り方の形状は、上部で１辺２.８～３.０ｍの方形をなし、下部は直径２ｍの円形をなす。深さは１.５ｍで底部の標高は７.２ｍになる。井側はおそらく素掘りで、直径７０cmばかりである。再下層では井側、あるいは井筒の木質が残存した部分があった。方形の上層部は、後述のよ

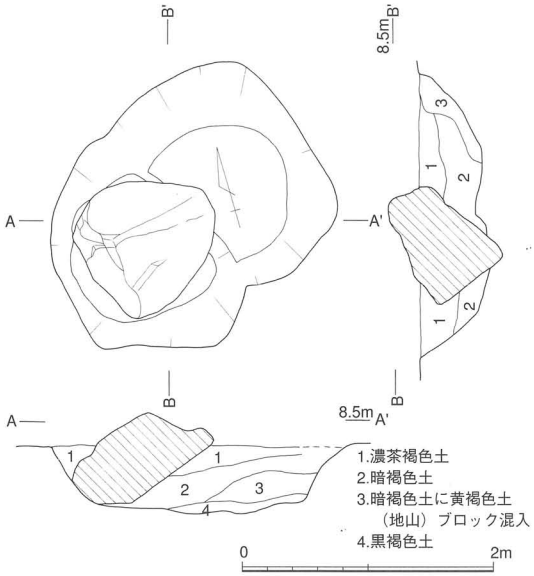


第172図　古志本郷遺跡SX04出土遺物実測図　(S=1／3)



第173図　古志本郷遺跡SE09実測図・出土遺物実測図　（遺構S=1／60　遺物S=1／3）

うに廃棄時に井桁を取り払ったものであろう。このことから井桁は方形であったと推定される。なお、北西隅には長径１ｍほどの貼り出し部がある。調査時にこの張出部と本体の関係を明確に確認しなかったが、第１層堆積以前に掘られたことは確実で、中がステップ状の段をなすことから井戸の掘り方掘削時にかかわる、作業用のステップ遺構ではないかと考えておく。ただし、このよう遺構が明確に検出されいている井戸は本遺構のみである。



第174図　古志本郷遺跡SE10実測図1　(S=1／3)

土層堆積状況　１は井桁取りだしに関わる掘りこみであり、茶褐色土が堆積する。後述のように、遺物はほとんどすべてがこの土層から出土した。２・３は井側埋土である暗褐色系の粘質土で、地山橙褐色砂質土などは一切含まれず、井戸の廃棄時に埋められた、というよりは井戸が自然に埋没する過程で堆積した土の模様である。４は井側の木質残存部である。以上２～６層には乱れがなく、井戸廃棄時に井側抜き取り、破壊などが行われた痕跡はなく井側は素掘りと推定される。

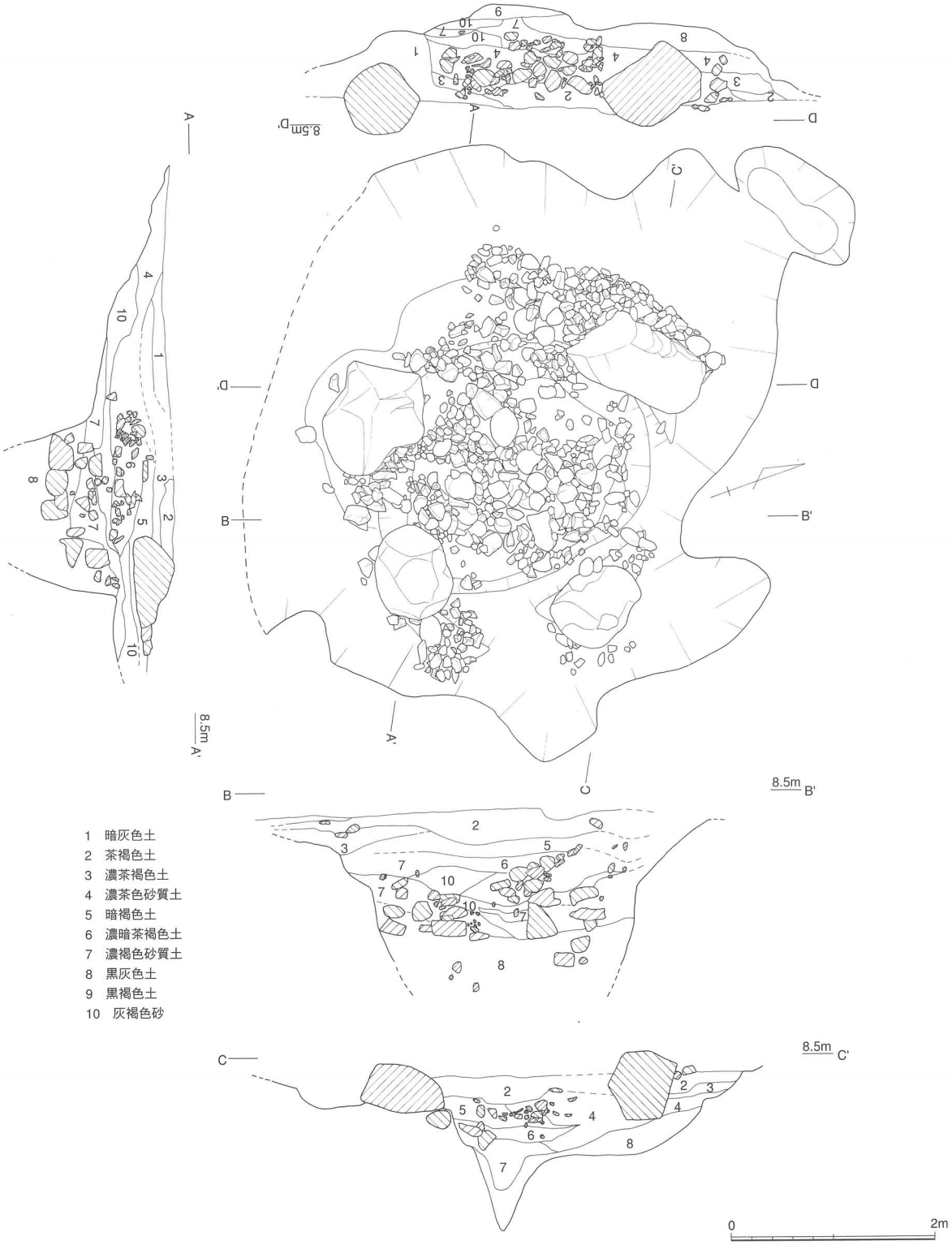
遺物出土状況　第１７３図２のみが３層から出土し、他は１層から出土した。土師質土器の多くは完形である。後者の土師質土器は井戸廃棄に関わる祭祀に使用されたものであろうか。

出土遺物　１～１４は土師質土器である。１・２は坏で、２は茶褐色の胎土を持ち、大型で口縁部が直線的に立ち上がるもので、土師質土器Ⅳ期か。４～１４は土師質土器Ⅵ期の皿である。口縁部の形状は、外反し端部を内傾させるもの（４・５・１０）、外反させるもの（６～９）、内面の底部と縁部の区別が難しいもの（１１～１４）があり、４～１０は底部回転糸切り、１１～１４は静止糸切りである。１０のような器壁の薄いものは土師質土器Ⅴ期の皿の系譜を引くものであろうか。口縁部に油煙の付着する燈明皿も一定の割合で出土している。皿は図化してないものも含めると２７個体以上が出土した。１５は陶器の壷である。口縁部を内側に折って縁状にする。濃緑灰色の釉が施釉される。１６・１７は同一個体の可能性のある肥前系陶器の大皿である。胎土はともに赤褐色で、乳白色の釉が下地となったその上に緑茶灰色の釉が施される、二彩の大皿である。見込みに砂目が残る。１７世紀代のものであろう。１８は管状土錘である。

年代　第１層出土の土師質土器皿はⅥ期で、１６・１７の１７世紀という年代とも矛盾せず、これが井戸の廃棄された年代を示している。一方２は、土師質土器Ⅳ期のものと思われるが、摩耗しているこの井戸の使用開始は中世末～近世初頭前後になると推定される。

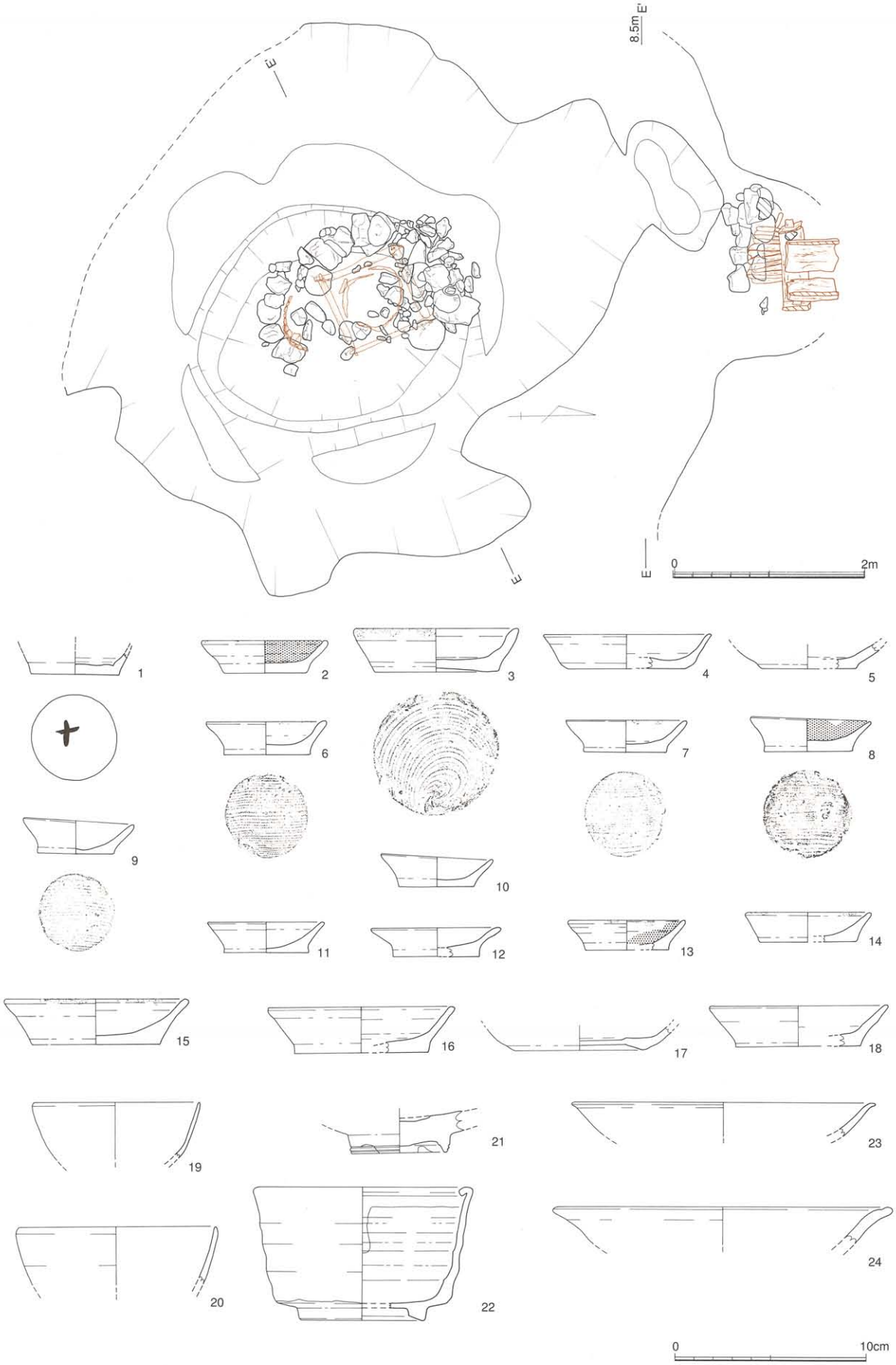
ＳＥ１０（第１７４～１７６図）

規模・構造　Ｄ区中央に位置する。掘り方は上下段からなり、上段が上端系５ｍ、下端径３ｍの不整円形をなし、下段が径２ｍの不整円形をなす。深さは上段が８０cm、下段が１ｍほどである。底部の標高は６.５ｍほどで、Ｄ区の井戸では最も規模も大きく深い。なお、調査時は湧水が激しく常時電動ポンプを１・２基稼働させなければならず、地山は崩れやすい灰色砂で、下段は事実上土層

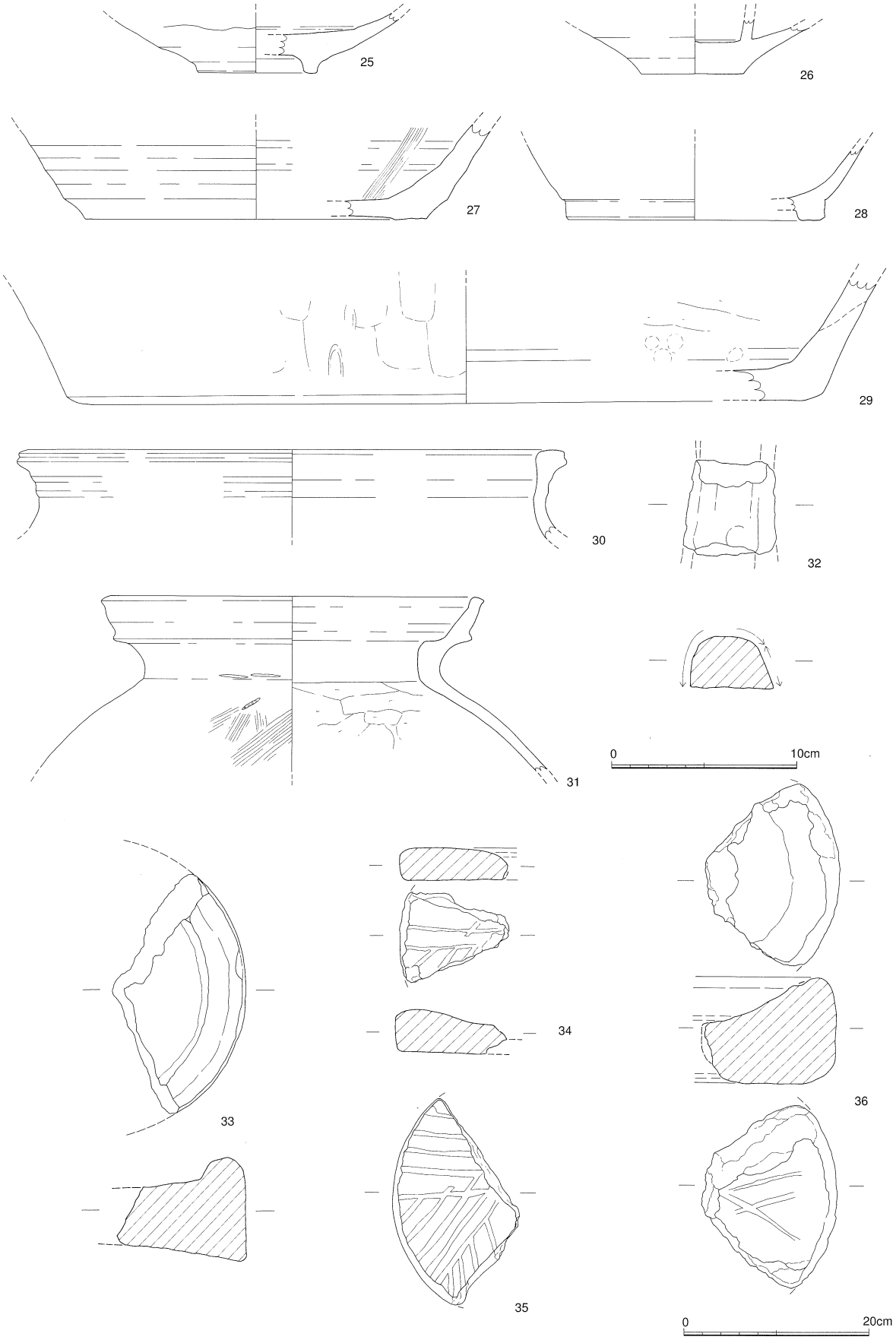


第175図　古志本郷遺跡SE10実測図2　(S=1／60)

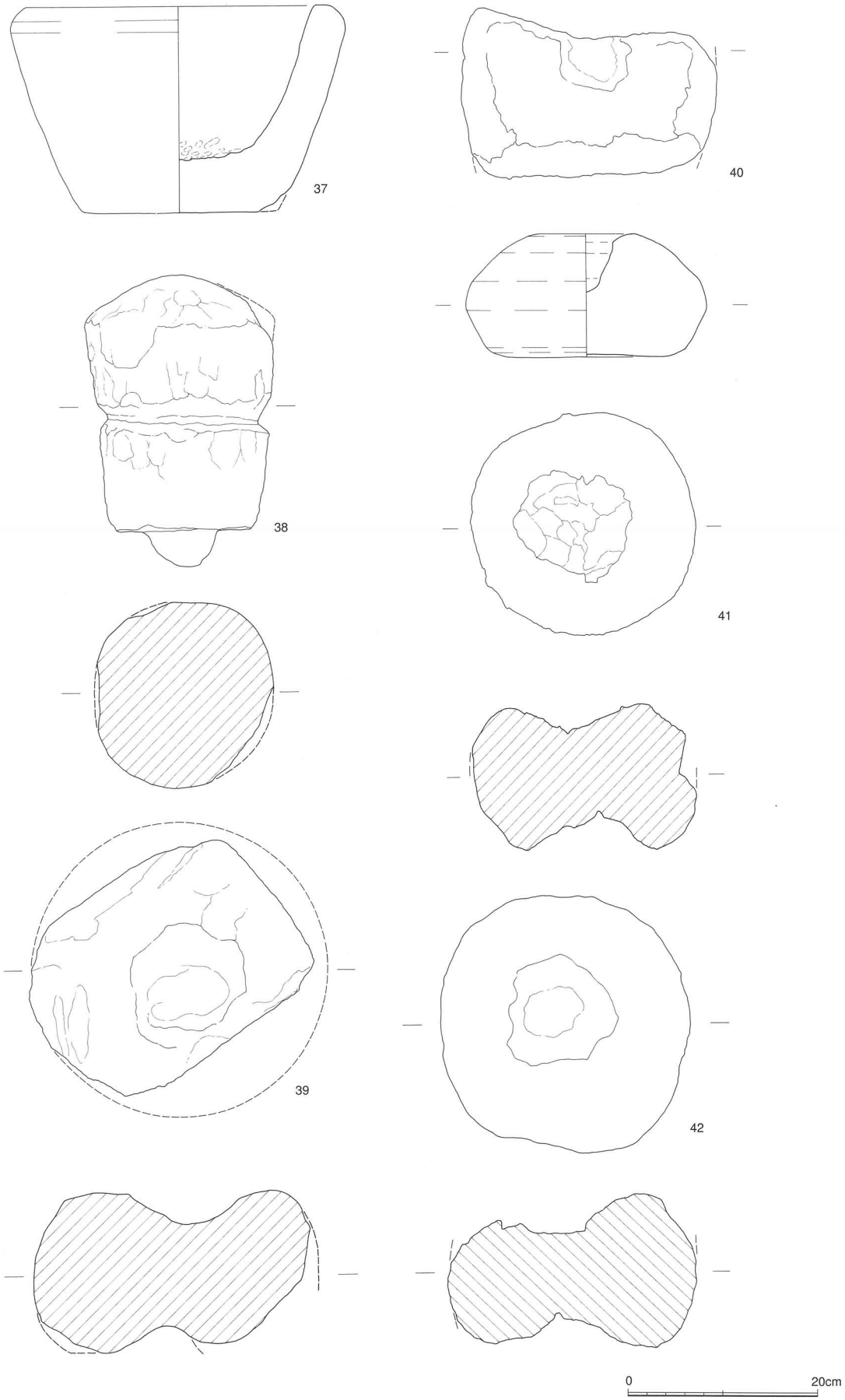
断面を確認できなかった。上層の土層、石組、桶、井筒、横板からは、以下の推定ができる。1 桶の井筒と石組は対応することから、先に井筒－桶、井側－石組の井戸が作られた。2　次いで北側に拡張し、くり抜いた自然木を中心にほぞによって組み合わせる横板を周囲に配した井筒が設置された。この横板には隅柱や井籠の組みあげはなく、第１７６図に見るように石組と相関するので、



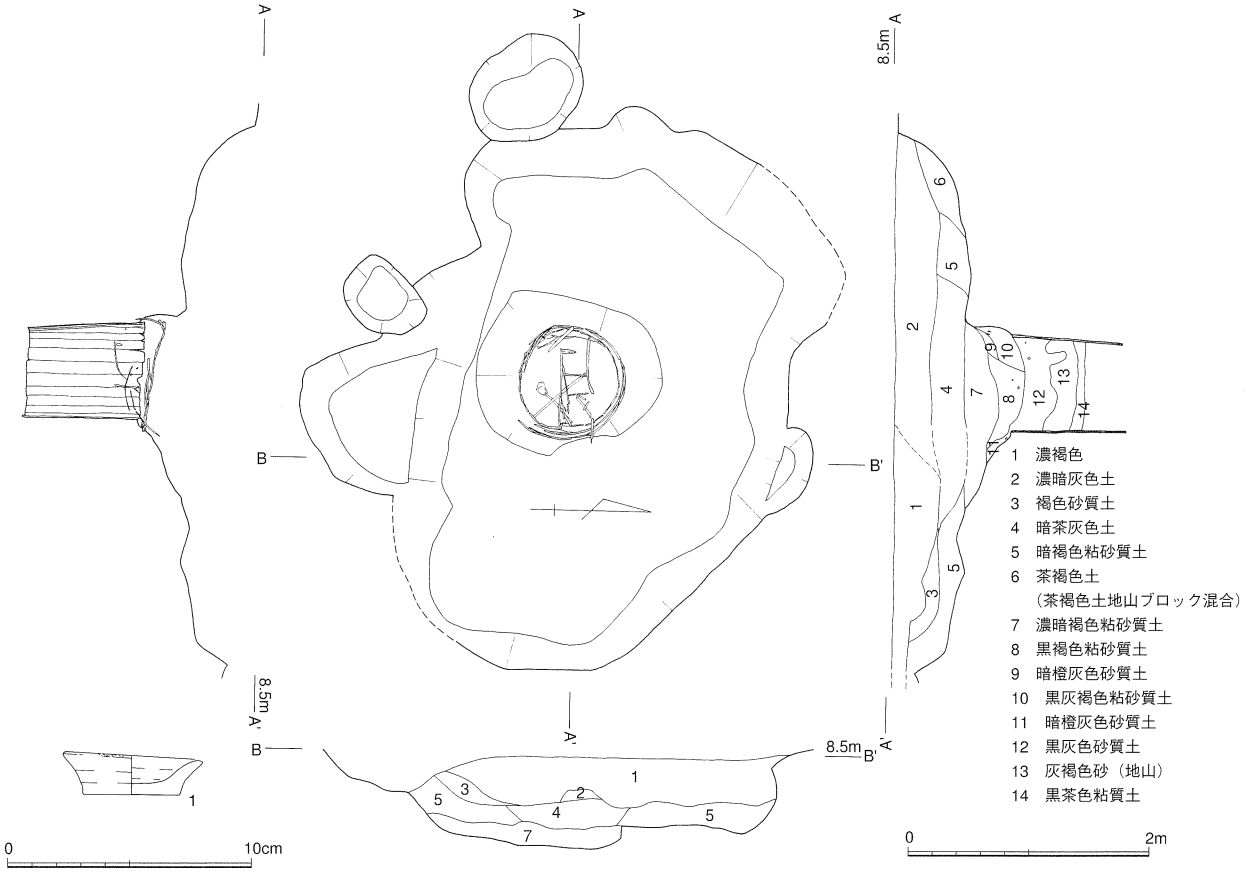
第176図　古志本郷遺跡SE10実測図3・出土遺物実測図1　（遺構S=1／60　遺物S=1／3）



第177図　古志本郷遺跡SE10出土遺物実測図2　（25～32、S=1／3　33～37、S=1／6）



第178図　古志本郷遺跡SE10出土遺物実測図3　(S=1／6)



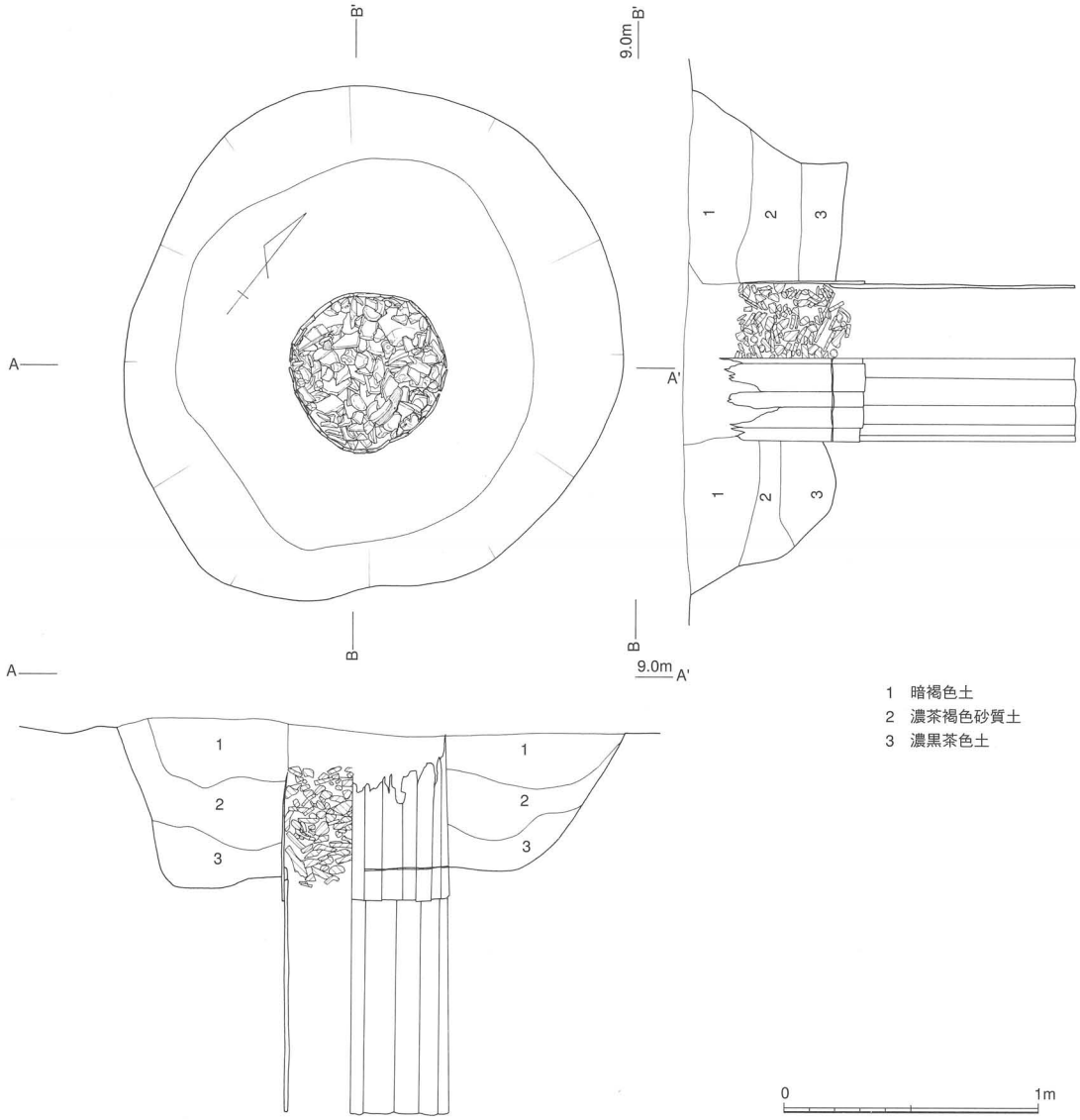
第179図　古志本郷遺跡SE11実測図・出土遺物実測図　(遺構S=1／60　遺物S=1／3)

井筒と見られ、井側は石組であったと考えられる。３　９・１０層が本来の井桁掘り方埋土で、上段は井戸の廃棄時の破壊痕跡と見られる。本来の井桁の設置などは不明である。

遺物出土状況　遺物のほとんどは上段井戸廃棄時埋土１～７層で出土している。また、１～７層には大量の石と、径１ｍ大の巨石が合計４個落とし込まれていた。何ゆえこのように大きな掘削（上段）を行い巨石を廃棄したのかは不明である。ただし、巨石の廃棄は何らかの理由で必要であったと考えられ、ＳＥ０９の北にも同様の巨石を埋めた穴が存在する（第１６３、１７４図）。

出土遺物（第１７６～１７８図）　１～１８は土師質土器の皿である。底径４.５～５.０cmのものだけでなく、同６cm前後の大型のもの（３・４・１５・１６・１８）もある。器形も口縁部が直線的に立ち上がるもの（１・３・４）、内面の底部と口縁部の区別が明瞭でないもの（７～１６）がある。底部調整も回転糸切り（１～６）がある反面、静止糸切りが増加し（７～１６）、大部分を占める。また、墨皿、燈明皿も一定の割合で存在する。全体に土師質土器Ⅵ期に該当する。図化していないものも含め、本遺構からは土師質土器の皿は計２４個体以上が出土している。２１は青磁碗で、高台内は釉を削り取る。１９・２０、２２～２６は陶器の皿、碗類である。２２は口縁部を縁状に折り曲げる碗で胎土は黄褐色、外面に濃黄褐色の釉を施す。２３～２５は灰色の釉が施釉される肥前系陶器の皿である。２６は見込に凸帯のまわるもので、燈明台皿であろう。

２７は黒茶色の精緻な胎土を持つ擂鉢である。２８は甕などの底部で、灰色の精緻な胎土に淡緑色の釉が施される。いわゆる石見焼と推定される。２９は備前焼の甕底部。３０は肥前系の甕口縁部



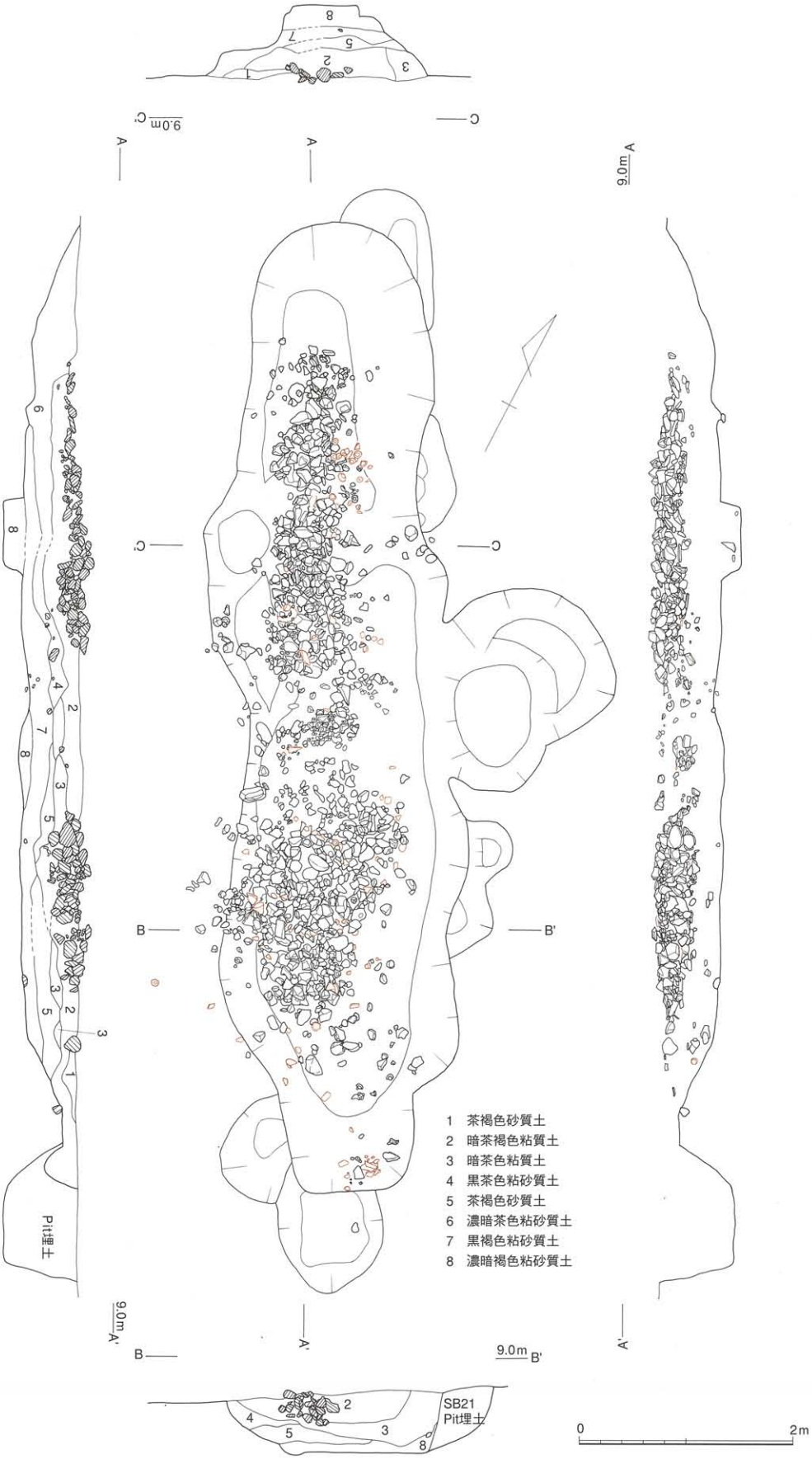
第180図　古志本郷遺跡SE12実測図　(S=1／30)

である。３２は砥石、３１は古墳時代前期の甕である。３３～３５は石臼である。３３・３６は雄臼で、３３は内側が中央部にが窪むものである。３４・３５は厚さ3cm程度と薄いもので、同一個体であろうか。３５の擦り目は８区で各区５条程度の擦り目が入れられる。３７は火鉢であろうか。底部内面火を浮けた痕跡が残る。３８は凝灰岩質砂岩製の五輪塔空・風輪である。４０は火輪、３９（凝灰岩製）・４１・４２（凝灰岩質角礫岩製）は水輪である。

年代　第１～７層出土の土師質土器はⅥ期でも新段階に当たり、出土する遺物にも石見焼があることから、井戸の廃棄は１８世紀以降と見られる。

ＳＥ１１（第１８０図）

規模・構造　Ｄ区中央に位置する。掘り方は上下二段に別れている。上段は直径４.５ｍの不整円形をなし、下段は直径９０cm程度で、井筒桶の幅しかない。深さは上段が０.５ｍ、下段が１.５ｍで合計２.０ｍ、底部の標高は６.７ｍ程度である。井側は合計２６枚の板から構成される桶で、いわゆる桶側井戸である。ＳＸ０４、ＳＫ３９を切る。



第181図　古志本郷遺跡SK36実測図　(S=1／60)

土層堆積状況　１～４層（Ⅰ層）、５・６層（Ⅱ層）、７・８層（Ⅲ層）、９・１０層（Ⅳ層）、１１層以下（Ⅴ層）に分けることができる。上段の構成層Ⅰ～Ⅲ層は井桁設置、抜き取りに関わるものであるが、Ⅰ層を最終的な廃棄時の抜き取りと考えても、１回は付け替えがあったものと見られる。Ⅲ・Ⅳの関係は不明であるが井側部分が埋まった時点で小規模な掘り返しがあったのであろうか。Ⅳ層は粘質土・砂質土の互層をなす。井戸底部として自然な堆積で、井戸の廃棄にかかわって埋められたものではあるまい。

出土遺物（第１８０図）　前述のⅢ層から、１の土師質土器が出土した。土師質土器Ⅵ期の小皿である。また、井側内部には図化していないが棒状の木製品が多数廃棄されていた。

年代　１から、井戸がある程度利用され、井側が自然に埋まった時点が近世になろうかと思われる。完全な廃棄年代は不明である。

ＳＥ１２（第１８０図）

規模・構造　Ｄ区中央東側に位置する。ＳＩ０１を切っている。地山は橙褐色砂で、井側桶の側板を引き抜いたとたんに崩壊してしまった。形態は上段・下段の二段からなり、上段は直径２ｍの円形をなし深さ６０cm、下段は井側直径の６０cm、深さ９０cmで、底部の標高は7.4ｍ前後と推測される。井側は高さ５０cm以上の桶と、９０cmの桶の２段組で、桶側段組構造である。井戸掘り方の埋土１～３には廃棄時に破壊された痕跡はなかった。井戸内部には多数の遺物が堆積していた。

出土遺物（図版１３６）　急須、花瓶など陶磁器、ヤマト糊の瓶等のガラス製品が出土した。

年代　出土遺物から、近代まで機能していたものと判断される。

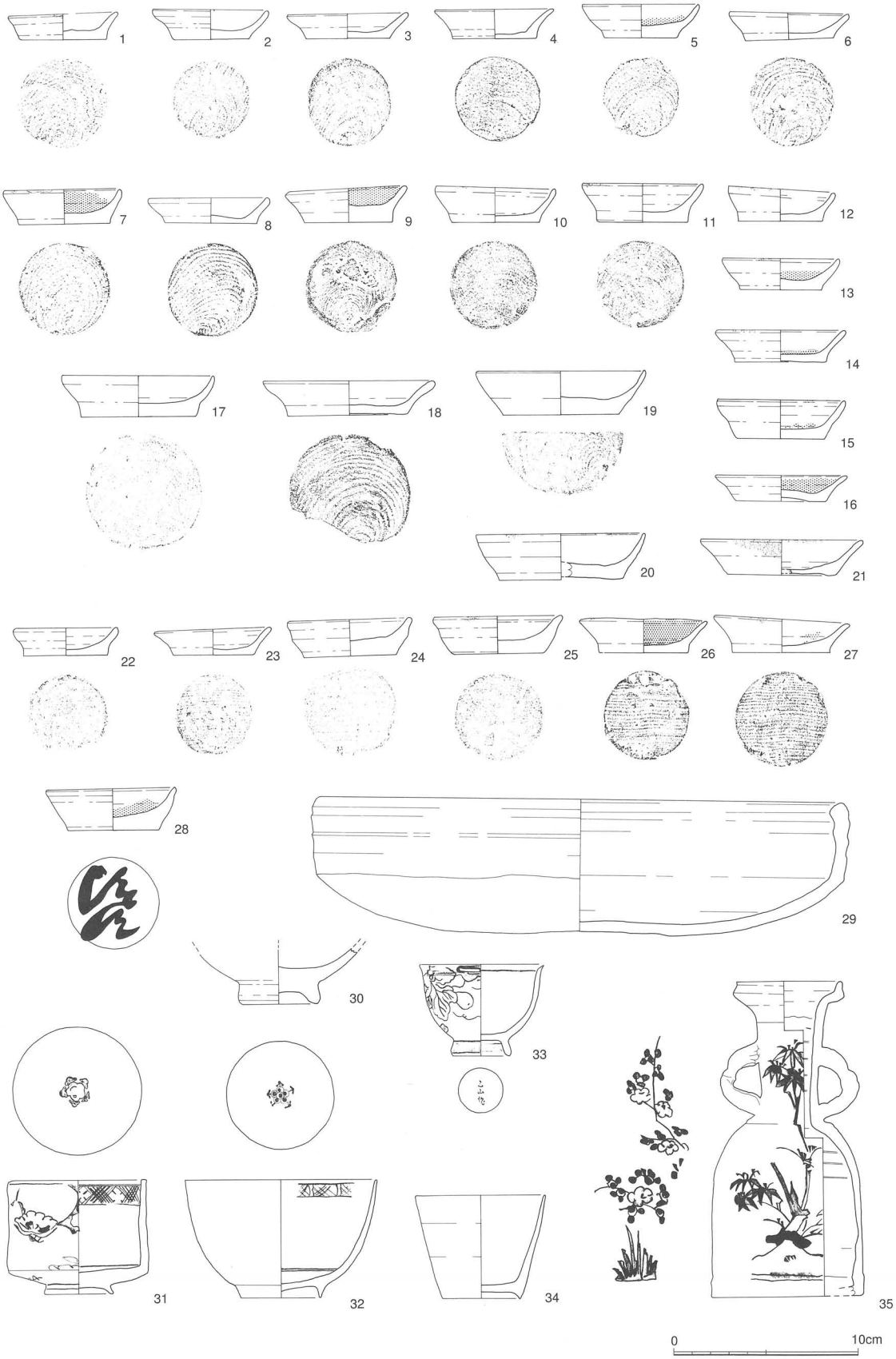
Ｅ、土壙

ＳＫ３６（第１８１図）

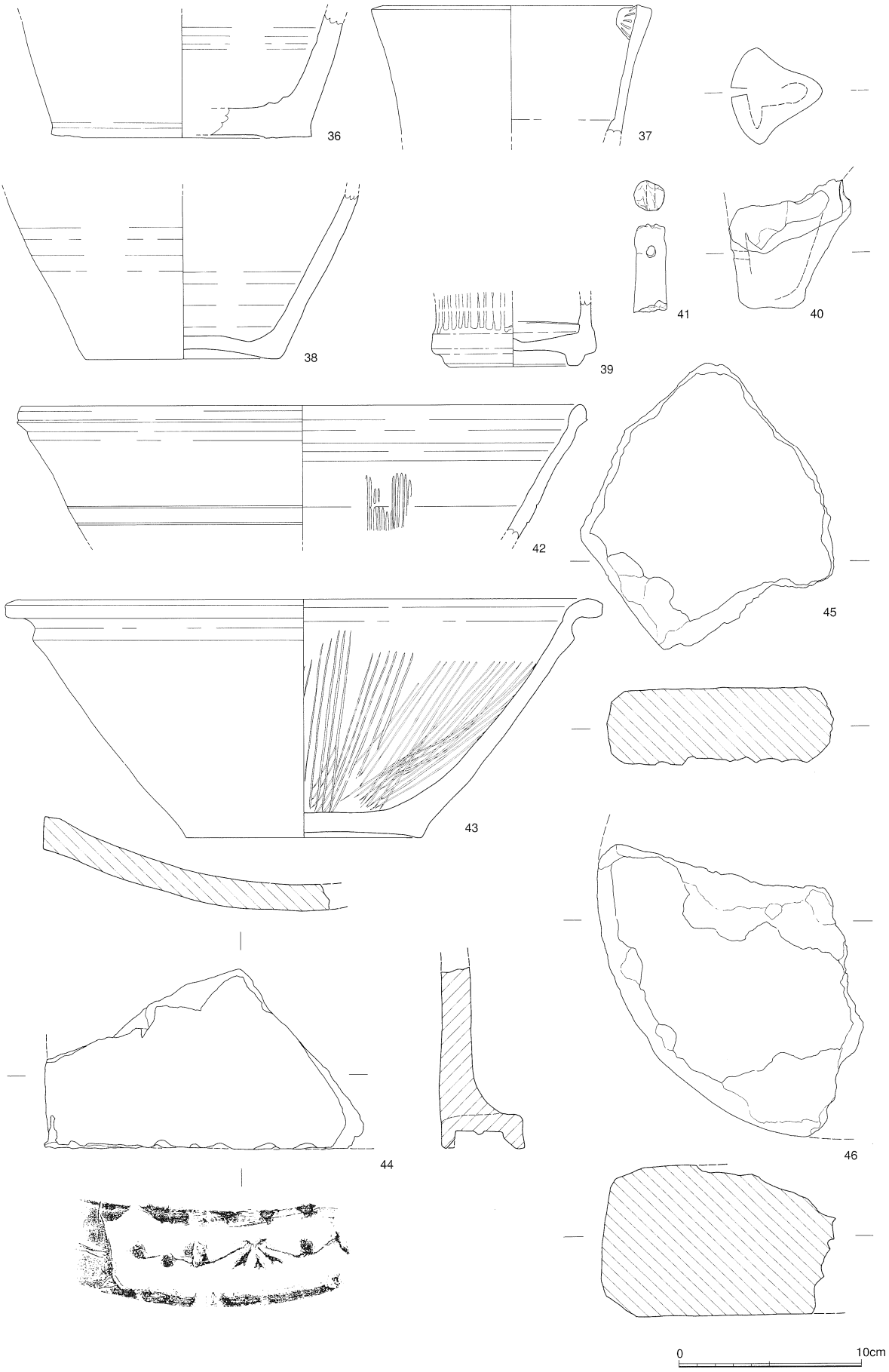
規模・構造　Ｄ区西側に位置する。規模は南北１０ｍ、幅は2.2ｍで深さは0.5ｍで、底部の標高は8.1ｍである。なお、中央部東側に、径1.4ｍほどの張り出し分があるが、この部分はＳＫ３７に先行して掘られた土壙と考えられる。東側片でＳＢ２１の柱穴を切っており、南側でもピットを切っている。

土層堆積状況　基本的に茶褐色系の土と地山灰褐色砂を含んだ砂質土との互層状況になっている。１～３層までの間に特に顕著に径５～１５cm前後の礫が混入されていた。礫層は２・３層を通じて堆積しており（ＢＢ’付近）、なおかつ、一塊になっていることから、１～３層は順次堆積したのではなく、一括的に埋められた土層であると考える。５～７層についても、地山が崩れやすい砂層であるにもかかわらず、地山が崩れた土層はなく、７層は中央から先に堆積しているような状況であるので、１～３層を含めて全体が一時に埋められた土層であると考えられる。８層はＣＣ’付近で円形のピット状をなしており、ＳＫ３７に先行するピットの残存部分であろうかと思われる。

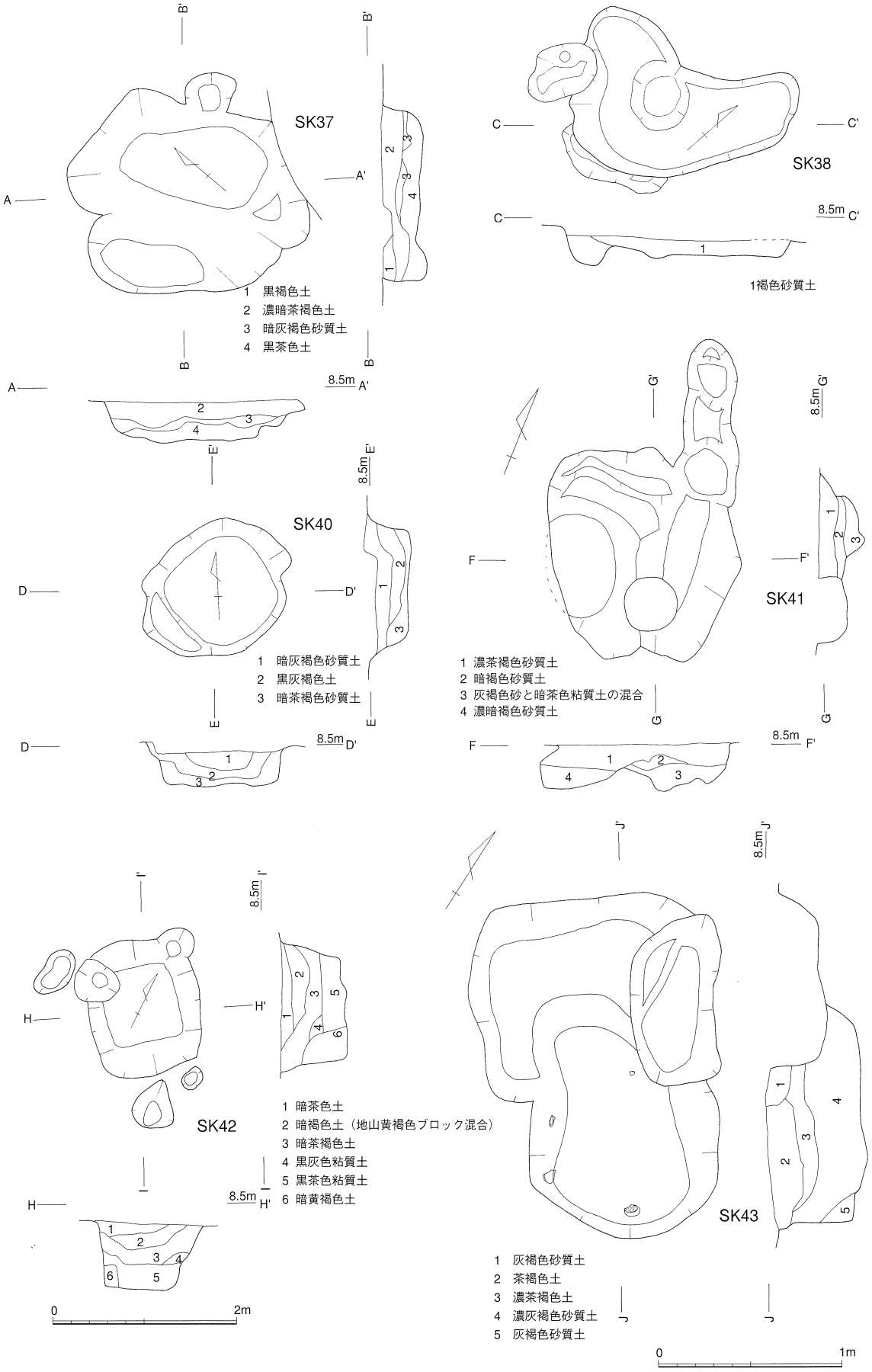
遺物出土状況　遺物は土師質土器皿を中心に多数が検出されているが、土師質土器皿について言えば、遺構検出面（１層の上）でもっとも多くを検出しており（図版５９・６０参照）、埋土の中からの出土はかえって少なかった。逆にそば猪口・瓶（第１８２図３４・３５）、擂鉢（第１８４図４３）、等は集石内あるいは集石直下付近から出土している。このことから考えて、陶磁器類は一般版的な廃棄と考えられるが、上層で出土した多量の土師質土器皿については、ほとんどが完形であったこ



第182図　古志本郷遺跡SK36出土遺物実測図1　(S=1／3)



第183図　古志本郷遺跡SK36出土遺物実測図2　(S=1／3)



第184図　古志本郷遺跡SK37～54実測図1　（S=1／60、SK42のみS=1／30）

とも含め、一般的でない廃棄理由を考えるべきであろう。

出土遺物（第１８２・１８３図）　１～２８は土師質土器皿である。なお土師質土器皿は、この他実測図を掲載していないものも含めて、合計４８点以上が出土している。すべて、土師質土器Ⅵ期に該当する。土師質土器皿は法量で、底径５cm前後を中心とする小皿のグループ（１～１６、２２～２８）、同６.５cm前後を中心とする大皿のグループ（１７～２１）に分別することができる。口縁の立ち上げ方については、内湾するもの、直線的なもの、外湾するものなどがあり、特に外碗するもので、内面の底部と口縁部が区別しがたく半円上の断面をなすものは、底部調整を静止糸切りとする特徴を持っている（２２～２７）。土師質土器皿の底部調整は回転糸切りと静止糸切りは２：１程度の比率である。また、他の遺構の土師質土器Ⅵ期の皿と同様に、墨皿と燈明皿が一定の割合で見られる。２８は底部外面に墨書をするものである。２９は土師質の焙ろくである。底部外面は火を受け剥落し薄くなっている。３０～３６・３８は肥前系陶磁器である。３０は黄褐色の胎土を持つ肥前系陶器碗で、呉器手碗と呼ばれるタイプで、三日月高台を持つ。３１～３４は肥前系磁器碗で、３１・３２は見込みにコンニャク印判による五弁花文を持つ。３３は底部外面に「乙山作」の文字が染付される。３４は白磁そば猪口。３５は花瓶で、表裏に竹と梅の絵柄を染付する。３６・３８は黒茶色の胎土を持つ甕・壷である。３０は１７世紀、３１～３４は１８世紀代のものである。３７は香炉であろうか。３９は肥前系の青磁花瓶である。４０は土師質の脚である。４１は棒状土錘。４２・４３は暗赤茶色の胎土を持つ擂鉢である。４３は底部をやや内反りにする。４４は燻し瓦。４５、４６は石臼で、共に擦り面は摩耗のためか、溝が確認できない。

年代・性格　ＳＫ３６の時期は土師質土器Ⅵ期、１８世紀代になるものと思われる。この時期には正法寺が確実に存在し[27]、正法寺に関わる廃棄土壙と見ることができる。以上の前提に立つと、遺構検出面で出土した土師質土器群は、正法寺での行事に関わるものである可能性もある。

ＳＫ３７（第１８４図）

規模・構造　Ｄ区中央南寄りに位置し、規模は長辺２.３ｍ、短辺２.４ｍを測り、平面型は二つの楕円形土壙が連結したような形状を示す。しかし、土層断面図では、埋土を共有しており、両者は一緒に埋められたものと思われる。埋土は黒褐色系の土が堆積する。

出土遺物（第１８７図１～５）　１～５は土師質土器皿で、底径５cm前後、器形１.５～２cm前後の皿でいずれも底部回転糸切りである。すべての口縁部に油煙が付着し、燈明皿と推測される。また２は口縁の一部を湾曲させるが、意図的なものであるか否かは不明である。

年代・性格　遺構の年代は土師質土器Ⅵ期に当たろう。性格としては廃棄土壙が考えられ、土師質土器が皆燈明皿であることが注目される。

ＳＫ３８（第１８４図）

規模・構造　Ｄ区中央南寄り、ＳＫ３７の北側に位置する。長径２.５ｍ、短径１.３ｍの不整形をなし、中央部のみを深く掘り込む。深さは５０cm程度である。褐色砂質土が堆積する。

出土遺物（１８７図６・７）　６・７は土師質土器の坏である。いずれもⅣ期に収まる。

年代・性格　出土遺物からＳＫ３８の年代は中世末と考えられる。性格は廃棄土壙であろうか。

ＳＫ３９（第１８５図）

規模・構造　Ｄ区中央やや南寄りに位置し、ＳＥ１１に切られる。規模は長辺２.２ｍ、短辺１.２ｍの隅丸長方形をなし、深さは南側に深い部分があり６０cm程度である。南側には５～２０cm大の石が集積されていた。暗茶色系の土が堆積する。

出土遺物（第１８７図８～１０）　土壙上面近くから８の軒桟瓦が出土した。９・１０は土師質土器皿で、Ⅵ期に位置づけられる。

年代・性格　出土遺物からＳＫ３９の年代は土師質土器Ⅵ期と見られる。性格は廃棄土壙か。

ＳＫ４０（第１８４図）

規模・構造　Ｄ区中央に位置する。ＳＫ４１に切られる。規模は直径１.５ｍの楕円形で深さは４０cmを測る。暗灰色系の土が堆積する。

年代・性格　出土遺物は土器小片のみであるが、埋土などから近世のものと推察される。

ＳＫ４１（第１８４図）

規模・構造　Ｄ区中央に位置する。ＳＫ４０に隣接し、ＳＫ４０を切っている。長径２.０ｍほどの楕円土壙部と、長さ１.五ｍの長楕円形土壙部分からなる。楕円形部分は西側でやや袋状になる。黒茶色土が堆積する。

年代・性格　出土遺物はなく、年代・性格は不明である。

ＳＫ４２（第１８４図）

規模・構造　Ｄ区東側北寄りに位置する。規模は一辺１.５ｍの隅丸方形で、深さ７０cmを測る。底部標高は７.５ｍである。断面は逆台形をなし、全体に整った掘り方を持つことやある程度の深さを持つことから、井側素掘りの井戸ではないかと考えられる。また三方に小柱穴を伴うが、井桁覆屋などの可能性がある。

土層堆積状況　埋土は地山黄褐色土ブロックを含む２層までと、黒褐色系の３～６層に大別できる。後者は自然堆積、前者は埋め土と考えられる。

年代・性格　出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。性格は素掘りの井戸であろう。

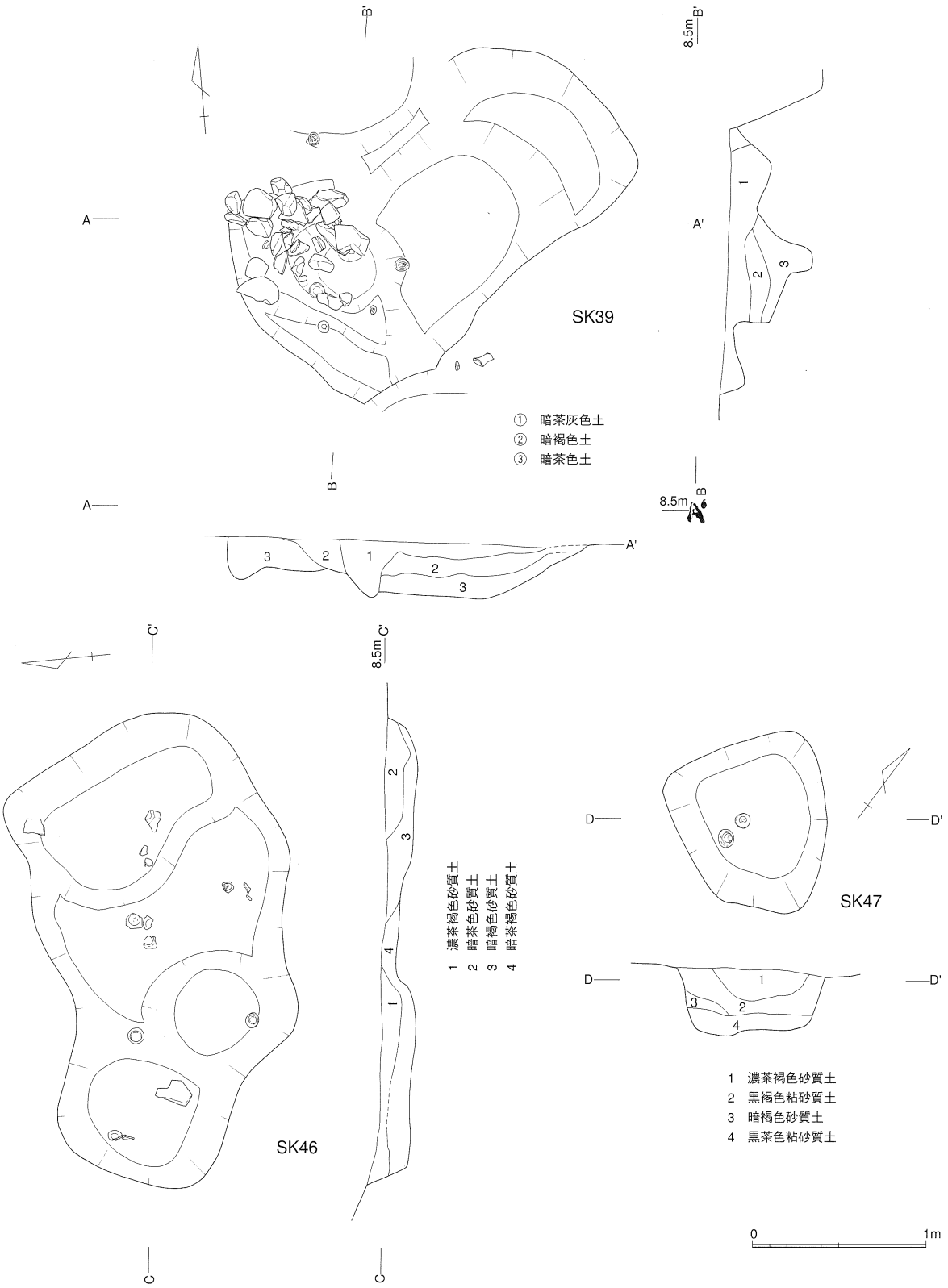
ＳＫ４３（第１８４図）

規模・構造　Ｄ区西側南辺近くで検出された。長径１.２ｍほどの土壙が二つ切り合っており、南側は深さ５０cmを測る。

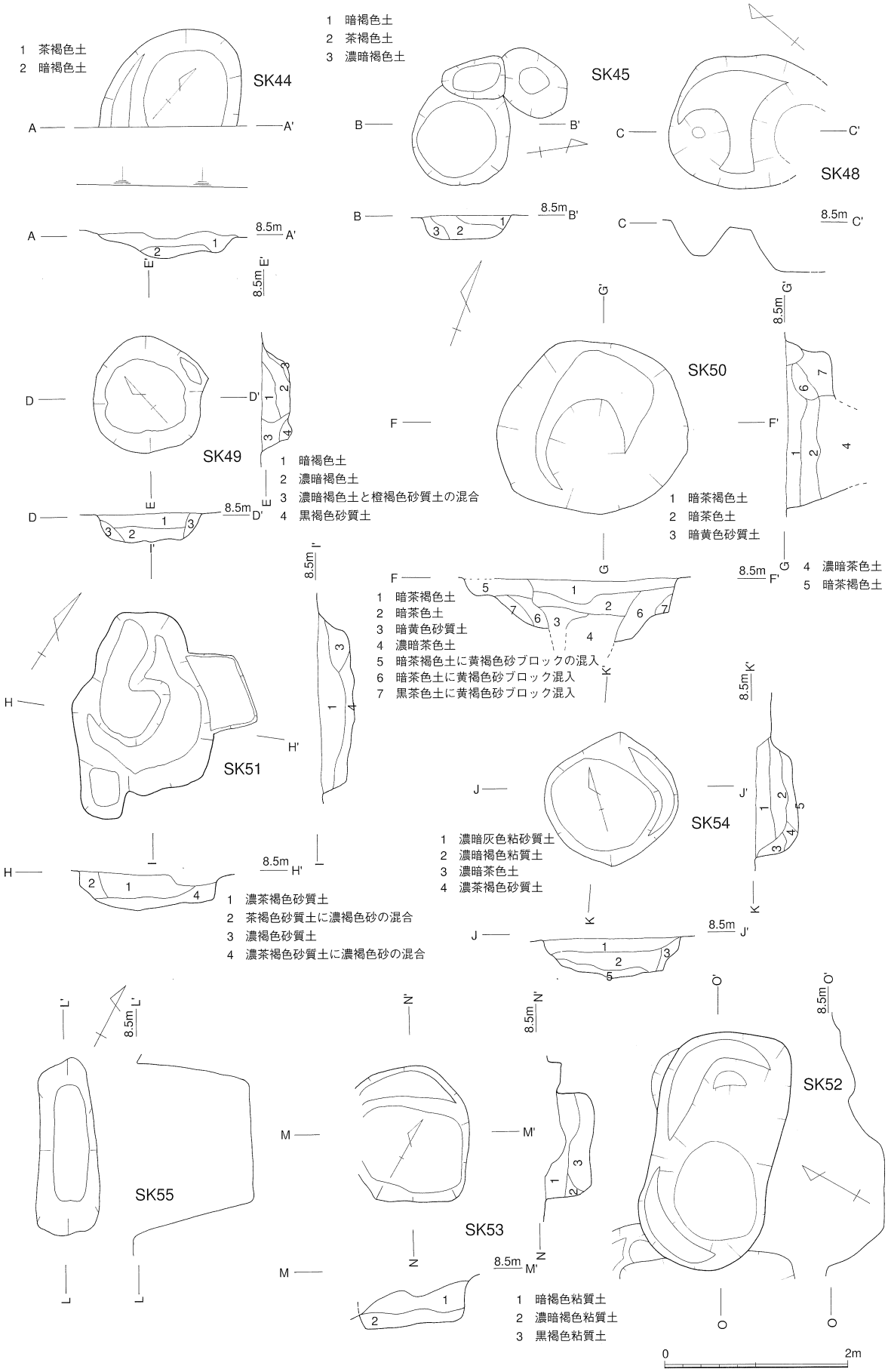
土層堆積状況　中心となる４層は地山に近い灰褐色砂質土であり、２・３層が中央部のみ落ち込んでいる点が注目される。

出土遺物（第１８７図１１～１３、図版１４１）　１１～１３は土師質土器皿で、底径は６cm前後、器高も２cmを越える、大皿である。この他朱漆塗櫛（図版１４１）、金糸（実測図・写真図版とも未掲載）が出土している。

年代・性格　出土した土師質土器皿はⅥ期に属するので、ＳＫ４３の時期は近世に当てはめられよう。性格としては、装飾品の出土から、土壙墓を考えたい。



第185図　古志本郷遺跡SK37～54実測図2　(S=1／30)



第186図　古志本郷遺跡SK37～54実測図3　(S=1／60)

ＳＫ４４（第１８６図）

規模・構造　Ｄ区西側南辺に位置し、規模は直径１.６ｍ、深さ３０cmほどで半分は調査区外に残る。茶褐色土が堆積する。

出土遺物（第１８７図１４）　１４は土師質土器大皿で、底部は静止糸切りである。

年代・性格　土壙の時期は、出土遺物が土師質土器Ⅵ期に当たり近世以降かと考えられる。性格は明らかでないが、ＳＫ４９との類似から土壙墓の可能性もあろう。

ＳＫ４５（第１８６図）

規模・構造　Ｄ区西側南辺に位置し、ＳＫ４４の北側でに隣接する。規模は直径１ｍほどの円形で、深さは３０cmほどである。ピットがＳＫ４５を切っている。茶褐色系の土が堆積する。

出土遺物（第１８７図１５）　１５は土師質土器皿で、底径・口径が余り変わらないが器高が２.８cmと比較的高い。土師質土器Ⅴ期に当たる。また、小片ではあるが肥前系陶器が出土している。

年代・性格　出土遺物から遺構の時期は近世初頭と見られる。性格はＳＫ４９との類似から土壙墓の可能性を考えたい。

ＳＫ４６（第１８５図）

規模・構造　Ｄ区西側南辺に位置する。規模は全体で長径２.６ｍ、短径１.５ｍを測るが、実際は３個以上の土壙が切り合ったものである。一つは東側の土壙で、東側の一番低い部分（土層図２・３層）からなる。もう一つは西側で部分（土層図４層）である。そして西側部分の上の第１層の堆積部分である。堆積土はいずれも黒褐色の砂質土で類似しており、平面プランを検出した際にも、切り合い関係は明確にし得なかった。このうち、第１層、第２・３層から遺物が出土している。

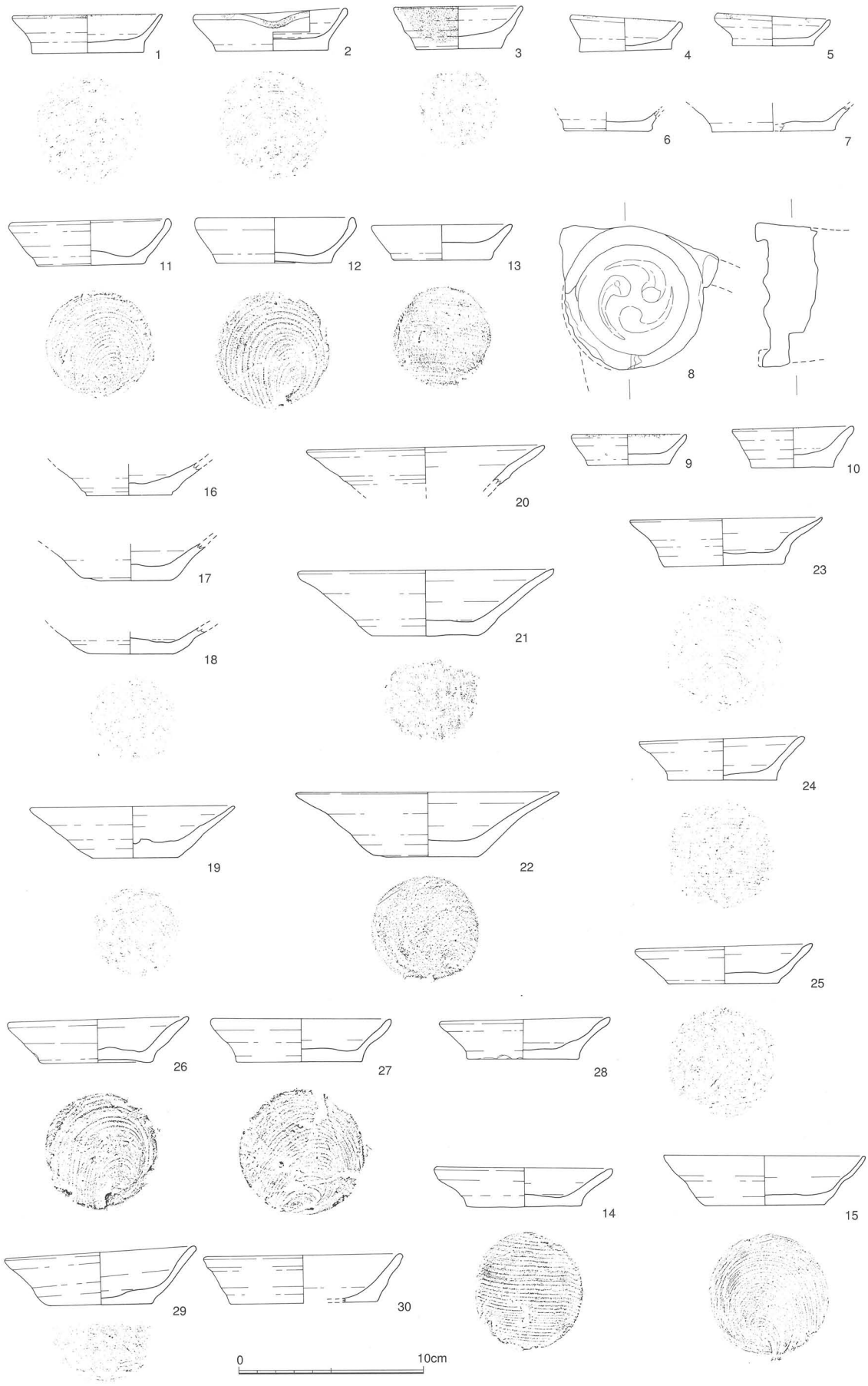
出土遺物（第１８７図１６～２５）　１６～２５は土師質土器で、１６～２２が第２・３層、２３～２５が第１層から出土している。２０は口縁が直線的に伸びる坏で、２１・２２は広く外反する坏である。前者が土師質土器Ⅳ期古段階、後者が新段階のものであろう。１６～１８・２０はいずれも破片であるが、外反する傾向が見られ、土師質土器Ⅳ期中～新段階に当たる。２３～２５は土師質土器の皿である。２３は口縁部が途中で折れ広く外反し器高も高く土師質土器Ⅴ期に近い。２４は底部が静止糸切り、２５は回転糸切りで、共に土師質土器Ⅵ期のものである。

年代・性格　遺構の時期は層位によって異なるようである。すなわち、再上層の第１層は土師質土器Ⅵ期（近世以降）に掘りこまれ、第２・３層の土壙は土師質土器Ⅳ期新段階（中世末）に掘りこまれたと考えられる。性格については、土壙墓の可能性もある。

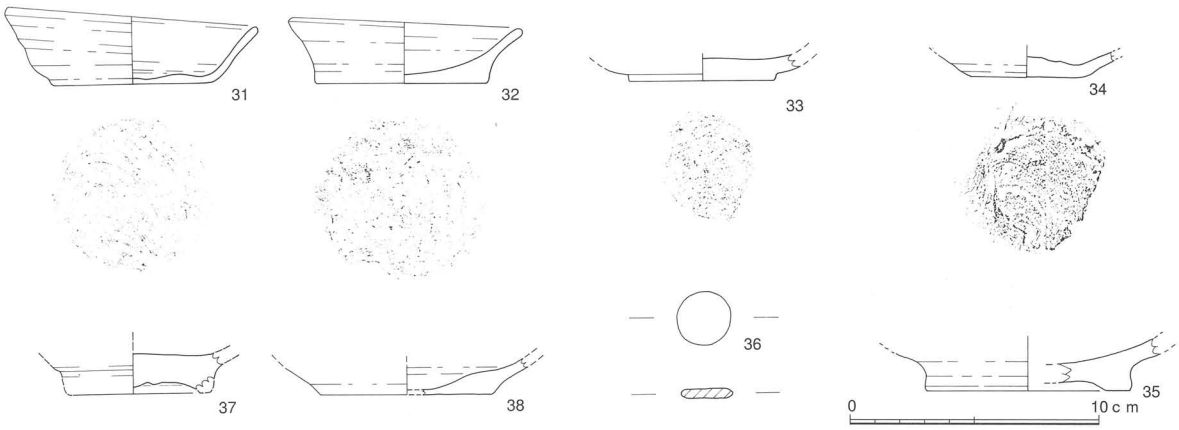
ＳＫ４７（第１８５図）

規模・構造　Ｄ区西側南端に位置する。ＳＫ４８を切っている。規模は一辺１.５ｍほどの隅丸の三角形状をなしている。深さ４０cm程度である。茶褐色系の土が堆積する。

出土遺物（第１８７図２６～２８）　いずれも土師質土器皿で、底径６cm前後の大皿で、回転糸切りである。土師質土器Ⅵ期に当たる。



第187図　古志本郷遺跡SK37～54出土遺物実測図1　(S=1／3)



第188図　古志本郷遺跡SK37～54出土遺物実測図2　(S=1／3)

年代・性格　ＳＫ４７の時期は近世の前期にあたるものと思われる。土壙墓であろうか。

ＳＫ４８（第１８６図）

規模・構造　Ｄ区西南端に位置し、半分は調査区外に出ているものと推測される。全体で直径１.６ｍほどの楕円形をなすが、北側と南側の関係は確認できなかったが別な土壙であろう。それぞれ深さ４０cm、５０cmを測る。

出土遺物（第１８８図２９～３３）　いずれも土師質土器である。３１は器高２.７cmを測り、底部回転糸切りである。３２は口縁が外反し内面の底部と口縁部の区別のない器形で、底部静止糸切りのものである。土師質土器Ⅴ～Ⅵ期のものである。

年代・性格　年代は全体として近世初頭と考えることができる。土壙墓であろうか。

ＳＫ４９（第１８６図）

規模・構造　Ｄ区中央やや西よりに位置する。直径１.５ｍ、深さ３０cmの円形土壙である。

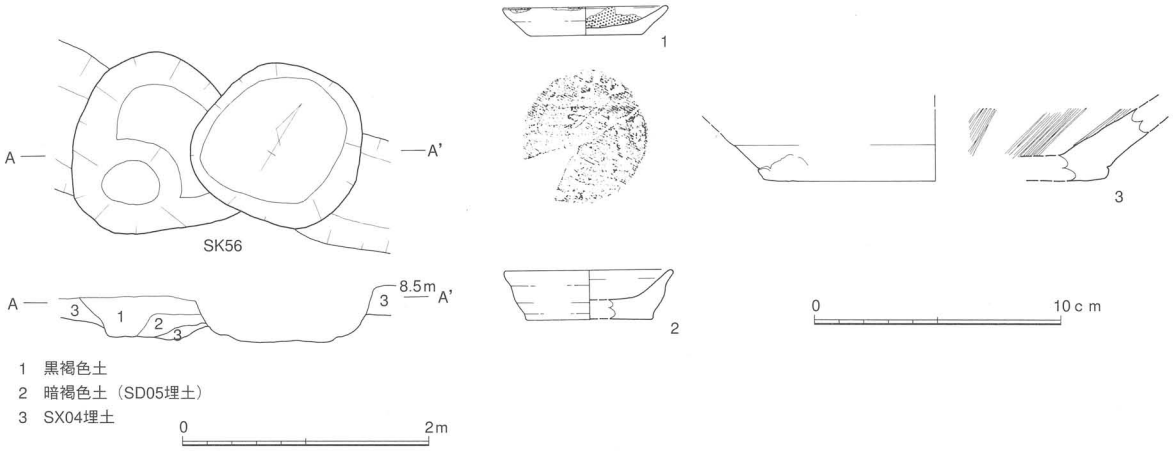
土層堆積状況　中央１・２層に黒色土が、側方３・４層に地山に近い砂質土が堆積する。これはＣ区ＳＫ２０・２１に類似し、中央に何かが置かれて埋められたことを示す。

年代・性格　土層堆積状況から、土壙墓ではないかと推測される。

ＳＫ５０（第１８６図）

規模・構造　Ｄ区中央に位置する。井側・井筒はないが、素掘りの井側を持つ井戸であろう。ＳＸ０４を切る。調査は湧水に悩まされ、地山が崩れやすい砂であったことから、地山面より１.５ｍ地点で停止した。構造は上下二段からなり上段が直径２ｍの不整円形、下段は直径１ｍの楕円形である。深さは上段が５０cm、下段が１ｍ以上である。底部の標高は７.５ｍ以下になろう。

土層堆積状況　１層は上段及び井戸内部に及ぶので、井戸廃棄時以降の堆積層である。２～４層は井戸内堆積層、５～７層は井戸掘り方堆積層である。５層は６・７層を切るので、上段（おそらく井桁設置場所）については掘り返しがあったと考えられる。第２～４層が自然堆積層であるのか埋め土であるのかは判断できなかった。



第189図　古志本郷遺跡SK55・56実測図・出土遺物実測図　（遺構S=1／60　遺物S=1／3）

年代・性格　出土遺物はなく、時期は不明である。

ＳＫ５１（第１８６図）

規模・構造　Ｄ区中央西寄りに位置する。規模は長辺２ｍ、短辺１.５ｍの隅丸方形をなす。東側に浅い張り出し部を持つ。中央に茶褐色土、側方に地山に近い砂質土が堆積する。

出土遺物（第１８８図３４・３５）　３４は土師質土器の坏でⅣ期に当たる。３５は削り出し高台状のものがつく土師質土器である。本報告では余り類例がない（同図３７参照）。

年代・性格　遺構の年代は中世末期で、性格は土壙墓であろう。

ＳＫ５２（第１８６図）

規模・構造　Ｄ区中央やや西よりに位置し、ＳＫ５３を切る。規模は長辺２.７ｍ短辺１.６ｍで、深さは最大５０cmを測る。断面は逆三角形状をなし、ＳＫ４３～４９、５１とも異なる。

年代・性格　出土遺物は碁石状石製品（第１８８図３６）のみで、遺構の時期は不明である。性格についても、断面形状が他の土壙とは異なり、土壙墓とは考えづらい。

ＳＫ５３（第１８６図）

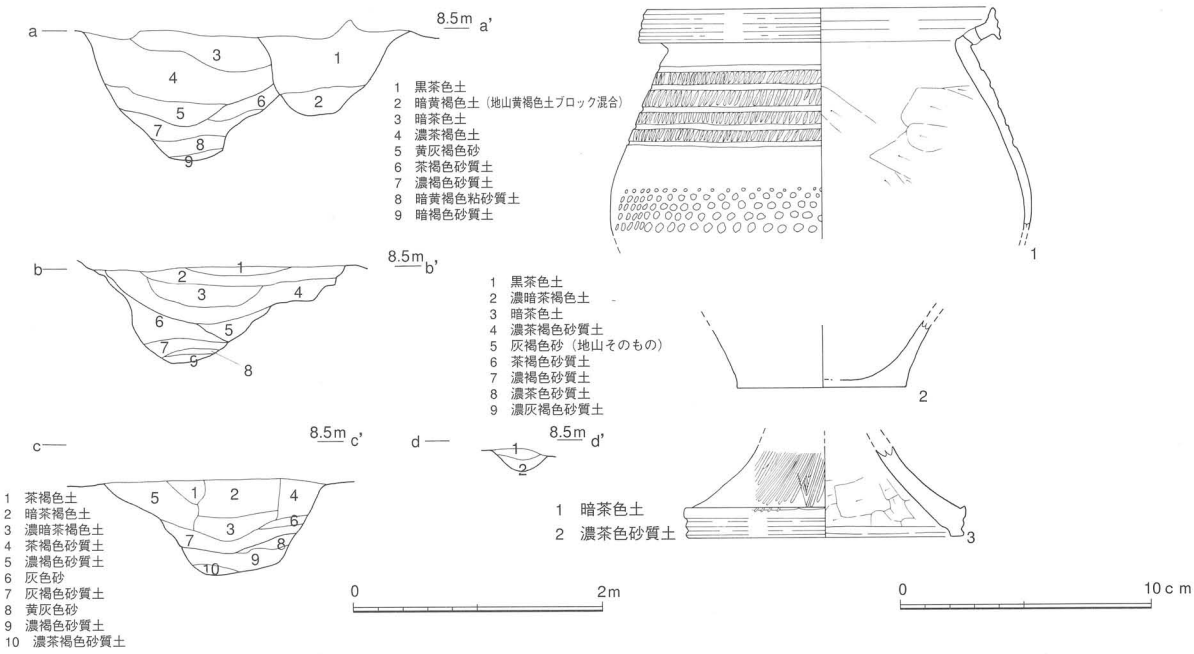
規模・構造　Ｄ区中央西寄りに位置し、ＳＫ５２に切られる。規模は一辺１.５ｍ前後の隅丸方形で、深さは０.５ｍを測る。暗褐色系の土が堆積する。

年代・性格　出土遺物はなく、遺構の年代は不明であるが、埋土などから中・近世のものと推測される。土壙墓であろうか。

ＳＫ５４（第１８６図）

規模・構造　Ｄ区中央西寄りに位置する。規模は直径１.５ｍ、深さ０.５ｍほどである。堆積土は１・２層と３～５層の二重構造になっており、前者が粘質土、後者が砂質土である。

年代・性格　出土遺物は削りだし状高台の土師質土器一点（第１８８図３７）で、これにより遺構の年代は中世と考えられる。性格は土壙墓であろう。



第190図　古志本郷遺跡SD40・41実測図・出土遺物実測図　（遺構S=1／60　遺物S=1／3）

ＳＫ５５（第１８６図）

規模・構造　Ｄ区中央西側に位置する。上端は長さ２ｍ、幅６０cmの隅丸長方形をなし、深さは１.３ｍを測る。底部の標高は７.１ｍ前後である。

年代・性格　遺物として第１８８図３８が上層から出土した。３８は低く広がる坏で、土師質土器Ⅳ期に当たる。性格は不明である。調査時には湧水に苦慮した遺構であった。

ＳＫ５６・５７（第１８９図）

規模・構造　Ｄ区中央南寄りに位置する。西側のＳＫ５７が東側のＳＫ５６に先行する。共に直径１.３ｍ深さ４０cmほどの規模を持つ円形の土壙である。ＳＸ０４を切っている。

出土遺物（第１８９図１～３）　１～３はＳＫ５６より出土した。１・２は土師質土器で土師質土器Ⅵ期のものであろう。３は備前焼擂鉢底部である。

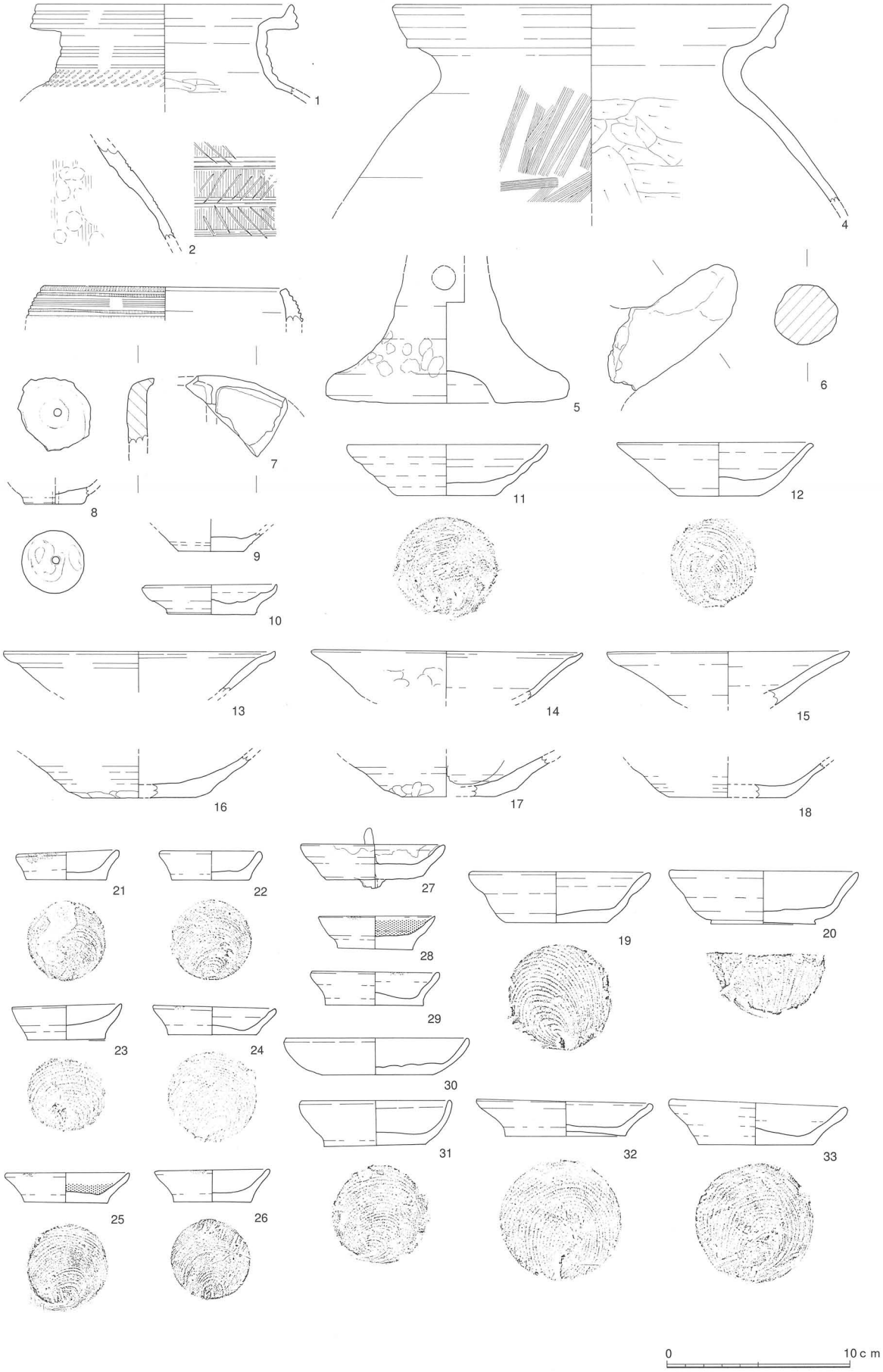
年代・性格　ＳＫ４６の年代は近世以降と判断される。土壙墓であろうか。

Ｆ、溝

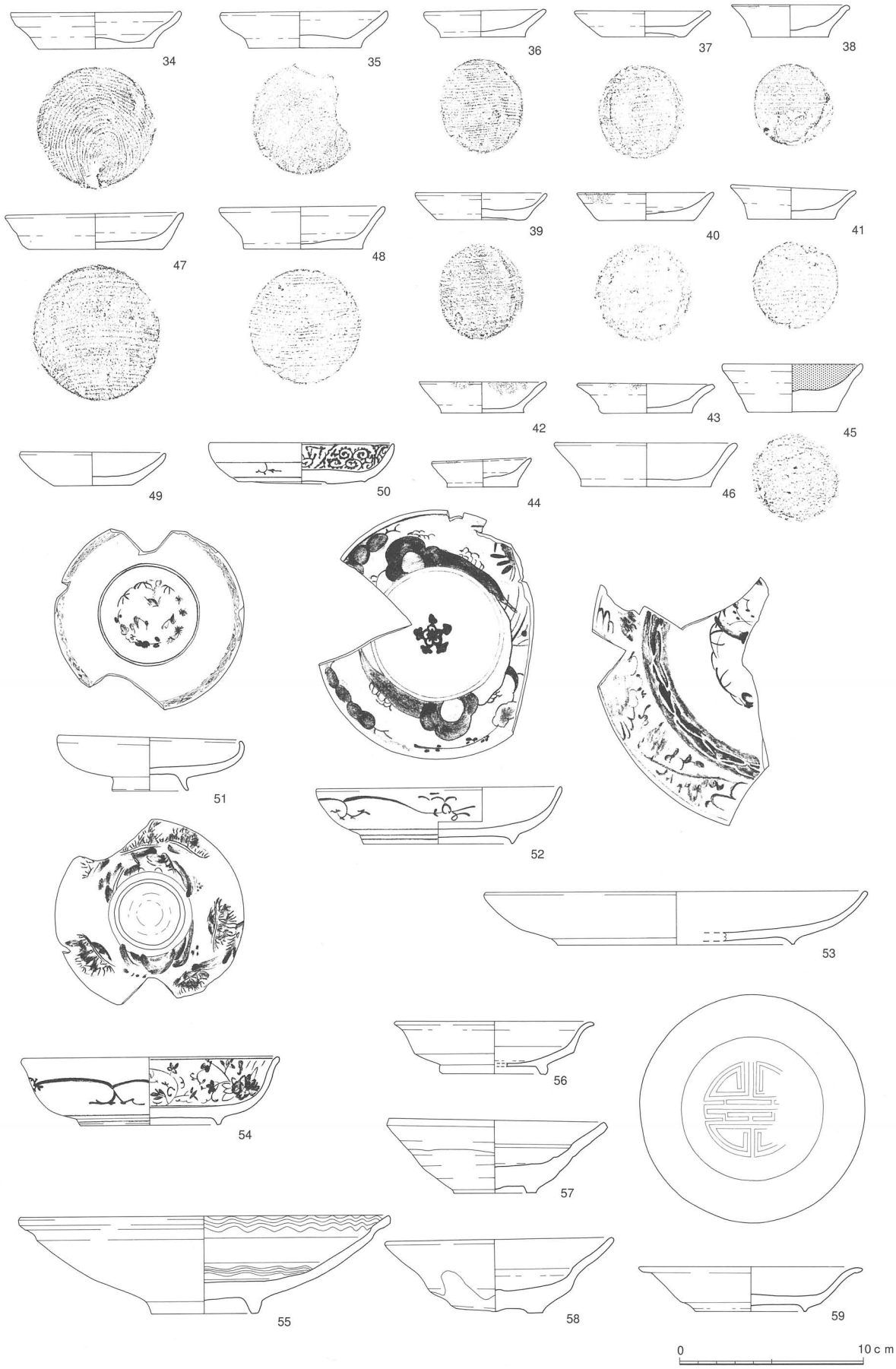
ＳＤ４０（第１６３・１９０図）

規模・構造　Ｄ区東側を南東－北西に方向に走っている。約２０ｍを検出した。規模は上幅２.０ｍ、深さ０.７ｍで、底部の標高は南側・北側とも７.４ｍである。

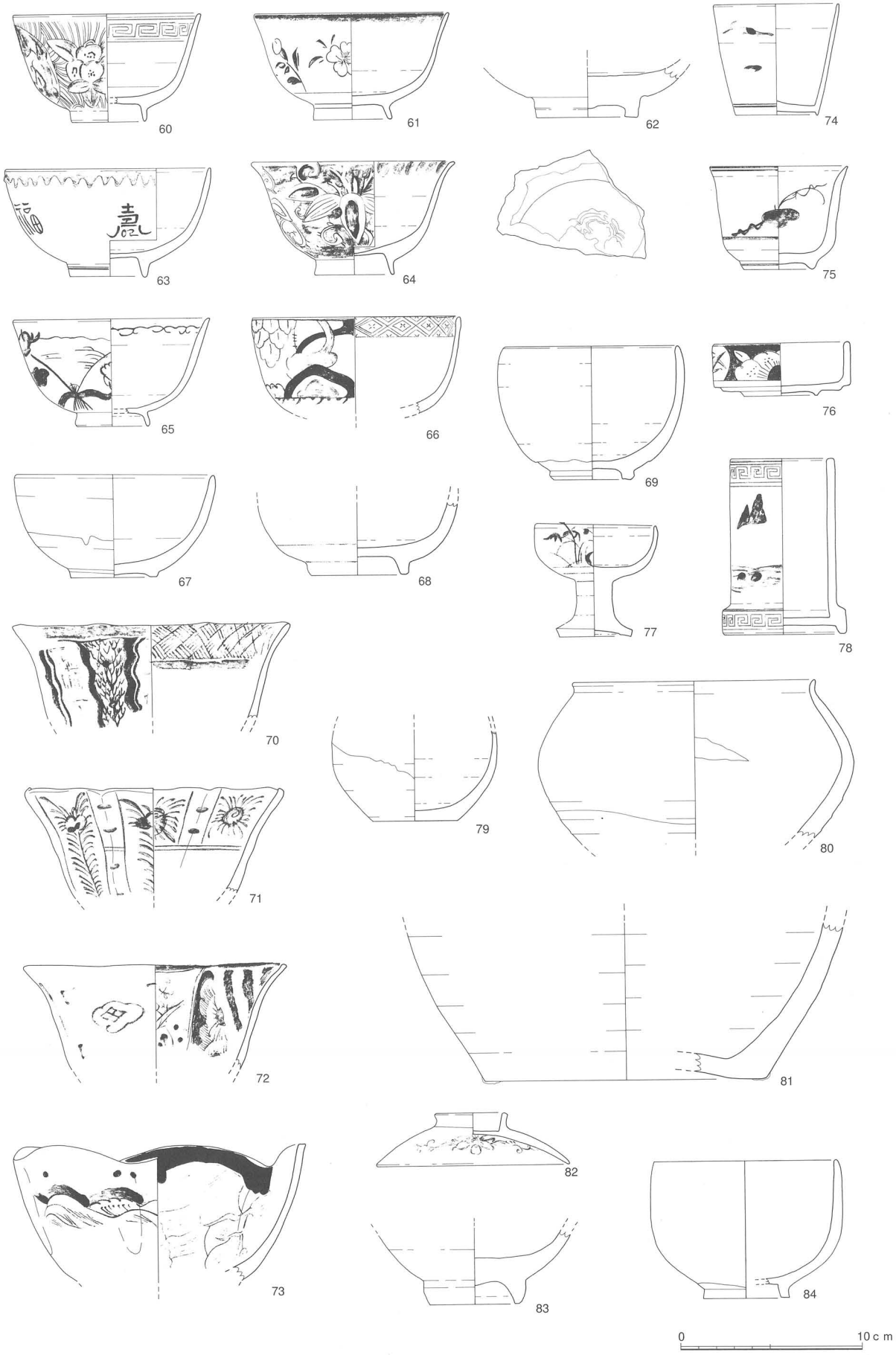
土層堆積状況　基本的に、茶褐色土と、地山灰（黄）褐色砂の互層をなし、ａａ’ｂｂ’ｃｃ’ともに上下２層に別れる。上層はａａ’３～５層、ｂｂ’１～５層、ｃｃ’３～５層である。ＣＣ’ａａ’ｂｂ’はいずれも最下層に地山の二次堆積層を持つ。下層はａａ’６～８層、ｂｂ’６～９層、ｃｃ’６～９層に当たり、下層は砂層と砂質土の互層で一定の流水を考えさせる。上層下層とも断面はＶ字を指向していたと見てよい。上層の地山の堆積は流水によるものというより、急な崩落によるといった



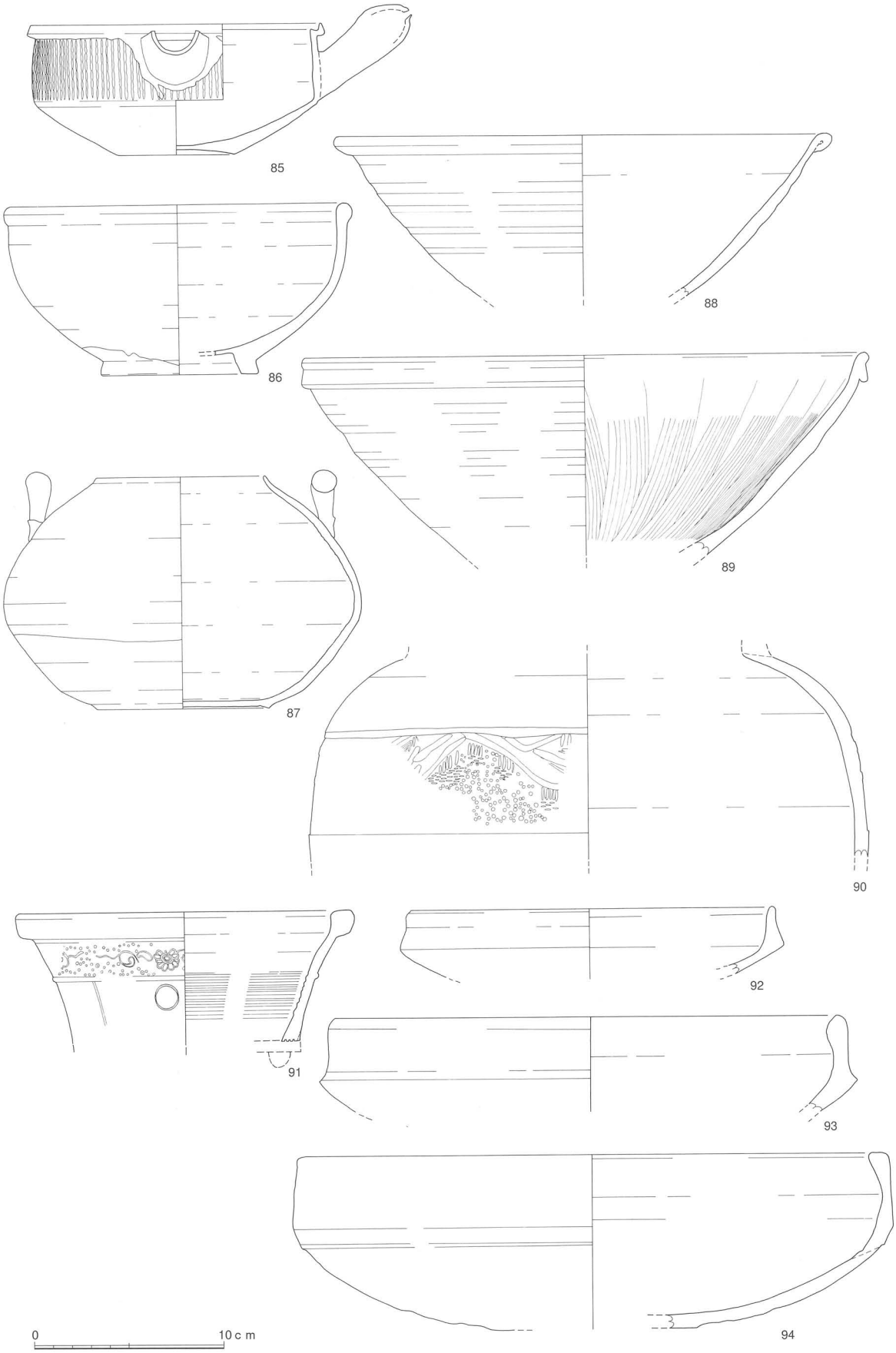
第191図　古志本郷遺跡D区調査区出土遺物1　(S=1／3)



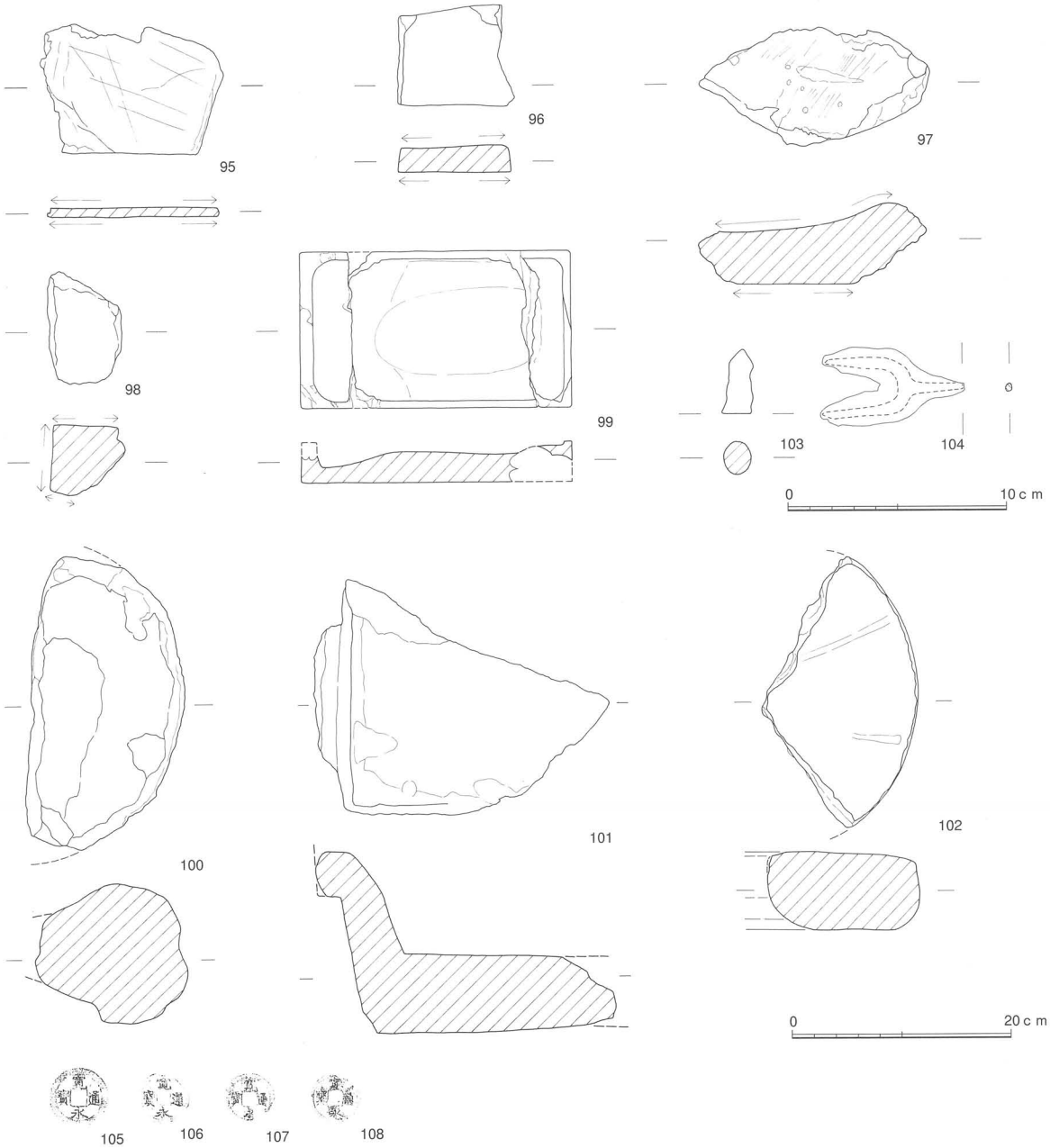
第192図　古志本郷遺跡D区調査区出土遺物2　(S=1／3)



第193図　古志本郷遺跡D区調査区出土遺物3　(S=1／3)



第194図　古志本郷遺跡D区調査区出土遺物4　(S=1／3)



第195図　古志本郷遺跡D区調査区出土遺物5　（92～96、100、101、105～108　S=1／3　97～99　S=1／6）

感を受ける。

出土遺物（第１９０図１～３）　１・３は上層、２は下層から出土した。他には後世の撹乱遺物を除いて、若干の小片が出土するのみであった。１は弥生土器甕で、口縁部に凹線２状を廻らす。さらに肩部上方には、凹線によって区分された刻み目文帯が４条あり、体部最大径付近にも、５点以上（下半欠損）からなる列点文帯が施されるいわゆる塩町式の土器である。なお、刻目文帯はそれぞれ独自に施文し、後に凹線で区分するするタイプである。内面は頸部以下までケズリを施す。

３は高坏の脚で、接地部に３条の凹線を廻らし、脚部外面は縦方向のミガキを加える。

年代　出土遺物の年代はいずれも松本Ⅳ－２様式に収まるものと考えられる。１・３は上層より出土しているので、この時期には溝は埋まったと見られる。

溝の性格　溝の性格については、第３章まとめで考察を加える。

ＳＤ４１（第１６３・１９０図）

規模・構造　他の溝と異なり、Ｄ区東よりを北西から南東に向かって貫流する。規模は上幅１ｍ、深さ５０cmほどで、黒茶色系の土が堆積する。底部標高は北８.３ｍ、南７.９ｍほどである。

年代・性格　遺物は図化していないが、赤彩された土師器高坏片が出土しており、古墳時代中期以降のものと考えられる。性格は不明である。

Ｄ区調査区出土遺物（第１９１～１９５図）

第１９１～１９５図は調査区出土の遺物の一部である。１～３は弥生土器である。１は壷で口縁部、頸部に凹線を、肩部に列点文を廻らす。２は壷の頸部で建てハケの後、沈線と綾杉文を施す。３は高坏で口縁部に凹線、上下に刻目文を施す。４は退化した複合口縁を持つ甕である。５は土製支脚、６は甑把手である。７は厚さ１cmで外周に縁を持つ須恵器で風字硯の一部と推定される。８～４６は土師質土器である。８～１０は土師質土器Ⅰ～Ⅳ期の皿で、８は底部に穿孔され内外面に判読不明の墨書が施される。１１～１８は坏で、このうち１１・１２は土師質土器Ⅳ期古段階、１３～１８は同新段階の所産になろう。なお、１６・１８は底部及びその周辺をヘラケズリするタイプである。１９・２０はやや器高の高い皿で、土師質土器Ⅴ期に相当する。２１～４６は同Ⅵ期の皿である。２２～３５は底部回転糸切りのもので、３６～４６は内面の底部が明確でなく、断面半円状をなすタイプで、静止糸切りである。２７は焼成後中央に穿孔、釘を打ったもので、底部には柾目の木質が残っていた。木製の把手の先に土師質土器をつけ、手持ちの燭台にしたものと思われる。４９は茶褐色の施釉をした陶器皿である。５０～６１、６３～７８は肥前系陶磁器である。なお、６２は高台内無釉の青磁碗である。５０はタコ唐草の染付の皿、５１～５４は内外面・見込みに松・竹・梅・柳などを染付した皿である。５２は見込みに五弁花のコンニャク印判を押したもので、同様のものが３点以上出土した（カラー図版３）。５５は黄褐色の釉が、５６は黒茶色の釉が施される皿である。いずれも１８世紀代のものである。５７・５８は胎土目の陶器皿で１６世紀末の所産。５９は白磁の皿で見込みに押印がある。６０・６１、６３～６６は磁器の碗である。いずれも内外面に手のこんだ染付を施すもので、１９世紀代のものになろう。６７～６９は陶器の碗である。７０～７３は磁器の鉢で、陵を持つもの（７０～７２）、５弁の花形を呈するもの（７３）などがあり、いずれも１９世紀代のものであろう。７４はそば猪口、７５は小坏、７６は小鉢、７７は高坏、７８は花瓶である。７９～８１は陶器の壷・甕類である。８３～８７は布志名焼であろうか。８３・８７は淡褐色の胎土に黄褐色の釉が、８４・８７は緑灰色の釉が施される。８５は急須で茶褐色の釉が施される。把手には「寿」と亀甲文の浮き彫りがある。８７・８８は石見焼であろうか。精緻な灰色の胎土に淡緑灰色の釉が施される。８９は肥前系の擂鉢である。９０は瓦質の火鉢、９１は小型の鉢である。９２～９４は焙ろくで、口縁下端が突出するものとなめらかなものがある。いずれも外底部は火を受け剥落する。９５～９８は砥石である。９９は硯、１００は五輪塔火輪、１０１は用途不明の石製品である。１０２は石臼雄臼である。１０３は窯道具であろうか、陶器質である。１０４はＵ字の鉄鏃である。１０５～１０８は寛永通宝で、１０６は古寛永である。

第５節　Ｅ区の調査

調査区の立地

Ｅ区は本報告書で扱う中でもっとも西よりの調査区で、幅約１２ｍ、長さ８５ｍの細長い調査区である。Ｅ区の西側には、出雲市による古志本郷遺跡第６次調査の調査区が存在し、さらに市道新宮線を越えると下古志遺跡群が広がっている。現地表の標高は９.０ｍ程度と、Ｄ区より低い。Ｅ区東端は、Ｄ区同様調査前の状況は宅地であり、大部分が撹乱されていた。中央より西側は畠であった。

基本層序（第１９７図）

西側は暗灰褐色粘砂質土（４層）と暗茶褐色土（６層）が基本的な土層である。後者には近世の遺物が含まれいるので、基本的には地山以上はすべて近世以降の堆積と見られる。ただし、場所によってはこの下に中世の遺物を含む黒褐色土（７層）が堆積する。一方、東側には中世の遺物が出土する７層、弥生時代の遺物が出土する濃黒褐色土（９層）がかなりの部分で残存していた。なお、中央部で現表土が低く落ち込んでいる部分があるが、この地点はは調査前池になっていた。地山は灰褐色砂、褐色砂質土などであった。標高は８.３ｍ程度で、Ｄ区とほとんど一緒である。以上のような状況のため、遺構の検出は他の調査区同様、基本的には地山面で行った。以下、竪穴建物、掘立柱建物、柵列、井戸、土壙、溝の順に概要を述べることとする。

Ａ、竪穴建物

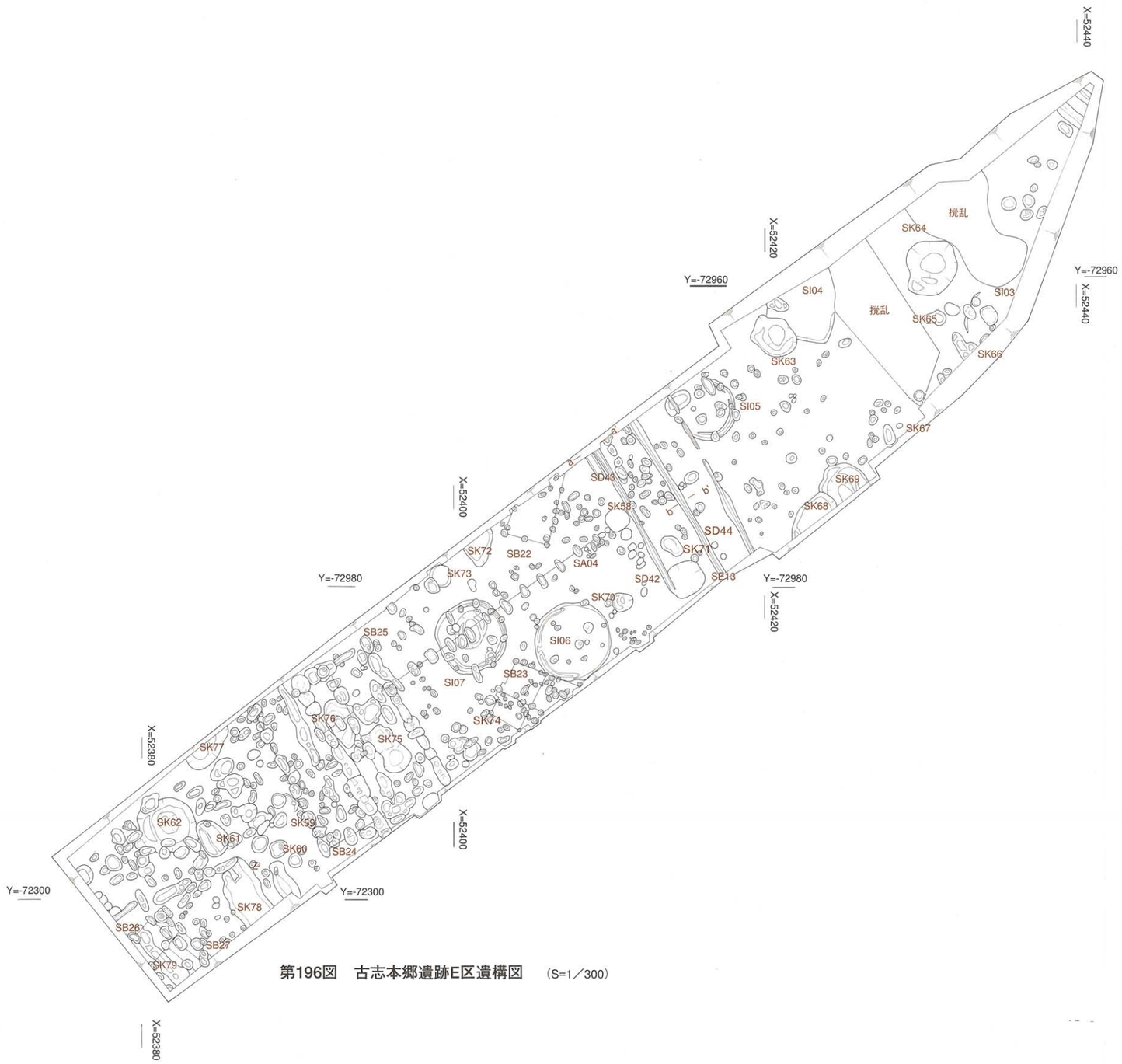
ＳＩ０３（第１９８図）

規模・形態　Ｅ区東側で約半分ほどを検出した。南側は調査区外に続くものと思われる。調査区内では弥生時代の遺物包含層が残る部分に当たるが、遺構内埋土と弥生時代の遺物包含層の区別が困難で検出状況は良好ではなかった。規模は推定で直径６ｍ前後の円形をなすものと思われる。深さは、南壁面でおよそ３０cmを確認することができた。なお、本遺構はＳＫ６６を切っている。

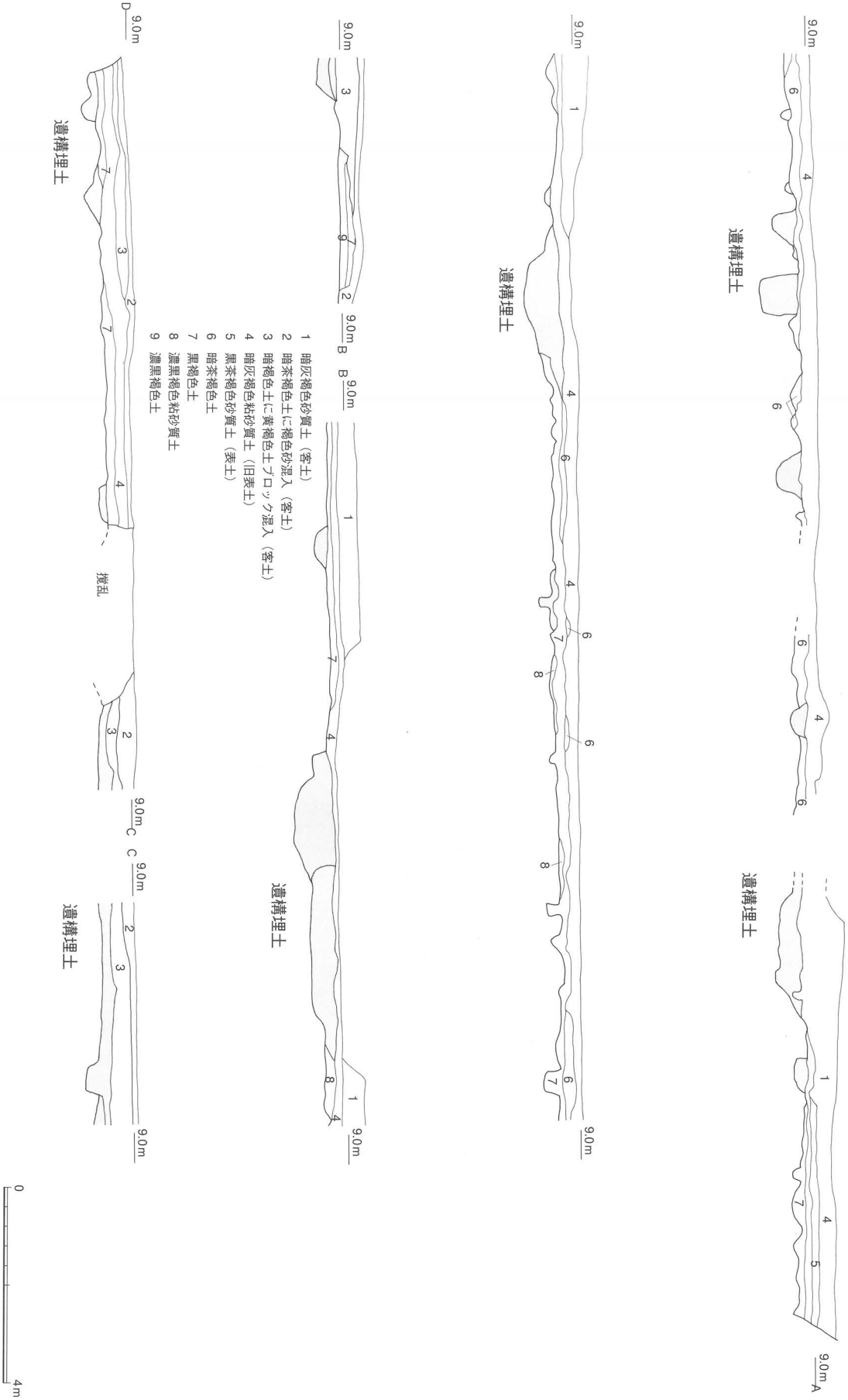
土層堆積状況　遺構の埋土は分層不能の濃黒褐色土１層からなっていた。張り床などは確認できなかった。遺物は地山直上から出土している。床面の標高は８.７ｍである。なお、遺構周辺の地山は崩壊しやすい灰褐色砂である。

柱穴・壁体溝　柱穴は２本確認されている。Ｐ１・Ｐ２は共に直径４０cm程度の円形の上端を持つが、深さは大きく異なり、Ｐ１が２０cm、Ｐ２が４０cmに達する。後述するＳＩ０６・０７同様、４本柱のうち２本の柱穴のみが深い形態をなすことが想像される。Ｐ３は、埋土を共有する長辺７０cmほどのピットである。埋土の分層が困難であったことから、あるいはＳＩ０３に先行するピットとも考えられるが、ＳＩ０３に伴う貯蔵穴の可能性も否定できない。Ｐ２の西に位置する長辺１ｍ幅５０cmほどの土壙は、Ｐ２を切っており、基本的にはＳＩ０３と無関係のものと考えられる。壁体溝・中央ピット、焼土等については確認できなかった。

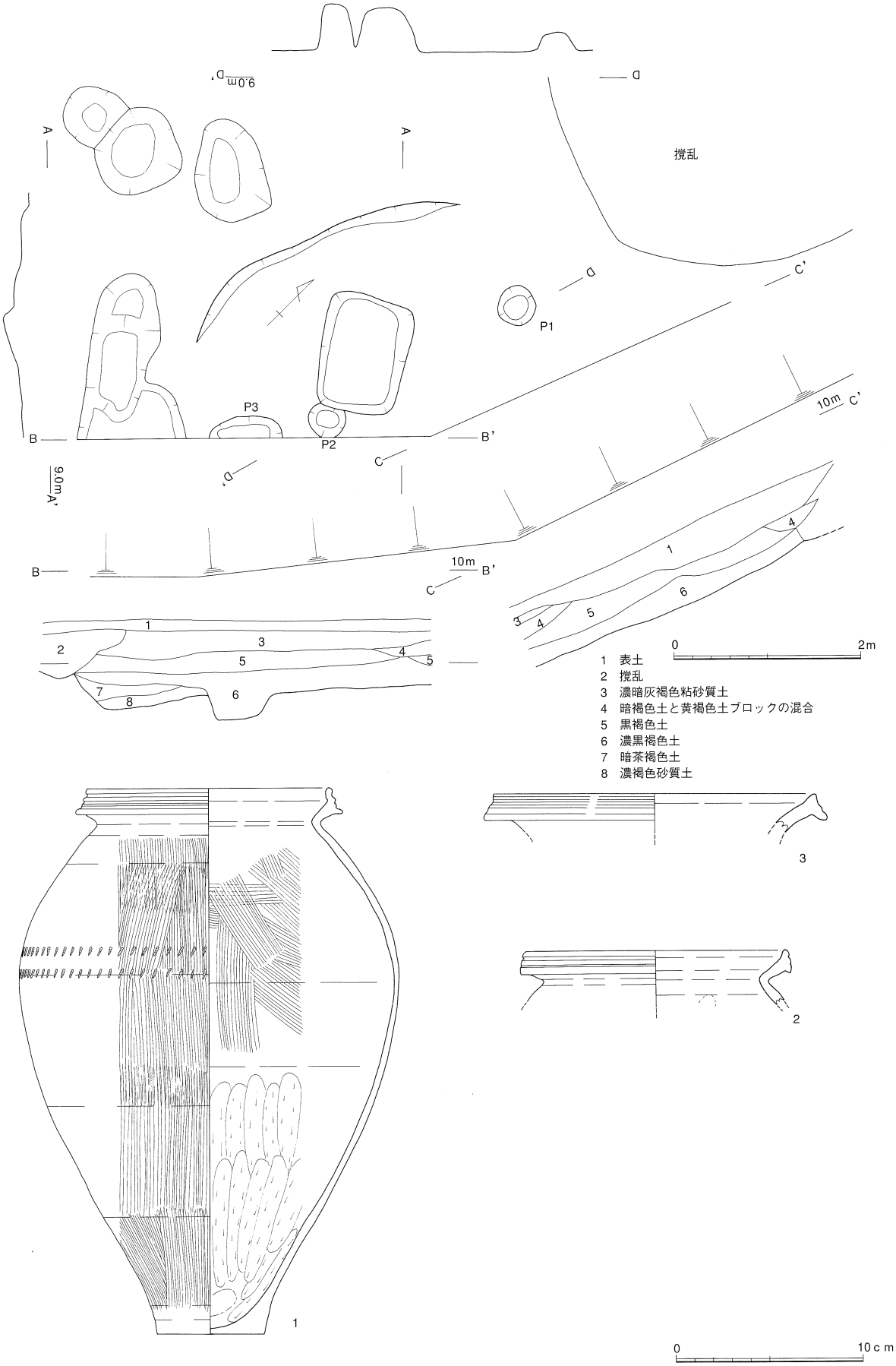
出土遺物（第１９８図）　遺物はいずれも床面から出土した。１は弥生土器甕である。１は口縁に３～４条の凹線を廻らし口縁部を上方・下方に引き出すタイプである。体部は縦ハケを施した上に、体部最大径付近にハケ工具小口などによると思われる列点文を２週廻らしている。内部の調整は体部中央付近までハケを施す。２は口径１４cm前後の甕である。２は１と同様に上下に引き出す口縁



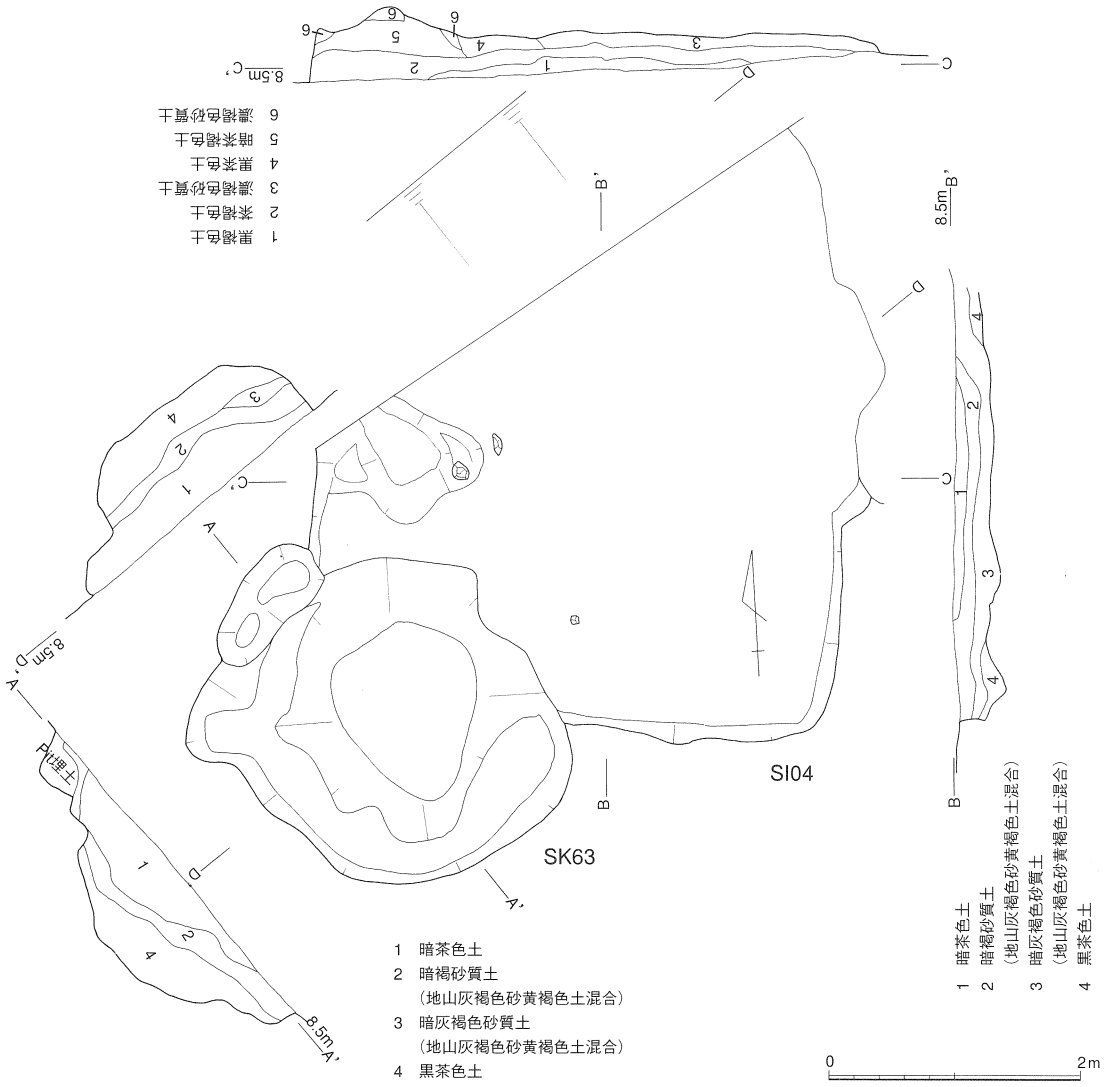
第196図　古志本郷遺跡E区遺構図　(S=1／300)



第197図　古志本郷遺跡E区土層図　(S=1／120)



第198図　古志本郷遺跡SI03実測図・出土遺物実測図　（遺構S=1／60　遺物S=1／3）



第199図　古志本郷遺跡SI04・SK63実測図　(S=1／60)

部に３条程度の凹線を廻らす。外面は縦ハケの上に肩部に列点文を１条廻らす。内面は肩部以上残存している部分はすべてハケで調整されている。３は口径１７.３cmの壷で、口縁部は下方に拡張する。

年代　出土遺物はいずれもの松本Ⅳ－２様式のもので、本竪穴建物の時期も弥生時代中期末と見てよいであろう。

ＳＩ０４（第１９９図）

規模・構造　Ｅ区東側北寄りに位置する。検出した段階で調査区を工事用地際まで１.５ｍほど北側に拡張したが、検出できたのは半分程度であった。本調査中では検出状況の比較的良好な建物跡である。規模は東西４.２ｍ、南北４.５メートルほどで、深さは西側で５０cm程度である。西南隅はＳＫ６３に切られており、東側は撹乱を受けていた。

土層堆積状況　上から黒褐色土（１層）、茶褐色土（２層）が堆積していた。また壁際土壙には暗茶

褐色土・濃褐色砂質土（５・６層）が堆積してた。建物の埋土と、壁際土壙の埋土は明らかに埋まった時期の異なるものである。

柱穴・壁体溝　本竪穴建物内では柱穴は確認できなかった。同様に壁体溝も明確には出来なかったが西側壁面には建物内とやや異なる土（６層）が堆積する部分があり壁体に関わる可能性がある。

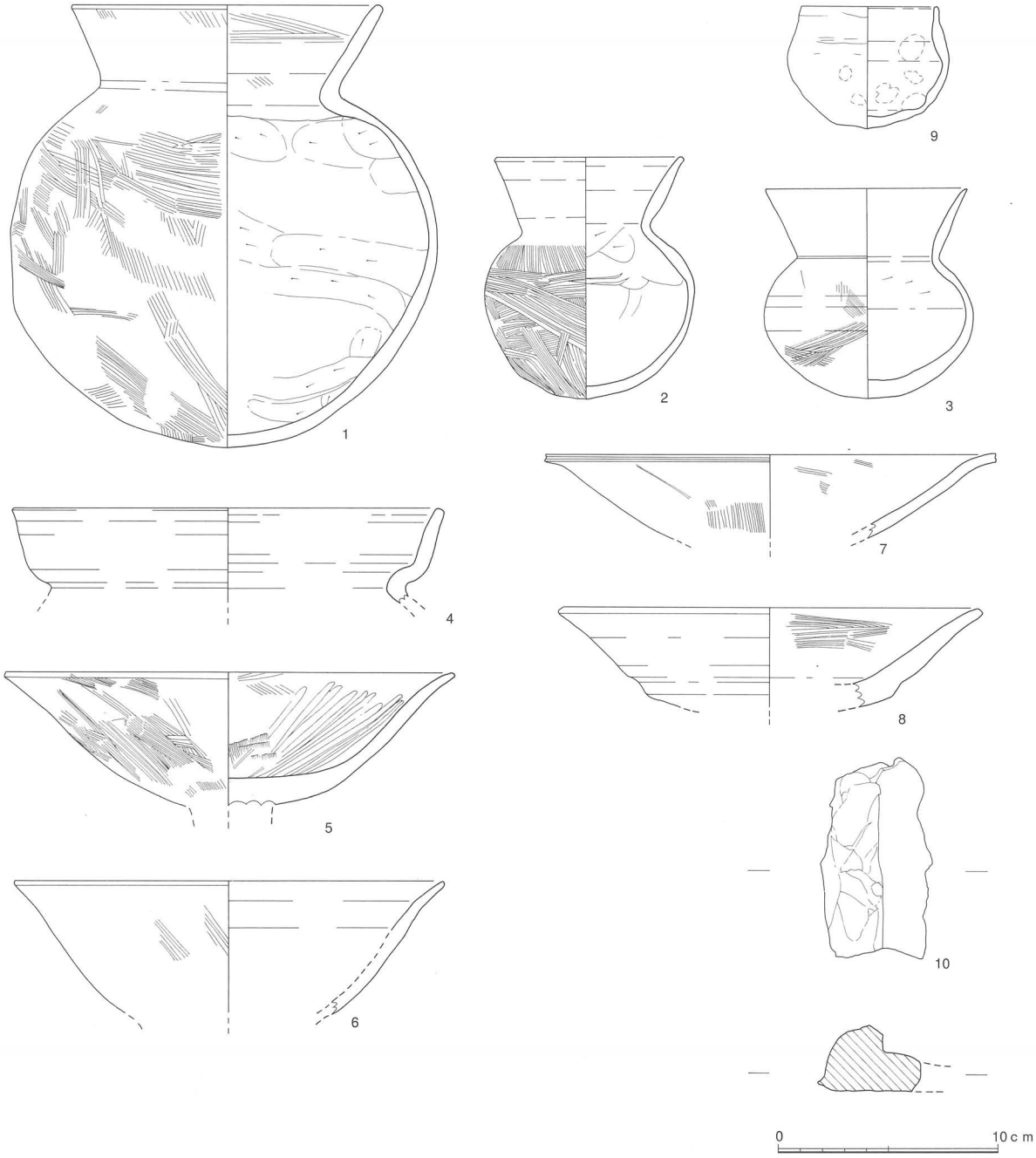
また、西側り部分には長さ約１ｍを測るいわゆる壁際土壙が存在する。土壙の断面型は逆三角形状を呈している。

第200図　古志本郷遺跡SI04遺物出土状況図　（遺構S=1／60　遺物S=1／9）

遺物出土状況（第２００図） 出土遺物は基本的には床面から出土した。特に建物東辺に集中し、甕３個体、高坏１個体が完形に近い状況で出土している。一方西側壁よりからは完形の小型丸底壷１個体、壁際土壙上面からは完形の手捏ね土器１個体が検出された。同土壙内部、床面中央部には土器小片が散在していた。なお、ＳＩ０４を切るＳＫ６３からは小型丸底壷（第２２５図５）が出土しており、これも西側に置かれてたものと推測される。

壁際土壙の性格　壁際土壙については、炉とする説と関連の施設とする説があり[25]、近年、出雲東部の例について検討を加えた池渕俊一氏は、炉ないし火に関わる施設であるとする。本遺構の壁際土壙の明確な性格付けは出来ないが、手捏ね土器が祭祀に関わるものとするならば、土壙の機能が停止し埋められた後に祭祀が行われたと見られ、火処廃棄に関わる祭祀との関連が指摘できる。

出土遺物（第２０１図）　１は単純口縁の甕で、外面、口縁部内面にハケを施すが、体部を全周する横ハケは見られない。２・３は小型丸底壷である。２は体部外面に縦ハケを施した後、横方向のハケを施すが、明確な形で一周はさせていない。口縁部は外反しつつも中央部が肥厚する。４は複合口縁の退化した甕である。５～８は高坏である。５は外面ハケ、内面縦方向のミガキで、底部は松山β接続法によって接続される。６・７は口縁部がやや外反するタイプで、若干のはけが施される。８は坏底部に段を有するもので、内面に横ハケが施される。１０は器形不明の土製品で、板状の部分に手捏ねの張り出し部がつく。９は手捏ね土器である。内外面に指頭圧痕が残る。



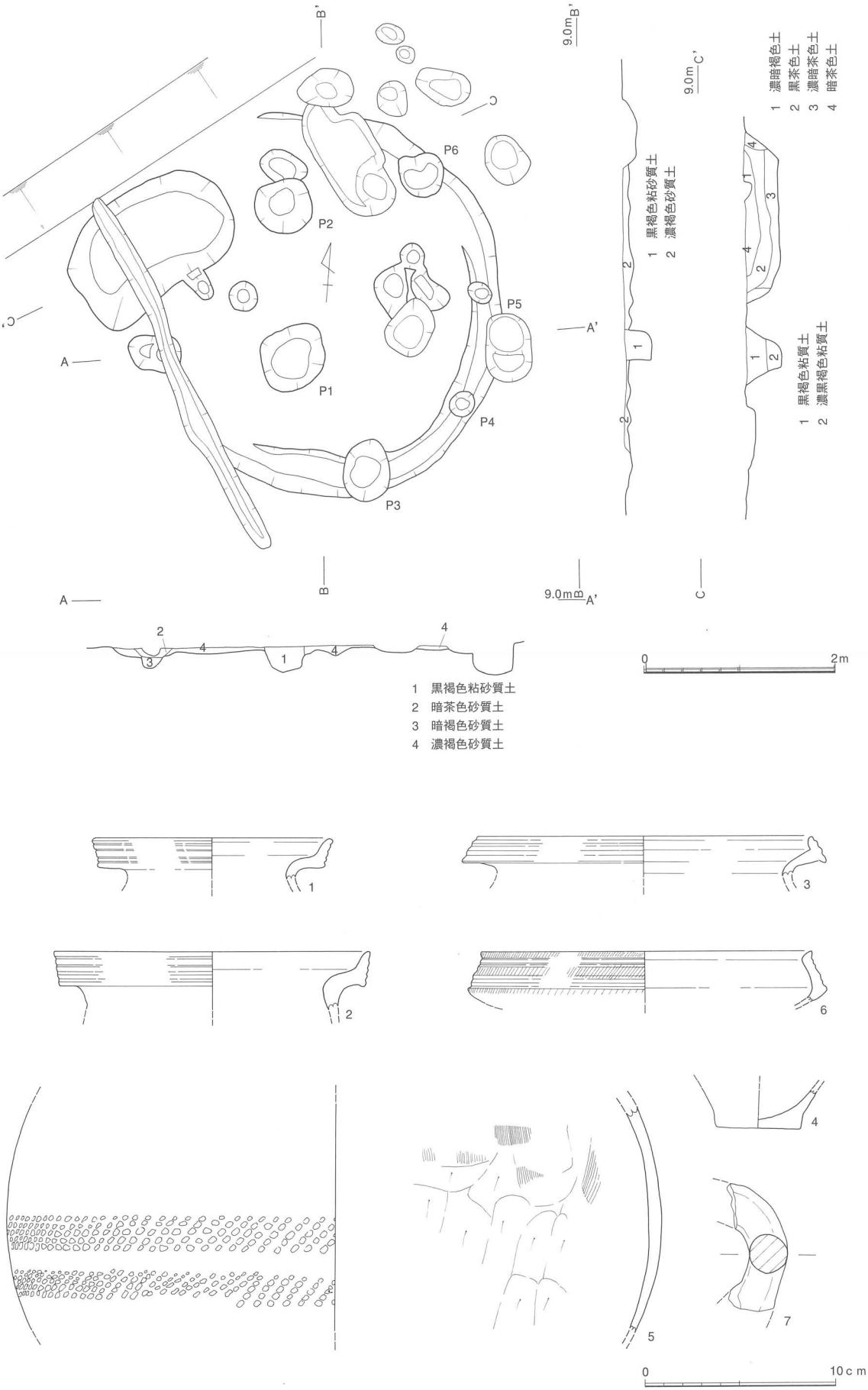
第201図　古志本郷遺跡SI04出土遺物実測図　(S=1／3)

年代　出土した遺物はいずれも松山Ⅱ期古段階の特徴を持つもので、本建物後出土のものは良好な一括資料である。ＳＩ０４の廃棄の時期は古墳時代前期後半と考えられる。

ＳＩ０５（第２０２図）

規模・構造　Ｅ区中央東寄りに位置する。ほぼ全面的に検出できたがこの部分は調査前に池状地形になっていた所で、特に堆積層が薄く、遺構の検出状態も良くなかった。規模は直径４ｍほどで、深さは１０cm程度、床面の標高は８.５ｍであった。

土層堆積状況　堆積土は黒褐色粘質土（２層）であるが、検出状況が極めて浅いこと、主柱穴の堆



第202図　古志本郷遺跡SI05実測図・出土遺物実測図　（遺構S=1／60　遺物S=1／3）

積土がこの２層を切ることから、遺構埋土ではなく張り床の可能性もある。

柱穴・壁体溝　柱穴は埋土などからＰ１～６が確実に本建物跡に伴うものと考えられる。このうちＰ１・Ｐ２は特に大きく深いことから、建物跡の主柱穴と考えられる。共に計５０cm前後、深さ３０～４０cmを測る。一方Ｐ３～Ｐ６は壁体溝上に存在する柱穴で、共に建物跡の堆積層２層を切っている。大きさは計５０cm近くのＰ３・Ｐ６がある一方で、計３０cm以下のＰ４・５もあるが、これは検出状況の違いにも左右されており、いずれも深さは１０cm程度と一致し、同性格の柱であったことは疑いない。これらの柱穴は壁体となる束柱的なものか。壁体溝は上述の小柱穴に切られる形で存在し幅３０cm、深さ１５cm程度である。なお、建物の北西隅には長辺１.８ｍほどの土壙があるが、本建物の関係は不明である。

出土遺物（第２０２図）　確実にＳＩ０４に伴うものは２層から出土した第２０２図５のみであり、残りは前述の北西土壙から出土したものである。１～３は弥生土器甕である。１は口径１４.６cmの小型の甕である。口縁部は上側に拡張され外反し、擬凹線４条が施される。２は同１６.８cmの甕で同じく擬凹線が施される。３は１・２に比べると古い形態の甕で、口縁部は上下に拡張し、内径、凹線が施される。５は大型の甕体部であるが、ＳＩ０７下層土壙から出土した甕体部と接合した。体部最大径下に５点からなる列点文２条を廻らし、内面は頸部以上はハケを施す。６は高坏７で口縁部に凹線を施すが、上下のみならず中間部にも刻目文を入れるものである。７は把手である。

年代　出土遺物は５が松本Ⅳ－２様式で、北西土壙の出土遺物は３を除き同Ⅴ－１様式になる。ＳＩ０４の年代としては５の弥生中期末になろうか。

ＳＩ０６（第２０３図）

規模・構造　Ｅ区中央に位置する。今回の調査で検出された竪穴建物の中ではもっとも保存状況の良好なものである。なお、調査時には湧水に悩まされたが、これは現在周辺が水田化していることと無関係でないであろう。規模は直径４.８ｍ、深さは３５cm程度である。底部の標高は８.３メートルであった。

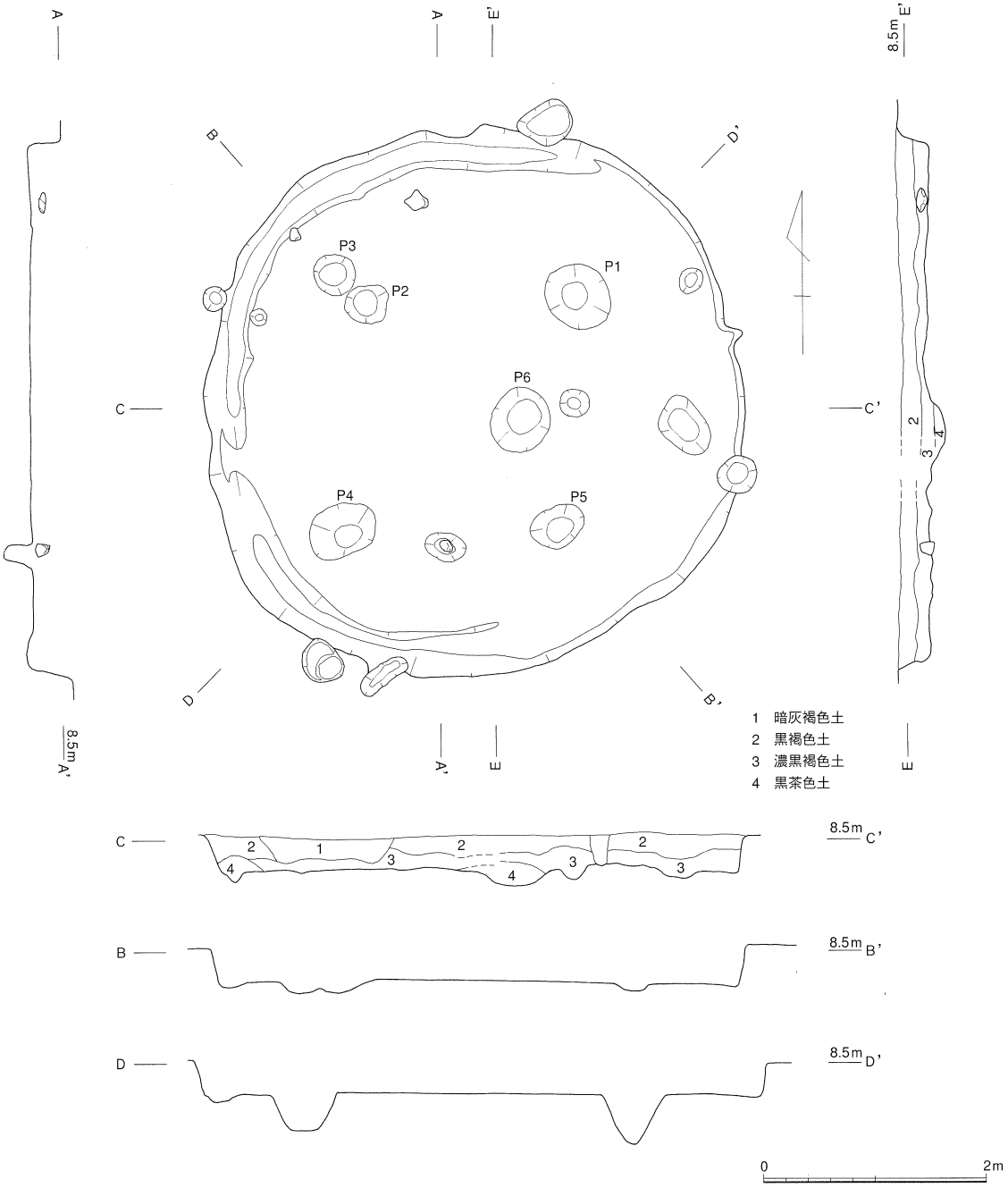
土層堆積状況　上から黒褐色土（２層）、濃黒褐色土（３層）が堆積し、中央ピットと壁体溝には黒茶色土（４層）が堆積していた。

柱穴・壁体溝　小穴は多数あったが柱穴として機能したのは次のものであろう。主柱穴（Ｐ１・Ｐ４）…径５０cm深さ３０～４０cmを測る。補助的柱穴（Ｐ２・Ｐ３、Ｐ５）…径３０cm、深さ１０cm、Ｐ１・Ｐ２と対向する位置にある。中央ピット（Ｐ６）…径５０cm、深さ２０cm。焼土などは確認できなかった。壁体溝は西半分で良好に確認できた。幅２０～３０cm深さ１０cm程度である。

遺物出土状況（第２０４図）　遺物は各層から満遍なくなく出土しており、床面直上で押さえられたものはむしろ少数であった。

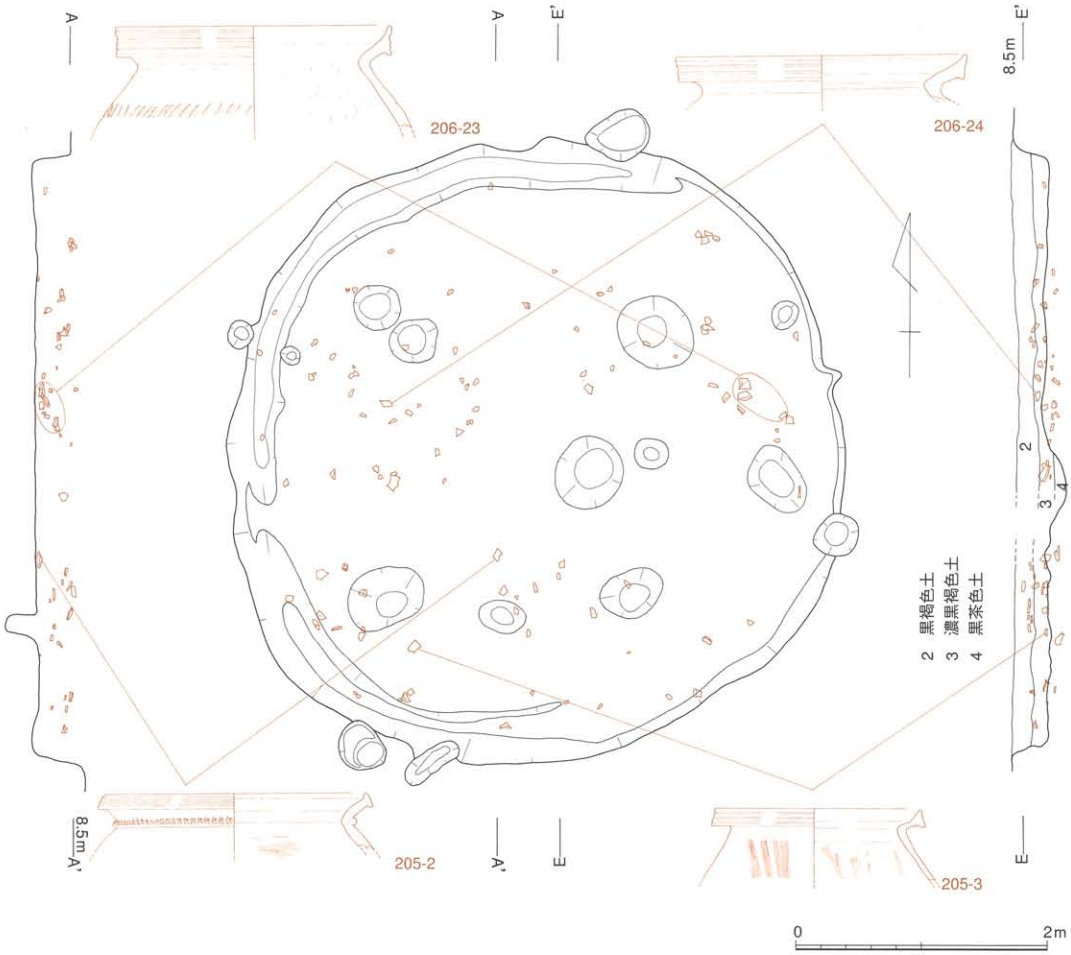
出土遺物（第２０５・２０６図）　床面直上出土として押さえられたのは１～４である。１～４は弥生土器甕で、１は肩が張らず、頸部内面の稜線も不明瞭で、内面は頸部までケズリ、一部ミガキを施すものである。２は頸部外面に凸帯を廻らし、ヘラ状工具によって刻目文を施すものである。３は最大径がやや下にくる甕で、内面はナデ後ハケを施す。

５～３５は埋土からの出土品である。５～２５は弥生土器甕口縁部である。いずれも外面に凹線



第203図　古志本郷遺跡SI06実測図　(S=1／60)

あるいは擬凹線を廻らす。６は口縁端部を上方に拡張させ、内傾するものである。９・１３・２５は口縁端部を上下に拡張し、内傾されるものである。頸部内面にハケを施すものには口縁を内傾させるもの（１１）、外傾させるもの（５・１０）の両者がある。８・１４・１５・１６・１８は口縁を上方に拡張、外傾させる一群で、頸部内面には口縁部と体部を分ける明確な稜がないものである。２１・２２は同様の形態であるが、口縁部下半が内湾するタイプである。口縁部を直立・外傾させるものは口径の小さいもの（１２・１７）、中程度のもの（１８・１９）大型のもの（２３・２４）があり、頸部内面もやや稜線を持つ。このうち１８はハケ工具小口によって頸部に列点文が廻らされる。２３は以上の弥生土器の中でも最も新しいものの一つで、頸部には貝殻復縁による羽状文が



第204図　古志本郷遺跡SI06遺物出土状況図　（遺構S=1／60　遺物S=1／9）

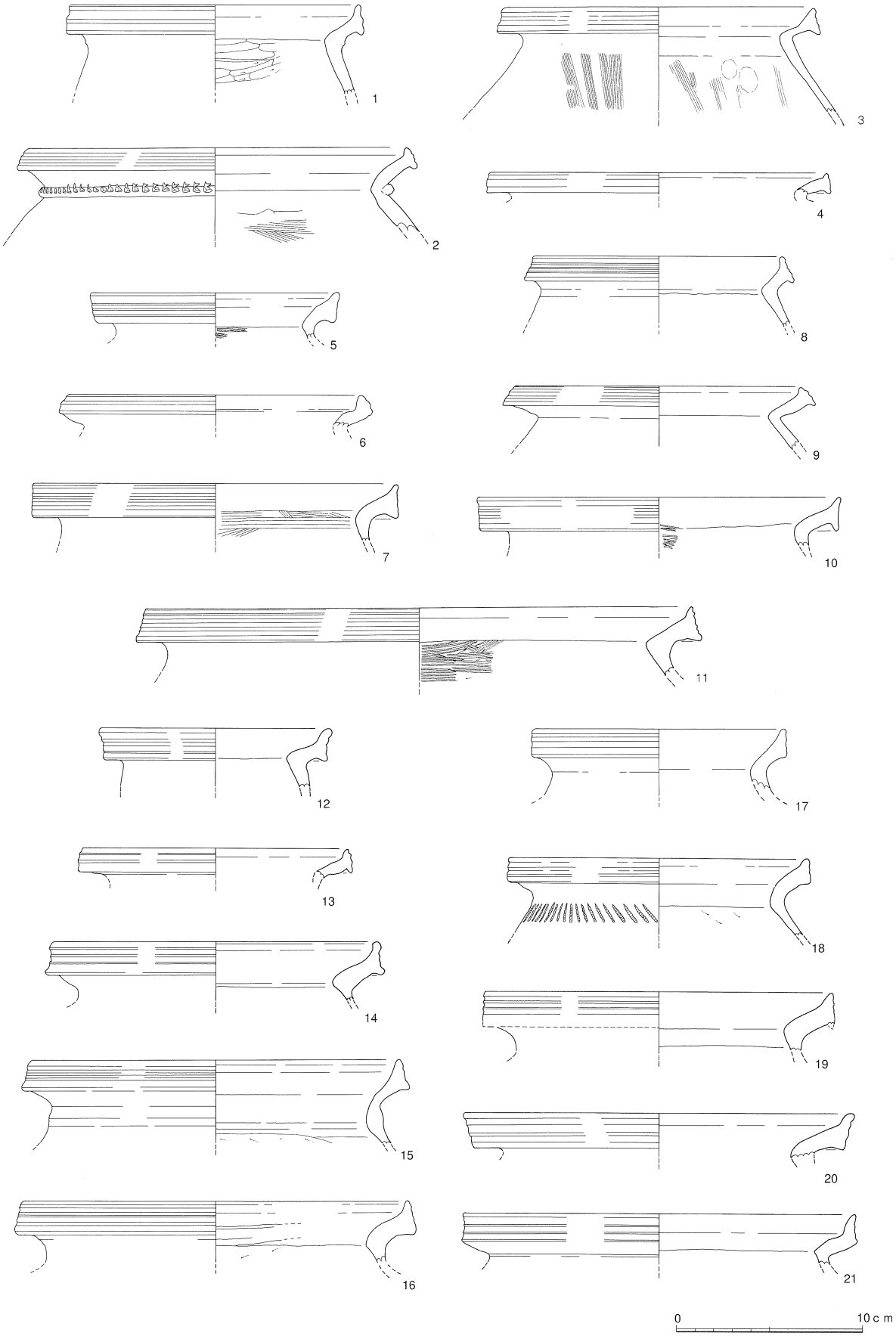
施される。２６～２８は甕底部である。２９はやや小型の広口壷の頸部で、外面は縦方向のハケの後凹線を４条廻らし、内面もハケを施す。以上の弥生土器は松本Ⅳ－２様式から草田２期、弥生中期末から後期前葉のものになる。３０は次期不明の壷である。外面にハケ、ミガキを施す。３１も時期不明の土器で、口縁部には丁寧な横ミガキを施した上、内外面を赤彩する。また頸部には径２mmほどの穴が穿孔されている。３２は土師質土器である。３３は濃褐色の精緻な胎土をもつ鉢形の土器で、内面はミガキを施す。中世のものであろう。３４は擦石、３５は砥石である。

年代　床面出土の土器（１～４）は、１を除くと松本Ⅳ－２様式に含まれる。したがって、ＳＩ０６の廃棄年代は中期末に当たろう。埋土からの出土遺物は後期前葉まで続き、この間、本遺構は廃棄土壙的に機能したものと考えられる。

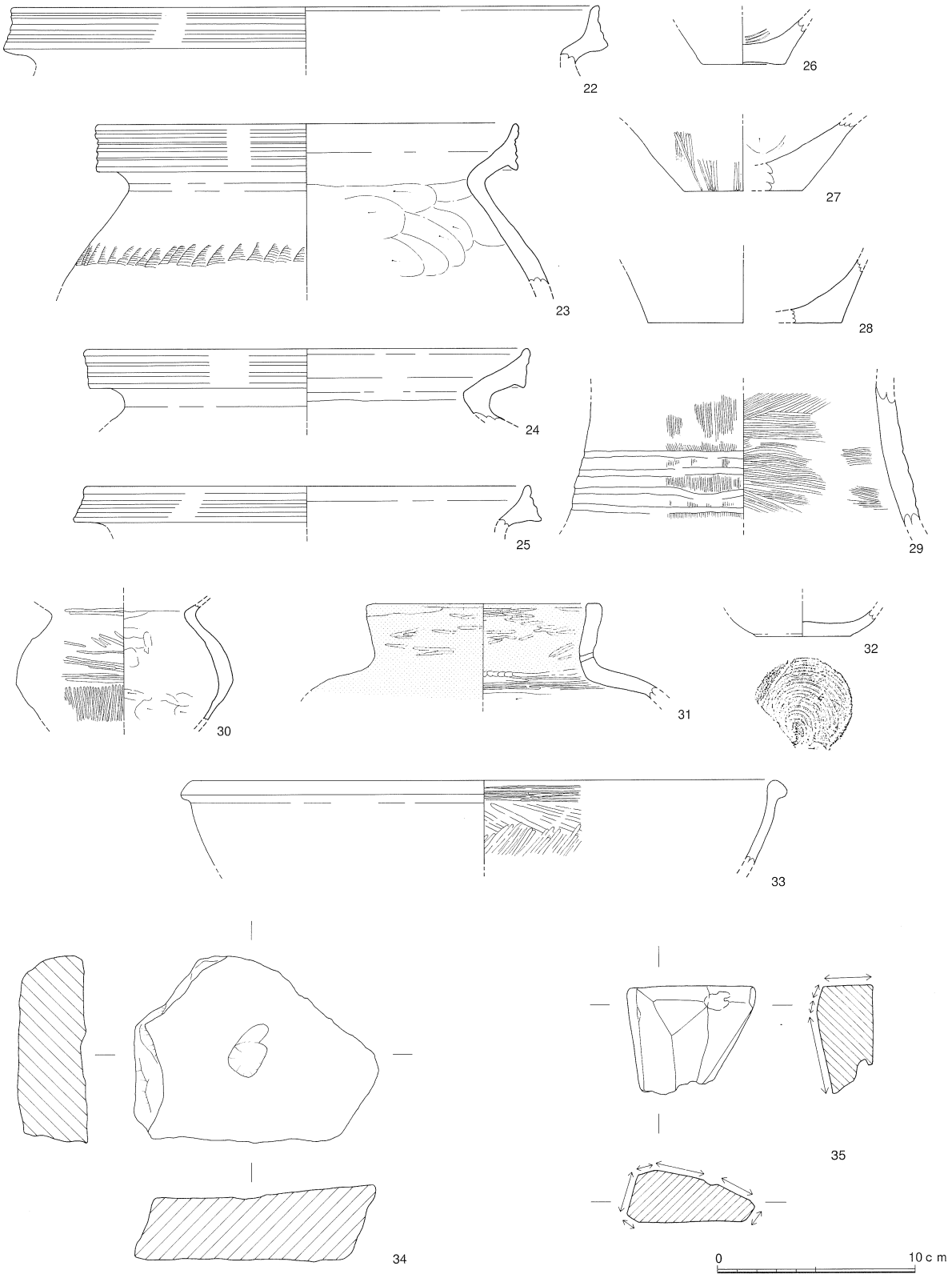
ＳＩ０７（第２０７図）

規模・構造　Ｅ区中央やや西よりに位置する。規模は直径４.５ｍ、深さは２０～３０cmである。底面の標高は８.４ｍであった。ＳＩ０６同様調査は湧水に悩まされた。

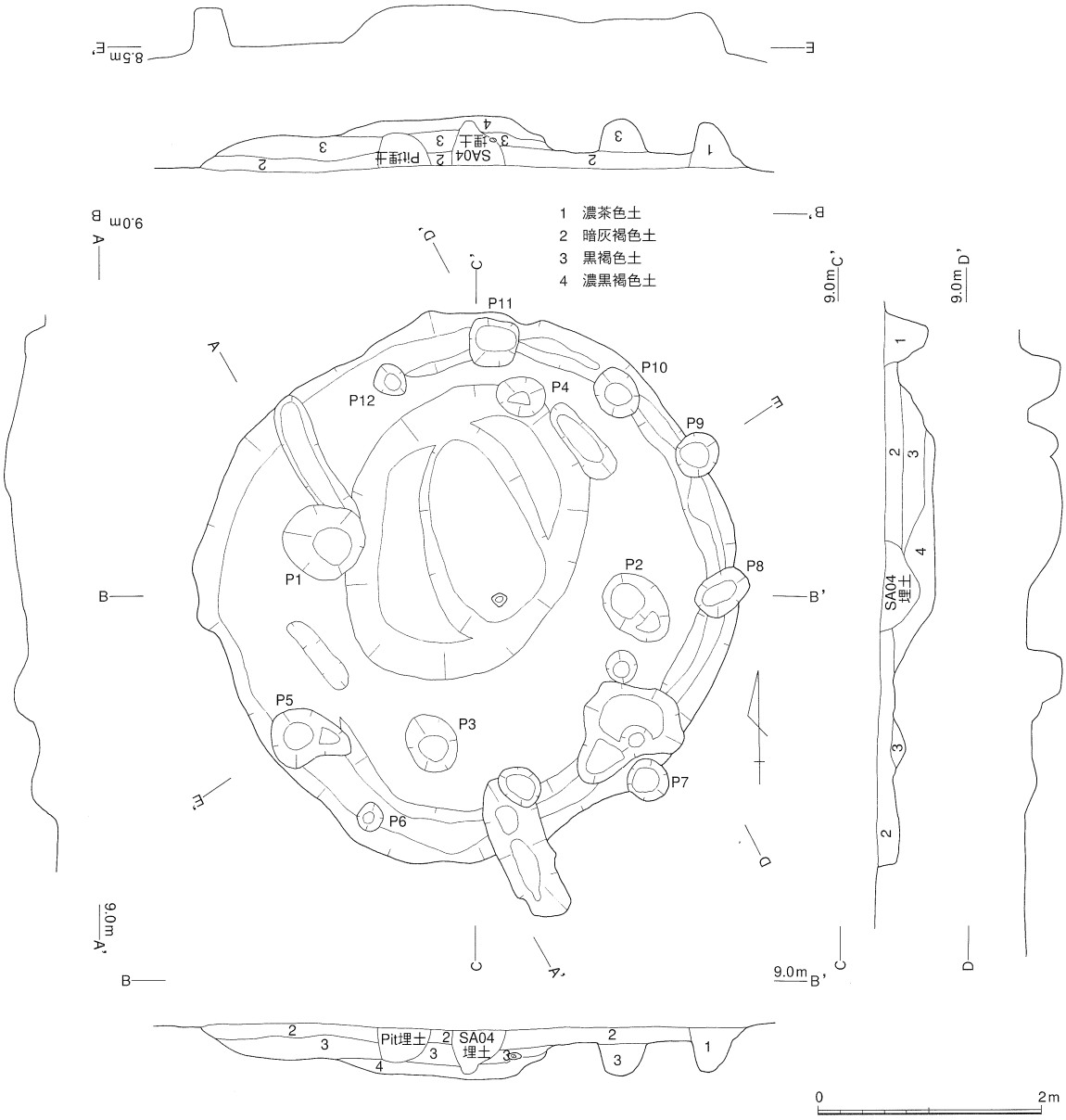
土層堆積状況　建物跡の埋土は事実上暗灰褐色土（２層）の一層のみであった。濃茶色土は、後述する壁体溝状の小柱穴の埋土であり、３・４層はＳＩ０７と同時かそれ以前に存在した土壙（仮に



第205図　古志本郷遺跡SI06出土遺物実測図1　(S=1／3)



第206図　古志本郷遺跡SI06出土遺物実測図2　(S=1／3)



第207図　古志本郷遺跡SI07実測図　(S=1／60)

中央土壙と呼ぶ）の埋土である。

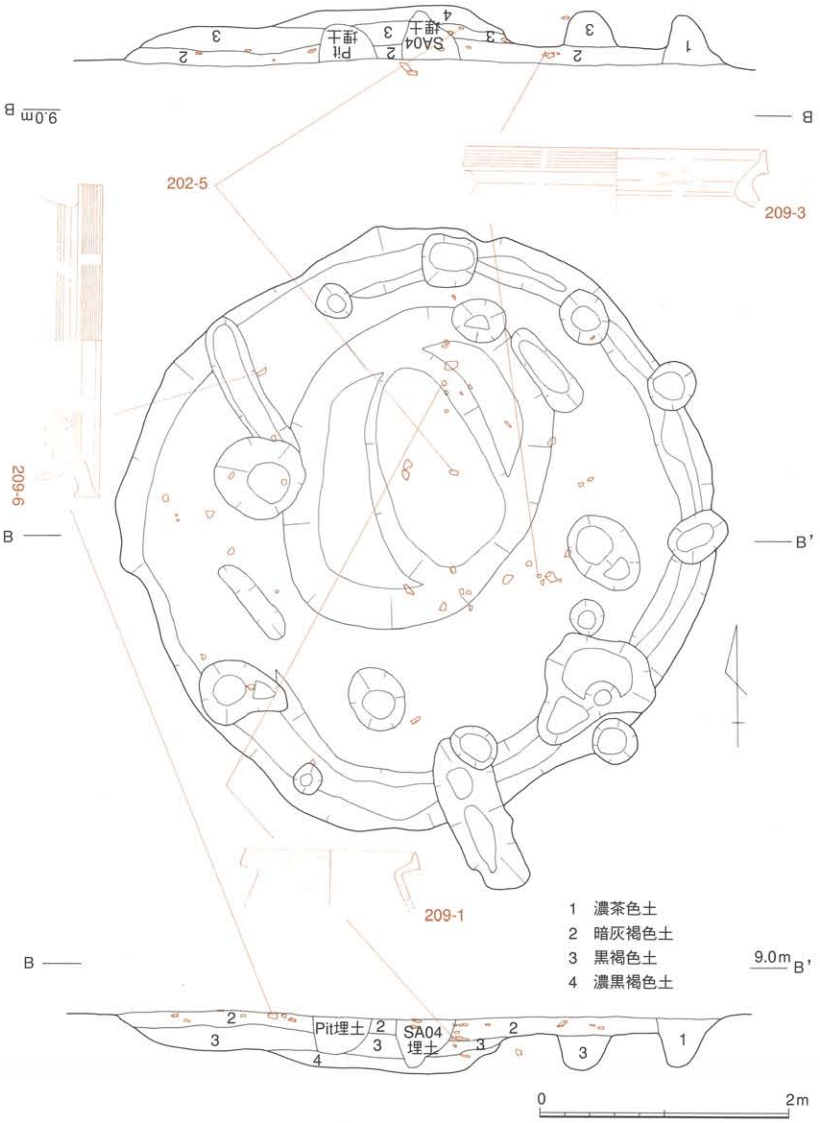
柱穴・壁体溝　ＳＩ０７ではそれに伴うＰ１～Ｐ１２までの柱穴を確認した。Ｐ１・Ｐ２は上端径６０cm、深さ４０cm（Ｐ２については推定）の大型の柱穴で、本建物の主柱穴になるものと思われる。Ｐ３・４はＰ１・２と対向する位置にあり規模は、径３０cm深さ３０～４０cmとやや小さい。Ｐ５～１２は、壁体溝上にある小柱穴であるが、Ｐ９のようにややはずれているものもある。また、全体の埋土（２層）を切って作られているは、ＳＩ０７との関係を疑わせるが、０.８～１ｍで等間隔に並ぶことから、ＳＩ０７の壁と何らかの関係があった遺構と解したい。壁体溝は西側を除く全周に認められ、幅３０cm、床面からの深さ１０cm程度である。中央土壙はその大きさやＰ１Ｐ３の切り合い関係からＳＩ０７の形成以前のものと判断される。

遺物出土状況（第２０８図）　遺物は、ＳＩ０６同様各層から出土しており、床面直上の出土のも

のは少ない（第２０９図１～３・７）。ＳＩ０５出土甕（第２０２図５）に接合した土器片は、ＳＩ０７の中央土壙埋土から出土している。

出土遺物（第２０９図）

いずれも弥生土器である。１～３、７は床面から出土したものである。１・２は口径１３～１４cmの甕で口縁部に凹線を施し口縁部を内傾させる。１は頸部内側をハケで調整する。３は口径２３.８cmの大型の甕で、口縁部はやや直立気味で、頸部も厚い。口縁部内面に若干のハケを施す。７は床面から出土した甕底部である。４～６は埋土出土の甕で、共に口縁を上下に拡張する。６は擬凹線を口縁に施し、内面はケズリの後頸部上半までハケを施す。外面はミガキを施す。８は口径１３.４cmの小型の壷で、口縁部に凹線を廻らす。器壁は厚く頸部以下にはケズリを施す。９は無頸壷である。口縁部には凹線を廻らす。１０は大型の広口壷頸部で、凹線、列点文、ヘラによる綾杉文が施される。１１は金属製品であるが、ＳＩ０７とは無関係であろう。



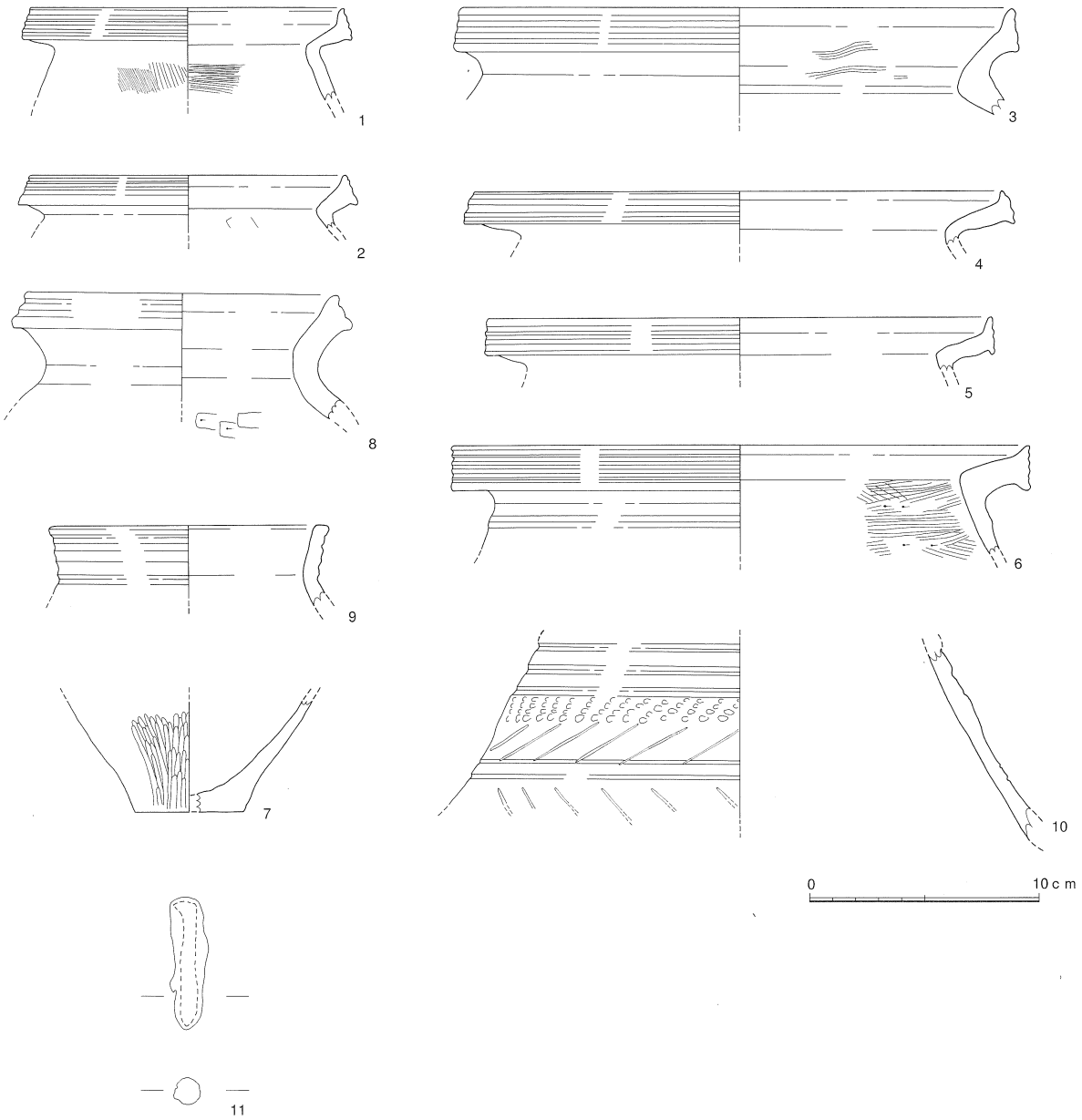
第208図　古志本郷遺跡SI07遺物出土状況図　（遺構S=1／60　遺物S=1／9）

年代　出土した遺物は、床面のものが松本Ⅳ－２～Ⅴ－１様式の両者にかかる位置のものであり、埋土から出土したものはⅣ－２様式からⅤ－１様式までのものが含まれる。中央の土壙の時期は第２０２図５を見るかぎり中期のものになろう。ＳＩ０７は中期後末の土壙の跡に竪穴建物が作られ、後期初頭前後に廃棄され、以後後期前葉にかけて廃棄土壙として利用されたものと考えられる。

Ｂ、掘立柱建物

ＳＢ２２（第２１０図）

規模・構造　Ｅ区中央北辺区に位置する。規模は梁間２間（３.０ｍ）×桁行２間（３.８ｍ）以上の規模を持ち、ＣＣ'を主軸と見た場合、Ｎ－１４°－Ｗを指向する。柱間は、梁行（１.５ｍ）に対



第209図　古志本郷遺跡SI07出土遺物実測図　(S=1／3)

して桁行（1.9m）が幅広である。なお、本遺構の地山はよく締まった橙褐色土である。

柱穴　いずれも直径30cm、深さ30cm程度で、底面の標高も東南隅柱を除いては、8.1mほどで共通する。なお、埋土は黒茶褐色系の土であった。梁方向の中央柱穴も、他の柱穴に比して特に大きいということはない。

年代　出土遺物はなく、年代は明確ではないが、埋土などから中世のものと推定される。

ＳＢ２３（第２１１図）

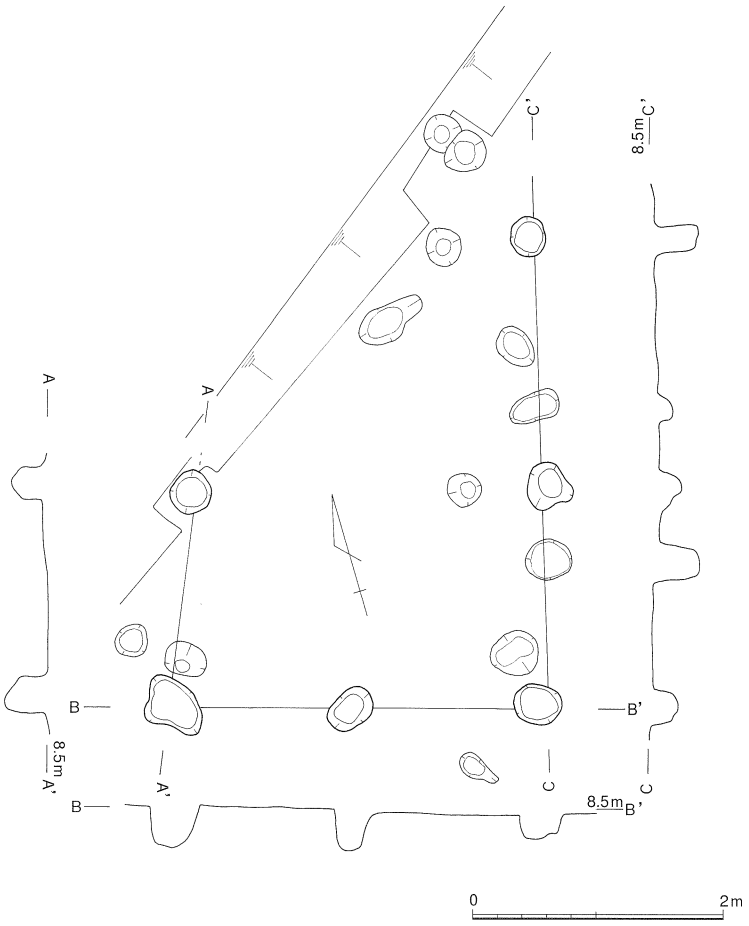
規模・構造　Ｅ区中央南辺に位置する。梁間２間×桁行２間以上の規模を持つ総柱建物で、ＢＢ'を主軸と見た他場合、Ｎ－６１°－Ｗを指向する。ただし、平面型はＥＥ'が北側にふれ不整形をなす。本遺構の地山もよく締まった橙褐色土である。

柱穴　いずれも径２５cm、深さ４０cm程度で、Ｐ１のみが径２０cm、深さ２０cmと浅く小さい。中央の柱も特に規模に変化はなく、床束的な柱は想定できない。Ｐ３は東にずれる。

出土遺物（第２１１図１～３）

いずれも土師質土器坏で、西端の柱穴Ｐ１からまとまって出土した。後述するＳＢ２４の柱穴出土のように、祭祀行為として埋納された可能性もある。１はやや体部が内湾するもの、２・３は外反するもので、共に底部回転糸切りである。

年代　出土遺物は土師質土器Ⅳ期に該当し、ＳＢ２３の時期は中世末になろう。



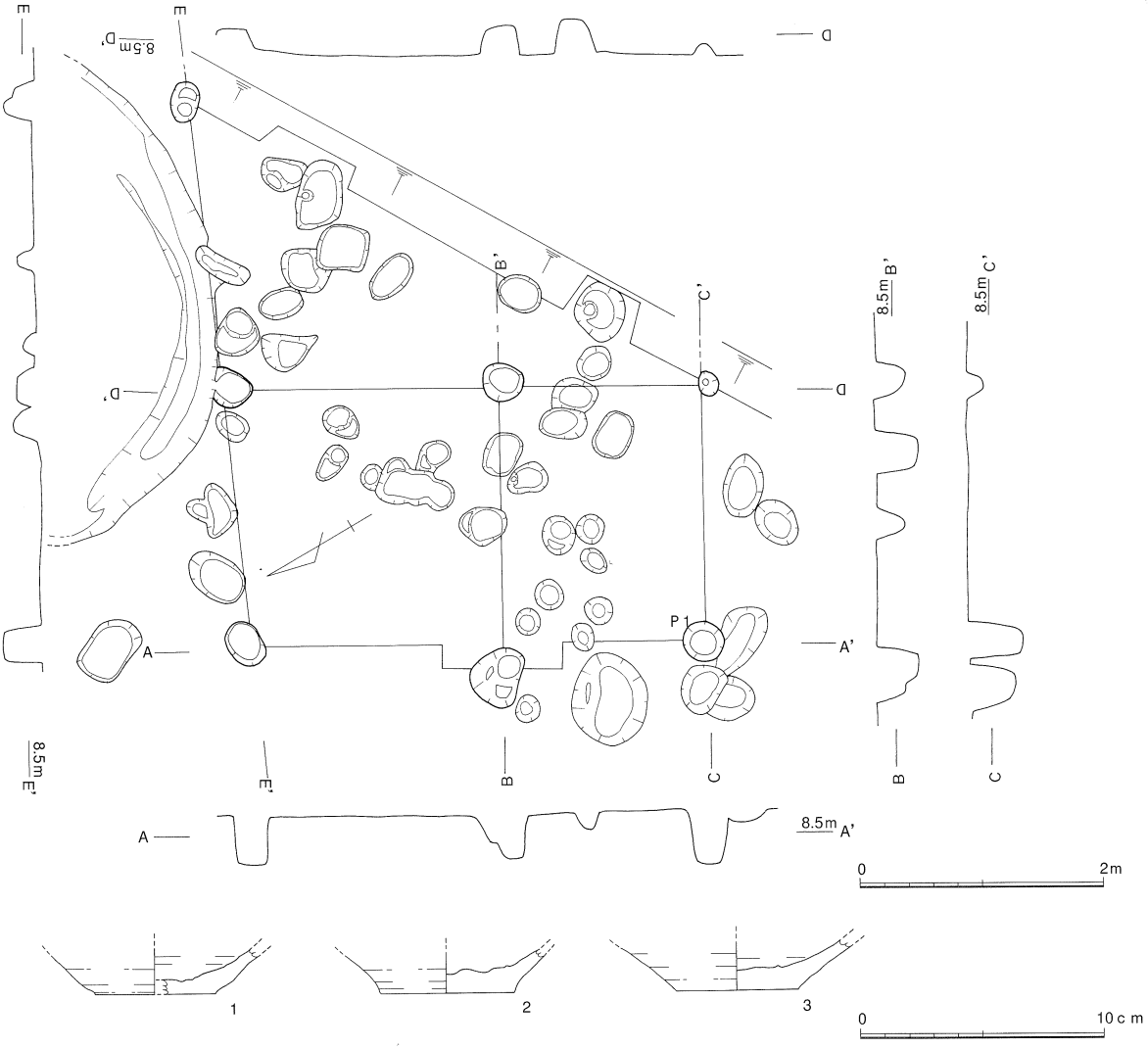
第210図　古志本郷遺跡SB22実測図　(S=1／60)

ＳＢ２４（第２１２・２１３図）

規模・構造　Ｅ区中央西側に位置し、調査区の全幅に及んでいる。ＳＢ２４・２５は柱穴が切り合っており、新しいものをＳＢ２４、古いものをＳＢ２５とする。ＳＢ２４は梁間３間（５.６ｍ）×桁行５間（１１.１ｍ）以上で、北側は梁行の柱が見られないことから、調査区外に及んでいるものと見られる。梁行の柱間距離は西側の２間分が１.９ｍ、東側１間分が１.５ｍと東側が小さく、この部分は庇をなし、西側梁間２間の身舎であったと考えられる。なお、地山は崩れやすい灰褐色砂である。主軸はＮ－２７°Ｗを指向する。

柱穴　ＳＢ２４の柱穴はＰ１～Ｐ１４である。これらは側柱部分で、おおむね長辺１～１.５ｍ、短辺０.６ｍ程度の平面型で、深さ３０～６０cmの掘り方を持つ、それぞれ独立した柱穴として確認されている。この掘り方は大きいようにもみえるが、平面型は必ずしも定型ではなく、断面もＶ時もあれば箱形もみえるように多様であり、全体に統一が取れたものとは言い難い。堆積土は茶褐色型の砂質土を中心とする。Ｐ１・Ｐ３では直径１５cm程度の柱根が検出されているが、Ｐ７、Ｐ１０では砂質土の堆積する柱の抜き取り痕が確認されており、抜かれる場合もあったようである。身舎の東側柱列とほぼ重なるＣＣ'上のＰ２１・２２を切る独立の柱穴列は確認できなかったが、あるいはＣＣ'７～９層、１０～１２層、２２層、２９～３１層がＳＢ２４のＰ２～６、Ｐ７～９に対応する可能性もある。

東南隅柱と出土遺物　これら柱穴のうち、東南隅のＰ１は複数のピットの切り合い関係の中で（図版７４）、最後に位置づけられるもので、深さ約７０cmを測り、底部から関係の土師質土器２点



第211図　古志本郷遺跡SB23実測図・出土遺物実測図　（遺構S=1／60　遺物S=1／3）

（第２１４図３・４）、鉄器３点が出土した。またＰ２から第２１４図５が、Ｐ５から同図２が、Ｐ６から同図１が出土している。

出土遺物（第２１４図１～８）　１～４は土師質土器である。１・２は、赤茶褐色で１mm大の砂粒を含むの胎土を持ち、強いナデによって作られる皿で、土師質土器Ⅰ期に当たる。３・４・６～８はＰ１から出土した。３・４は、直線的に立ち上がり、土師質土器Ⅳ期に類似する器形であるが、体部がやや丸みを帯びること、口縁部が厚いことからⅢ期に近い古段階のものと思われる。５は青磁碗で口縁が外湾するタイプである。上田Ｄ類に当たる。６～８は木質の付着した釘で、柾目材の板に打ち込まれていることが窺われる。全体としては箱状のものがあったのであろうか。先に述べた出土状況と勘案して、３・４、６～８はＳＢ２４造営に関わる何らかの祭祀に使用されたものと考えられる。

年代・性格　出土遺物は１・２と３・４で時期が異なるが、これは２の出土地点が、ＳＢ２５を切って作られた柱穴であることによるもので、柱抜き取り痕跡のないＰ１から原位置に近い状況で出土した３・４すなわち、土師質土器Ⅲ期末～Ⅳ古段階が本建物の造営時期に当たるであろう。ほぼ

同規模のＳＢ２４が立て替え直されたものである可能性がある。

ＳＢ２５（第２１３・２１４図）

規模・構造　ＳＢ２４に切られる、連続土壙状の柱穴（Ｐ２１～２６）をもつ側柱建物である。梁間５.０ｍ×桁行１０.５ｍ以上の規模を持ち、南側に梁行の柱列を持たないことから、さらに南に連続するものと思われる。主軸をＣＣ’と見た場合、Ｎ－３１°－Ｗを指向する。

柱穴　ＣＣ’、ＤＤ’は深さ４０cm程度の連続土壙状をなしているが、ＣＣ’でみえる柱穴（７～９層）に対応する柱はＤＤ’では確認できないなど、ＳＢ２４のように整っていはない。強いて桁行の柱穴を挙げればＣＣ’で６間分（１９層、７～９層、１０～１２層、６～１４層、２２～２５層、２９～３１層、北辺）、ＤＤ’で６間分（１・２層、４・５層、１０～１２層、１６～１８層、１９・２０層、北辺に二つ）程度であろうか。柱穴埋土は茶褐色系ではあるが、地山灰色砂層が多分に含まれていた点もＳＢ２４の柱穴埋土土は異なる。

出土遺物（第２１４図９～１５）　９～１４は土師質土器である。１２はＰ２５出土、その他はＰ２１出土である。９・１０・１２は１mm大の砂粒を含む赤褐色の胎土をもち、口縁端部が内湾、回転糸切りの底部で付近の側面を強くナデて、くびれさせる坏である。１１は薄手で口縁部が内湾する坏で、本報告ではあまり類例がない。１３・１４は褐色の胎土で立ち上がりが丸く内湾するもので、ＳＫ６０出土の土師質土器坏（第２２０図１２）が同類である。１５は[26]Ｐ２１の北端柱穴から出土した。底部外面も施釉する無高台の白磁皿で、大宰府分類の白磁皿Ⅸ類、いわゆる口禿皿である。内面に陰刻はない。

年代　土師質土器はⅠ～Ⅱ期に当たり、ＳＢ２５の年代は、中世後期初め頃と判断される。

ＳＢ２６（第２１５図Ｐ１～Ｐ４）

規模・構造　Ｅ区西南端に位置する。西側、南側が調査区外に伸びており、梁間２間（２.０ｍ）×桁行２間（４.８ｍ）以上が確認される。ＢＢ’を主軸と見た場合、建物はＮ－５２°－Ｗを指向する。ＳＫ２７を切る。

柱穴　長径６０cm短径３０cmの楕円形をなし、深さは３０cm程度である。底面の標高も８.６ｍ程度で一定している。

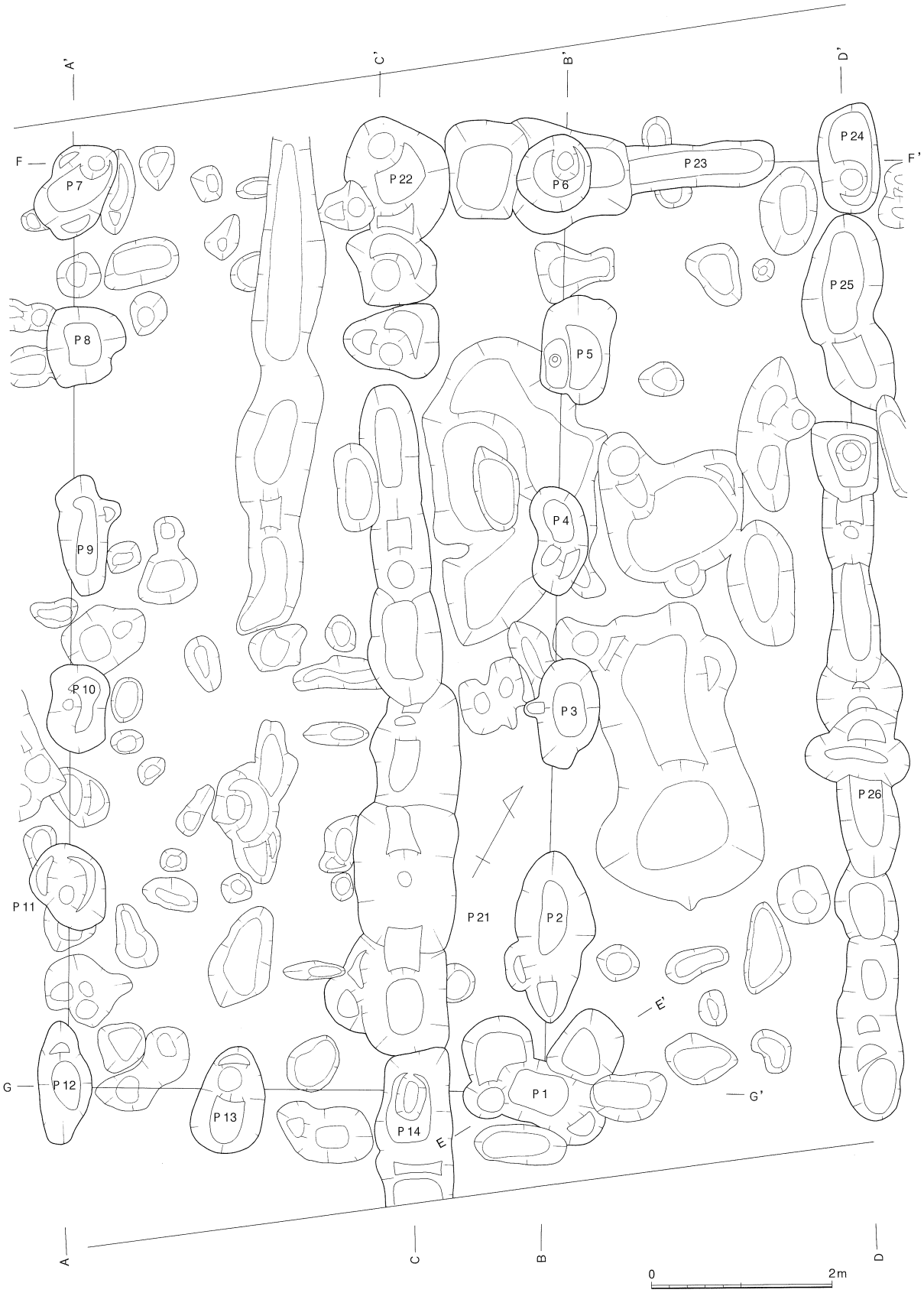
年代　出土遺物はなく、明確な年代は明らかでない。

ＳＢ２７（第２１５図Ｐ５～Ｐ９）

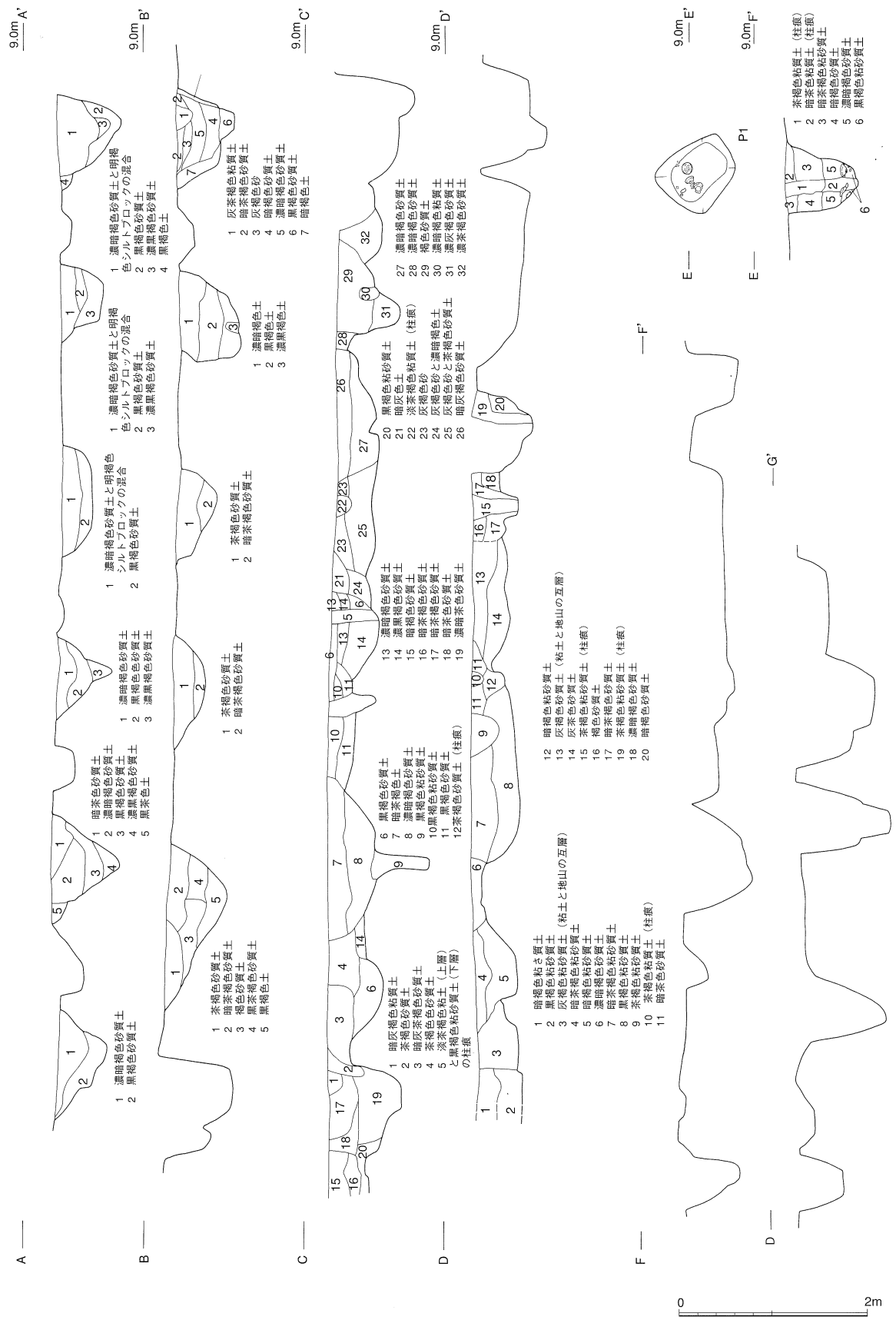
規模・構造　Ｅ区南西端に位置し、ＳＢ２６と重なる。梁間３間（３.０ｍ）以上×桁行２間（３.０ｍ）以上の規模を持ち、ＡＡ’を主軸と見た場合、建物はＮ－５２°－Ｗを指向する。ＣＣ’の北側にはピットが存在するが、それに対応するピットがＡＡ’の延長上で確認できなかったので、北側にはこれ以上建物が伸びないと判断した。東側に庇がつくことがわかる。柱間距離は桁行梁間とも１.５ｍ前後である。

柱穴　多少形に変化があるが、長さ６０cm、幅３０～５０cmの長方形をなし、深さは４０cm程度、底面の標高８.４ｍと一定している。

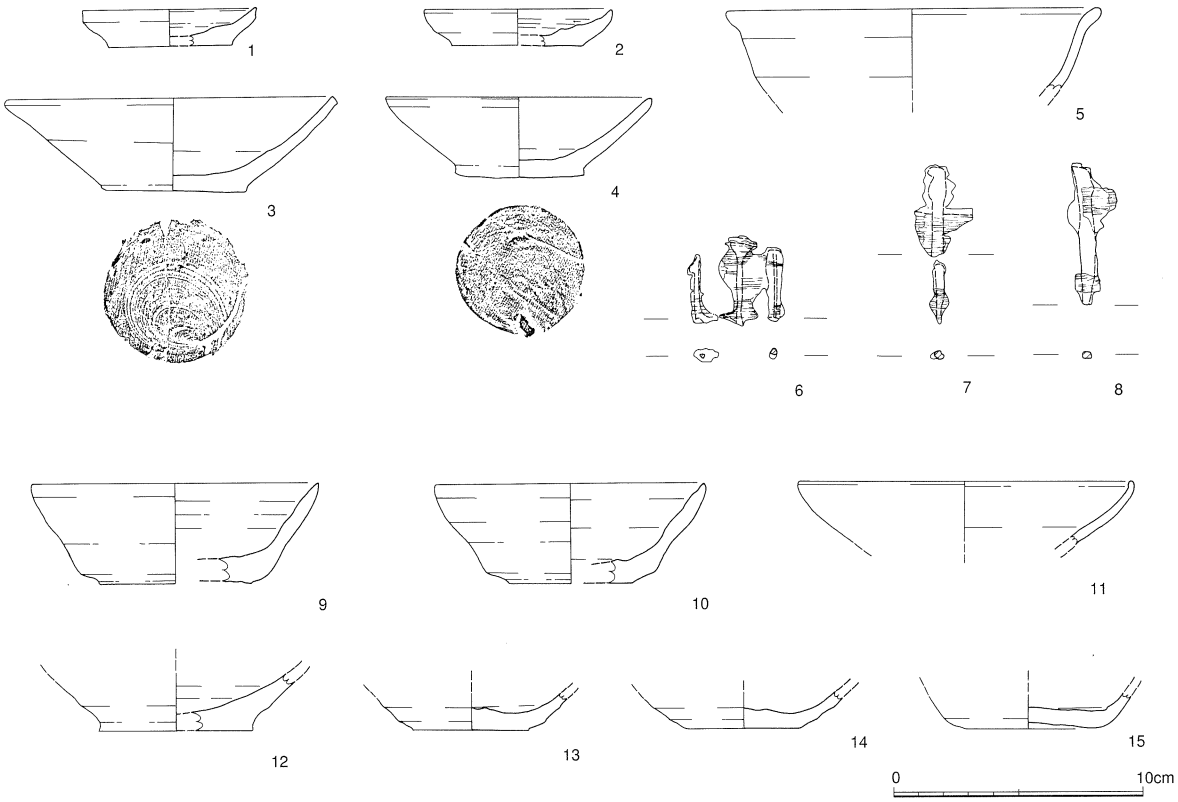
年代　出土遺物はなく、明確な年代は不明であるが、主軸方向はＳＢ２６と一致しており、両者は立て替えの関係にあったと思われる。柱間距離は小さいが、庇を持つことから大型の建物であっ



第212図　古志本郷遺跡SB24・25実測図1　(S=1／60)



第213図　古志本郷遺跡SB24・25実測図2　(S=1／60)



第214図　古志本郷遺跡SB24・25出土遺物実測図　(S=1／3)

たと推定される。

C、柵列

ＳＡ０４（第２１６図）

規模・構造　Ｅ区中央をほぼ調査区と平行して伸びている。１５間分、長さ２３.６ｍ程を検出している。主軸はＮ－５５°－Ｅを指向する。柱穴はいずれも、長さ１.２ｍ、幅０.６ｍの楕円形をなし、深さは０.４ｍ前後である。茶褐色系の粘砂質土が堆積し、Ｐ１では径１５cmほどの柱痕も確認された。

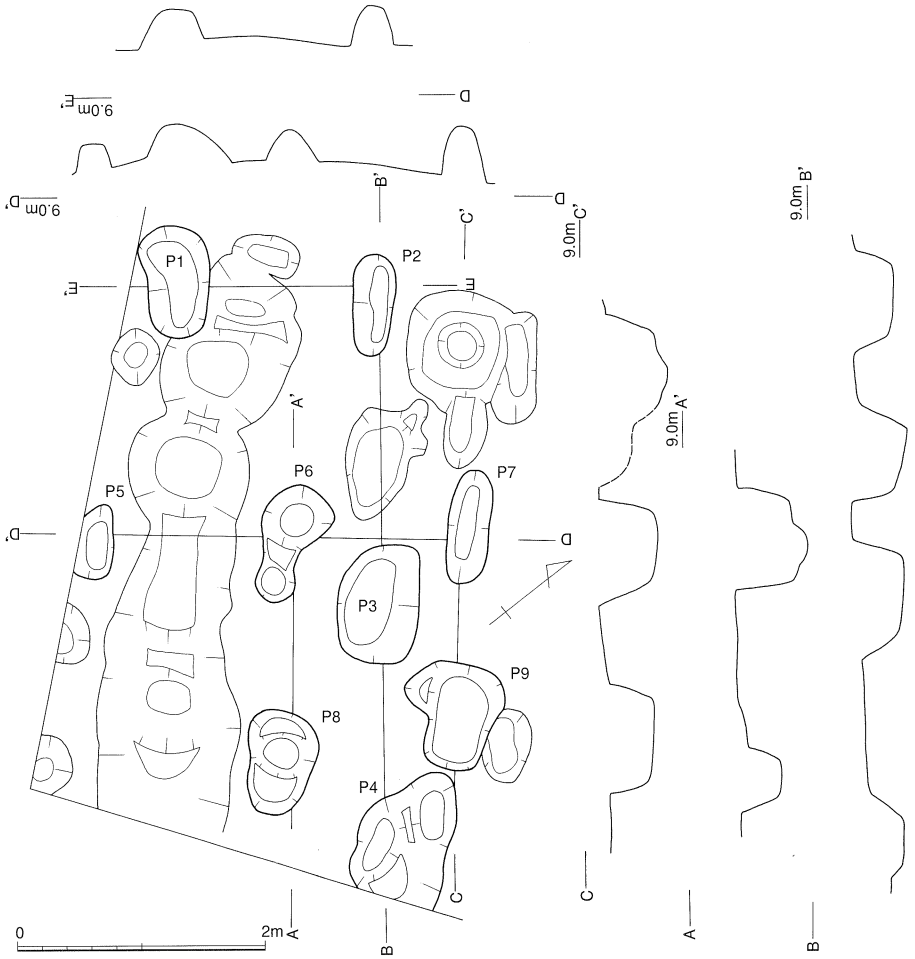
出土遺物　１・２は肥前系陶磁器である。１は緑灰色釉が施される陶器皿で、いわゆる溝縁皿である。２も同様のものであろう。

年代・性格　出土した遺物は１７世紀前半に位置づけられ、ＳＡ０４の年代もこの時期になろう。

D、井戸

ＳＥ１３（第２１７図）

規模・形態　Ｅ区中央南辺で確認された。形態は上下２段をなしており、上段は１辺２ｍ弱の隅丸方形をなし、深さは約０.８ｍ、下段も上段同様一辺１.１ｍの隅丸方形をなす。湧水が激しく、調査区際にあることもあって、調査は下段を６０cmほど掘り下げたところで停止した。下段には、横板を隅木で支える、横板組隅柱型の井側が確認されている。上段は後述のように井桁に関わる土壙であろうか。ＳＤ４２に切られる。



第215図　古志本郷遺跡SB26・27実測図　(S=1／60)

土層堆積状況　下段埋土５は粘質土で、上段に及ぶことから、井桁撤去時の埋土であろうか。１は地山ブロックを含み、井側撤去に関わる埋土と見られる。であろうか。

年代　出土遺物はないがＳＤ４２に切られており、遺構の時期は近世中期以前である。

Ｅ、土壙

ＳＫ５８（第２１８図）

規模・形態　Ｅ区中央に位置する。一辺２ｍの隅丸三角形状をなす。深さは８０cmで断面は箱形である。底部標高は７.８ｍほどである。

土層堆積状況　暗灰色系の土が堆積しており、底面から浮いた状態で径２０～３０cm大の石が存在する。石は、石組が崩壊した状況ではなく、投げこまれたものと推察される。

年代・性格　出土遺物はないが、ＳＤ４２を切ることからＳＫ５８の時期は近世中期以降であろう。性格は廃棄土壙であろうか。

ＳＫ５９（第２１９図）

規模・構造　Ｅ区西側中央に位置する。規模は長辺１.１ｍ、短辺０.８ｍの楕円形の平面を持ち、深さ０.３ｍである。埋土は上層（１・２層）、下層（３、４層）に別れ、下層には地山が含まれ

る。遺物は下層を中心に出土している。

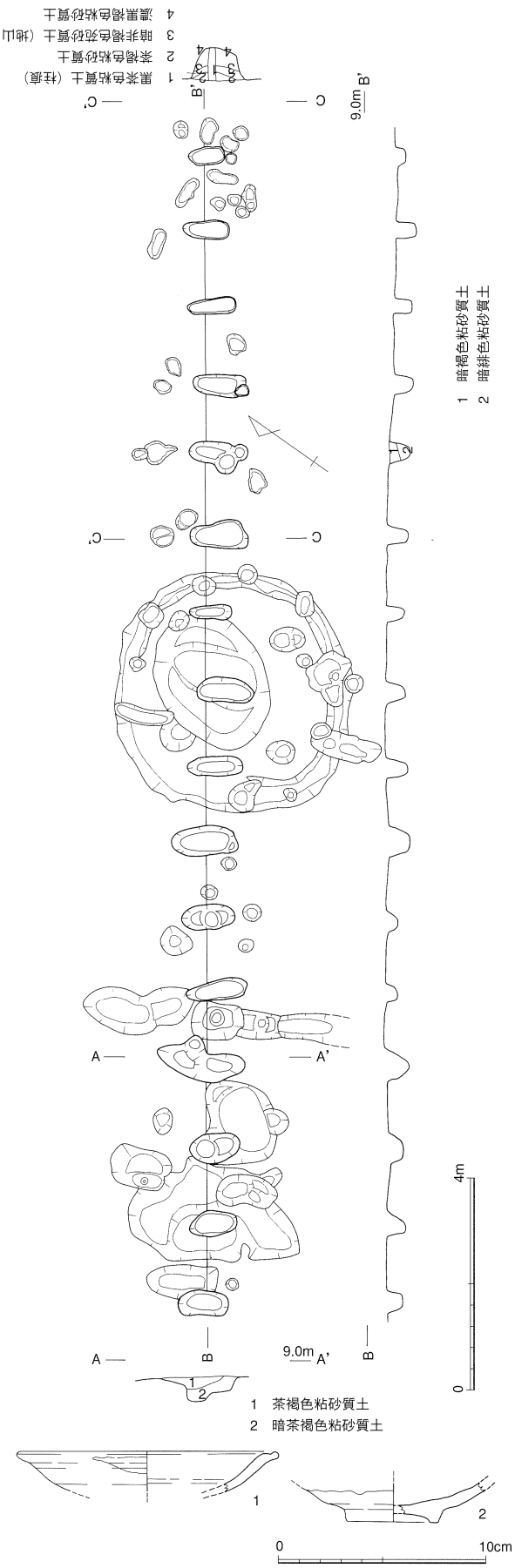
出土遺物（第２１９図）　１～７は土師質土器坏である。いずれも赤褐色で１～２mm大の砂粒を多量に含む胎土を持ち、底部は回転糸切りである。１・２は底部脇を強くナデてくびれされるタイプである。３～７は丸く内湾して立ち上がるグループである。前者が土師質土器Ⅰ、後者がⅡ期に当たる。８～１１は土師質土器皿である。胎土は坏と同様で、１１は強い回転ナデが内底部に残る。１２は刃渡り１９.５cm、全長２９cmを測る小刀である。茎の部分には目釘穴が１カ所開いている。

年代　出土遺物は土師質土器Ⅰ～Ⅱ期に当たり、遺構の年代は中世後期前半になろう。性格については刀の出土から土壙墓と考えることも出来るが、土師質土器は散在して出土しいることから、廃棄土壙の可能性もある。

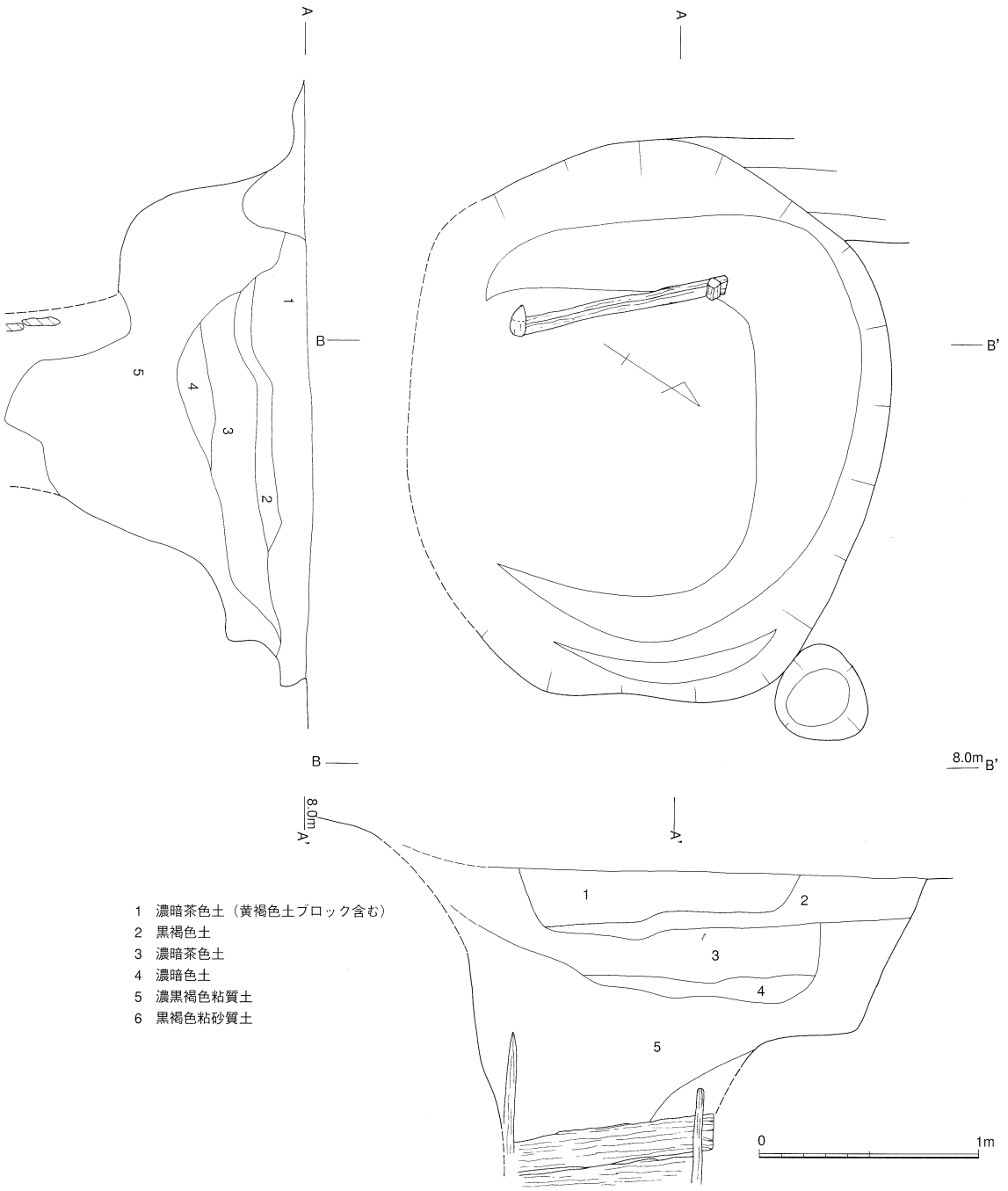
ＳＫ６０（第２２０図）

規模・形態　Ｅ区西側南寄りに位置する。径１.３ｍ前後の不整円形をなし、深さは６０cmほどである。埋土は茶褐色系の土からなる１～５層と、地山灰色さを多量に含んで構成される７～９層に分けられる。遺物は１～５層から、多くのものが破片の状態で出土している。また３・４層には径２０～３０cm大の石が含まる。

出土遺物（第２２０・２２１図）　１～２１は土師質土器である。１２を除いていずれも１～２mmの砂粒を含む、赤褐色の胎土を有し、底部回転糸切りである。１～８は底部周辺を強くナデ取り、くびれさせるもので、口縁部の厚さも厚い。１・５などは底部の形状も楕円形をなし、１は器高も一定でないなど、大味な荒い作りである。復元図化してあるものは整った印象があるが、実態は１近いものが多いと推測される。なお、１には糸切りとは別に圧痕が底面に残る。９～１１は口縁が丸みを帯びるタイプである。１２は乳褐色の胎土を持ち、内湾した器形であ



第216図　古志本郷遺跡SA04実測図・出土遺物実測図
（遺構S=1／120　遺物S=1／3）

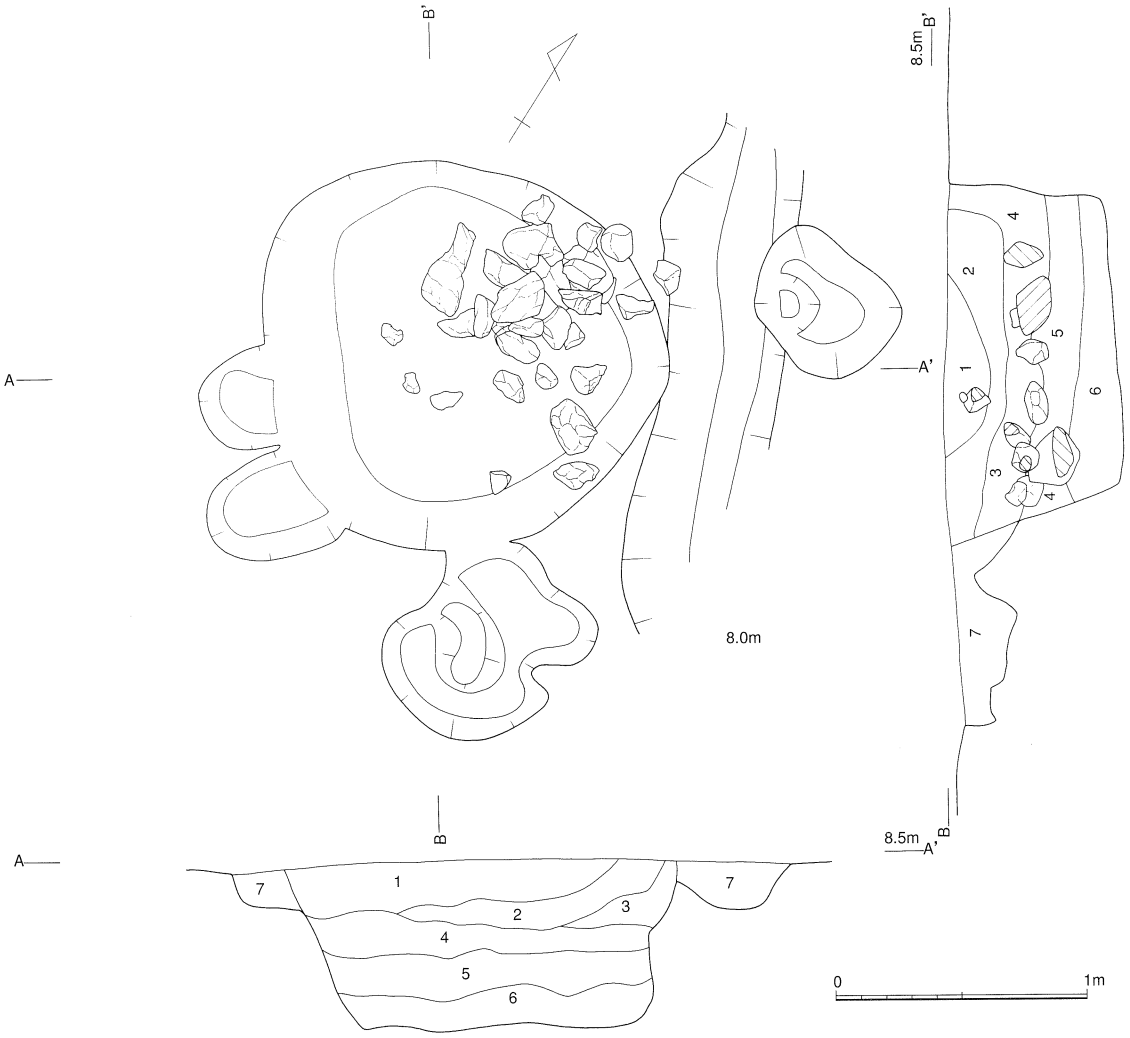


第217図　古志本郷遺跡SE13実測図　(S=1／30)

る。底部は回転糸切り。１３～２１は皿である。

１７のように内面には強いナデ痕跡が残るものが多い。１３～１５、１８～２０は坏同様に底部周辺を強くナデ、くびれさせるタイプで、１８は丸みを帯びて立ち上がるものである。１７・２１は両者の中間的形態を示す。２２は陶器鉢である。暗茶灰色で１mm大の白色砂粒の胎土を持ち、口縁部に凹線状の沈線を２条程度持つ。この他、片切彫のあるやや黄色みがかった青磁碗小片が出土する。

年代・性格　赤褐色の土師質土器は底部周辺がくびれる土師質土器Ⅰ期のものが主流で、遺構の年代も同じであろう。性格は廃棄土壙であろう。



第218図　古志本郷遺跡SK58実測図　(S=1／30)

ＳＫ６１（第２２２図）

規模・形態　Ｅ区西端北側に位置する。長径２.８ｍ、短径２.２ｍの楕円形をなし、中央から西側（深さ１５cm）と、東側で深さが異なる（同３５cm）。茶褐色土が堆積する。ＳＫ６２を切る。

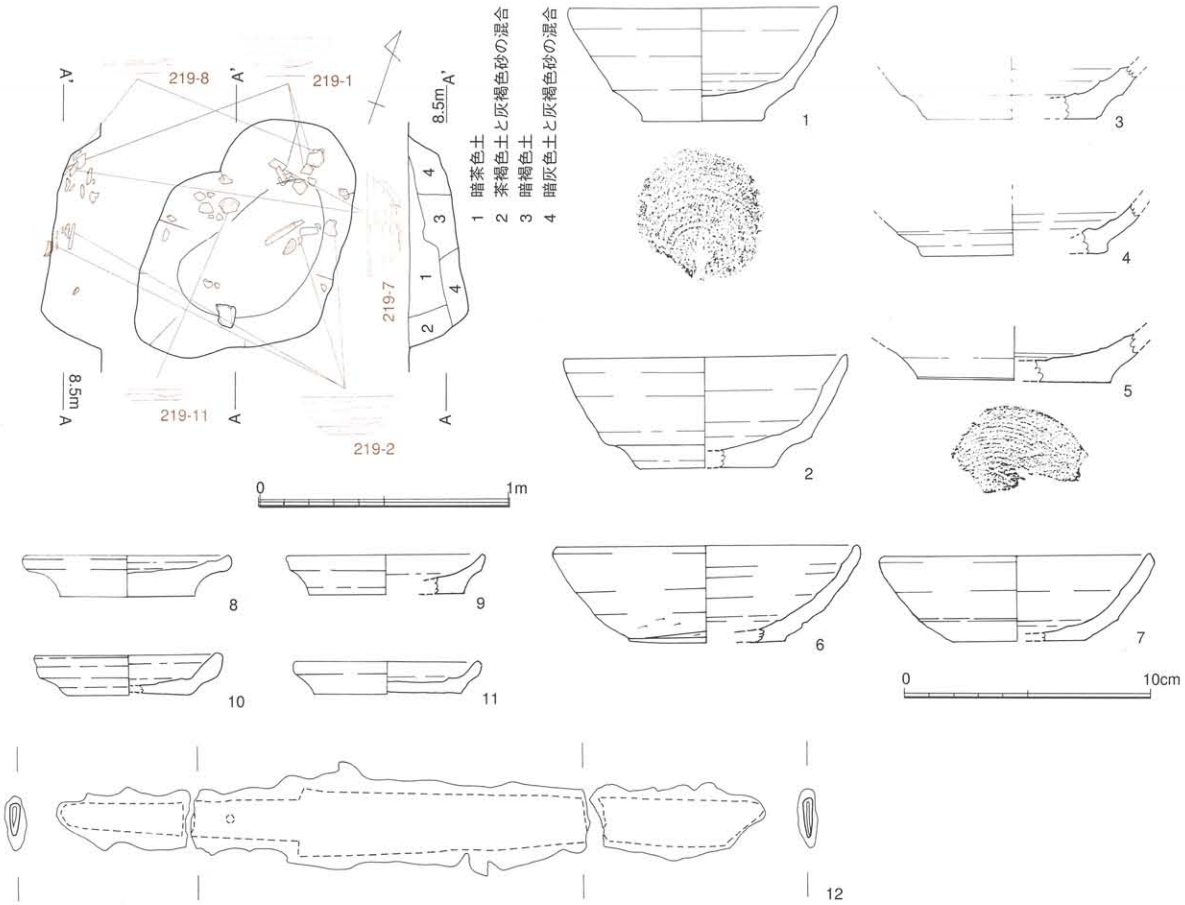
出土遺物（第２２２図９）　全長１４cm以上を測る鉄製紡錘車である。軸棒上側先端は糸をかけるためにＬ字に曲げられている。はずみ車部は直径３.９cmで下側に湾曲する碗状をなす。

年代・性格　出土した土器は小片で遺構の時期は明らかでないが、ＳＫ６２を切ることから、中世後期以降である。性格は不明である。

ＳＫ６２（第２２２図）

規模・形態　Ｅ区西側北寄りに位置し、ＳＫ６１に切られる。径４.４ｍの不整円形の中に径１.８ｍほどの楕円の落ち込み分がある２段構造をなす。深さは上段で０.４ｍ、下段で０.６ｍで、ともに断面は皿状である。茶褐色系の砂質土が堆積する。

出土遺物（第２２２図１～８）　１・２は土師質土器の皿である。共に褐色の胎土を持ち、２は若干内湾する器形である。３・４は備前焼擂鉢で、間壁Ⅲ期の所産である。５・６は小刀で５は９.６



第219図　古志本郷遺跡SK59実測図・出土遺物実測図　（遺構S=1／30　遺物S=1／3）

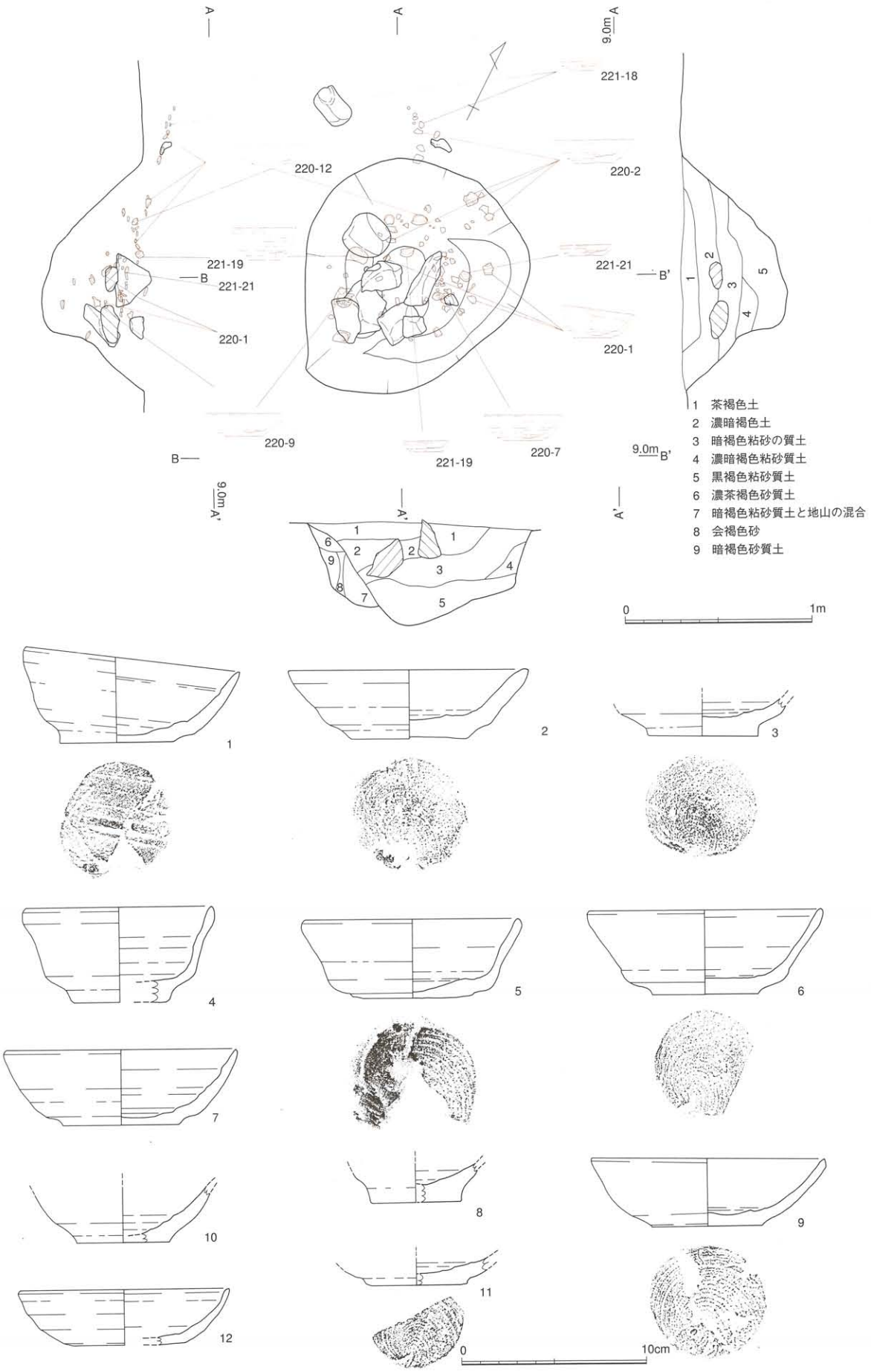
cm、６は１０.８cmが残存する。７・８は板状鉄製品である。

年代・性格　遺構の時期は土師質土器からⅣ期、中世末と考えられる。遺構の性格は廃棄土壙であろうか。Ｃ区ＳＫ２４、２８と規模、時期が一致し、同類の遺構であると考えられる。

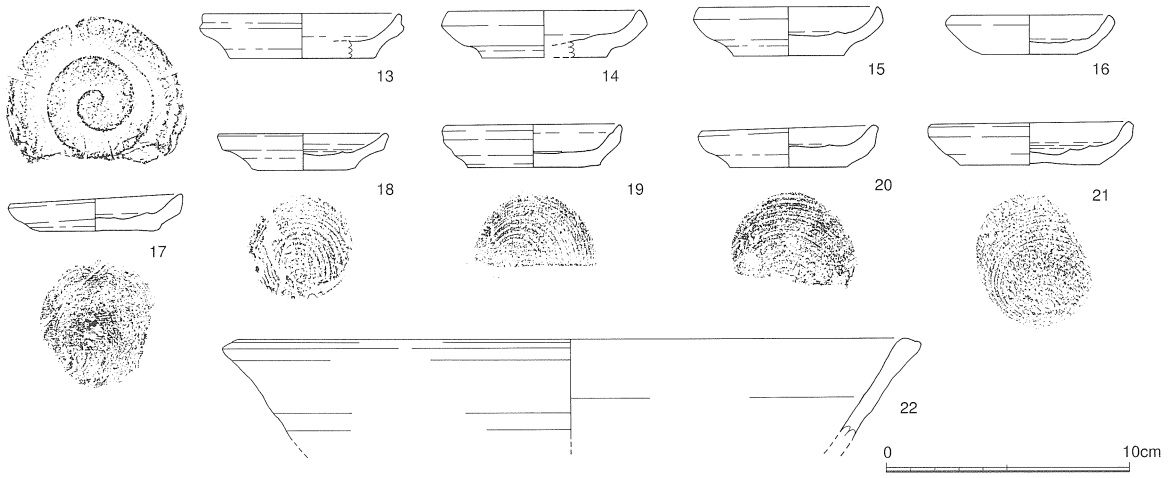
ＳＫ６３（第１９９図）

規模・形態　Ｅ区東側北辺に位置し、ＳＩ０４を切っている。土壙は上下２段に別れ、上段の規模は直径３.０ｍの円形で、深さ０.３ｍ、下段は直径２.０ｍの不整円形で、深さ０.５ｍを測る。底部の標高は７.７ｍである。暗灰褐色系の砂質土が堆積する。なお、第１９９図はＳＩ０４の形状を見るために遺構完掘状況で作成した図である。

出土遺物（第２２５図４～１３）　４は弥生土器甕口縁部で、端部を上下に拡張し、擬凹線を廻らす。頸部も器壁が厚い。５は小型丸底壷である。部外面にはハケが施され、全面に指頭圧痕が残る。６は単純口縁の壷の口縁で、内面に横方向のミガキを施す。５・６は、前述のようにＳＩ０４内に置かれていたものであろう。共に松山Ⅱ期古段階のものと思われる。７は須恵器高坏である。８は白磁の皿で底部のみ露胎とする。大宰府Ⅷ類１ｂのものであろう。９～１３は土師質土器である。９は茶褐色の胎土を持ち、内湾しつつ口縁が先細りになるもので、本報告では余り類例のないものである。１３は柱状高台である。この他鎬蓮弁を持つ青磁碗小片などが出土している。



第220図　古志本郷遺跡SK60実測図・出土遺物実測図1　（遺構S=1／30　遺物S=1／3）



第221図　古志本郷遺跡SK60出土遺物実測図2　(S=1／3)

年代・性格　ＳＫ６３の時期は、８や９・１３から中世前期後半頃に位置づけられる、中世に関して言えば、本報告中で最も古い遺構である。性格としては素掘りの井戸が考えられる。

ＳＫ６４（第２２３図）

規模・性格　Ｅ区東側に位置する。平面形は直径３ｍの不整円形で、深さ０.８ｍを測り、底部の標高は８.０ｍ程度である。暗褐色土が堆積する。

出土遺物（第２２５図１～３）　１は須恵器低脚無蓋高坏の脚である。２・３は土師質土器坏で、２は比較的良質な胎土で、口縁部のみが外反し、外側に面を持ち、本報告内では類例がない。

年代　土師質土器の出土から中世であることは疑いないが、２・３の時期が不確定であり、詳細は不明である。遺構の形態はＳＫ６３に類似し、素掘り井戸ではないかと考えられる。

ＳＫ６５（第２２３図）

規模・形態　Ｅ区東側、ＳＩ０３のすぐ北に位置する。直径１.２ｍ、同２.０ｍの土壙が連結したような形状をなすが、埋土は共有している。黒褐色土が堆積する。

出土遺物（第２２５図１４）　１４は弥生土器甕である。口縁部に凹線３条を施し、内面頸部以下もハケで調整する。

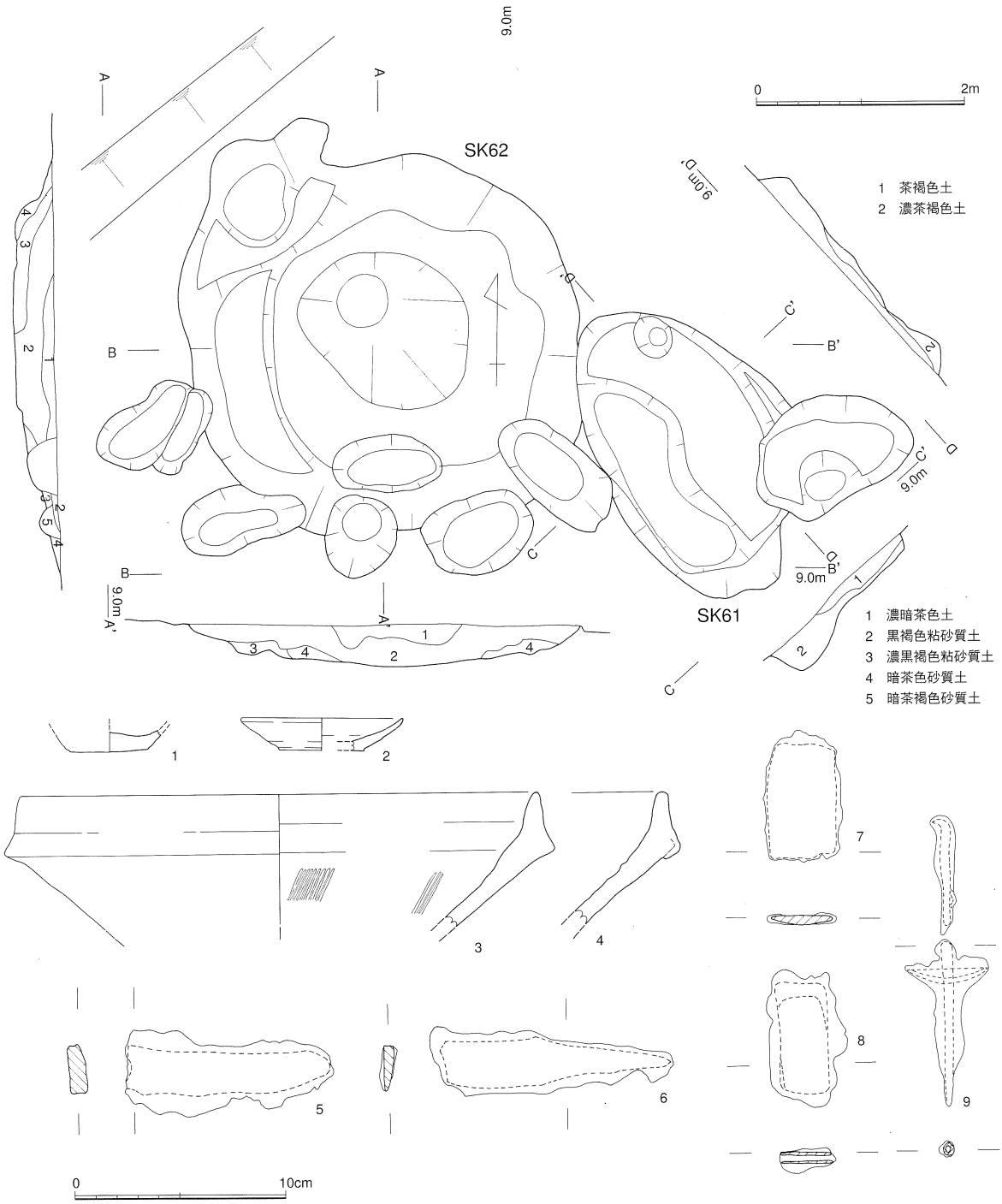
年代・性格　埋土や出土遺物から、弥生中期末の土壙と考えられる。

ＳＫ６６（第２２３図）

規模・形態　Ｅ区東側、ＳＩ０３に西接する。長径３.６ｍの楕円をなし、南側は調査区外に続いている。深さは２０～３０cm程度である。黒褐色系の土が堆積していた。

出土遺物（第２２６図１５）　１５は弥生土器広口壷頸部である。外面は上部に凹線を３条以上廻らし、その下は縦～斜行のハケで調整した後、その上に３条の平行沈線からなる綾杉文と圏線を施す。内面にもハケが施される。

年代・性格　埋土や出土遺物から、弥生中期末の土壙と考えられる。



第222図　古志本郷遺跡SK61・62実測図・出土遺物実測図　（遺構S=1／60　遺物S=1／3）

ＳＫ６７（第２２３図）

規模・形態　Ｅ区の東側、調査区南辺で検出された。規模は長径２.２ｍ、幅１.２ｍ、深さ０.６ｍを測り、断面は箱形である。黒褐色の粘質土が堆積する。

出土遺物（第２２５図１６～２０）　１６～２０はいずれも底部回転糸切りの土師質土器である。１６は小型の皿で口縁部途中がくびれるタイプである。他はいずれも大型の皿である。

年代・性格　出土遺物の内１６は土師質土器Ⅴ期の大皿に近い形態を持つ。総体は同Ⅴ～Ⅵ期、近

世前半のものと捉えられよう。性格は土壙墓と考えられる。

ＳＫ６８（２２３図）

規模・形態　Ｅ区中央南辺に位置する。ＳＫ６９を切る。規模は長辺４ｍを測る不整形で、深さは５０cm、断面は箱形である。底面は平坦で、標高は８.３ｍである。暗褐色土が堆積する。

年代・性格　出土遺物はないがＳＫ６９を切ることから古墳時代後期以降と考えられる。竪穴建物の一部である可能性がある。

ＳＫ６９（第２２３図）

規模・形態　Ｅ区中央東寄り南辺に位置し、ＳＫ６８に切られる。直径３ｍ程度の円形の平面を持ち、深さは約１ｍ、底部の標高は７.９ｍである。断面は半円形をなし、途中にテラスがある。

出土遺物（第２２５図２１～２３）　２１・２２は弥生土器甕底部、２３は須恵器坏身である。

年代・性格　遺構の時期は古墳時代後期である。

ＳＫ７０（第２２３図）

規模・形態　Ｅ区中央に位置し、長径１.８ｍの楕円形で深さは３０cmで、暗灰色土が堆積する。

年代・性格　出土遺物はなく、時期や性格は不明である。

ＳＫ７１（第２２４図）

規模・形態　Ｅ区中央に位置し、長径１.２ｍ深さ、０.５ｍの楕円形の土壙である。

年代・性格　出土遺物はなく、年代は不明であるが、埋土から近世のものと推察される。

ＳＫ７２（第２２４図）

規模・形態　Ｅ区中央北辺に位置する。１辺２～３ｍの三角形で、深さは０.８ｍほどである。堆積土は第１・２層と３・４層の２期に別れ、時期の異なる二つの土壙が重なっていると見られる。底部の標高は７.９ｍである。

出土遺物（第２２６図２４）　２４は上下に口縁部を拡張する弥生土器甕である。ただし、前述の２期のいずれかから出土したのかは記録できなかった。

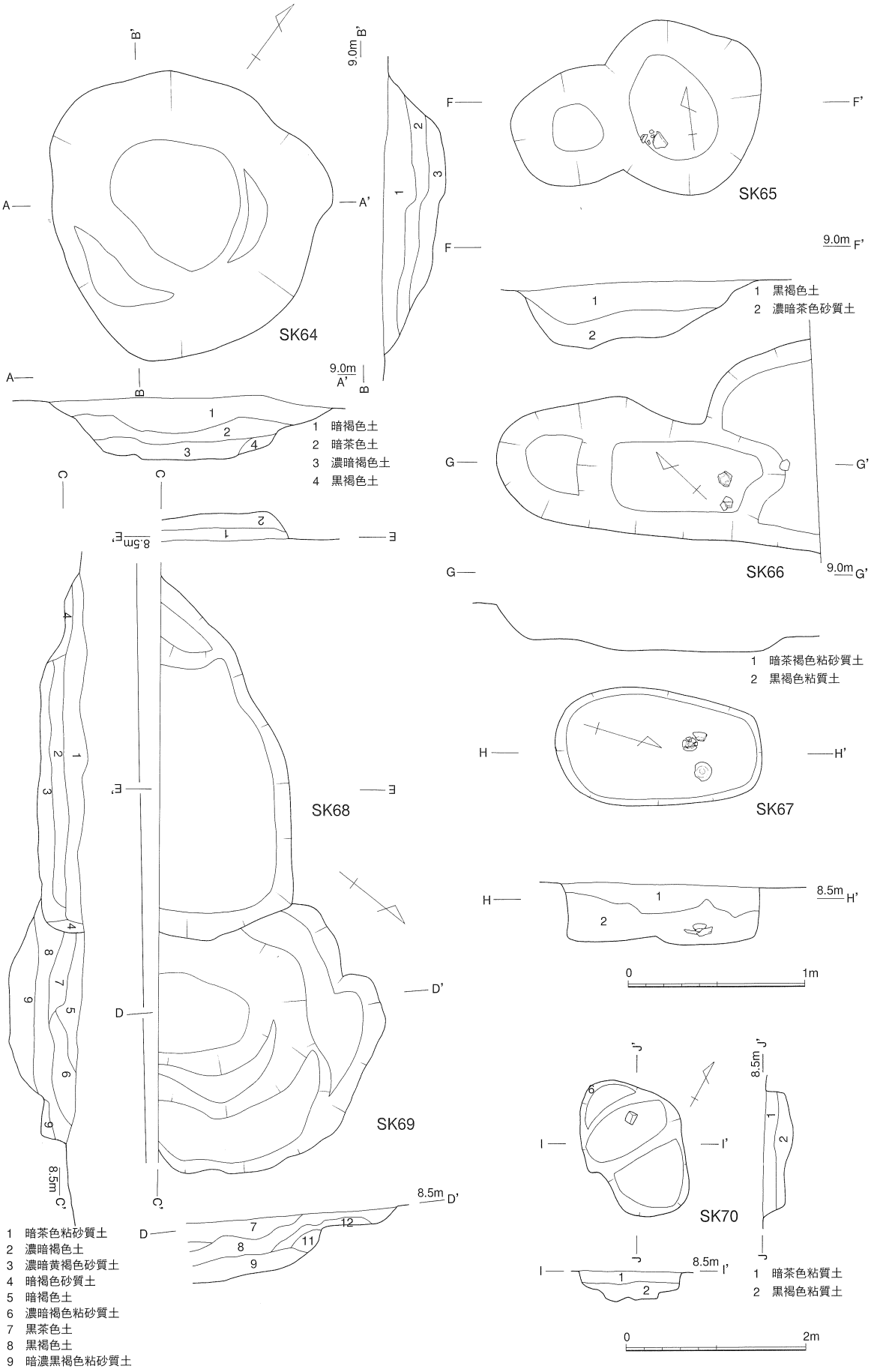
年代・性格　出土遺物から２時期の遺構のどちらかの時期は弥生時代中期末と考えられる。素掘り井戸であろうか。

ＳＫ７３（第２２４図）

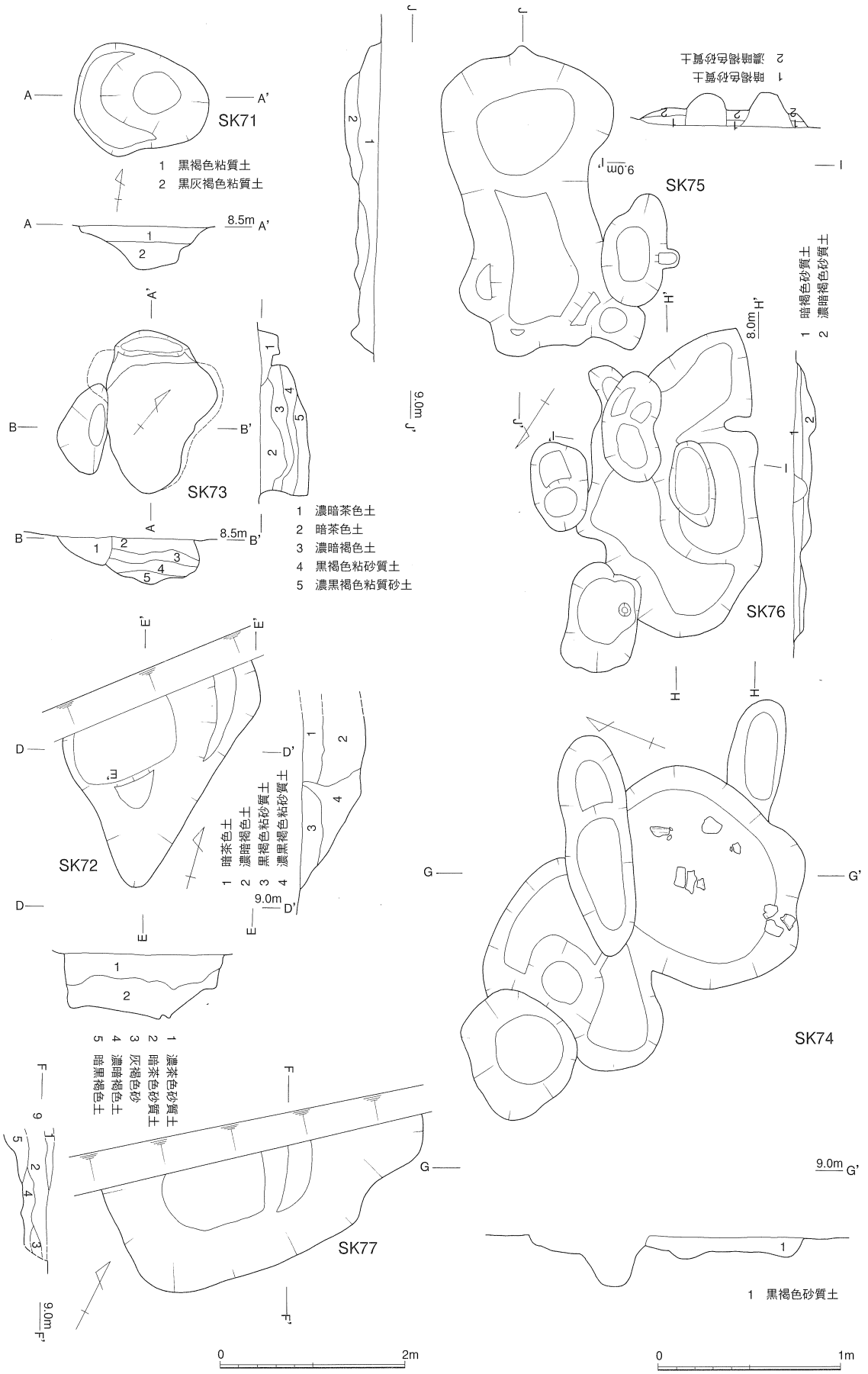
規模・年代　Ｅ区中央北辺に位置する。規模は長径１.８ｍの、短径１.４ｍ、深さ６０cmで、断面は袋状である。暗褐色系の土が堆積する。出土遺物はなく、年代性格は不明である。

ＳＫ７４（第２２４図）

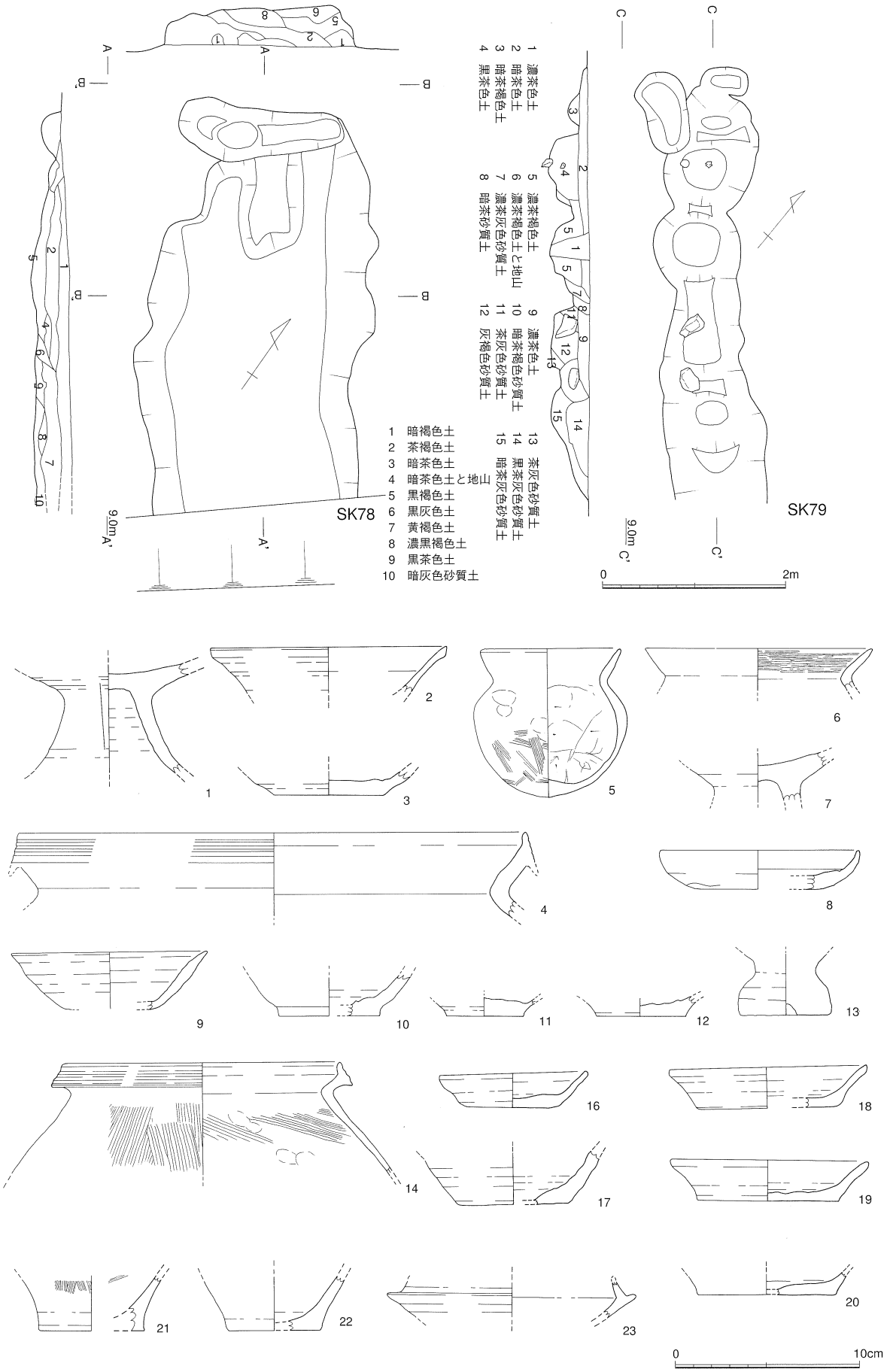
規模・形態　Ｅ区中央西より南側に位置する。径１～１.２ｍ、深さ１０cm程度の不整形土壙が重なっている。黒褐色土が堆積する。



第223図　古志本郷遺跡SK62～77実測図1　（S=1／60　SK65～67のみS=1／30）



第224図　古志本郷遺跡SK62～77実測図2　（S=1／60　SK74のみS=1／30）



第225図　古志本郷遺跡SK62～77実測図2　出土遺物実測図1　(S=1/3)

出土遺物（第２２６図２８～３０）　２８～３０は弥生土器甕である。いずれも口縁を上側に拡張する。２９は内面頸部にハケを施す。

年代・性格　出土遺物は松本Ⅳ－２様式のもので、遺構の年代もこの時期になろう。

ＳＫ７５（第２２４図）

規模・形態　Ｅ区西側中央に位置する。長辺３.２ｍ、短辺１.８ｍの楕円形で、深さは２０cmを測る浅い土壙である。暗褐色土が堆積する。ＳＡ０４に切られる。

出土遺物（第２２６図２５）　２５は弥生土器甕である。しかし、遺構からは土師質土器小片も出土している。

年代・性格　出土遺物から遺構の時期は中世になる。性格については明確ではないが、Ｃ区ＳＫ２４・２８、Ｅ区ＳＫ６１・６２などと同じ、浅く平坦な遺構である。

ＳＫ７６

規模・形態　Ｅ区西より中央に位置し、ＳＫ７５に南接する。南側は長径１.８ｍ、深さ０.４ｍの楕円形をなし、北側は長さ１.５ｍ、幅１.０ｍ、深さ０.２ｍの長方形をなす。ただし、上層の埋土は共有している。埋土は暗褐色土である。

出土遺物（第２２６図２６）　２６は茶褐色の胎土を持ち、底部回転糸切りされる土師質土器の皿で、土師質土器Ⅰ期のものである。

年代・性格　２６から遺構の年代は中世後期前半と考えられる。ＳＫ７５同様、ＳＫ６１・６２と形態的に類似する。

ＳＫ７７（第２２４図）

規模・構造　Ｅ区西側北辺に位置する。長径３.６ｍを測る不正の長方形状をなし、北側は調査区外に続いていた。堆積土は暗褐色土が中心であるが、地山灰褐色砂の流入（３層）も見られる。深さは０.６ｍで、底部の標高は８.６ｍ前後である。

年代・性格　出土遺物なく、遺構の年代・性格などは不明である。

ＳＫ７８（第２２５図）

規模・構造　Ｅ区西側に位置する。規模は完掘状況で幅２.３ｍ、長さ４ｍを検出し、北側は二股に別れ、南側は調査区外に続いている。

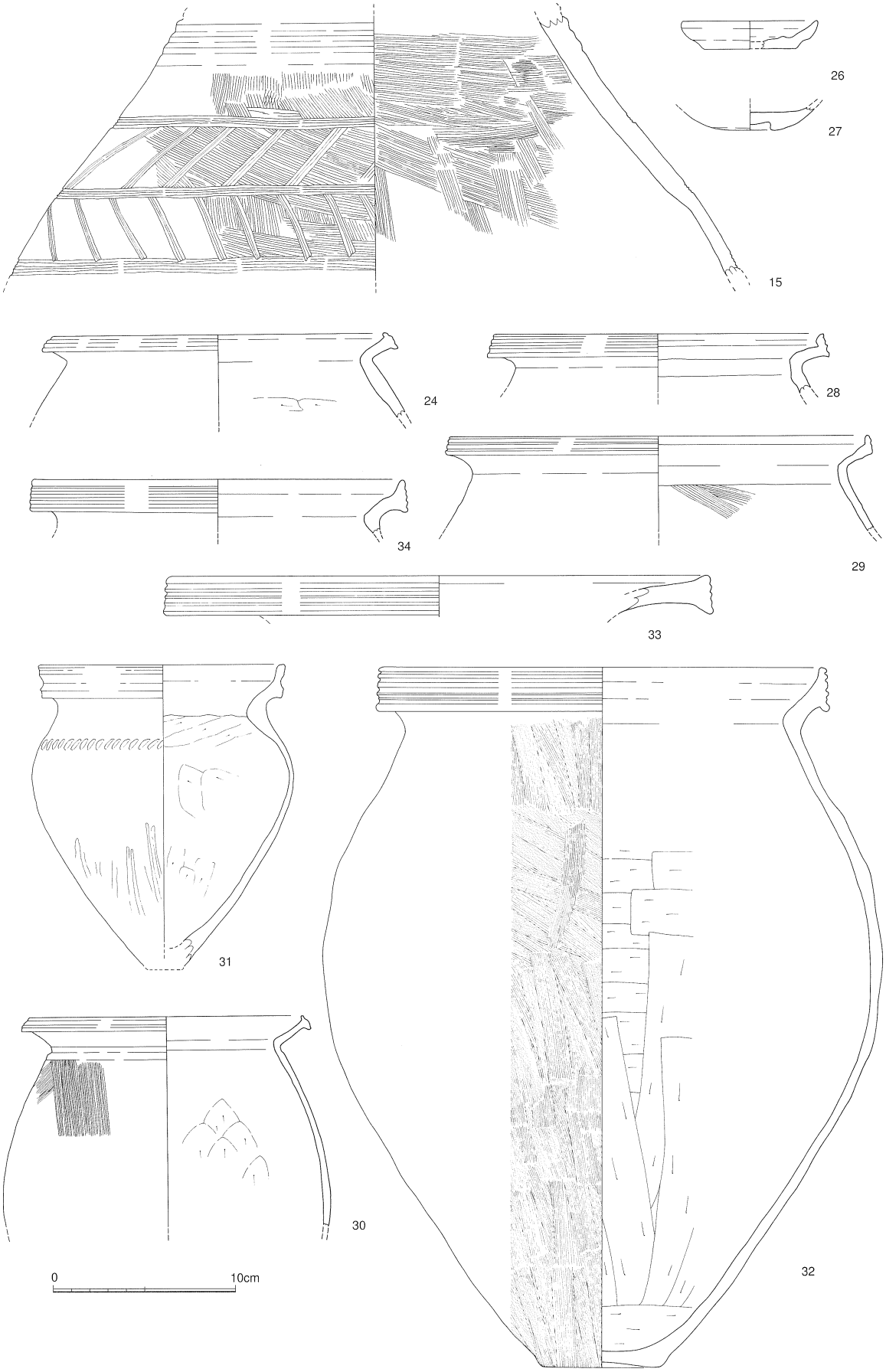
土層堆積状況　堆積土は上層（１～６層）と下層（７～１０層）に別れ、前者は後者を切っていることから、南側（下層）が埋まった段階で、北側（上層）に拡張再掘削されたものと思われる。埋土に地山灰褐色砂が多く含まれている。

出土遺物（第２２６図２７）　２７は碁笥底の白磁皿で、森田勉氏の分類のＥ類に当たる。

年代・性格　出土遺物からＳＫ７９の時期は、１６世紀代と見られる。性格は不明である。

ＳＫ７９（第２２５図）

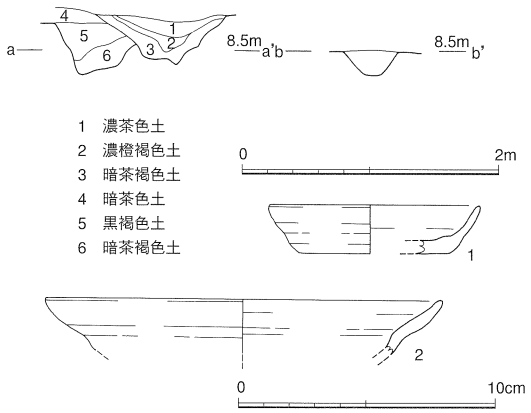
規模・構造　Ｅ区南西隅に位置する。長さ４.５ｍ程を検出し、南側は調査区外に続いている。遺は



第226図　古志本郷遺跡SK61～77出土遺物実測図2・X地点出土遺物実測図　(S=1／3)

ＳＢ２５の柱穴のように連続土壙状をなし、明らかに柱根が残る部分もあった（４層）。深さは最大で５０cm程である。

土層堆積状況　前述のように、複数のピットが切り合う形で検出され、４層には直径１０cm程度の柱根が残る。１層も柱痕跡と考えられる。一方、１０層、１１層で確認される石は、底部から浮いており、礎盤などとは考えづらいものである。



第227図　古志本郷遺跡SD42～44土層図・出土遺物実測図　（土層S=1／60 S=1／3）

Ｚ地点出土遺物（第１９６図）

出土の概要　Ｄ区西南端に近い、ＳＫ７８とＳＫ６０の柱間地点付近（Ｚ地点）の地山直上から、数個体分の弥生土器が出土している。この部分は地山標高が高く、原表土が低い部分で包含層が薄く、竪穴建物の痕跡を飛ばしてしまった可能性もある。なお、周辺にはピットが多数あるが、これらピットから竪穴建物を積極的に復元することも出来なかった。

出土遺物（第２２６図３１～３３、第１６９図１・２）

第２２６図３１～３３は弥生土器である。３１は底部のみ復元できなかった、口径１３.４cmの小型の甕で、口縁部は外傾し、肩部に列点文を施す。３２は底部まで部分的に復元できた甕で、口径２３.６cm、器高３７.９cm底径６.２cmを測る外面は底部からの縦ハケを施し、内面は底部から体部までは縦方向のケズリ、体部からは横方向のケズリを施す。口縁部外面には擬凹線５条が廻らされ、頸部の器壁も厚い。３３は広口壺の口縁部で、端部に凹線４条が施される。第１６９図１・２は編集時に誤ってＳＩ０２出土遺物としてしまったが、Ｚ地点出土の土器である。１・２共に弥生土器甕で口縁部は断面三角形状を呈し、内傾し１は内面にハケを施す。

遺物の年代　出土遺物は松本Ⅳ－２様式から、同Ⅴ－１様式、草田２期までが含まれており、このことからすると、Ｚ地点は土器溜り、あるいは廃棄土壙のようなものであった可能性もある。

Ｆ、溝

ＳＤ４２（第１９６・２２７図）

規模・形態　上幅１ｍ、深さ０.５ｍを測り、南東－北西に存在する。茶色系の土が堆積する。

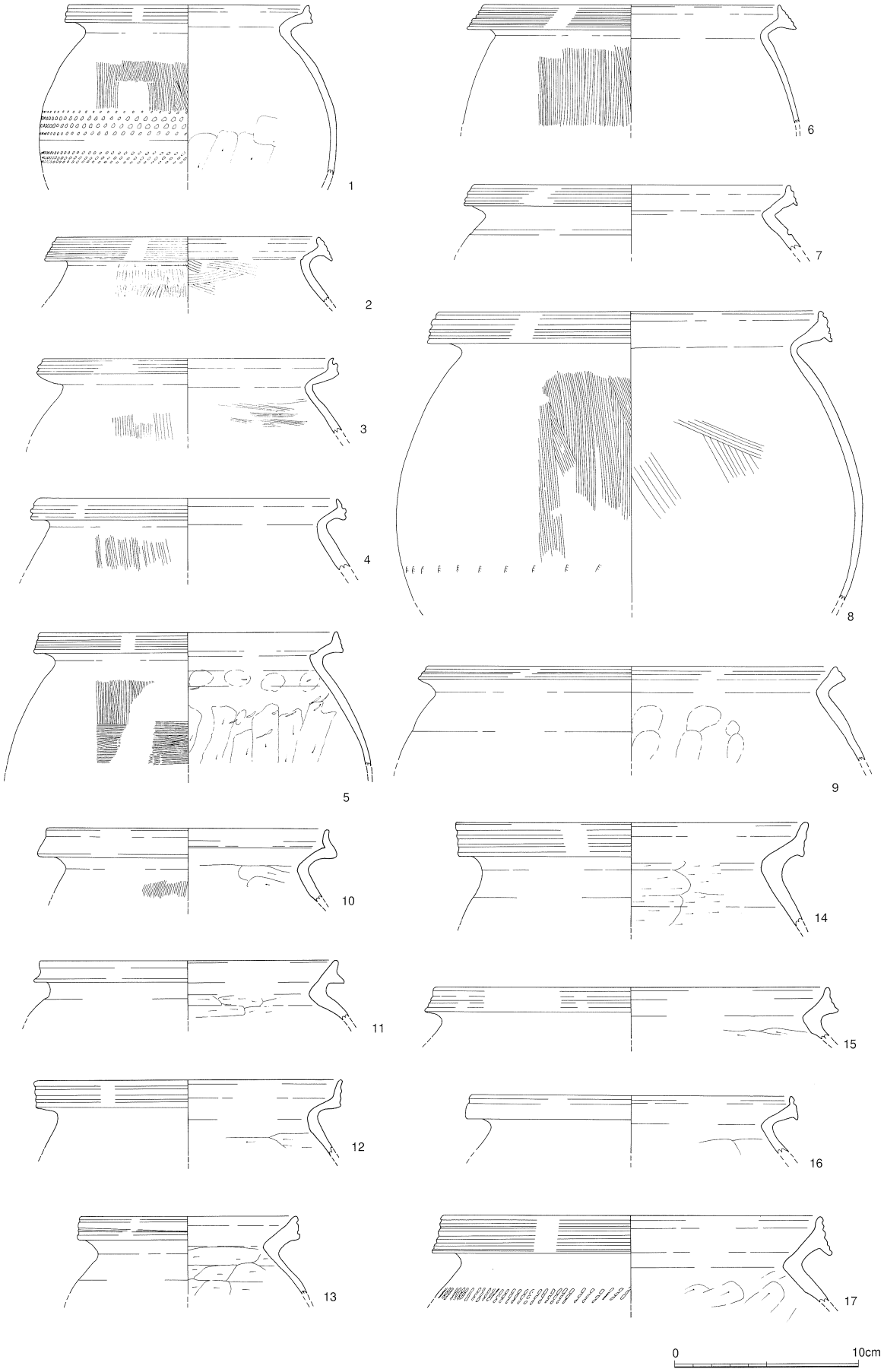
年代・性格　出土遺物はなく、年代、性格は不明である。

ＳＤ４３（第１９６・２２７図）

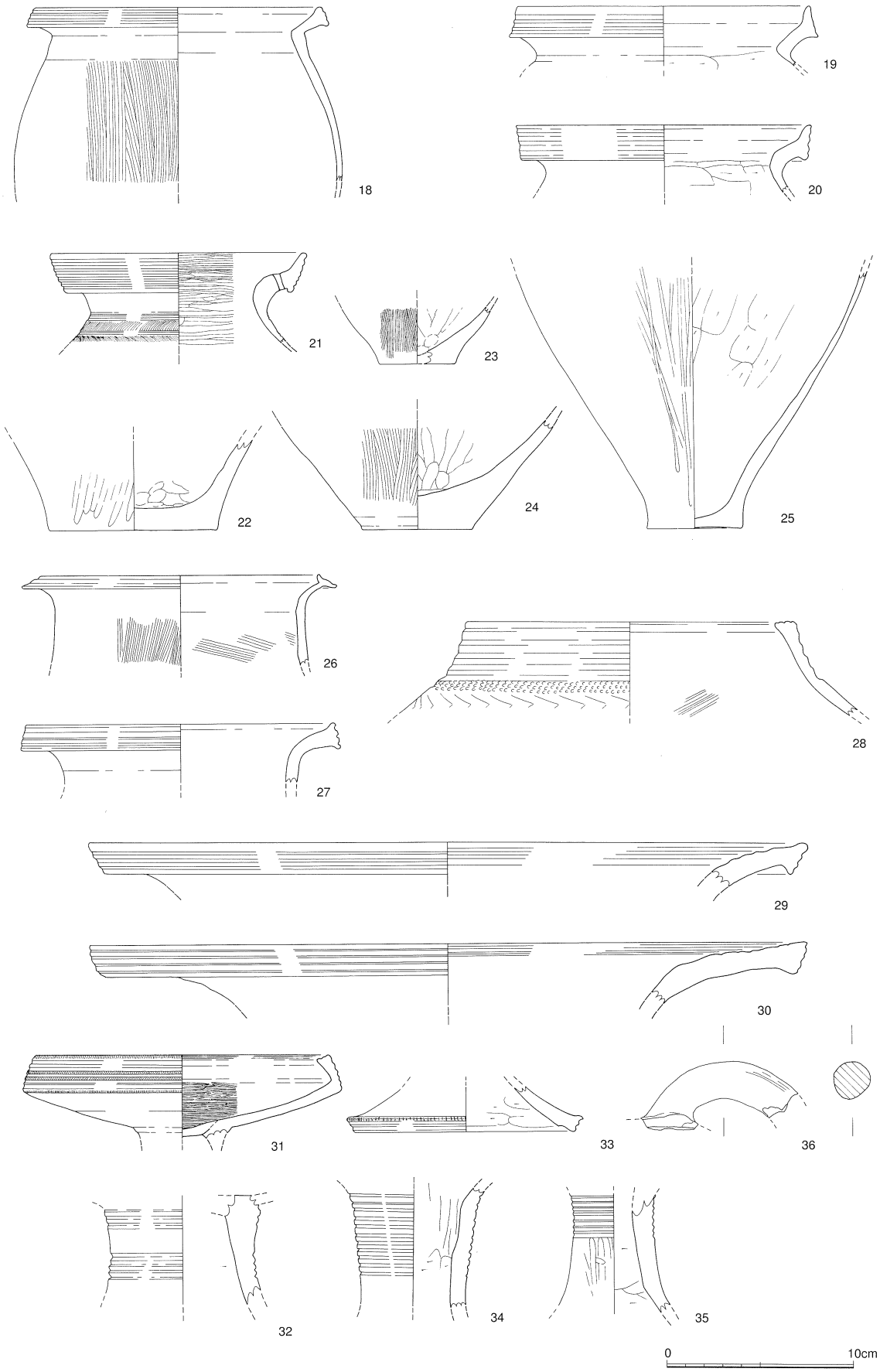
規模・年代　上幅現存０.５ｍ、深さ０.４ｍを測る。調査区北区から南へ２ｍほどの地点で途切れる。ＳＤ４２に切られる。出土遺物はなく、時期・性格は不明である。

ＳＤ４４（第１９６・２２７図）

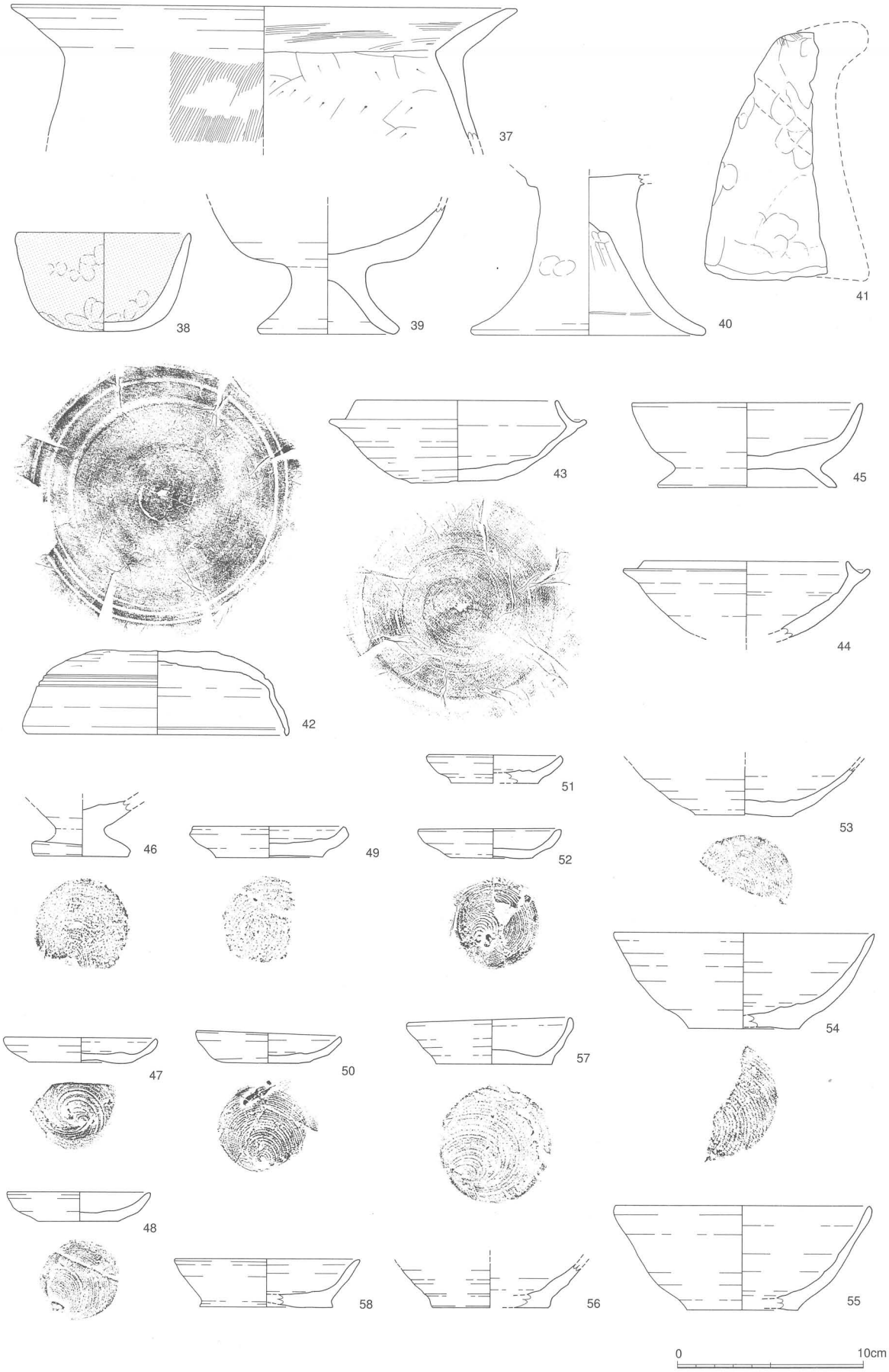
規模・形態　上幅０.４ｍ、深さ０.２ｍを測り、南東－北西に存在する。



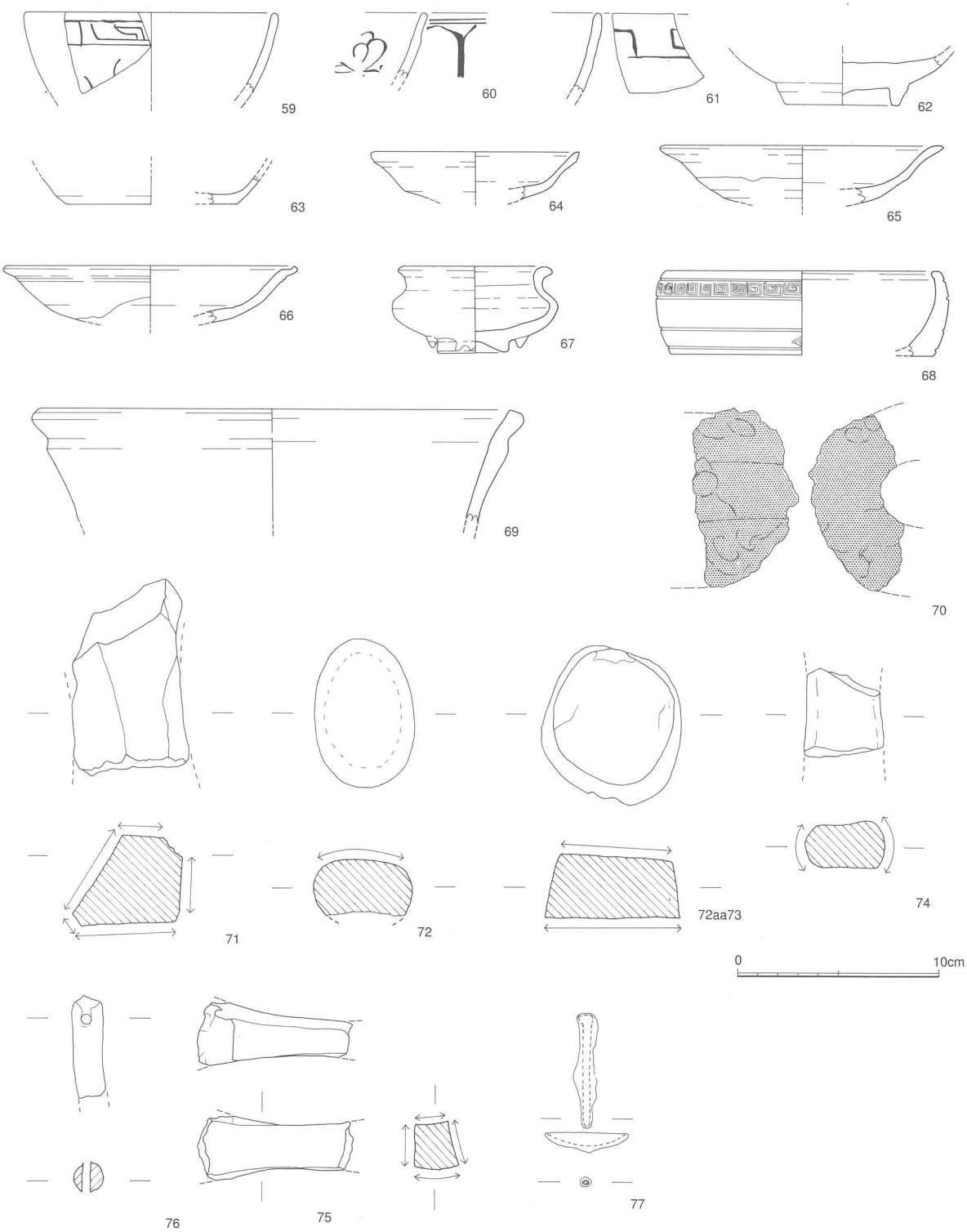
第228図　古志本郷遺跡E区出土遺物実測図　(S=1／3)



第229図　古志本郷遺跡E区出土遺物実測図　(S=1／3)



第230図　古志本郷遺跡E区出土遺物実測図　(S=1／3)



第231図　古志本郷遺跡E区出土遺物実測図　(S=1／3)

出土遺物（第２２７図１・２）　１はⅥ期の土師質土器で、２は肥前系陶器の皿である。

年代・性格　遺構の年代は出土遺物から近世と考えられる。

Ｅ区調査区出土遺物（第２２８～２３１図）

第２２８～２３１図にはＥ区調査区出土の遺物のうち、代表的なものを掲載した。１～２１は弥

生土器甕である。１、３～５は口縁端部を上方に拡張し、２・７・８は上下に拡張するものである。いずれも外面は縦ハケを施し、５のみが横ハケも施す。１は体部最大系付近に３～４点一セットの列点文を２条廻らしている。内面は、１は体部下方までケズリ、上方はナデ、４・６・８が上方をナデとし、２・３・８はハケを施す。また、５には爪痕が残る。９は口縁部の拡張が不十分なものである。１０・１１は口縁部に凹線・擬凹線のみえないもので、１１はやや直立気味の頸部を持つ。・１３・１５・１７・１８は口縁端部の断面が三角形状をなすものである。１２・１４・１９・２０・２１は口縁部を上側に拡張させ、直立または外反させるものである。２１以外は皆内面頸部までケズリが及んでいる。２１は外面肩部に沈線とノの字状の刺突文を施し、内面は頸部下端まで丁寧なミガキを施すもの。口縁部には焼成前穿孔が行われ、台付甕の可能性がある。２２～２５は甕底部である。２２・２５は外面にミガキを施し、２４はハケを施す。２６・２７は壷の頸部である。２６は外面に縦ハケ、内面に横方向のハケを施す。２８は直口壷である。やや内傾した頸部を持ち、凹線４条が廻らされる。その下に列点文、櫛状工具による羽状文が施される。内面には若干のハケが残る。２９・３０は広口壷で、２９は口縁上面に４条の凹線文が、３０には同５条が施される。３１～３５は高坏である。３１は口縁部に凹線５条を廻らし、上端下端に刻目文を加える他、凹線間の山の部分にもそれぞれ別個に刻目を施すもので、第１９１図３と同様である。３２～３５は脚上部で、３２は最小部分で径８cmを測る大型品である。３６は把手である。いずれも１区あるいは２区の凹線文帯を持つ。以上の弥生土器は松本Ⅳ－１様式から草田２期の間に収まる。

３７～４０は土師器である。３７は甕で、水平近くまで口縁が外反するもので、口縁部内面にもハケを施す。３８は手捏ねと思われる碗で、内外面を赤彩する。指頭圧痕が全面に残る。３９・４０は高坏である。４１は頂部に２突起をもつ土製支脚で、背部上面から内部下方に向かって径１.５cm程度の孔が貫通する。４２・４３は須恵器蓋坏と坏身で、同じ場所から完形で出土した（図版７９）。４２は頂部にやや雑なケズリを施すもので、内面は口縁端部に段を持つ４３は底部にケズリを施すものである。ともに、大谷出雲Ａ４類の坏で、同４期のものであろう。４４は底部が不明であるが、４３より時代の降るものである。４５は高台のある須恵器坏である。

４６～５５は土師質土器である。４６は柱状高台。４７～５２は荒い茶褐色の胎土を持つもので、底部脇をなでて絞るもの（４８・４９・５１・５２）、体部が外反し口縁部が丸く立ち上がるもの（４７・５０）がある。５３～５６は坏である。いずれも茶褐色の胎土を持ち、底部脇を絞るものである。以上は土師質土器Ⅰ・Ⅱ期の所産である。５７～５８は土師質土器Ⅵの大皿であろう。

５９～６４は輸入陶磁器である。５９・６１は口縁部に雷文を廻らす青磁碗で、上田Ｃ－Ⅱ類のものである。６０は外面に丸彫り線描蓮弁を持ち、内面にも陰刻する。上田Ｂ－Ⅲ類に該当する。６３は白磁皿で底部全面施釉するものである。大宰府Ⅷ類に含まれよう。６４は李朝と思われる皿で、濃灰色の釉に黒・白斑が混じる。この他、天目碗・同安窯系青磁碗・瀬戸美濃系陶器皿が出土している。６５～６７は肥前系陶磁器である。６５・６６は溝縁皿、６７は青磁の香炉である。６８・６９は瓦質の鉢で、６８は口縁部に雷文、底部近くに菱形文を持つ。７０は羽口で、推定３cm程度の送風管を持つ。７１～７５は砥石である。７４は内磨き砥石の同様両側面に研面を持つが、目は粗く、玉作に使われたものではない。７６は棒状土錘である。７７は鉄製紡錘車で、直径４cm程度の内湾する円盤状のはずみ車と、上部に糸を結びつけるＬ字を部分を有する心棒からなる。また鉄滓も出土する（図版１４９）。

註

第１節

（１）土師質土器の編年は第３章まとめで行ったものによる。

（２）草戸千軒町遺跡では、不整形、護岸施設なしの池と考えられる遺構が多数見つかっており、ＳＫ１０もそれに準ずるものと考える（『草戸千軒町遺跡発掘調査報告書Ｖ』〔広島県草戸千軒町遺跡発掘調査研究所編　１９９６年〕）。

（３）弥生土器の擬凹線については池渕俊一「まとめ」（『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡』島根県教育委員会　１９９８年）の分類に従った。

（４）松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」（『島根考古学会誌』８　１９９１年）。

（５）島根県教育委員会『大角山遺跡』１９８８年。

（６）島根県教育委員会『富田川河床遺跡Ⅲ』１９８３年。

（７）同上。

第２節

（８）島根県教育委員会『高広遺跡』１９８４年。

（９）川原和人・桑原真治「島根県斐川町西石橋遺跡の中世墓」（『古文化談叢』１８）１９８７年。

（１０）島根県教育委員会『陽徳遺跡・平ラⅠ遺跡』　１９９５年。

（１１）八峠興「山陰における中世土器の変遷について」（『中近世土器の基礎的研究＝』）１９９８年。

第３節

（１２）秋山浩三「黒斑等の遺物属性からみた土師器焼成遺構」（『古代の土師器生産と焼成遺構』真陽社１９９７年）。

（１３）木立雅朗「土師器焼成坑の分類」、森隆「中世土師器・瓦器の焼成窯」（共に前掲註１２書）。

（１４）上田秀夫「１４～１６世紀の青磁碗の分類について」（『貿易陶磁研究』２　１９９２年）。

（１５）間壁忠彦『備前焼』ニュー・サイエンス社　１９９０年。

（１６）松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社　１９９２年。

（１７）次山淳「初期布留式土器の西方展開」『古代』１０３　１９９７年。

（１８）柳遺跡階段状遺構出土遺物、山持川川岸遺跡に類似のものがある。島根県教育委員会『塩津丘陵遺跡群』１９９８年。出雲市教育委員会『山持川川岸遺跡』１９９６年。

（１９）前掲註１８書。ただし、大きさは山持川川岸遺跡のものが一回り大きい。

（２０）島根県教育委員会『勝負遺跡・堂床古墳』１９９８年。ただし、時期的には勝負遺跡のものはやや降る。

（２１）松山智弘前掲論文。

（２２）これら遺物の年代については、岩橋孝典氏に教示を得た。

（２３）次山淳前掲論文。同「波状文と列点文」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所１９９５年。

（２４）これらの遺物の年代については、次山淳・岩橋孝典両氏に教示を得た。

（２５）出雲市教育委員会『上長浜貝塚』１９９６年。

（２６）前掲註２５書。

第４節

（２７）出雲市教育委員会『出雲市の寺々（上）』１９９３年。

第５節

（２８）池渕俊一前掲註３。

（２９）太宰府市教育委員会「大宰府条坊跡Ⅱ」（『太宰府市の文化財７』１９８３年）。同「大宰府条坊跡Ⅲ」（『太宰府市の文化財８』１９８４年）。

第3章まとめ

第3章まとめ

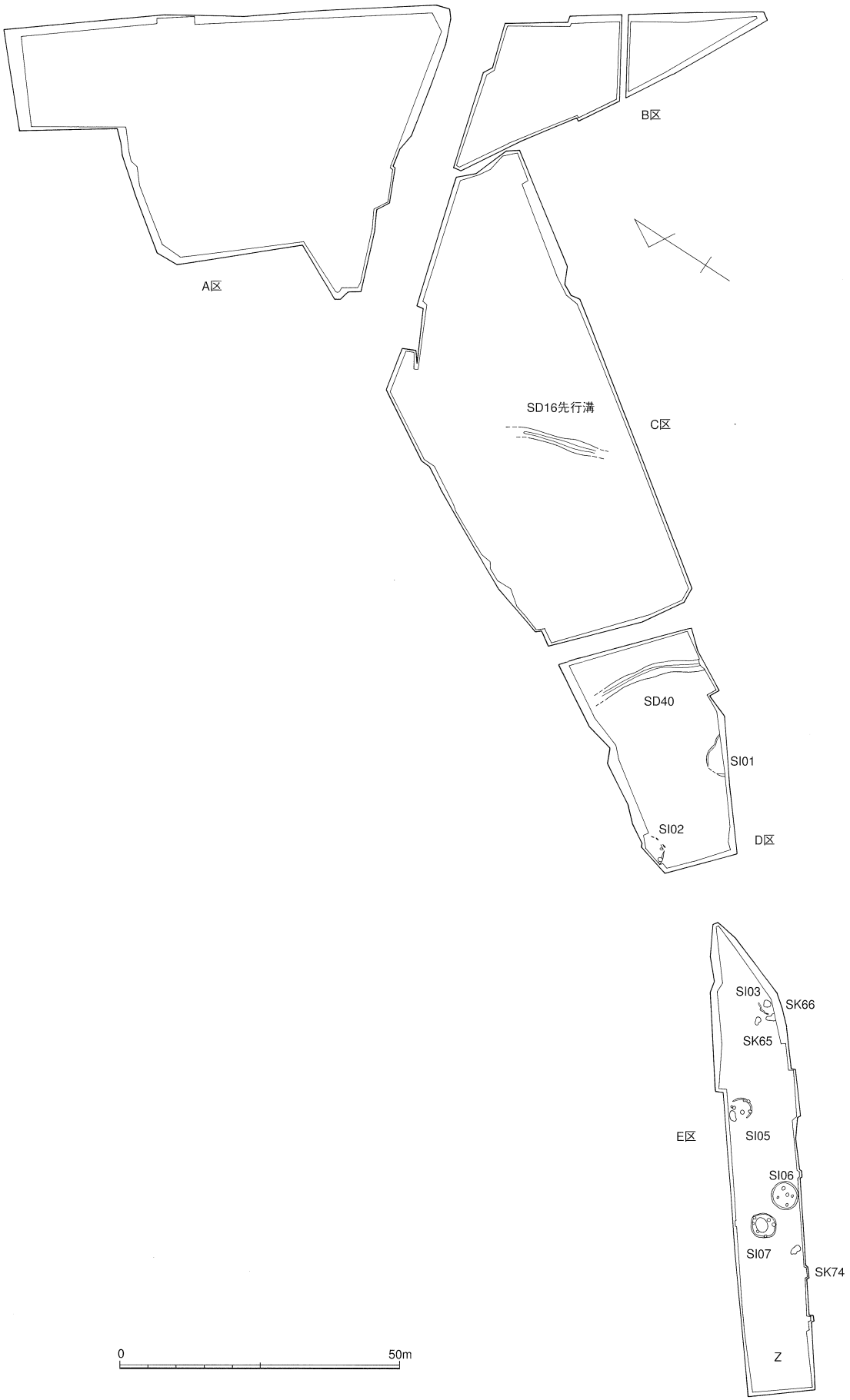
はじめに　平成７～８年度における島根県埋蔵文化財調査センターの古志本郷遺跡の発掘調査では、第２章で述べたように弥生時代～中世・近世にいたるまでの各種の遺構、遺物が検出された。本章では、各時代ごとに、調査区内の遺跡の特徴をまとめてみたい。ただし、本報告は古志本郷遺跡の一部であることや、隣接する下古志遺跡群の調査が行われていることなどから、いずれの時代においても遺跡総体の性格などについて言及するものではなく、調査区内の様相のみの報告であることをあらかじめ断っておく。

第１節　弥生時代の中期後半～後期前半の様相[(1)]（第２３２図）

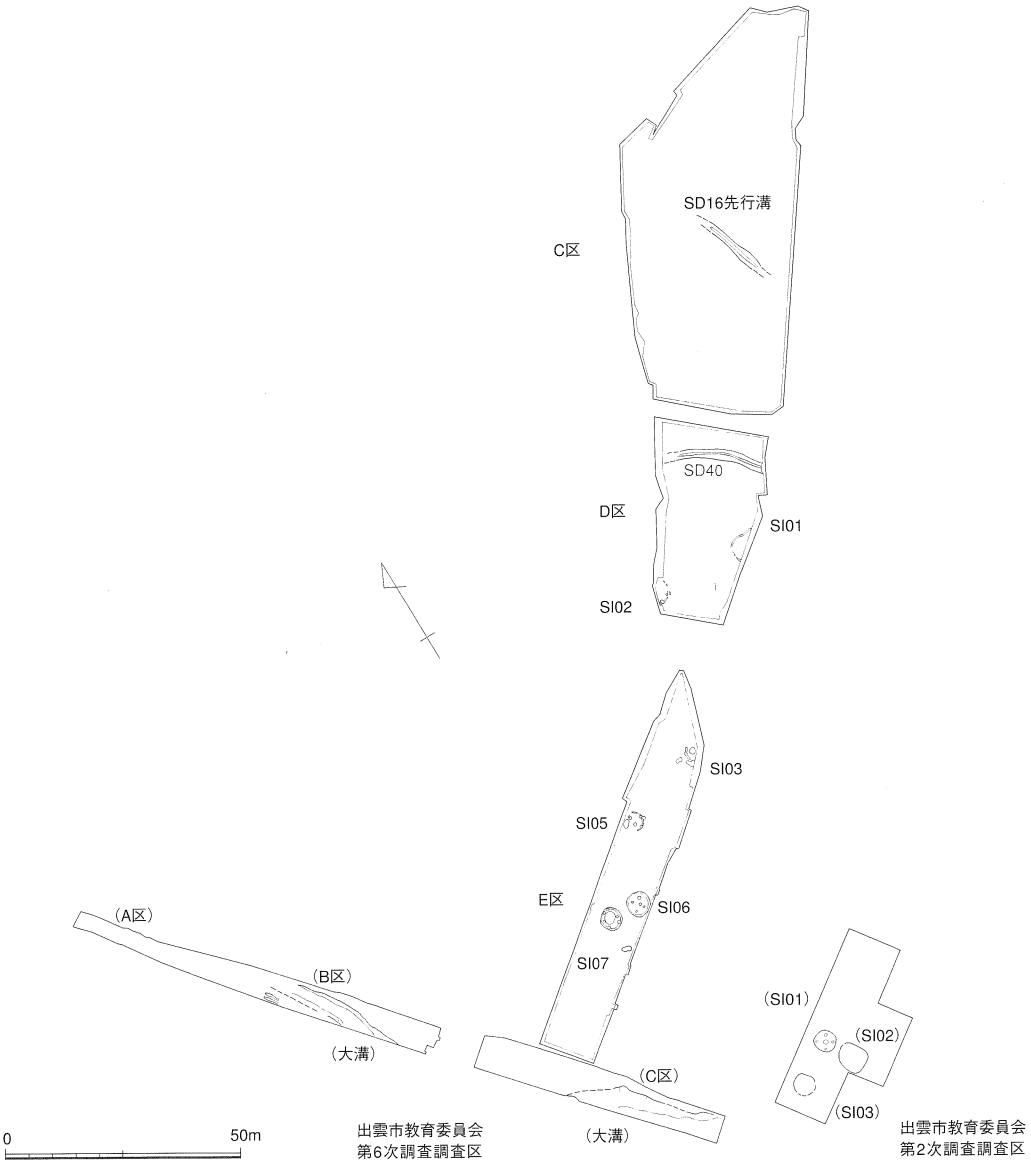
集落の範囲　弥生中期末～後期初頭という時期の遺構・遺物は、今回の調査で検出した遺構・遺物のうちで最も古い一群である。Ａ区では縄文土器、Ｃ区では弥生前期の土器が出土するが、いずれも１点のみで、遺構にも伴わない。最初に調査区の全体的な傾向を述べれば、明らかに弥生中期後半～後期初頭と考えられる遺構はＥ・Ｄ区に集中しており、本報告で扱う範囲内ではＥ・Ｄ区に限られるといってよい状況である。Ａ区ＳＫ０６などからもこの時期の遺物が出土してはいているが、調査区出土遺物をみると、Ａ～Ｃ区がＥ区に比して量的に大きく異なることが明らかである。

さらに、Ｄ区のＳＤ４０からは松本Ⅳ－２の土器が出土しており、この溝が当該期の集落におけの東を限る区画溝の一つであった可能性は高い（ＳＤ１６先行溝については後述）。一方西側については、市道本郷新宮線以西については出雲市教育委員会による下古志遺跡群の調査の成果を得てあらためて検討する必要があるが、Ｅ区に西接する同市教育委員会の古志本郷遺跡第６次調査区（第２３３図[(2)]参照）で、上幅４.０ｍ、深さ１.０ｍを測る大溝が検出されている（表４参照）。以下大溝の概略を述べれば、４回以上の掘り返しが認められ、最下層からは松本Ⅳ－２様式の土器が出土して、特に同調査Ｃ区では今回報告のＥ区よりの東側肩から松本Ⅳ－２様式の土器が出土している。この大溝が本報告Ｄ・Ｅ区で検出された弥生中期末～後期初頭の集落と関係することは明らかであろう。ただし、ＳＤ４０と大溝の最初の掘削段階（第Ⅵ層）は底部標高が前者７.４ｍ、後者７.０ｍと異なっており、存続時期もＳＤ４０は中期末には埋まっているので異なっており、両者の機能は別と考えるべきである。また、Ｃ区大溝ＳＤ１６・１７（第２３４図）の掘削開始時期は不明であるが、ＳＤ１６・１７の掘削時期がこの時代まで遡れば、これらが第６次調査の大溝に対応する可能性もある。一方、Ｅ区の南側では同じく出雲市教育委員会によって、当該期の竪穴建物３基、溝などが検出されており、集落はさらに南に広がっていたことが知られる。[(3)]

竪穴建物の形態　合計９棟の竪穴建物はいずれも円形で、ＳＩ０６・０７以外は検出状況が不良で正確な大きさは測り難いが、おおむね直径５ｍ～６ｍの範囲に収まる。ただし、ＳＩ０５のみは小型で、直径４.８ｍ程度である。柱は確認されているものでは４本（ＳＩ０６・０７、第２次調査ＳＩ０１）と[(4)]、２本（ＳＩ０５）で、前者は主柱穴と考えられる掘り方の深いものと、浅いものが建物の中心に対向する位置に各々２本セットになっている。ＳＩ０３の深さの異なる二つの柱穴も、この類型であろう。ＳＩ０５は小型であるため柱穴が２本であったと推定される。また、上屋構造は不明ながら、壁体溝上に小柱穴を多数並べる形態のものが見られた（ＳＩ０５・０７）。



第232図　古志本郷遺跡　弥生中期後葉～後期前葉遺構配置図（S=1／1000）



第233図　古志本郷遺跡　D・E区周辺遺構配置図　(S=1／1500) ※（）は出雲市教育委員会の遺構名

竪穴建物の同時併存　上述の範囲（出雲市調査分も含める）における当該期の遺構としては、竪穴建物９棟、土壙３、土壙墓１が検出されている。これらの中心となる竪穴建物は切り合い関係のあるものがなく、併存関係については明らかでない点が多い、しかし次に挙げる点から、すべてが同時併存していたとは思われず、一部建物には同時併存しないものがあったと見られる。

１　ＳＩ０５床面出土の遺物（第２０２図５）が、ＳＩ０７に切られる土壙出土の遺物と接合することから、ＳＩ０５➡ＳＩ０７の時期差が考えられる。

２　出雲市第２次調査で検出したＳＩ０１・０２の距離は約１ｍしかなく、同時併存でない可能性がある。ＳＯＩ０６・０７についても同様である。

なお、建物床面から出土する土器は、ＳＩ０７を除いて松本Ⅳ－２様式に収まり、出土遺物から細分することは困難である。

廃棄後の竪穴建物　その一方で、ＳＩ０５の北西土壙や、ＳＩ０６、０７の埋土からは松本Ⅴ－１様式、草田２期までの遺物が出土しており、調査区からも同様の時期の土器片が出土することから、

後期前葉までＤ・Ｅ区で生活が営まれた可能性が高い。このように松本Ｖ－１様式遺構の遺物が出土する地点は、廃棄された竪穴建物自体や、竪穴建物を切る土壙である（ＳＩ０５北西の土壙など）。

同時期の土壙について　これとは異なり、竪穴建物床面の遺物と同時期の遺物が出土する土壙は、竪穴建物の周辺に見られる（ＳＫ６５・６６・７４）。

中期の集落の様相　島根県東部における弥生中期の集落の様相は、調査された遺跡も少なく、不明瞭な点が多い。鳥取県を中心に山陰の弥生時代の掘立柱建物を総括した小原貴樹氏によれば、斜面に立地する遺跡が中心とした分析ではあるが、弥生中期の集落には竪穴建物と共に長棟建物、高床建物（１間×１～２間のもの）、貯蔵穴等があったとする。今回の調査では、確実に弥生中期とすることのできる掘立柱建物は検出できなかったが、竪穴建物周辺に同時期の土壙を確認し、土器だまりＺ地点もあり、これが竪穴建物以外の何らかの施設と関連することも考えられよう。沖積地に立地する弥生中期後葉～後期前葉にかけての集落の様相については調査例の増加を待って再度検討を加える必要がある。

遺構名	床面標高
D区SI01	７．９ｍ
D区SI02	８．６ｍ
E区SI03	８．７ｍ
E区SI05	８．５ｍ
E区SI06	８．３ｍ
E区SI07	８．４ｍ
市 SI01	８．５ｍ
市 SI02	８．５ｍ
市 SI03	８．７ｍ

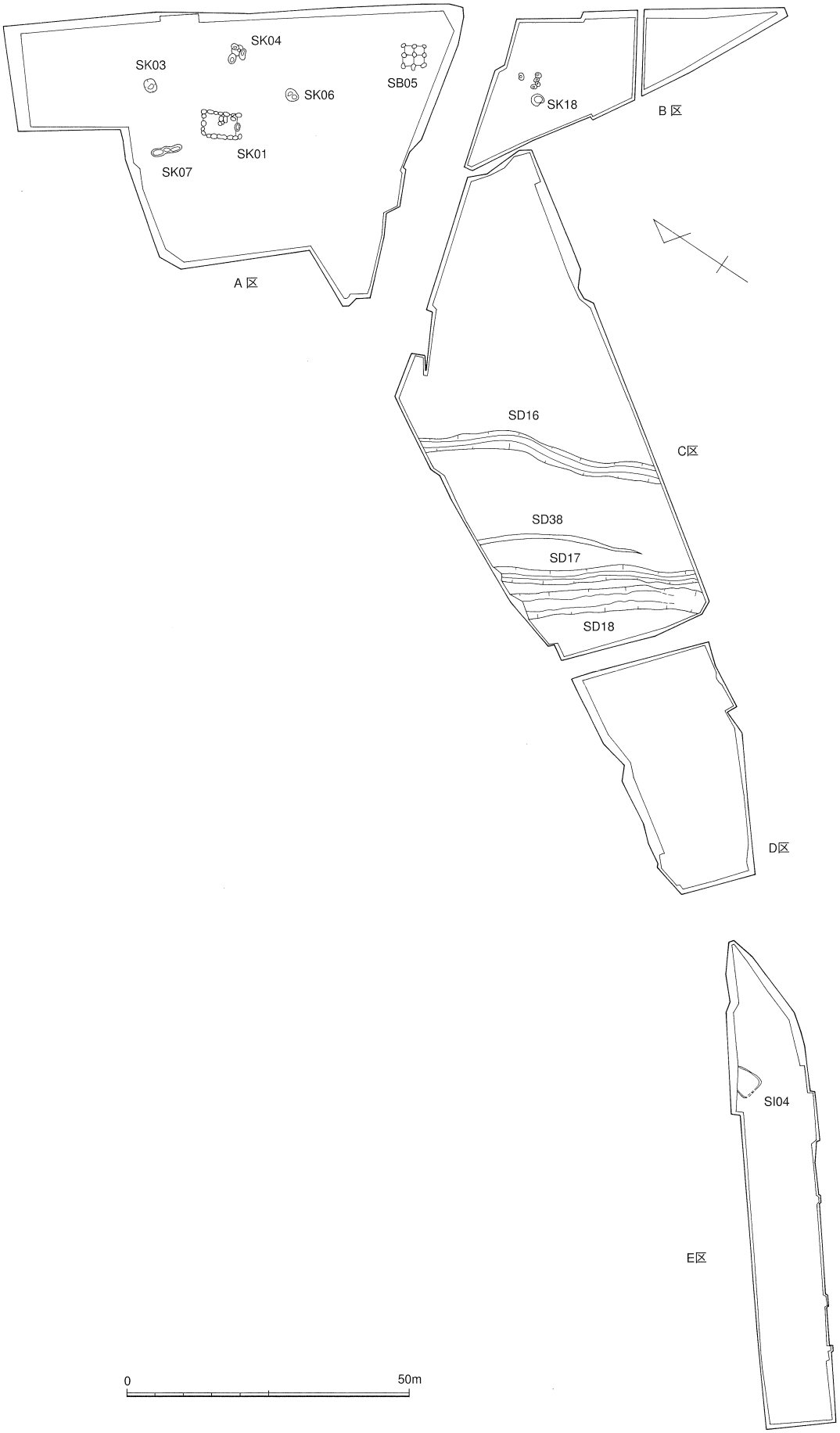
※Ｄ区ＳＩ０１は貼床上面の高さ。

集落の立地　以上述べてきた、竪穴建物は、本報告の中でもっとも地山標高の高い地点から検出された（８.４～８.７ｍ）。竪穴建物の底部標高のまとめたものが次に挙げる表３である。出雲市第２次調査の調査区はより標高の高い南側にあるために、床面の標高も高くなっているが、本報告分ではＥ区東側周辺にもっとも床面の高い建物があることがわかる。仮に竪穴建物の堀込が同程度であったとするならば、当該期の表土はＤ・Ｅ区の中間の道路付近ので最も高い微高地状をなしていたと考えられる。

第２節　弥生時代終末～古墳時代前期の様相[(6)]（第２３４図）

集落の範囲　第１節の弥生中期後葉～後期前葉の遺構・遺物分布と当該期の遺構・遺物の分布は、大きく異なっている。すなわち、中期後葉～後期前葉の遺構がＤ・Ｅ区に集中して見られるのに対し、これらの調査区からは後続する時代の遺構は検出されず、時期的に間隔を置いてＥ区に古墳時代前期後葉のＳＩ０４が見られるだけである。一方、Ｃ区には大溝ＳＤ１６～１８が存在したことが明らかである。Ａ・Ｂ区にも掘立柱建物跡２棟・土壙５が検出される。

集落の様相　Ａ・Ｂ区は中～近世遺構の集中する調査区であり、標高７.０ｍ付近まで、近世の遺物を含む土層で覆われ、古墳時代後期の遺物包含層が最も古い遺物包含層であるため（第２章第１節）、当該期の様相を知ることは困難である。また、当該期の遺物が調査区出土遺物に占める割合は至って低く、Ｅ区のように出土遺物の多くが弥生中期後葉～後期前葉の土器であるということもない。全体として、当該期の当該期の集落の様相は不明瞭であるが、Ｄ・Ｅ区には遺構が確認されなかった。遺構の底部標高などからして、Ｄ・Ｅ区よりＡ～Ｃ区が当該期においても低地であったことは明らかで、第１節で述べた弥生時代中期後半～後期初頭集落が本節で述べた遺構群に移動したか否かは別にしても、低地へ遺構が進出する傾向は認めてよいと思われる。なお、古墳時代前期後葉の遺構はＳＢ０５・ＳＩ０４・ＳＤ１８と散在し、様相は明瞭でない。



第234図　古志本郷遺跡　弥生時代終末～古墳時代前期遺構配置図　（S=1／1000）

ＳＢ０１について　Ａ区で検出した掘立柱建物ＳＢ０１は、柱穴出土遺物などから草田７期、古墳時代初頭の遺構と考えられるが、梁行は２間（４.０ｍ）で、桁行も６間（５.８～６.０ｍ）と規模が大きく、梁行の柱間が１.０ｍと狭いことが特徴的である。[8] また桁方向の東側柱列では、柱穴の上部を共有しているものが見られ、遺構掘りこみ面近くの削平を考えると、本建物が浅い布堀状掘り方に柱穴を掘りこむ形態の柱穴を持った可能性がある。次に柱穴の規模についてみると、柱穴底部の標高は最も低いもので６.３ｍ、平均６.５ｍほどと大変低い。古墳時代前期後半の総柱建物であるＳＢ０５が同６.７ｍ前後であるので、ＳＢ０１の柱掘方は大きく、本建物が相応の上部構造を持つものであったと推定できる。以上、ＳＢ０１については、平面規模が大きいこと、柱掘り方が深く、布堀り状の可能性があることなどを指摘しておく。[9]

大溝ＳＤ１６～１８　Ｃ区では当該期の遺物（草田５～７期）が出土する大溝ＳＤ１６・１７、この時期に掘削されると見られるＳＤ１８が検出された。これらの概要については第２章で詳述したが、得られた結論は、出雲平野の弥生時代～古墳時代前期の大溝をまとめた表４を参照されたい。なお、このようなの溝の性格の推定は、容易でないことが指摘されており、[10] 本報告でも再掘削の状況や時期他の遺構との位置など、事実関係まとめるにとどめたい。

ＳＤ１６・１７　この２条の大溝は共に底部標高が同じで、再上層Ｖ層の土器がほぼ同時期であることから、共通する性格を持っていたことが推測される。そして、ＳＤ１６では、第Ⅱ～Ⅲ層が、ＳＤ１７では第Ⅱ層が通水を示す第Ⅰ層を切って再掘削された後に、通水状態で推積しているので、機能を停止した後に通水があったのではなく、溝として機能している間にも通水があったと見られる。また、ＳＤ１６第Ⅰ～Ⅳ層、ＳＤ１７第Ⅰ・Ⅱ層からは遺物の出土がない点については、第２３４図に見られるように、周辺に大溝以外の当該期の遺構がない点に起因するとも見られるが、同様の条件のＳＤ１８からは出土しているので、性格の差と考えることも出来るであろう。さらに、最上層Ｖ層は共に通水の痕跡は見られず、溝も幅広で浅い形態に変化しており、Ⅰ～Ⅳ層が形成された時期とは様相が明らかに異なっている。以上のことから、ＳＤ１６のⅠ～Ⅳ層、ＳＤ１７のⅠ～Ⅱ層堆積に対応する時期のこれら大溝の目的は通水状態と関係が深いと判断される。

ＳＤ１６先行溝　この溝は、第１節で述べた弥生時代中期末葉～後期初頭に該当する溝である。ＳＤ１６に重なり合うように一部が検出されたもので、溝の両端がＳＤ１６によって切られていることから、ＳＤ１６と同位置に存在したことが推測される。ＳＤ１６の掘削時期が不明であるので、両者の関係も不明であるが、重複することから、先行溝の機能がＳＤ１６と連続性をもっていた可能性もある。ただし、断面形状・推積状況などでは差異性を強く看てとれる。

大溝ＳＤ１８　ＳＤ１８はその再上層（Ｖ層）がＳＤ１７の第Ｖ層を切っている（第１２０図）。ただし、ＳＤ１８の最初の掘削段階での切り合い関係は不明で、むしろ、ＳＤ１８第Ⅰ・Ⅱ層出土土器からは、ＳＤ１６の第Ｖ層、ＳＤ１７のＶ層との同時併存が考えられる。この時期のＳＤ１８は断面が逆台形で、通水が認められ、その通水層を再掘削するなど、ＳＤ１６・１７の第Ⅰ～Ⅱ層形成期との性格の類似が指摘できる。すでに第２章で述べたようにＳＤ１６・１７が性格を変容させると共に、西側にＳＤ１８が掘削されたとみられるのである。ＳＤ１８はこの後、第Ⅲ層－断面Ｖ字（松山Ⅱ・Ⅲ）、第Ⅳ層－断面逆台形（同）、第Ｖ層－断面Ｖ字（大谷出雲５期）と形状を変えながら継続する。なお、断面Ｖ字になった時期にはその底部には黒色土が堆積し（カラー図版３参照）、通水が認められないことから、これらの間には大きな性格の変化あったと考えられる。

表4　出雲平野における弥生～古墳時代前期の大溝

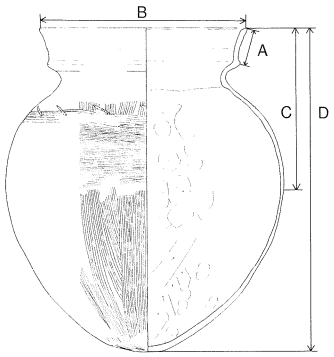
番号	遺　跡　名	地　区	遺構名	規　模	主　軸	標　高（底面）	土層堆積状況	建物出土状況	時　期	検出長	その他
1	本報告	C区	SD16	幅約2.4m 深さ1.2m	N−40°−W	南　6.8m 北　6.65m	Ⅰ～Ⅴ層に分かれる。 断面は逆台形・V字。 掘り返し4回以上。 Ⅰ～Ⅱ層には流水が認められる。	Ⅴ層から出土。 完形に近いものが多く、数度に渡り一括的に廃棄されたと考えられる。 （草田5～7期）	弥生終末～古墳前期 （埋る時期）	約　50m	SD16先行溝(弥生中期末)に重なる。
2			SD17	幅約2.0m 深さ1.0m	北西	南　6.95m 北　6.7m	Ⅰ～Ⅴ層に分層できる。 断面は逆台形・V字。 掘り返しは4回以上。 Ⅰ・Ⅱ層には流水が認められる。	Ⅲ～Ⅴ層から出土。ただし大部分はⅤ層から。完形に近いものが多く、数度に渡り一括的に廃棄されたと考えられる。 （草田5～7期）	弥生終末～古墳前期 （埋る時期）	約　35m	
3			SD18	幅4.0m 深さ1.0m	N−35°−W	南　6.8m 北　6.7m	Ⅰ～Ⅴ層に分層できる。 断面は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳが逆台形。 Ⅱ・Ⅴ層がV字状。 掘り返し4回以上。	Ⅰ・Ⅱ層は古墳前期。 Ⅲ・Ⅳ層は古墳前～中期。 Ⅴ層は古墳後期。 出土遺物はいずれも小片。	古墳前期～後期	約　30m	
4	古志本郷遺跡 第6次調査 （文献1）	B～C区	大溝	B区 幅　4.1m 深さ1.0m C区 幅　5.6m 深さ1.6m	南北	B区 1回目（Ⅳ層）・・・7.0m 2回目（Ⅴ層）・・・7.1m 3回目（Ⅵ層）・・・7.1m 4回目（Ⅰ層）・・・7.3m C区 （Ⅱ層）・・・7.1m	断面、逆台形。およそ40度の傾斜を持つ。 3～4回の掘り返しが認められるが、明確ではない地点もある。確認できる掘り返しからは溝の規模は縮小し、最初に掘削された時点が最大規模になる。掘り返しが不明確な地点では、掘り返しごとに溝の規模が縮小することはない。	数回の掘り返しが行われているため、遺物が異なる時期のものと同じ層から出土することが多い。 出土遺物は付近から捨てられたものの他にローリングを受けたものもある。 大半は溝東側の斜面付近からのものである。北半分の緩やかな傾斜部からは、埋葬をした土墳墓も検出されている。 C区からは塩町式、須玖式、布留式土器、それに分銅型土製品も出土している。	弥生時代中期～古墳時代初頭	B区 28.0m C区 24.0m	
5	天神遺跡 （文献2）	A区	大溝1	幅6.0m 深さ0.9m	N−20°−W	（5層）……4.9m	両側の立ち上がり不明。 掘り返し、検出不明。 底部以下は地山のシルト質層を掘り切って荒砂まで到達する。この荒砂から遺物が集中的に出土するため、大溝1はこの荒砂の自然流露を利用していた。また砂と粘質土の互層があり、ある程度の流水状態であった。	荒砂部分から弥生土器が集中的に出土。 弥生土器壺、甕、鉢のほかに、弥生中期中葉の土器片が数十点出土する。	弥生中期中葉～後葉		SD03と並走
6			大溝2	幅6.0～6.3m 深さ0.4～0.9m	N−35°−W	（9層）……5.2m	断面、W字状。 新しい遺構に切られているため、西側の立ち上がりは不明。 上層1層以下は全体的に砂質土で、粘質土の流水があったか、層が相互に入り込む。掘り返し、不明。	古墳時代初頭の、外面及び、内面口縁部に朱塗りの施されている直口壺が出土。上位層の混入品と思われる。その他全て弥生土器破片。	弥生中期中葉～後葉		大溝1にほぼ並走
7		B区	SD06	幅４．１ｍ 深さ１.３ｍ	南北	（10層）……5.6m	断面、逆台形。 覆土には上層に黒褐色土や黄褐色土が堆積しているが、下層には荒砂をブロック状に含む粘質土が堆積し、ある程度水の流れがあったと考えられる。	上中下層とも中央は弥生終末、端部は中期で、上層には完形品がある。下層底面では中期が多い。 弥生時代終末期の土器には、甕・壺・高坏・低脚坏・器台・手捏ね土器などの他に搬入品がある。中期の土器には甕・壺・高坏・鉢などがある。	弥生中期～終末期	6.3m 検出高 6.9m	幅は南幅が広く、北側は約1.1mほど狭い。 （掘りかえしがあったとみられる。）
8		2トレンチ	溝1	上幅３.０ｍ 下幅１.０ｍ 深さ　1.2m	北西～南西	（Ⅺ層）……5.6m	断面、V字状。 下底はほぼ平坦で、0.4m程度の傾斜で立ち上がった後、両端に緩やかに広がっている。 掘り返し、不明。	弥生時代中期の土器が多く出土する。 下底付近から短頸の弥生土器甕が出土したほか、高坏などが認められる。また、その上層からは放射状雑文のある土師器坏や甕片、管状上錘などが出土する。	弥生中期	約1.8m	
9	小山遺跡 第２調査 （文献３）	北側調査区	ＳＤ01	幅　2.2m 深さ0.4m	N−63°−E	（27層）……2.7m	側壁は西側が外に直線的に立ち上がり、東側は緩やかに立ち上がる。 遺構の埋土は砂質土が中心で、相応の流れをもった溝であったと推定される。掘り返し、不明。	弥生土器や用途不明の木片のほか、30～40cmにも及ぶ大型の石が幾つも確認されている。石に加工痕は見られないが、このような石はSD01だけに集中しているもで、人為的に持ちこんだものと思われる。	弥生中期～後期	4.8m	
10		南側調査区	ＳＤ13	幅約4.1m 深さ約0.4m	N−73°−W	（７層）……3.9m	遺構上面が削平されている可能性が高く、実際には深さのある溝であったと推定され、環濠のようなものも考えられる。 掘り返し、不明。 底部は中央付近部分が若干固むが、比較的平坦に造ってあり、壁は北側で外反した後に内湾気味に立ち上がる。一方、南側は内湾気味に立ち上がる。	包含層における弥生土器の割合は高い。		約1.8m	SD06（N−81°−W）と平行関係にある可能性があり、平行関係にあるなら2重の環壕も考えられる。

文献1　出雲市教育委員会『古志本郷遺跡第６次発掘調査報告書』1998年
文献2　〃　「天神遺跡第7次発掘調査報告書」1997年
文献3　〃　「小山遺跡第2地点発掘調査報告書」1998年

出雲平野の大溝　ここで、現在報告のなされている出雲平野での弥生時代～古墳時代初頭の大溝とＳＤ１６・１７の比較を行ってみたい[11]（なお、ＳＤ１８については存続時期が大きく異なるので検討しない）。古志本郷遺跡第６次調査で検出された大溝（４）とは規模、遺物の出土状態が異なっているが、底部の標高はＳＤ１６・１７が３０cmほど低い程度である。天神遺跡で検出されている大溝（５～７）も、最上層からの遺物出土状況は類似するが、下層から弥生中期の遺物が出土する点などは異なっている。

大溝の性格　以上、ＳＤ１６～１８を全体としてみた場合、長期間にわたってＣ区に溝が作られ続けたということが指摘できる。ＳＤ１６、１７からＳＤ１８への作り替えが認められるならば、ＳＤ１６・１７のＶ層にみられる土器の廃棄も、決して同様の機能を持つ大溝の終焉を意味するのではなかろう。また、ＳＤ１６・17・18の下の推積層の通水状態は大溝の機能を考えるうえで重要に

なる。従来、これらの溝には弥生時代の集落をめぐる環濠との解釈を想定してきたが、現状ではそのような性格を明確にすることは出来ず、今後の調査の進展を得て、慎重に検討する必要がある。



第235図　古志本郷遺跡複合口縁甕の計測部位

ＳＤ１６・１７の出土土器の計測　ＳＤ１７では器種別に出土地点が異なる傾向があり、両者で廃棄の様相はＳＤ１６と異なっている。しかし、巨視的に見ればＳＤ１６・１７の遺物出土状況は複数回に渡って一括的に廃棄されたものの集合と見ることができ、土器の形態は草田６・７期を中心としたまとまりのある資料となり得る。以上の前提の元に、甕について、複合口縁端部の幅[12]（Ａ）、口径（Ｂ）／口縁部から体部最大径までの距離（Ｃ）を計測しものが次の表５～７になる（測定部分については第２３５図を参照）[13]。なお、後者の数値は、この時期に進行すると考えられている体部球胴化の数値化を目指したものである。本来は、器高（Ｄ）／口縁部から体部最大径までの距離（Ｃ）等で数値化するべきであろうが、完形品が少ないことから、器高を口径で代用している。なお、表中の小は口径１５cm未満、中は２０cm未満、大は２０cm以上のものである[14]。

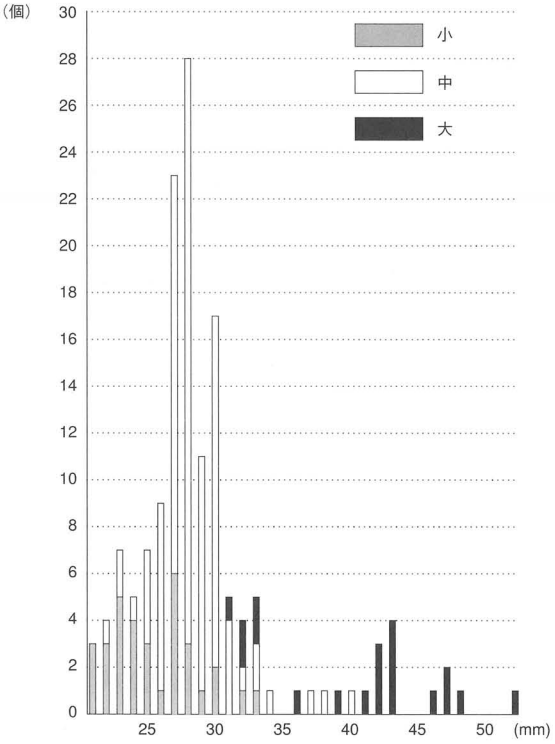
第３節　古墳時代後期の様相[15]（第２３６図）

遺構の概要　第１・２節で述べた弥生時代～古墳時代前期と異なり、当該期の遺構は溝が主体で、他には土壙２基、井戸１基、方形溝状遺構１基が知られるのみで、明確この時期の建物と判断できるものも検出されていない。Ｅ区のＳＫ５８が竪穴建物に推定できる程度である。ただし、これらの溝はＳＤ１８をはじめＳＤ０１・０２・０９・１０・１４・１９など、土師器甕、甑などの煮炊具を含む相応の出土遺物を持つものが多い。溝は前節で述べたＳＤ１８を除くと、上幅は２ｍを測るＳＤ０１とと幅１ｍ弱の溝とに分別でき、後者は現神戸川に平行する方向の溝（ＳＤ０１・０９・１０・１２・２０・４１）が多い。なお、ＳＤ０９は底部の標高が西側と東側で４０cmほど異なっており、東に向かって傾斜はのきつい。以下、Ｄ区の方形溝状遺構ＳＸ０４と、出土遺物として土師器脚部有段高坏について若干ふれてみたい。

方形溝状遺構（ＳＸ０４）　一辺８ｍ程度の方形に、上幅１ｍ深さ１０～２０cmの溝をめぐらした遺構で、溝中から土師器甕、須恵器有蓋高坏、同蓋坏などが出土している遺構で、第２章第４節で述べたように、方墳の周溝である可能性がある。出土した須恵器は大谷出雲４期に属するものである。この遺構を検出したＤ区の南東３００ｍには、墳丘形態・規模不明の大梶古墳が存在する。また、『雲陽誌』神門郡上古志条には「神門塚　高さ八尺周り二十八間、塚頭に榎あり神木と号してまつる、これ神門の臣等の葬所なり、これ古志町より七町辰己の方にあり」とみえ[16]、現在までに墳丘を消失した古墳が周辺にあったと推定される。ただし、溝内から土師器甕が出土する点、円墳の多い地域にあって方墳と想定される点など、この遺構を方墳と推定するには問題点がないわけではない[17]。

脚部有段高坏について（第２３７図）　土師器の高坏で、脚部に段を持つことが形態上の特徴で、脚部有段高坏と仮称する。今回の調査では、推定のものも含めＳＤ０１から９個体、Ａ区調査区から１個体、ＳＥ０８から１個体、ＳＤ１８から５個体、ＳＤ１９から２個体、Ｃ区調査区から１個体が出土した[18]。形態は坏部は浅く、口縁部は緩く内湾し、脚部は上方を著しくくびれさせ、下方に

SD16出土甕　複合口縁部幅（A）分布グラフ



SD17出土甕　複合口縁部幅（A）分布グラフ

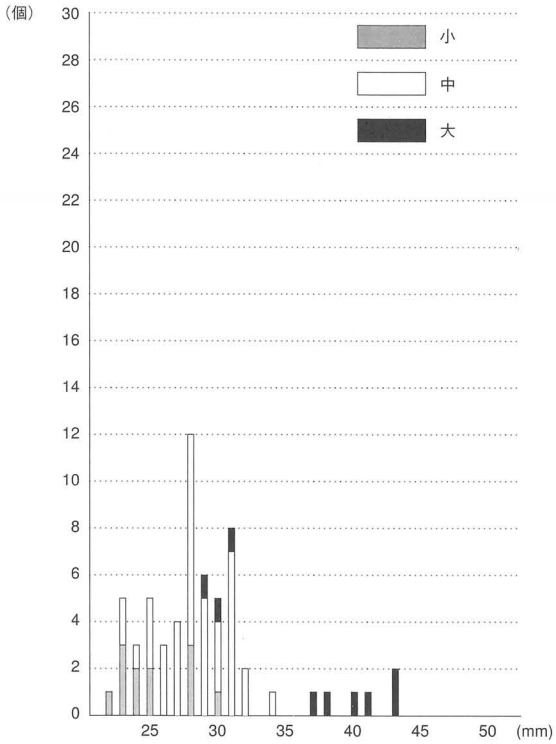


表5　SD16出土甕　複合口縁部幅（A）分布表　（単位mm）

幅	小	中	大	全体	幅	小	中	大	全体	幅	小	中	大	全体
21	3			3	32	1	1	2	4	43			4	4
22	3	1		4	33	1	2	2	5	44				0
23	5	2		7	34		1		1	45				0
24	4	1		5	35				0	46			1	1
25	3	4		7	36			1	1	47			2	2
26	1	8		9	37			1	1	48			1	1
27	6	17		23	38			1	1	49				0
28	3	25		28	39			1	1	50				0
29	1	10		11	40		1		1	51				0
30	2	15		17	41			1	1	52				0
31		4	1	5	42			3	3	53			1	1

表6　SD16（甕）　$\frac{B}{C}$値

比　率	小	中	大	全　体
1．2	2			2
1．3		1	1	2
1．4		5	1	6
1．5	3	4		7
1．6		3	2	5
1．7				0
1．8	2	1		4

表7　SD17出土甕　複合口縁部幅（A）分布表　（単位mm）

幅	小	中	大	全体	幅	小	中	大	全体	幅	小	中	大	全体
21				0	32		2		2	43			2	2
22	1			1	33				0	44				0
23	3	2		5	34		1		1	45				0
24	2	1		3	35				0	46				0
25	2	3		5	36				0	47				0
26		3		3	37			1	1	48				0
27		4		4	38			1	1	49				0
28	3	9		12	39				0	50				0
29		5	1	6	40			1	1	51				0
30	1	3	1	5	41			1	1	52				0
31		7	1	8	42				0	53				0

表8　SD17（甕）　$\frac{B}{C}$値

比　率	小	中	大	全　体
1．2	2			2
1．3		2		2
1．4	2	5		7
1．5	1	1		2
1．6			1	1
1．7		1		1
1．8				0

段を持つ。段より下はふくらむもの（１４６－７５）、反り返るもの（３６－５３）の両者がある。また、内部は段がなく、外面のみの調整で段を作り出したものが確認される（３６－５８）と同時に、内面にも段が残り、整形時に段を作り出すと考えられるものも見られる（３６－５３）。また、全体に薄く、外面に赤彩されるもの（１４６－７７）や、段が２段にわたり複雑な形態を取るもの（１５１－６）もある。後者は、脚端部を内側に引き出す、という特徴的な形態を取る。なお、坏部と脚部は松山γ接続法によって接続されている。全体に、胎土も特徴的で、１～２mm大の砂粒を多量に含む褐色の胎土である。７５では坏部内面に剥離が認められる。

分布　本遺跡の他に、出雲市壱丁田遺跡[19]、同角田遺跡からも出土し[20]（第２３７図）、前者は移動式竈を伴うことから、報告者によって６世紀後半～８世紀の年代観が与えられている。

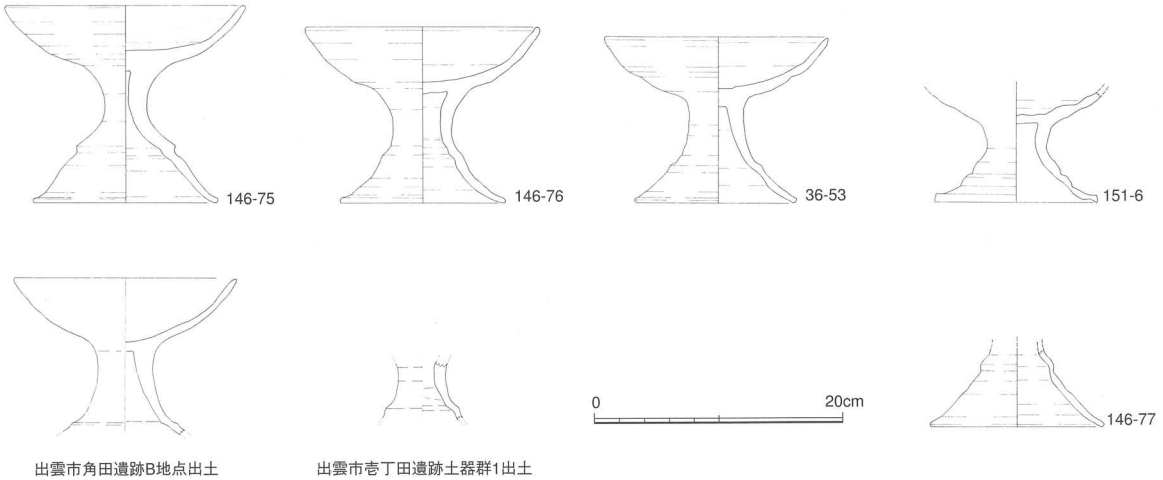
年代　出土した遺構は、ＳＤ０１、ＳＤ１８が中心で、いずれも出土した包含層は、時期区分ができないものであった。しかし、ＳＤ１８は古墳時代後期遺構の遺物が中心で、ＳＤ１９、ＳＥ０８も同様であることから、少なくとも大きく古墳時代後期には存在したと見るのが妥当であろう。実際には、形態はさらに細分できると考えられ、類例の増加を待って再検討を加える必要があろう。

第４節　奈良・平安時代の様相[21]（第２３７図）

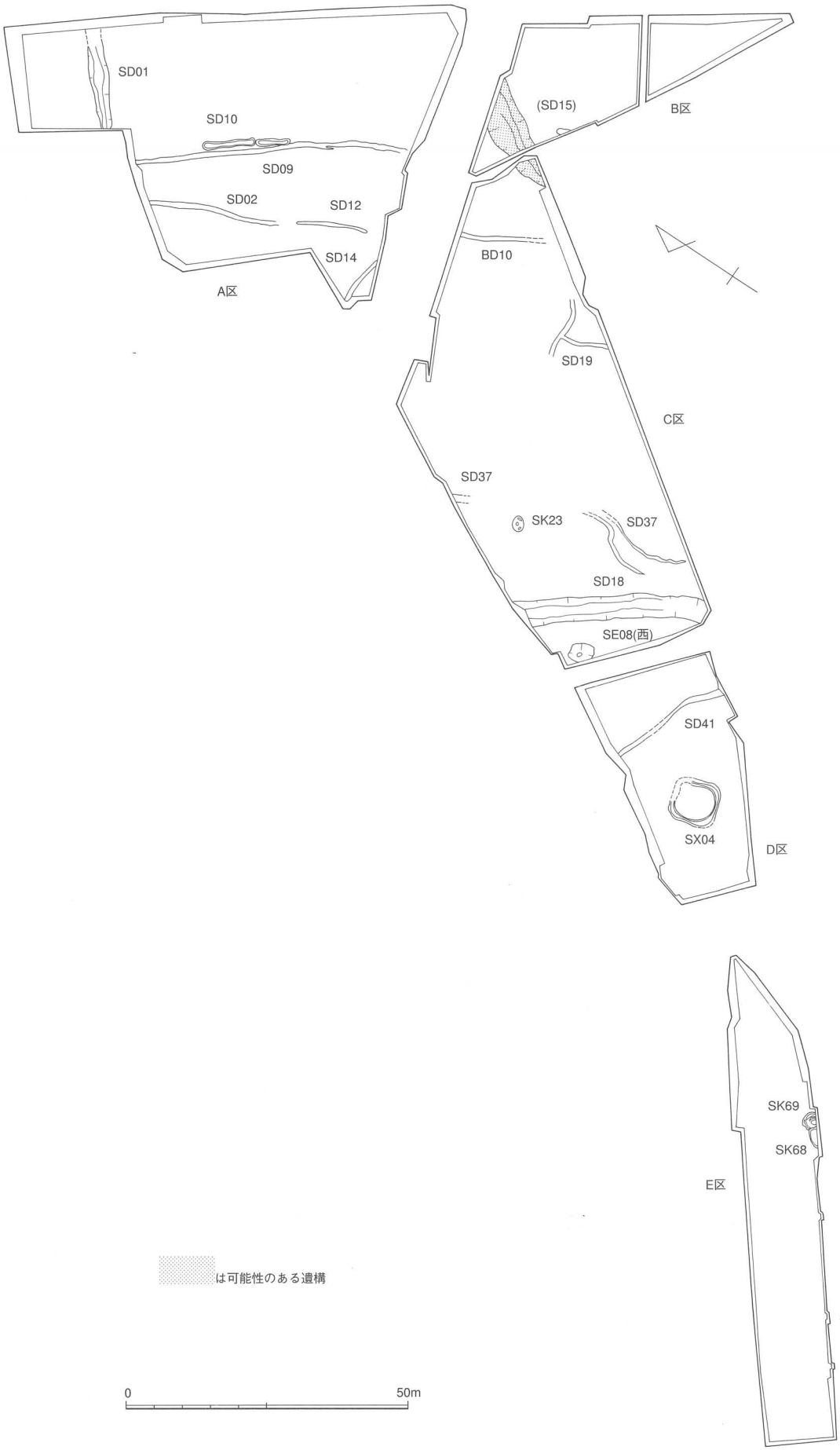
奈良・平安時代の遺構については、Ｃ区の中央から西側部分でのみ検出されており、Ａ・Ｂ区、Ｅ区では当該期の遺物もほとんど検出されていない。

遺構の概要　Ｃ区で側柱建物１棟、総柱建物１棟、井戸１基、土壙２基を検出した。掘立柱建物は主軸をＮ－１６°－Ｗ（ＳＢ１９）、Ｎ－７５°－Ｅ（ＳＢ１３）に指向する。いずれも建物の立て替えなどは認められない。柱掘り方も、特に隅丸方形を指向するなどの傾向も見られない。

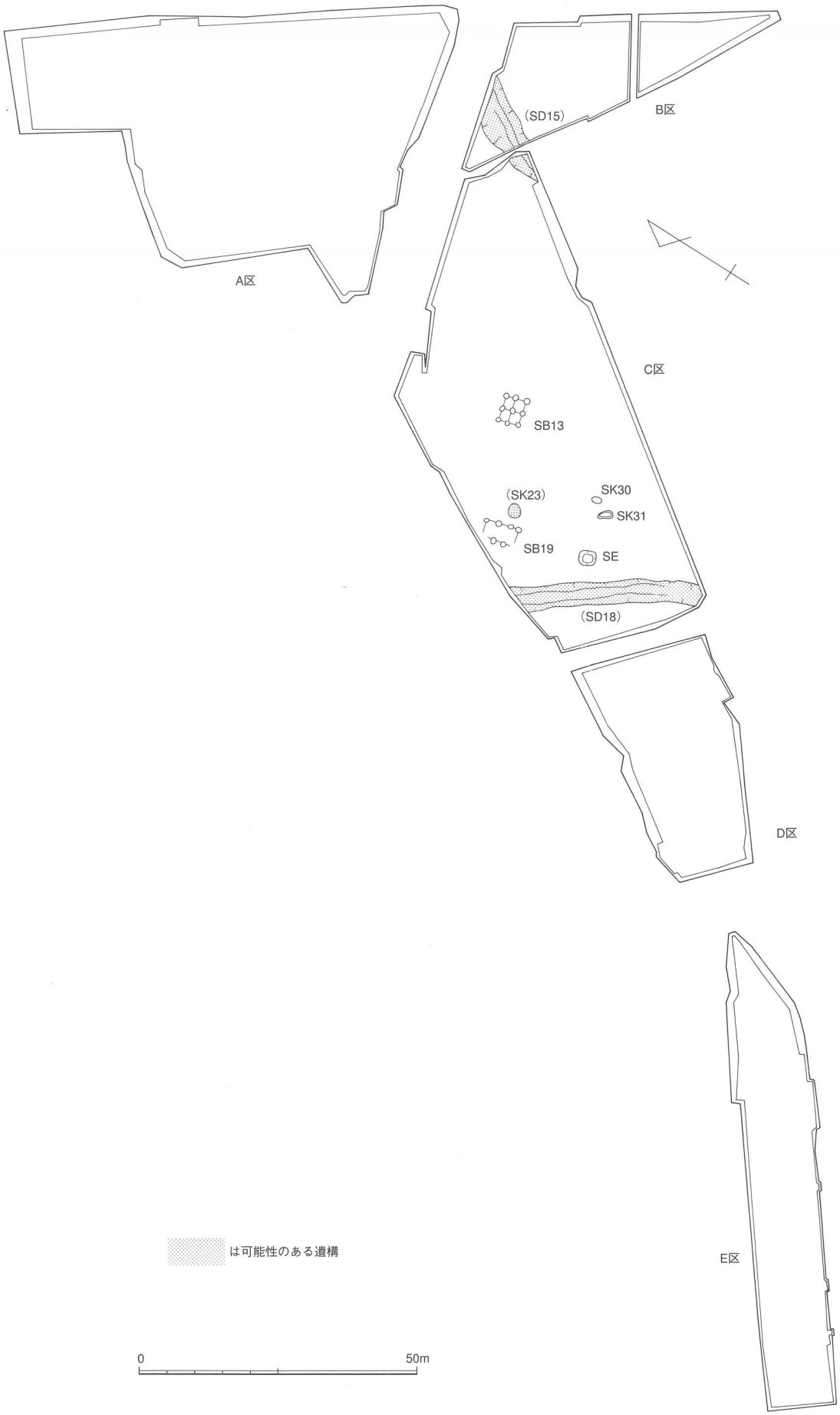
遺物の概要　出土遺物も量的には決して多いとは言えず、時期的にも高広Ⅳ期（８世紀後半～９世紀）を中心とするものであまり前後しない。ただし、官衙関連遺跡に特徴的な遺物とされる円面硯（第１５７図５２）、風字硯（第１９１図７）、墨書土器（第１５４図１４・１５）、緑釉陶器（第１６０図１３２）が出土し、製塩土器も全体の遺物量に比して多く出土している（第１５８図５４～６３）。



第236図　古志本郷遺跡　脚部有段高坏実測図　(S=1／6)



第237図　古志本郷遺跡古墳時代後期遺構配置図　(S=1／1000)



第238図　古志本郷遺跡　奈良・平安時代遺構配置図　(S=1／1000)

まとめ　古志本郷遺跡では平成１０年度の調査で、本調査区の北側から神門郡家政庁域と思われる遺構が検出されており、それらとの関係が問題になる。奈良・平安時代の様相については調査の進展を待ってあらためて総括を加える必要があるが、本報告書では、１　調査区内の一部でしか該当期の遺構が検出されなった、２　遺構としては掘立柱建物、井戸などが検出されたが、顕著な大型建物などは見られず、存続時期も短い、３　しかし、建物群周辺では官衙関連の遺物が出土するの３点を指摘しておきたい。

第５節　中・近世の様相

（１）中・近世の土師質土器について

はじめに　今回のの調査において、量的にも最も多く検出されたのは中世後期～近世の集落遺跡であった。当該期の集落遺跡の調査例は、近年の大規模調査に伴って増加してはいるものの、今回の調査では多数の土師質土器を初めとし、輸入陶磁器や国内産陶磁器が出土し、対応すると思われる遺構も検出され、当該期の集落の様相を知る上で、重要な資料を提供するものである。

後述するように、この時期の古志本郷遺跡では近世前期に一つの画期が認められる。そしてこの時期区分は遺物の上でも比較的明瞭で、すなわち、第一義的には日用雑器としての肥前系陶磁器（唐津焼）の使用開始と、若干のずれがあるものの、ほぼ重なっている。しかし、詳細な集落の動向を在地の動きに即した検討を行うためには、当該期の土師質土器の年代観をつかむことは、必要である。かかる問題設定の上で、中近世の様相を概観する前に、まず、当該期の土師質土器について分類と編年行ってみたい。

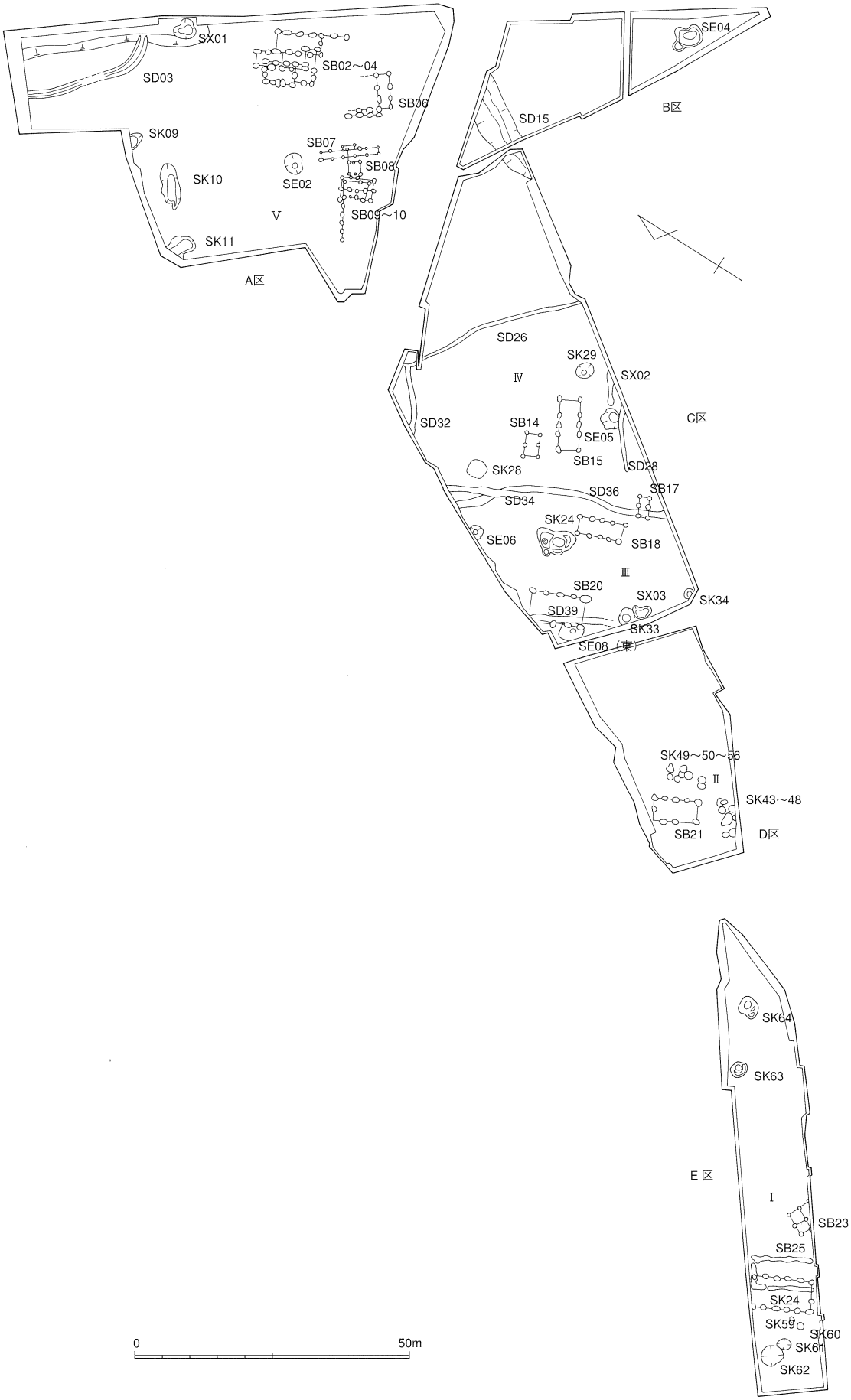
分類・編年の手法　古志本郷遺跡を含む出雲西部の中世～近世の土師質土器については、従来資料数の絶対的不足もあって、特に中世後期以降は余り明確でなかったといえる。この点は、広江耕史による研究以来[23]、橋本久和氏や八峠興氏の研究に至るまで通有のものであるといえる[24]。近年報告された八峠氏の分析も、当該時期の資料として挙げられるのは松江周辺の遺跡のものが中心である。これらの研究状況や、筆者自身が出雲東部部の状況や、より広範囲での中世土器の動向に言及する能力はとてもないことから、基本的には古志本郷遺跡内でのみ機能する時期区分として以下の土器分類・編年を想定し、場合によって従来の編年との対応関係を考察することにする。なお、この編年観は、先に述べたように、あくまで本報告書で触れる古志本郷遺跡の分析のための設定であり、出雲西部域、あるいは島根県域に及ぶものではない。

遺跡内での土器編年の基準は、本来は良好な一括関係や、切り合いによって確認されなければならないことは言うまでもなく、また、供膳具である坏・皿以外にも煮炊具・調理具等とのセット関係も重視されるべきである。しかし、資料数の皿・坏類への偏在と、良好な資料を持ちつつ切り合い関係を持つ遺構がほとんど存在しないことから、まず坏と、坏を共伴しない皿の形態から分類を行う。次いで皿についてはそれとの供伴関係から位置付け、最後に伴出する陶磁器、切り合い関係や、そして先行研究による編年観などとの比較から、時期を区分する。

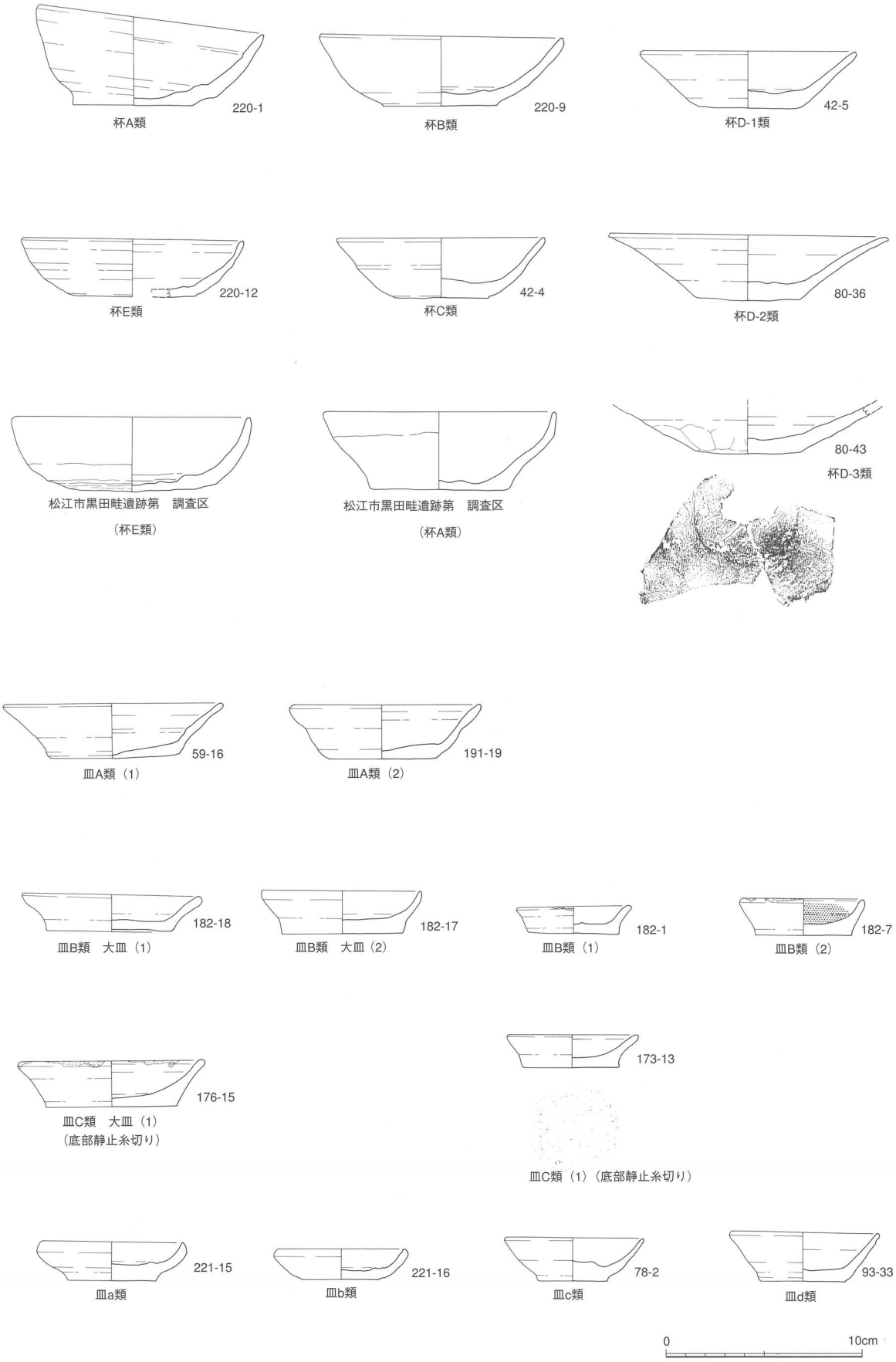
なお、坏・皿ともに特にことわらないかぎり、底部は回転糸切りである。

Ⅰ　土師質土器坏の分類（第２４０図）

坏Ａ類　器形は底部周辺をナデによって絞りこみ、絞りこみ部分からは比較的急な角度で立ち上がる口縁を持つ。口縁端部はやや内傾するものも見られる。器壁は全体に厚い。胎土は赤茶褐色で、



第239図　古志本郷遺跡　中・近世遺構配置図　（S=1／1000）



第240図　古志本郷遺跡　土師質土器坏・皿形態分類表　（S=1／3）

１～２mm大の砂粒を含む。

坏Ｂ類　器形は底部から内湾しつつ立ち上がる器形を持つ。器壁はＡ類同様に厚いが、器高は低くなる。ただし、底部周辺のナデはＡ類同様に見られ、Ａ類と分別の困難なものもある。Ａ類同様荒い作りのものが多い。Ａ類と同じ赤茶褐色の胎土を持つ。

坏Ｃ類　Ｂ類と同様に内湾しつつ立ち上がる器形を持つ。ただし、より直線的である。器壁はＢ類に比べて薄い。ナデも丁寧である。胎土は明褐色～褐色で後密な胎土である。赤茶色粘土ブロックが混入する。

坏Ｄ類　器形・法量からＤ－１、Ｄ－２類の二つに区分する。実際にはＤ－１類とＤ－２類の中間的形態が多数存在する。胎土はともに精緻な褐色で、赤茶色粘土ブロックが混入する。

Ｄ－１類　直線的に立ち上がり、器壁はＤ－２に比してやや厚いタイプである。

Ｄ－２類　直線的に立ち上がり、途中からさらに外反する、あるいは底部から外反しつつ立上がるが器形である。Ｄ－１類に比して大型化し、口径に対し器形は低くなる。

Ｄ－３類　Ｄ－２類とほぼ同じ形態で底部周辺をヘラケズリするものである。

坏Ｅ類　器形は内湾する立ち上がりを持つが、断面がより円形に近い中央部の張ったものである。胎土は白褐色の精緻な胎土である。

Ⅱ　土師質土器皿の分類（第２４０図）

坏を伴わず、皿のみで出土する皿をＡ～Ｃ類に分類する。また、坏と共伴して出土するものをａ～ｄ類に分類する。

皿Ａ類　口径、底径、器高のもので法量は一定している（あるいは大皿しか検出されていない）。器形は直線的に立ち上がるもの（１）と（５９－１６）、途中で屈曲するもの（２）がある。（１９１－１９）茶褐色の胎土を持つ。

皿Ｂ類　底部回転糸切である。底径約５cmのものと、同約７cmのものの、大小２法量がある。器高は変わらない。口縁端部が外反するもの（１）と（１８２－１８・１）、内傾するもの（２）がある（１８２－１７・７）。茶褐色の胎土を持つ。

皿Ｃ類　底部静止糸切りである。口縁端部が外反し、内側内面の断面が半円状をなし、底部と口縁部の別がなく、皿Ｂ類（１）と形態が類似する。Ｃ類同様大小２法量がある。茶褐色の胎土を持つ。

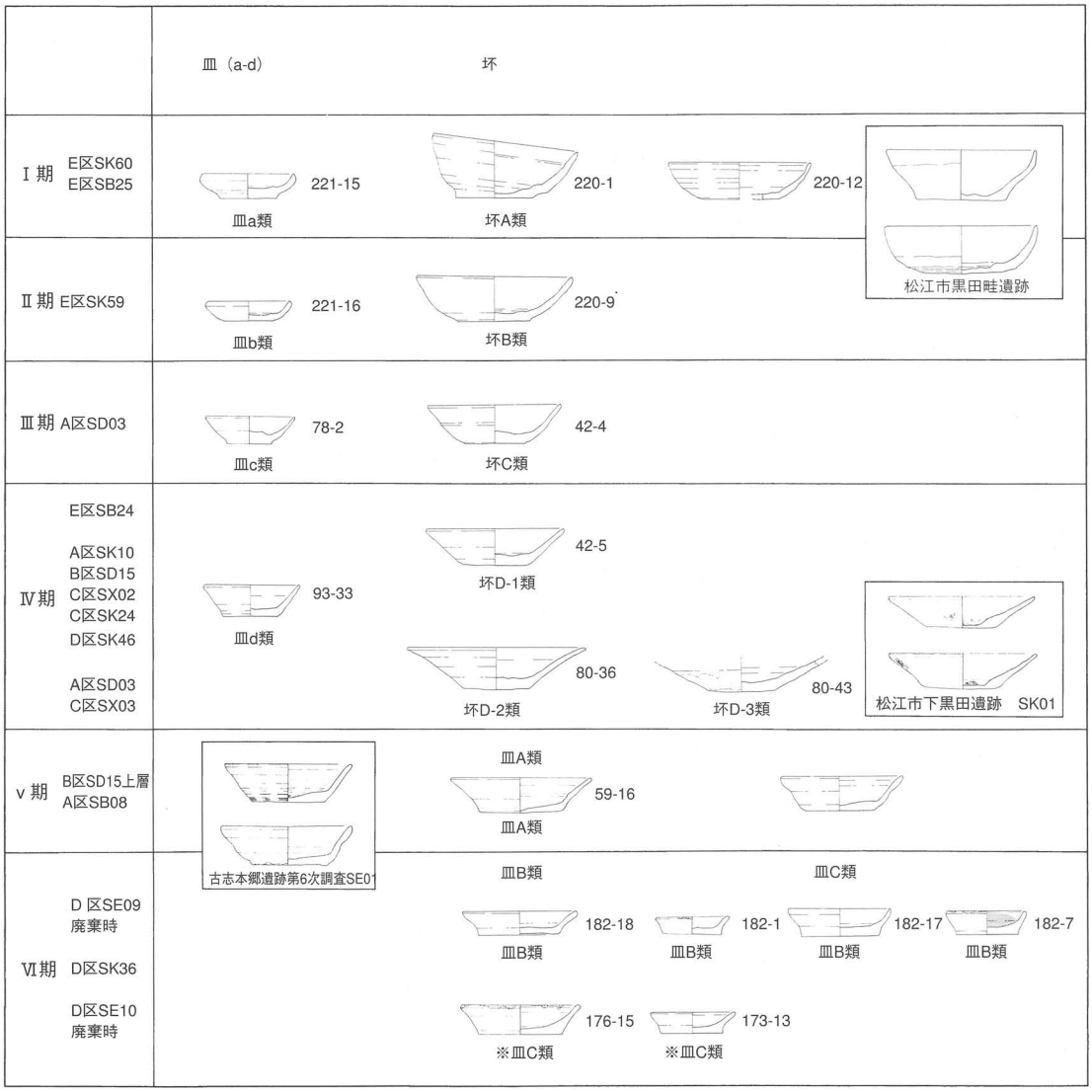
皿ａ類　低平で、底部周辺を強くナデて絞りこむもの。胎土は赤茶褐色である。荒い作りで、ナデが内面によく残る。

皿ｂ類　低平だが、立ち上がりが内湾するもの。胎土は赤褐色である。

皿ｃ類　器壁は薄く、若干内湾する。器高もある。胎土は明褐色である。

皿ｄ類　器壁は薄く、口縁は直線的に立ち上がる。胎土は明褐色である。

坏・皿各類型の供伴関係　ここで、これら類型化した坏、皿について、本遺跡内で供伴関係を想定できる事例について示したのが次の表１１である。また、この表には共伴していた陶磁器類も加えてある。この表に挙げた遺構は、土師質土器が比較的多く出土した遺構の大部分を占めており、各遺構出土の遺物は型式学的には幅を持っていることになる。表１１を見ると、まず坏Ａ類とＢ類とＥ類は相互に関連することがわかる。また、坏Ｃ類とＤ類も相互に関連することも明らかである。さらに皿Ｂ・Ｃも同様である。皿と坏では皿ａｂは坏Ａ・Ｂと共伴すると見られ、皿ｃ・ｄも坏Ｃ・Ｄに共伴すると考えられる。先に述べた器形・胎土などからも坏Ａ－皿ａ、坏Ｂ－皿ｂ、坏



第241図　古志本郷遺跡　土師質土器編年表（S=1／6）　※は底部静止糸切り

C－皿c、坏D－皿dの関係は整合的に解釈できるので、以上のセット関係をまず認めてよいであろう。

各分類の前後関係　次に、坏A・B・E類、坏C・D類、皿A・B・C類の関係であるが、ここで、共伴する陶磁器を見てみたい。この供伴関係は、陶磁器が小片であったり、また陶磁器自体が伝世される可能性があるなど必ずしも時期を考える上では良好なものではないが、坏A・B・E類と、坏C・D類、皿B・C類の間には明らかな新・古関係を見いだすことができる。すなわち古い方から、白磁Ⅷ類・片切彫青磁碗を伴う坏A・B・E類と、青磁碗B４類・E類・古瀬戸新段階を伴う坏C・D類、１８世紀の肥前系陶磁器を伴う皿B・C類の順である。さらに、ここでSB２４とSB２５の切り合い関係を確認してみる。杯A・B類の出土するSB２５は、坏C～D類の出土するSB２４に切られており、供伴陶磁器の前後関係と整合する。なお、肥前系陶磁器が出土する遺構に切られる坏C・D類出土の遺構は多数あるので例示しない。

Ⅰ期～Ⅵ期の設定（第２４１図）　ここで、再び各類型の形態に目を向けてみることにする。坏A・B・E類のうち、器形が内碗するという点ではB類が次のC・D類に近似する。坏C・D類ではA・B類に近似するのはC類である。したがって、坏についてはA類➡B類➡C類➡D－１類➡

表9　土師質土器(坏)法量分布表

	遺構	E区SK60	E区SK59	A区SD03	C区SX02	C区SX03	C区SK24	D区SK46
時期		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ－Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ
口径	10.0～10.2cm	1						
	10.3～10.5cm			1				
	10.6～10.8cm		2	1	2			1
	10.9～11.1cm			2				
	11.2～11.4cm		1	2		1		
	11.5～11.7cm	2						
	11.8～12.0cm	1						
	12.1～12.3cm		1				1	
	12.4～12.6cm	2					1	
	12.7～12.9cm	1					1	1
	13.0～13.2cm	1		2			1	
	13.3～13.5cm						1	
	13.6～13.8cm							1
	13.9～14.1cm					1	1	
	14.2～14.4cm					2		1
	平均(cm)	12.0	11.3	11.5	10.6	13.5	13.0	12.9

	遺構	E区SK60	E区SK59	A区SD03	C区SX02	C区SX03	C区SK24	D区SK46
時期		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ－Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ
器高	2.7～2.8cm			1				1
	2.9～3.0cm	1		2				
	3.1～3.2cm			3	1			
	3.3～3.4cm				1	1	1	
	3.5～3.6cm		1	1		1	2	2
	3.7～3.8cm	2	1				3	
	3.9～4.0cm					1		
	4.1～4.2cm	2						
	4.3～4.4cm							
	4.5～4.6cm	1	2					
	4.7～4.8cm							
	4.9～5.0cm							
	5.1～5.2cm	2						
	平均(cm)	3.9	4.1	3.1	3.3	3.6	3.6	3.3

	遺構	E区SK60	E区SK59	A区SD03	C区SX02	C区SX03	C区SK24	D区SK46
時期		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ－Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅳ
底径	4.3～4.5cm					5		
	4.6～4.8cm			2	3	3	1	4
	4.9～5.1cm	3	1	2		6	4	1
	5.2～5.4cm		2	3		5	7	
	5.5～5.7cm	1		1		4	2	
	5.8～6.0cm	3			1	2	7	1
	6.1～6.3cm	3	1	1		1	4	
	6.4～6.6cm	2					2	
	6.7～6.9cm		1	1				
	7.0～7.2cm			1				
	7.3～7.5cm		1					
	7.6～7.8cm							
	7.9～8.1cm		1					
	平均(cm)	6.3	6.3	5.5	5.0	5.4	5.7	5.0

表10　土師質土器(皿)法量分布表

	遺構	E区SK60	E区SK59	C区SX03	C区SK24	D区SK46	D区SK48	D区SK43	D区SE09	D区SK36
時期		Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅴ－Ⅵ	Ⅴ	Ⅴ－Ⅵ	Ⅵ	Ⅵ
口径	5.8～6.0cm									3
	6.1～6.3cm								1	1
	6.4～6.6cm	1							5	11
	6.7～6.9cm	2							3	
	7.0～7.2cm	3	1	1	1				2	6
	7.3～7.5cm		1	1						1
	7.6～7.8cm	1	1		3			1		1
	7.9～8.1cm	1								
	8.2～8.4cm	1		1						1
	8.5～8.7cm							1		
	8.8～9.0cm					1		1		2
	9.1～9.3cm									2
	9.4～9.6cm					1	1			
	9.7～9.9cm									
	10.0～10.2cm						1			
	10.3～10.5cm					1	1			
	10.6～10.8cm						1			
	平均(cm)	7.3	7.5	7.6	7.6	9.7	10.2	8.3	6.7	7.1

	遺構	E区SK60	E区SK59	C区SX03	C区SK24	D区SK46	D区SK48	D区SK43	D区SE09	D区SK36
時期		Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅴ－Ⅵ	Ⅴ	Ⅴ－Ⅵ	Ⅵ	Ⅵ
器高	1.3～1.4cm	1	1							5
	1.5～1.6cm	3	2						6	1
	1.7～1.8cm	3							4	5
	1.9～2.0cm	2		1				1	1	10
	2.1～2.2cm			1	1	1				3
	2.3～2.4cm			1		2		2		3
	2.5～2.6cm									1
	2.7～2.8cm				2		1			
	2.9～3.0cm				1					
	3.1～3.2cm						1			
	3.3～3.4cm									
	3.5～3.6cm						1			
	3.7～3.8cm									
	3.9～4.0cm									
	4.1～4.2cm						1			
	平均(cm)	1.7	1.5	2.1	2.6	2.3	3.4	2.3	1.7	1.9

	遺構	E区SK60	E区SK59	C区SX03	C区SK24	D区SK46	D区SK48	D区SK43	D区SE09	D区SK36
時期		Ⅰ	Ⅱ	Ⅳ	Ⅳ	Ⅴ－Ⅵ	Ⅴ	Ⅴ－Ⅵ	Ⅵ	Ⅵ
底径	3.1～3.3cm				1					
	3.4～3.6cm			3						
	3.7～3.9cm			3						
	4.0～4.2cm	2		5	1					2
	4.3～4.5cm	1		1	5				4	2
	4.6～4.8cm	2		1					4	12
	4.9～5.1cm		1	1	1				3	6
	5.2～5.4cm	1						1	1	1
	5.5～5.7cm	1						1		
	5.8～6.0cm	2	1			1	1			1
	6.1～6.3cm		1			1		1		2
	6.4～6.6cm					1	1			1
	6.7～6.9cm								1	1
	7.0～7.2cm						1			
	7.3～7.5cm									
	7.6～7.8cm									
	7.9～8.1cm						1		1	
	平均(cm)	5.0	5.7	4.0	4.2	6.2	6.8	5.8	6.5	5.0

表11　土師質土器の共伴関係

出土遺構	遺構の性格	土師質土器（坏・皿）の供伴関係	土師質土器以外の供伴遺物
A区ＳＫ１０	池	坏Ｄ－２類	古瀬戸後期香炉。
A区ＳＫ１１	土壙	坏Ｄ－２類	備前擂鉢Ⅳ期。
A区ＳＤ０３	溝	坏Ｃ、Ｄ－１・２類	青磁碗Ｄ類。
C区ＳＸ０３	廃棄土壙	坏Ｄ類、皿ｃ・ｄ類	
C区ＳＫ２４	土壙	坏Ｄ類、皿ｃ・ｄ類	青磁碗Ｂ－Ⅳ類、備前播鉢Ⅳ期。
D区ＳＥ０９	井戸	皿Ｂ・皿Ｃ	肥前系陶磁器。
D区ＳＫ３６	土壙	皿Ｂ・皿Ｃ	肥前系陶磁器。
E区ＳＢ２４	掘立柱建物	坏Ｃ～Ｄ類	青磁碗Ｄ類。
E区ＳＢ２５	掘立柱建物	坏Ａ・Ｅ類	白磁皿Ⅷ類。
E区ＳＫ５９	土壙	坏Ａ・Ｂ・Ｅ類、皿ａ類	
E区ＳＫ６０	土壙	坏Ａ・Ｂ類、皿ａ・ｂ類	片切彫青磁碗（非掲載）
出雲市ＳＥ０１	井戸	皿Ａ類	肥前系陶器（唐津胎土目、鉄絵）。

Ｄ－２類という前後関係が成り立つ。さて、皿Ａ類であるが、これは、良好な一括資料が出雲市教育委員会による古志本郷遺跡第６次調査区ＳＥ０１（本報告書Ｅ区に隣接する）から出土している。[25] すなわち、ＳＥ０１では皿Ａ類が胎土目唐津皿、鉄絵唐津皿と供伴するのである。これらの年代は１６世紀末～１７世紀初頭と考えられるので、皿Ａ➡皿Ｂ・Ｃの前後関係を認められる。形態的にも、皿類の中でもっとも器高が高く、口径と底径の比が大きいのがＡ類であり、坏Ｄ類との類似性を指摘でき、坏Ｄ類➡皿Ａ類と見てよい。以上のことから坏Ａ～Ｄ類、皿Ａ～Ｃ類について前後関係をでき、それぞれの時期を土師質土器Ⅰ～Ⅵ期と仮称する。それぞれの年代は、土師質土器Ⅴ・Ⅵ期については、肥前系陶磁器との供伴関係から押さえることができる。また、坏Ａ・Ｅ類は松江市黒田畦遺跡、倉吉市広瀬廃寺跡ＳＧ０１出土の皿と類似し、[26] １３世紀後半～１４世紀代と見ることができよう。[27] なお、皿Ｂ・Ｃ類については、基本的には共伴して供伴するので、前後関係は断言できないが静止糸切りの技法が土師質土器Ⅴ期以前には見られないこと、出土する肥前系陶磁器の新しいものほど、Ｃ類が多い傾向が窺われ、Ｃ類がより新相を示している可能性が高い。それぞれの絶対年代はごく大づかみに言って、Ⅰ期が１３世紀後半から１４世紀前半、Ⅴ期が１６世紀末から１７世紀初頭、Ⅵ期が１７世紀中葉以降になる。

Ⅳ期の時期について　問題は坏Ｄ類の時期である。これは次の標識土器である皿Ａ類との形態的差異が大きく、両者の間に相当の時期差があるようにも思えるからである。今回の調査においては、いわゆる京都系の手捏ねの皿類は一点も出土していない。[補註1] 橋本・八峠両氏によれば京都系土師器の山陰地方への伝播一つの波は１６世紀代にあるとされ（前掲論文）、鳥取や出雲東部では類例が確認されている。坏Ｄ類と皿Ａ類の間に未発見の京都系土師質土器の皿が収まる可能性もある。一方で、坏Ｄ－２類の時期は供伴するＣ区ＳＫ２４出土の青磁碗Ｂ－Ⅳ類から、１６世紀前半程度まで降るとも考えられる。

１６世紀代の土師質土器の実像は、なお、資料数の増加を待って再検討する必要があるが、遺跡全体では中国青花、李朝陶器、瀬戸美濃系大窯の皿（第４８図７１・７３）など１６世紀の製品が見られることは、坏Ｄ－２類と皿Ａの間はそれほど時期的にはなれない可能性を示すものであろう。

法量分布表について　次に挙げた表９・１０は、主要な土師質土器出土遺構の出土遺物（実測図掲載分のみ）の法量分布表である。それぞれ若干の時期幅が認められるが、中心となる時期を記載し

た。なお、遺物の残存状況によって、計測できる数値が異なるため、口径・器高・底径で資料数の異なる遺構もある。坏については、Ⅰ・Ⅱ期は器高が高く、口径が小さいが、Ⅳ期にかけて器高が低く、口径が広がる傾向を見せる。皿については、Ⅰ・Ⅱ期は口径が大きく、器高が低いが、Ⅲ・Ⅳ期には、器高が大きく、口径が小さくなり、小型の坏のような形態になる。また、Ⅴ期（皿Ａ類）には大型のものが見られ、Ⅵ期には大小２法量が見られる。今のところⅤ期に、Ⅵ期に見られる皿小の法量のものが見られないが、このことは、Ⅴ期皿Ａの起源が坏Ｄ類にあるのかにかかわると思われ、今後更なる検証が必要である。

Ⅳ－Ⅴ期の間の画期　土師質土器の形態については、Ⅳ－Ⅴ期の間に一つの画期がある。Ⅳ期まで、口径が広くなる動きがあるのに対し、Ⅴ期から口径と底径がほぼ同じになる傾向へ変化する。また、続くⅥ期の皿Ｂ・Ｃには相当量の墨皿、燈明皿がみえ、Ⅴ期以前の皿との間には用途の差があったと見られる。また、Ⅴ期には肥前系陶器（唐津焼）が流入しており、これらの変化には相関関係が認められよう。

（２）中・近世の古志本郷遺跡について

前述のような、土師質土器の編年や、あるいは陶磁器の時代観に基づいて、中・近世の古志本郷遺跡の変遷を追うと以下のようになる。

Ａ期　土師質土器編年Ⅰ・Ⅱ期に該当する。Ｅ区に、本報告中、中近世遺構では最も古いＳＫ６３素掘り井戸跡（土師質土器Ⅰ期に先行する）、その西側に掘立柱建物ＳＢ２４が作られる。この部分はⅢ～Ⅳ期にはＳＢ２３・２５が立てられ、Ｂ期まで遺構が残る。なお、Ａ～Ｄ区ではこの時期の遺物はほとんど見られず、遺構はこの部分には展開していなかったものと思われる。

Ｂ期　土師質土器編年Ⅲ・Ⅳ期に該当する。遺構が調査区全体に広がる時期である。また、近世以降道となるＳＤ２６が掘削される。掘立柱建物で、確実にこの時期のものである、といえるのはＡ区ＳＢ０９・１０、Ｃ区ＳＢ１５・２０で、主軸方位などからＤ区ＳＢ１７・２１もこの時期の可能性がある。建物はＳＢ０９・１０を除くと桁行４間、梁間１～２間の規模で、それぞれ周辺に井戸と断面皿状の土壙を持つ（ＳＫ１０・２８・２４・６１・６２）。さらに、ＳＢ１５とＳＢ１７、２０は溝によって隔てられており、上述の建物、井戸、皿状の土壙などのセットからなる遺構群のⅠ～Ⅴの存在が推定される。このような景観については、高知県南国市の田村遺跡群で報告されている。[28] ただし、田村遺跡では区画が明瞭で、建物数などもはるかに多く、先に述べた土師質土器Ⅳ期の年代幅の問題も合わせて、Ⅰ～Ⅴが同時に併存したか否か、どの程度の期間存続したかについては不明である。この他、Ｄ区の土壙墓群が作られ始め、また、ＳＤ１５も、この時期には確実に機能していたと見られる（掘削時期は不明）。東側落ち込み部の石敷遺構ＳＸ０１が機能するのもこの時期である。

Ｃ期　土師質土器編年Ⅴ期に該当する。Ａ区ＳＢ０２～０４（単一の建物の可能性あり）、同ＳＢ０６、ＳＢ０８、これと方位を同じくするＳＢ０７等、Ｂ期に比べ、変化に富んだ複雑な建物群が立てられる。Ｃ区、Ｄ区では顕著な遺構が検出されない。Ｅ区西側では井戸（出雲市教育委員会調査ＳＥ０１）があり、Ｄ区のＳＥ０９もＢ期から引き続き機能している可能性がある。また、ＳＤ１５は埋没し、窪地状になったと考えられる。

Ｄ期　土師質土器編年Ⅵ期以降に該当する。このＤ期遺構については第２３９図には示していない。

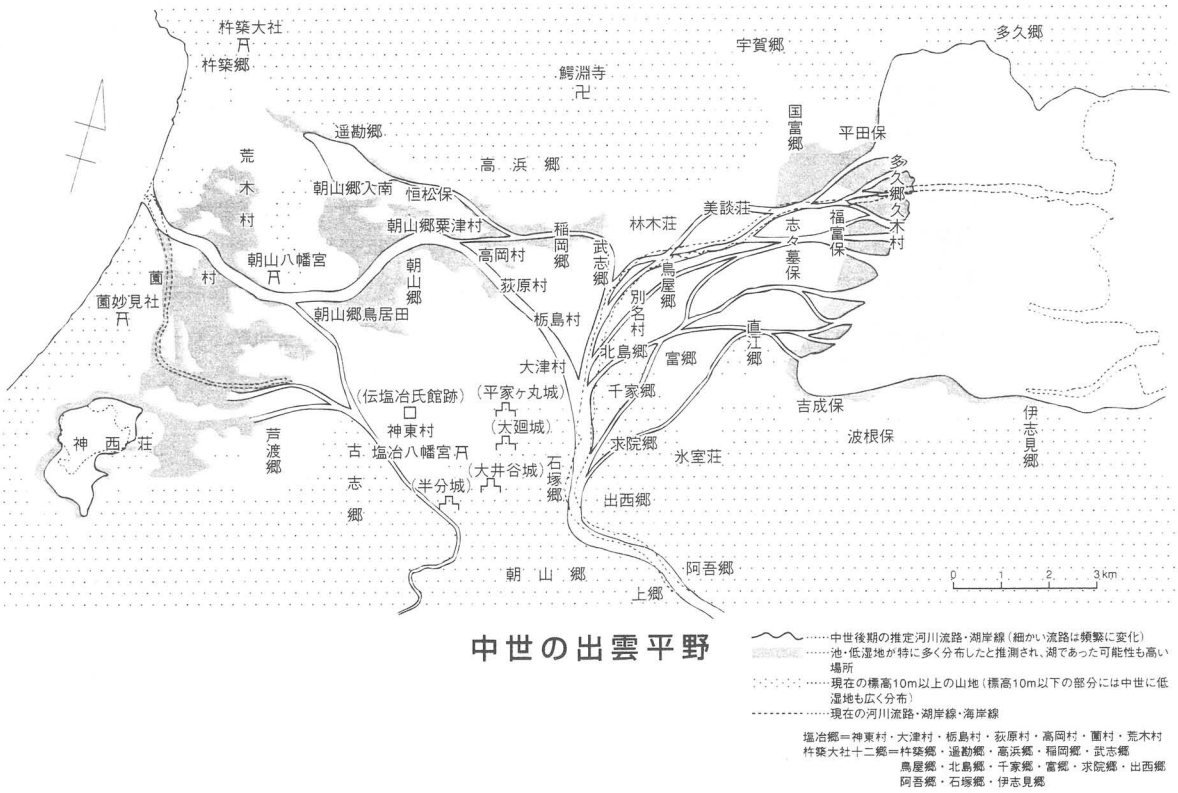
Ａ区ではＡ区ＳＥ０１、ＳＫ０１などがあり、検出された遺構の大部分がこの時期に当てはまるが、Ａ～Ｃ期と異なり、掘立柱建物として確認できるものはないという点が特徴として挙げられる。同調査区の堆積土の大部分もこの時期の遺物を含んでいることから、撹乱を受けている可能性もあるが、掘立柱建物が消失する可能性を想定したい。このことはＤ区でもの同様で、Ⅵ期以降の土師質土器、陶磁器では１８世紀以降の肥前系磁器が大量に出土しているにかかわらず、井戸、土壙などしか検出されない。一方、調査区Ｃ区は上層遺構に見られるように耕地化し、全体に近代・現代に至る景観の基礎が成立したのもこの時期である。

以上のように中近世の様相を把握した上で、以下２、３の点についてふれてみたい。

（３）中世古志氏と古志本郷遺跡

中世の古志本郷遺跡を考える上で興味深いのが、中世の古志氏である。[29] 近年、中世の塩冶氏や「備後古志文書」をめぐって出雲古志氏について検討を加えた長谷川博史氏は以下の３点を指摘する[30]（イ～ハは編集者が付加したもの）。イ守護・戦国大名権力との関係では、尼子氏が「出雲州衆」（帰属した国人衆）でありながら尼子家臣「富田衆」のように扱われ、かつ、強く拘束されていない。すなわち、大名権力からの相対的独自性を持っている。ロ１５世紀以来杵築大社社家と婚姻関係を含む緊密な結びつきを持っている。ハ隠岐国に権益を持ち、１５世紀後半～１６世紀初頭にかけて但馬山名氏と関係するなど、日本海域を通した広範な活動が認められる。

ここで、今回の調査で得られた知見との関係を整理してみたい。まず、イの戦国大名権力（尼子氏）に対する相対的自立性の問題であるが、これは（１）古志本郷Ⅳ期の時期、で述べたように出雲東部、すなわち尼子氏と密接に関わる地域で１６世紀代に見られる京都系手捏ね土師器がみえな



第242図　中世の出雲平野（長谷川博史作図。『富家文書』〔島根県古代文化センター1997年〕P167より転載）

い点と関係する可能性がある。次にハについて、今回の調査で、少量であるが古瀬戸後期の香炉・天目茶碗と思われるものが出土した点が考慮されるべきであろう[31]（第１７図１、第３１図２６、第４８図６９、第４８図７０、第１６０図１３７）。藤澤良祐氏は出土品から古瀬戸灰釉陶器の流通について検討し、前期は鎌倉からに集中して出土するのに対し、中・後期には地方都市、港湾、館跡から出土するようになると述べる[33]。中世古志氏が持つ水運とのかかわり、神戸川河口の杵築大社との政治的連携が[34]（第２４２図）、本遺跡への古瀬戸陶器の流入の背景となっている可能性がある。以上の相関関係は、現段階では憶測に過ぎず、政治的な関係が土師質土器の製作技法分布に関わるのか等問題点が多いが、今後の調査において考慮して良い視点であろう[35]。

（４）正法寺について

Ⅱ　古志本郷遺跡の位置と環境、Ⅲ　第１章でふれたように、Ｄ区には大正１０年まで正法寺が存在した。正法寺は雲陽誌にすでにみえ、１８世紀前半にはこの地に存在したと見られる。『神門郡北方萬差出帳』（宝暦４〔１７５４〕年）によれば「寺四間ニ九間半茅葺…（中略）…右寺内ニ薬師堂有リ方二間茅葺」と見え、本堂と薬師堂が存在した。また、『神門郡寺院明細帳』には僧伝心によって貞治５（１３６５）年に創建されたとの寺伝がみえる[36]。

今回の調査でこれら諸堂の遺構は検出されなかったのは前述のとおりである。また、寺伝に相当する時期の仏教関係遺物や遺構も検出されていない。問題となるのは、明治には墓地とされていた部分で検出した土壙墓であるが（ＳＫ４２～５７）、これも最も古いもので（Ｄ区ＳＫ４６）、古志本郷Ⅳ期に当たり、１４世紀代のものとはすることは出来ない[37]。ただし、正法寺に関連すると見られる土壙墓群が中世後期まで遡ることは確認された。

近世以降の出土遺物を見ると、Ｄ区の出土遺物は同じ１８世紀遺構の遺構・遺物の見られるＡ区とは対照的で、比較的高級な肥前系染付類（第１９２・１９３図、カラー図版２）が多い反面、Ａ区で多く検出された波佐見・内野山などで生産された粗製の皿（第８４・８５図参照）はあまりみえない。古志本郷Ⅵ期の土師質土器も、ほとんどがＤ区で発見され、Ａ区ではごく少量しか見いだし得なかった。また、すでに何度かか述べたようにⅥ期の土師質土器皿には、墨皿、燈明皿が多く含まれている。陶磁器・土器の組成分析など、時間的制約もあって行っていないが、以上の差異は集落的状況と寺院という出土地点の性格に関わると思われ、また近世土師質土器の皿の用途を考える上でも示唆するところとなろう。

註
（１）本節での弥生中期後半～後期前半とは、弥生土器で松本Ⅳ－２～Ⅴ－１様式に当たる時期のことを指している。なお、弥生時代～古墳時代前期にかけての古志本郷遺跡については、田中義昭・西尾克己氏の分析がある。田中義昭・西尾克己「出雲平野における原始・古代集落の分布について」（『山陰地域研究』４　１９８８年）、田中義昭「中海・宍道湖西部における農耕社会の展開」（島根県教育委員会『出雲神庭荒神谷遺跡』１９９６年）。
（２）出雲市教育委員会『古志本郷遺跡第６次発掘調査報告書』１９９８年。
（３）出雲市教育委員会『出雲市埋蔵文化財調査報告書第４集』１９９４年。
（４）田畑遺跡で検出された弥生中期の竪穴建物も、大小２種類各２本からなる４本の柱穴を持つ。ただし、同じ大きさの柱の組み合わせは建物の中心に対して対向する位置ではなく、隣同士である（出雲市教育委員会『神門地区遺跡詳細分布調査報告書』１９８９年）。
（５）小原貴樹「山陰の掘立柱建物」（『弥生時代の掘立柱建物』埋蔵文化財研究会　１９９１年）。
（６）本節で言う弥生時代終末～古墳時代前期とは、土器型式で草田Ⅳ期～草田Ⅶ、松山Ⅰ・Ⅱ期を指す。
（７）松山智弘氏は古墳時代前期における遺跡の衰退を想定している（前掲註２報告書）。
（８）弥生時代の掘立柱建物については、柱間間数が多くなればなるほど、柱間寸法が小さくなることが指摘されている（宮本長二郎「弥生時代・古墳時代の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物』埋蔵文化財研究会　１９９１年）。
（９）梁間２間であること、布堀りであることなどは東出雲町渋山池遺跡ＳＢ０２と類似する（『渋山池・原の前遺跡』　島根県教育委員会　１９９７年。）。
（10）赤木克視「近畿道大阪線における大溝の分布と環濠について」（『弥生時代の環濠をめぐる諸問題』愛知考古学談話会　１９８８年）
（11）この他、出雲市教育委員会による下古志遺跡群（旧正連寺周辺遺跡）の調査で、複数の大溝が検出されている。
（12）口縁端部の度数分布については中川寧氏から御教示を受けた。
（13）なお、ＳＤ１６、１７の甕複合口縁部幅分布表は実測図非掲載の資料を加えて作成した。
（14）口縁端部幅・球胴化率共に、明らかに甕の大小によって異なっており、同一に検討することは出来ないため、このような分類を行った。
（15）奈良時代（大谷出雲７・８期、高広ⅢＢ期）以前の須恵器を含む遺構の様相である。
（16）『大日本地誌大系４２　雲陽誌』雄山閣　１９７１年。
（17）従来、神戸川下流域は円墳主体といわれた地域である。ただし、神戸川右岸では刈山古墳群で２基の方墳が確認されており、皆無ではない（島根県教育委員会『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』１９８０年）。また、左岸では三田谷２号墳（大谷同４期）、大井谷古墳（大谷出雲６期、以上２基については島根県教育委員会『上沢Ⅱ遺跡・狐迫谷古墳・大井谷城跡・上塩冶横穴墓群』１９９８年）、三田谷３号墳（出雲市教育委員会調査、報告書編集中）などが発見されており、三田谷２号墳の存在からＳＸ０４と同じ大谷出雲４期には、横穴式石室を有する小型の方墳があったことが明らかになっている。
（18）報告書では脚部有段高坏については、実測可能なものはすべて実測した。
（19）出雲市教育委員会　『壱丁田遺跡』１９９８年。
（20）出雲市教育委員会　『出雲市埋蔵文化財調査報告書第５集』　１９９５年。
（21）須恵器で高広ⅢＢ期以降が該当する。
（22）山中敏史「官衙遺跡の判定方法」（『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房　１９９５年）。
（23）広江耕史「島根県における中世土器について」『松江考古』８号　１９９２年。
（24）橋本久和「Ⅱ　各地の土器様相　１０．山陰」『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社　１９９５年。八峠興「山陰における中世土器の変遷について」『中世土器の基礎研究Ⅷ』中世土器研究会　１９９８年。
（25）前掲註３報告書。
（26）倉吉市教育委員会『広瀬廃寺跡発掘調査概報』１９７９年。なお土器の類似については、百瀬正恒氏から御教示を得た。
（27）島根県教育委員会『八雲立つ風土記の丘地内発掘調査報告書Ⅰ』１９８４年。
（28）松田直則「田村遺跡群の『溝に囲まれた屋敷跡』」（『中世末から近世のまち・むらと都市』埋蔵文化財研究会　１９９０年）。
（29）古志氏については、後述長谷川氏の研究の他、今岡清「神西城と古志城の城主について」（『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告』　１９８０年）、『古志町誌』（「第三章　荘園制」古志町誌編纂委員会１９９０年）などがある。
（30）長谷川博史「戦国大名尼子氏権力の形成」（『史林』７６－３　１９９３年）、同「中世後期の塩冶氏と出雲平野」（『古代文化叢書』３島根県古代文化センター１９９７年）、同「戦国時代の古志氏」（１９９８年１２

月１３日古志公民館での報告資料)。
(31) 島根県内での古瀬戸出土遺跡としては以下のものがある。松江市天満谷遺跡（前期新段階）島根県教育委員会『北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内　埋蔵文化財発掘調査報告書』１９８７年、広瀬町富田三太良遺跡（後期）「富田三太良遺跡出土の陶磁」『貿易陶磁研究』１　１９８１年、広瀬町富田川河床遺跡（後期）島根県教育委員会『富田川－飯梨川河川改修に伴う富田川河床遺跡発掘調査報告書（４)』１９８４年、広瀬町塩谷遺跡（後期）島根県教育委員会『史跡　富田城関連遺跡群発掘調査報告書』１９８３年、出雲市蔵小路遺跡（前期、間野大丞氏の御教示による)、浜田市横路遺跡（浜田市教育委員会『横路遺跡（原井ケ市地区)』１９９８年)。
(32) 古瀬戸施釉陶器の型式・時期については、藤澤良祐・守岡正司氏から教示を得た。
(33) 藤澤良祐「９、中世陶器〔１〕古瀬戸」(『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社１９９５年)。
(34) 中世杵築大社領については井上寛司「中世杵築大社々領支配の構造と特質」(『大社町史研究』４　１９８９年)。同「中世都市杵築の成立」『大社町史上巻』１９９１年。
(35) 本節は全体にわたって、広江耕史・守岡正司両氏の御教示を得た。
(36) 以上は永田滋史『出雲市の寺々』(出雲市教育委員会　１９９３年）に依った。
(37) ただし、ＳＫ５１・５５には削り出し高台を持つ土師質土器が出土しており、これらの時期は不明で、編年上位置付けを行っていない。

補註1　本報告書脱稿後、遺物の収蔵保管段階で、Ｄ区調査区包含層出土遺物に、京都糸土師質土器皿の小片が一点あることが確認された。

Ⅳ 自然科学的分析

古志本郷遺跡ＳＫ２１・２２埋納桶の土壌分析

帯広畜産大学生物資源化学科　中野益男
(株)ズコーシャ総合科学研究所　中野寛子、長田正宏

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質（炭水化物）および脂質（脂肪・油脂）がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に棲んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと[(1)]、古代遺跡から出土した約２千年前のトウモロコシ種子[(2)]、約５千年前のハーゼルナッツ種子[(3)]に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した。[(4)]

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス（種）が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中ではもっとも多い。その脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合を持つ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物は種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って、出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能となる。

このような出土遺構・遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて古志本郷遺跡から出土した土壙内埋納桶の性格を解明しようとした。

１．土壌および板資料

島根県出雲市に所在する古志本郷遺跡の中で、17世紀のものと推定されている土壙内から出土した埋納桶そのものと桶内外および土壙外の土壌試料を分析した。遺跡内での桶埋納土壙の配置状況は、本文第62図を参照されたい。土壙内外での試料採取地点は図１の１～６に示す。試料No.１～No.４はＳＫ21埋納桶のもので、No.１は桶内土壌、No.２は桶の底板そのもの、No.3-1とNo.3-2はNo.２の底板に付着していた桶の内容物らしいもの、No.４は土壙の掘り方の土壌である。No.５とNo.６はＳＫ22埋納桶のもので、いずれも桶内土壌である。No.７はこれら２つの土壙外地山の土壌試料で対照試料にあたる。これらの試料のうち、No.3-2とNo.5には土壌中に白色の小粒状物質が多く混入しており外観が非常によく似ていた。

２．残存脂肪の抽出

土壌試料27～1347ｇに３倍量のクロロホルム－メタノール(2：1)混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルム－メタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに２回繰り返して残存脂肪を抽出した。付着物を掻き取った後の底板試料№２は、予めベンゼンとメタノールでその表面を洗い流し、最後に土壌試料と同様のクロロホルム－メタノール(2：1)混液をかけながら残存脂肪を抽出した。この試料№２だけは超音波処理は行わなかった。得られた全抽出溶媒に１％塩化バリウムを全抽出溶媒の４分の１容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。

残存脂肪の抽出量を表１に示す。土壌試料の抽出率は0.0025％～0.4064％、平均0.0956％であった。この値は全国各地の遺跡から出土した土壌、石器、土器等の試料の平均抽出率0.0010～0.0100％よりも非常に高いものであった。底板試料№２は本体を直接溶媒に浸漬しなかったのでその重量は測定せず、従って、抽出率も算出されていない。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質で構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール(トリグリセリド)、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

３．残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪の遊離脂肪酸とトリアシルグリセロールに５％メタノール性塩酸を加え、125℃封管中で２時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルを含む画分をクロロホルムで分離し、さらにジアゾメタンで遊離脂肪酸を完全にメチルエステル化してから、ヘキサン－エチルエーテル酢酸（80:30:１）またはヘキサン－エーテル（85：15）を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した。[5]

残存脂肪の脂肪酸組成を図２に示す。残存脂肪から12種類の脂肪酸を検出した。このうちパルミチン酸（C16：0)、ステアリン酸（C18：0)、オレイン酸（C18：1)、リノール酸（C18：2)、アラキジン酸（C20：0)、エイコサモノエン酸（C20：1)、ベヘン酸（C22：0)、エルシン酸（C22：1)、リグノセリン酸（C24：0)、ネルボン酸（C24：1）の10種類の脂肪酸をガスクロマトグラフィー質量分析により同定した。

試料中の脂肪酸組成パターンをみると、大きく２つに分かれた。1つめは主要な脂肪酸がパルミチン酸であるもので、試料№１、№２、№３-1、№４、№６、№７がこれにあたる。２つめは、主要な脂肪酸がステアリン酸であるもので、試料№３-2、№５がこれにあたる。１つめのパターンの中では試料№２のみが他の試料とはやや異なり、炭素数18までの中級脂肪酸がパルミチン酸、オレイン酸、ステアリン酸の順に多く分布しているものであった。他の試料中ではパルミチン酸、ステアリン酸、オレイン酸の順に多く分布していた。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミチン酸を生成するためで、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来ていると推定される。ステアリン酸は動物体脂肪や植物の根に比較的多く分布している。オレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪は特に根、茎、種子に多く分

布するが、動物性脂肪の方が分布割合は高い。オレイン酸はまた、ヒトの骨のみを埋葬した再葬墓試料などにも多く含まれている。リノール酸は主として植物種子・葉に多く分布する。

一方、高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸はそれら３つの合計含有率が試料№２、№３-2、№５で約６～９％、№４で約31％、他のすべての試料中で約16～24％であった。通常の遺跡出土土壌中でのアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸の高級脂肪酸３つの合計含有率は約４～10％であるから、試料№２、№３-2、№５での高級脂肪酸含有率は通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みで、他のすべての試料中では高めで、試料№４では非常に高かった。高級脂肪酸含有量が多い場合としては、試料中に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に特殊な部分が含まれている場合と、植物の種子・葉などの植物体の表面を覆うワックスの構成分が含まれている場合とがある。高級脂肪酸が動物、植物のどちらに由来するかは、コレステロールの分布割合によって決めることができる。概して、動物に由来する場合はコレステロール含有量が多く、植物に由来する場合はコレステロール含有量が少ない。

以上、古志本郷遺跡の試料の脂肪酸組成パターンは大きく２つに分けることができ、ＳＫ21桶試料№１、№２、№３-1、桶外試料№４とＳＫ22埋納桶試料№６、対照試料№７では主要な脂肪酸がパルミチン酸で、ＳＫ21埋納桶試料№３-2、ＳＫ22埋納桶試料№５では主要な脂肪酸がステアリン酸であることがわかった。高級脂肪酸はＳＫ21埋納桶外試料№４に非常に多く、ＳＫ21埋納桶試料№１、№３-1、ＳＫ22埋納桶試料№６、対照試料№７に多めで、ＳＫ21埋納桶試料№２、№３-2、ＳＫ22埋納桶試料№５に通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みに含まれていることがわかった。

４．残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサン－エチルエーテル-酢酸(80：30：１)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジン－無水酢酸(1：1)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にする。得られた誘導体をもう一度同じ展開溶媒で精製してから、ガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を図３に示す。残存脂肪から14～26種類のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど８種類のステロールをガスクロマトグラフィー－質量分析により同定した。

試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは試料№５と№６に約12～20％、№１、№２、№３-2、№４、№７に約４～８％、№３-1に約１％分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは２～６％分布している。従って、コレステロール含有量は試料№５と№６で多めで、№３-1で非常に少なめで、他のすべての試料中で通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであった。

植物由来のシトステロールは、試料№３-1と№３-2に１％前後、他のすべての試料中に約８～20％分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはシトステロールは30～40％、もしくはそれ以上に分布している。従って、試料中でのシトステロール含有量は試料№３-1と№３-2で非常に少なめで、他のすべての試料中で通常の遺跡出土土壌の植物腐植土中でよりも少なめであった。

クリ、クルミ等の堅果植物由来のカンペステロール、スチグマステロールは、すべての試料中に

カンペステロールが約１～６％、スチグマステロールが約１～８％分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはカンペステロール、スチグマステロールは１～10％分布している。従って、試料中でのカンペステロール、スチグマステロール含有量はすべて通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みであった。

微生物由来のエルゴステロールは試料№３-1と№３-2で痕跡程度しか検出されなかったが、他のすべての試料中には約0.3～1.7％分布していた。この程度の含有量は土壌微生物の存在による結果と考えられる。

哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは、試料№３-1に約91％、№１、№２、№３-2に約28～40％、№６に約10％、他のすべての試料中に約３～４％分布していた。コプロスタノールは通常の遺跡出土土壌中には分布していないが、１％程度の量は検出されることがある。また、コプロスタノールの分布により試料中での哺乳動物の存在を確認することができる他に、コプロスタノールが10％以上含まれていると、コプロスタノールとコレステロールの分布比から試料中に残存している脂肪の動物種や性別、また遺体の配置状況などが特定できる場合がある。今回は桶内試料№１、№２、№３-1、№３-2にはコプロスタノールが非常に多く含まれており、特に底板付着物試料№３-1はステロールのうち大半がコプロスタノールで占められていた。ＳＫ21埋納桶埋納土壙の掘り方土壌試料№４、ＳＫ22埋納桶内試料№５、２つの桶埋納土壙外対照試料№７のコプロスタノール含有量は通常の遺跡出土土壌の植物腐食土中でよりは多めであるが、他の試料よりも少なめであった。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壙で0.6以上[7]、土器・石器・石製品で0.8～23.5をとる[8・9]。また、コプロスタノールとコレステロールの分布比からは動物種が判定でき[6]、ヒトの場合コプロスタノールとコレステロールの分布比は成人男性が4.25、成人女性が2.75である。試料中のコレステロールとシトステロールの分布比を表２に表す。表からわかるように、分布比は試料№４と№７が0.6以下であったが、他のすべての試料は0.6以上であった。このことは試料№４、№７のような桶外や土壙外から採取した試料中には動物遺体または動物由来の脂肪が残存している可能性が少なく、他の桶内から採取した試料中にはその可能性があることを示唆している。また、コプロスタノールが10％以上含まれている資料についてコプロスタノールとコレステロールの分布比を算出すると、試料№１と№３-1はコプロスタノール含有量が多すぎて分布比も大きな値になったが、試料№２は3.58、№３-2は4.23であった。コプロスタノールとコレステロールの分布比が男性の値に近いか、それよりも高いことや、試料№３-2がＳＫ21埋納桶の底板に付着した白色の小粒状物質であることを考えると、ＳＫ21埋納桶には男性の遺体が埋納されていた可能性が考えられる。

以上、古志本郷遺跡の試料中に含まれている各種ステロール類は、動物由来のコレステロールがＳＫ22埋納桶内試料№５、№６に多く、哺乳動物の腸もしくは糞便由来のコプロスタノールがＳＫ21埋納桶内試料№１、№２、№３-1、№３-2に非常に多く含まれていた他は、すべて通常の遺跡出土土壌中の植物腐植土並みか少なめであることがわかった。コレステロールとシトステロールの分布比はＳＫ21埋納桶とＳＫ22埋納桶内試料がすべて0.6以上で、これらの試料中には動物遺体または動物由来の脂肪が残存している可能性があることを示唆している。コプロスタノールとコレステロールの分布比はＳＫ21埋納桶内試料№２が3.58、№３-2が4.23であったが、試料№３-2が底板に付着

していた物質であり、値もヒト男性の値に非常に近いことを考えると、ＳＫ21埋納桶には男性の遺体が埋納されていた可能性が考えられる。ステロール分析によるコレステロール含有量と脂肪酸分析による高級脂肪酸含有量の関係をみると、多めに含まれていた高級脂肪酸は植物体の表面を覆うワックスの構成分由来のものである可能性が高い。

５．脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料の類似度を調べた。同時に出土土壙を土壙墓と判定した兵庫県寺田遺跡[10]、出土土器を幼児埋葬用甕棺と判定した静岡県原川遺跡[11]、ヒトの体脂肪、出土土壙を再葬墓と判定した宮城県摺萩遺跡[12]、ヒトの骨油試料など、各種遺跡試料や現生試料との脂肪酸の類似度も比較した。予めデータベースの脂肪酸組成と試料中のそれとでクラスター分析を行い、その中から類似度の高い試料を選び出し、再びクラスター分析によりパターン間距離にして表したのが図４である。

図からわかるように、古志本郷遺跡の試料№１、№２、№３-1、№４、№６、№７は原川遺跡、寺田遺跡の試料と共に相関行列距離約0.1以内でＡ群を形成し、よく類似していた。古志本郷遺跡の試料№３-2と№５はそれらのみで相関行列距離0.05以内でＣ群を形成し、非常によく類似していた。対照試料はＢ群、Ｄ群を形成した。これらの群のうちＡ群とＢ群は相関行列距離0.2以内の所にあり、互いに類似しているといえる。試料№３-2と№５が形成するＣ群は近くに類似する試料がなかった。

以上、古志本郷遺跡のＳＫ21埋納桶の底板付着物試料№３-2とＳＫ22埋納桶内土壌試料№５に残存する脂肪は、類似する脂肪を特定できなかったが、他のすべての試料中に残存する脂肪は、ヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの体脂肪と類似していることがわかった。ＳＫ21埋納桶の桶外試料№４と対照試料№７も桶内土壌試料と類似しているが、これは桶内での遺物残存量が少ないために通常の植物腐植土の影響を強く受けているためと考えられる。

６．脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸（炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸、リノレン酸まで）と高級脂肪酸（炭素数20のアラキジン酸以上）との比をＸ軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をＹ軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第１象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第１象限から第２象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第２象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第２象限から第３象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第３象限から第４象限にかけての原点から離れた位置に海産動物に由来する脂肪が分布する。

試料の残存脂肪から求めた相関図を図５に示す。図からわかるように、試料№４が第１象限内に位置したが、全体的な群としては試料№１、№２、№３-1、№６、№７と共にＡ群を形成し、第１象限から第２象限内の広い範囲に分布していた。試料№３-2と№５も第２象限内に分布し、Ｃ群を形成した。これらの群の分布位置は、試料中に残存する脂肪が高等動物の体脂肪や骨油に由来することを示唆している。

以上、古志本郷遺跡のすべての試料中に残存する脂肪は、高等動物の体脂肪や骨油に由来することがわかった。

7．総括

古志本郷遺跡から出土した土壙内埋納桶の性格を判定するために、埋納桶そのものと桶内外および土壙外の土壌試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪の脂肪酸分析、ステロール分析、脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果、ＳＫ21・22埋納桶に残存する脂肪はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる遺跡の試料やヒトの体脂肪と類似しており、特にＳＫ21埋納桶にはヒト男性遺体が埋葬されていた可能性が高いことがわかった。

参考文献

（１）R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle：「Food identification of samples from archaeological sites」，『Archaeo Physika』，10巻, 1979, pp260.

（２）D.A.Priestley, W.C.Galinat and A.C.Leopold：「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」，『Nature』，292巻, 1981, pp146.

（３）R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle：「Analyse frühgeschichtlicher Gefäβ- inhalte」，『Naturwissenschaften』，70巻, 1983, pp33.

（４）中野益男：「残存脂肪分析の現状」，『歴史公論』，第10巻（６），1984，pp124.

（５）M.Nakano and W.Fischer：「The Glycolipids of Lactobacillus casei DSM 20021」，『Hoppe-Seyler's Z.Physiol.chem』，358巻, 1977, pp1439.

（６）中野益男：「残留脂肪酸による古代復元」，『新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』，田中　琢，佐原 眞編，クバプロ，1995, pp148.

（７）中野益男，伊賀 啓，根岸 孝，安本教傅，畑　宏明，矢吹俊男，佐原 眞，田中　琢：「古代遺跡に残存する脂質の分析」，『脂質生化学研究』，第26巻，1984，pp40.

（８）中野益男：「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」，『真脇遺跡-農村基盤総合整備事業能都東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書』，能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団,1986, pp401

(9) 中野益男, 根岸 孝, 長田正宏, 福島道広, 中野寛子：「ヘロカルウス遺跡の石器製品に残存する脂肪の分析」,『ヘロカルウス遺跡』, 北海道文化財研究所調査報告書, 第3集,1987, pp191.

(10) 中野益男, 中野寛子, 福島道広, 長田正宏：「寺田遺跡土壙墓状遺構に残存する脂肪の分析」,『未発表』, 兵庫県芦屋市教育委員会.

(11) 中野益男, 幅口 剛, 福島道広, 中野寛子, 長田正宏：「原川遺跡の土器棺に残存する脂肪の分析」,『原川遺跡Ⅰ-昭和62年度袋井バイパス（掛川地区）埋蔵文化財発掘調査報告書』, 第17集, （財）静岡県埋蔵文化財調査研究所, 1988, pp79.

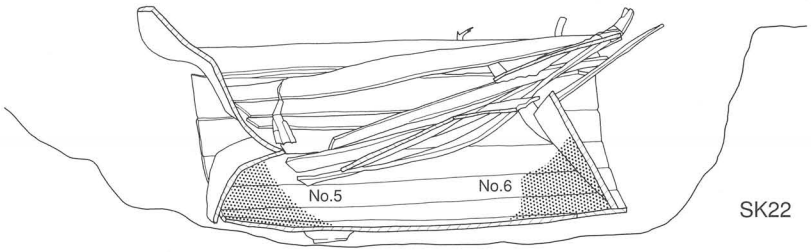
(12) 中野益男, 福島道広, 中野寛子, 長田正宏：「摺萩遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」,『未発表』, 宮城県教育委員会.

表1　試料の残存脂肪抽出量

試料No.	試料名	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
1	桶153 桶内土壌	1347.1	109.8	0.0082
2	〃 桶の底板	重量測定なし	10.3	−
3−1	〃 底板付着土壌	792.2	436.8	0.0551
3−2	〃 〃	26.6	108.1	0.4064
4	〃 土壙掘り方土壌	1144.1	56.0	0.0049
5	桶154 桶内土壌	211.8	230.4	0.1088
6	〃 〃	640.6	533.1	0.0832
7	土壙外地山土壌	1345.5	33.0	0.0025

表2　試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料No.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレステロール／シトステロール
1	5.71	8.84	0.65
2	8.31	17.67	0.47
3−1	0.91	0.86	1.06
3−2	6.62	1.87	3.54
4	3.60	13.32	0.27
5	20.39	7.65	2.67
6	12.18	17.67	0.69
7	5.16	19.99	0.26



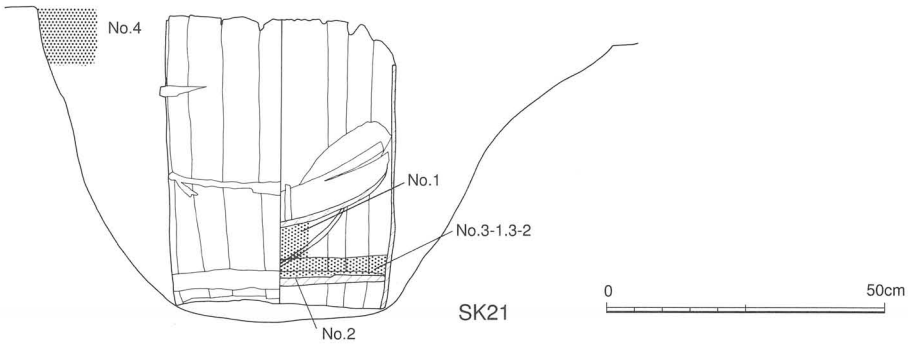


図1　SK21・22土壌試料採集地点

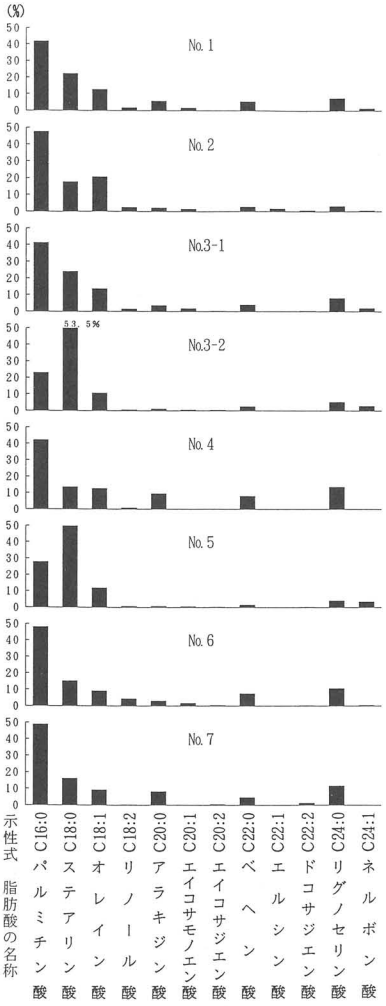


図2　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

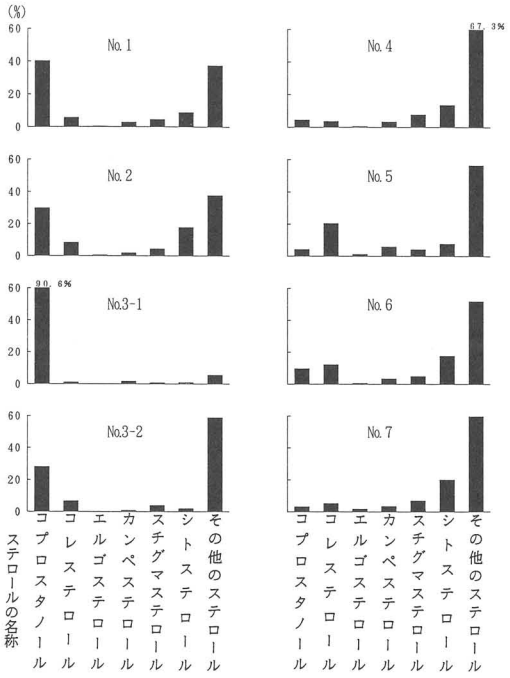


図3　試料中に残存する脂肪のステロール組成

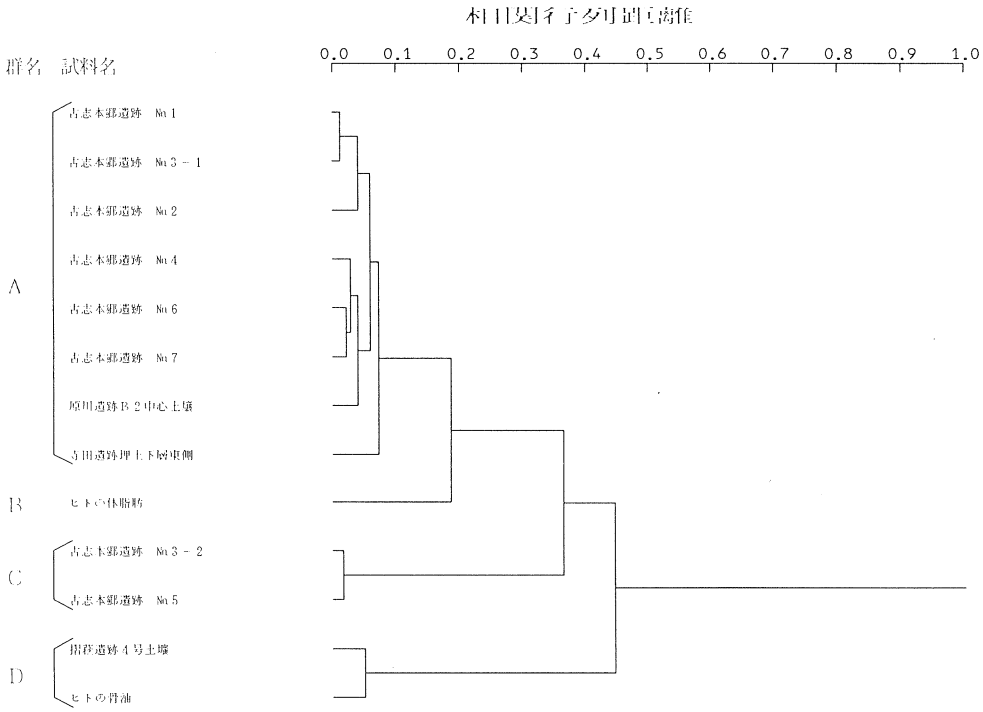


図4　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図

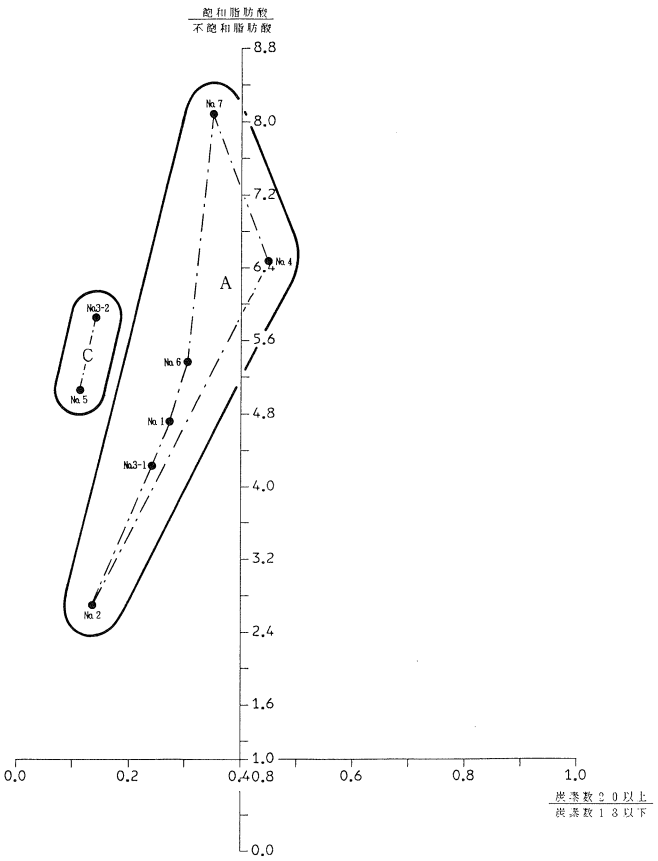


図5　試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

古志本郷遺跡発掘調査に伴う花粉分析

川崎地質株式会社（担当者：渡部正巳）

はじめに

古志本郷遺跡は、島根県中部の出雲市古志町内に分布する遺跡であり、三瓶山の東南に水源を持つ神戸川が出雲平野に形成した扇状地上に位置する。

本報告は島根県教育委員会が遺跡周辺の古環境復元のために川崎地質株式会社に委託した分析調査報告書の概報である。

また近年、出雲平野内では発掘調査に伴い花粉分析が積極的に実施されつつある（たとえば、川崎地質（1998））。しかし、現在得られている資料から平野内および周辺地域の植生変遷を積極的に論じることは、資料数が少なくまだ不可能である。今後資料の蓄積を待って、出雲平野および周辺地域の植生変遷を総合的に解析する必要があり、本報がその一助になれば幸いである。

分析試料について

分析した試料は島根県教育委員会との協議の上、川崎地質株式会社が採取したものである。図１に試料採取地点を示す。図２～７の柱状図右側の数字が試料番号で、採取深度に示した。

分析方法および分析結果

（１）分析方法

処理を渡辺（1995）に従って行った。顕微鏡観察は光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本化石も同定した。

（２）分析結果

花粉分析結果を図２～７の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは、同定した木本花粉総数を基数にした百分率を各々の木本花粉、草本花粉について算出し、スペクトルで表した。また、右側の総合ダイアグラムは、針葉樹花粉、広葉樹花粉、草本花粉、胞子総数の比を百分率で示し、累積ダイアグラムで表したものである。

分析の結果すべての試料から花粉化石が検出されたものの、含有量が少ないためにほとんどの試料で統計処理に十分な量の花粉化石が検出できなかった。また、統計処理を行った試料では顕著な花粉組成の変化が認められなかったことから、今回の解析では花粉分帯（地域花粉帯の設定）を行わなかった。

花粉化石の含有量の少ない原因について

花粉化石の含有量の少ない原因について、通常は以下のような事が考えられている。

１．堆積速度が速いために、堆積物中に花粉化石が含まれない。

２．花粉化石の平均的な粒径（数～100μ）と堆積物の粒度が著しく異なり、堆積物中に花粉化石が含まれない。

3．土壌生成作用にともなう堆積物で、堆積速度が極めて遅く、堆積した花粉化石が紫外線により消滅した。
4．花粉化石が本来含まれていたが、堆積後の化学変化により花粉化石が消滅した。
5．有機物に極めて富む堆積物で花粉以外の有機物も多く、処理の過程で花粉化石が回収できなかった。

今回の多くの試料では、炭片が多く含まれていた（試料観察で試料が有機質に富んでいたのは、このことに起因すると考えられる）。さらに、土壌生成作用を受けた際に含まれる土壌菌も多く認められるほか、古土壌中で高率になることの多い胞子化石も相対的に多い試料があった。また、分析試料の多くは砂質堆積物であり、A区深堀地点の下部の試料は凝灰岩質であった。このような試料の状況から、花粉化石の含有量の少なかった主な原因として、上記の1～3が指摘できる。

堆積年代について

今回の分析地点№と遺構名、試料№と堆積年代（出土遺物による）の関係は表1のようにまとめられる。

このことから、花粉化石の検出できた6試料のうち、5試料が古墳時代後期（6C後半～7C）の堆積物、1試料が江戸時代前期（16～17C）の堆積物であることがわかる。

古植生の推定

（1）遺跡近辺

弥生時代中期に堆積したと考えられるSD40の試料№2,1では、検出された花粉化石総数が少ないものの、イネ科（40ミクロン以上）花粉の出現率が高い。また、これに続く時期の堆積物中からもイネ科（40ミクロン以上）花粉が連続して高率で検出される。これらのことから、遺構が検出されていないものの、遺跡近辺には弥生時代中期以降水田が広がっていたと考えられる。また、古墳時代の堆積物中からはソバ属花粉が検出されることから、水田の畦や休耕田にソバが栽培されていたと推定できる。これに対し江戸時代からの堆積物からはソバ属花粉が検出されず、ソバの栽培がほとんど行われていなかったと考えられる。一方、江戸時代の堆積物からはアカザ科－ヒユ科花粉が多量に検出される。アカザ科－ヒユ科には水田・畠雑草が多く含まれるが、ホウレンソウなどの野菜も含まれ、江戸時代の一時期に遺跡周辺が野菜畑となった可能性が指摘できる。

（2）周辺の森林植生

木本花粉は一般に飛散距離が長く、草本花粉に比べ遠方の植生を示す。したがって検出された木本花粉の多くは遺跡南～東方に広がる中国山地縁辺部、西方の砂丘あるいは島根半島南側の植生に由来すると考えられる。

今回統計処理を行った試料の全てで、マツ属（複維管束亜属）花粉が卓越する。一方、宍道湖周辺地域でマツ属（複維管束亜属）が近世以降に卓越することはあるが、古墳時代にこれほどの高率を示すことはない（大西、1993）。このことから今回認められた古墳時代でのマツ属（複維管束亜属）花粉の卓越は、遺跡周辺の限られた地域での植生を反映したものと考えられる。遺跡西方約4㎞には出雲國風土記に記される「薗の松原」があり、砂丘にはクロマツ海岸林が存在したことが明らか

である。したがって、マツ属（複維管束亜属）の供給源がここである可能性がある。一方で同様の現象は、遺跡南～東方の中国山地縁辺部にアカマツ二次林が分布していたと仮定しても説明可能である。このように、現状では古墳時代に卓越するマツ属（複維管束亜属）の供給源を判断することは、困難である。今後周辺地域での調査が進み資料が蓄積されて、明らかになろう。

一方、江戸時代には出雲平野周囲の丘陵～山地はアカマツ二次林で覆われていたと考えられる。また古墳時代に認められるスギ属花粉は、中国山地縁辺部の谷間に分布したスギ林に由来すると考えられる。

まとめ

古志本郷遺跡において実施した花粉分析結果から、以下のことを考察した。

（1）花粉化石の含有量が少なかった原因について考察した。考察は以下のとおりである。

① A区深堀地点下部の試料については堆積速度が速いことが主な原因と考えられた。

② そのほかの試料では、堆積粒子のサイズが粗く花粉化石粒子が含まれにくかったこと、土壌化により花粉化石が消滅したことなどが主な原因と考えられた。

（2）古墳時代と江戸時代の古植生復元を試みた。これらのうち、特筆すべき点は以下のことである。

① 古墳時代以降、古志本郷遺跡近辺には水田が広がっており、古墳時代にはソバ栽培も行われたと考えられる。一方江戸時代には、ホウレンソウなどの野菜が栽培されていた可能性が指摘できる。

② 検出できたマツ属（複維管束亜属）花粉は、出雲國風土記に記される「園の松原」のクロマツ海岸林のほか、遺跡南から東方に続く中国山地縁辺のアカマツ二次林に由来する可能性がある。

引用文献

川崎地質株式会社（1998）「小山遺跡周辺の古環境」『小山遺跡第２地点発掘調査報告書』77-90. 出雲市教育委員会.

大西郁夫（1993）「中海・宍道湖周辺地域における過去2000年間の花粉分帯と植生変化」,『地質学論集』39 33-39.

渡部正巳（1995）「花粉分析法」『考古資料分析法』84 85, ニューサイエンス社.

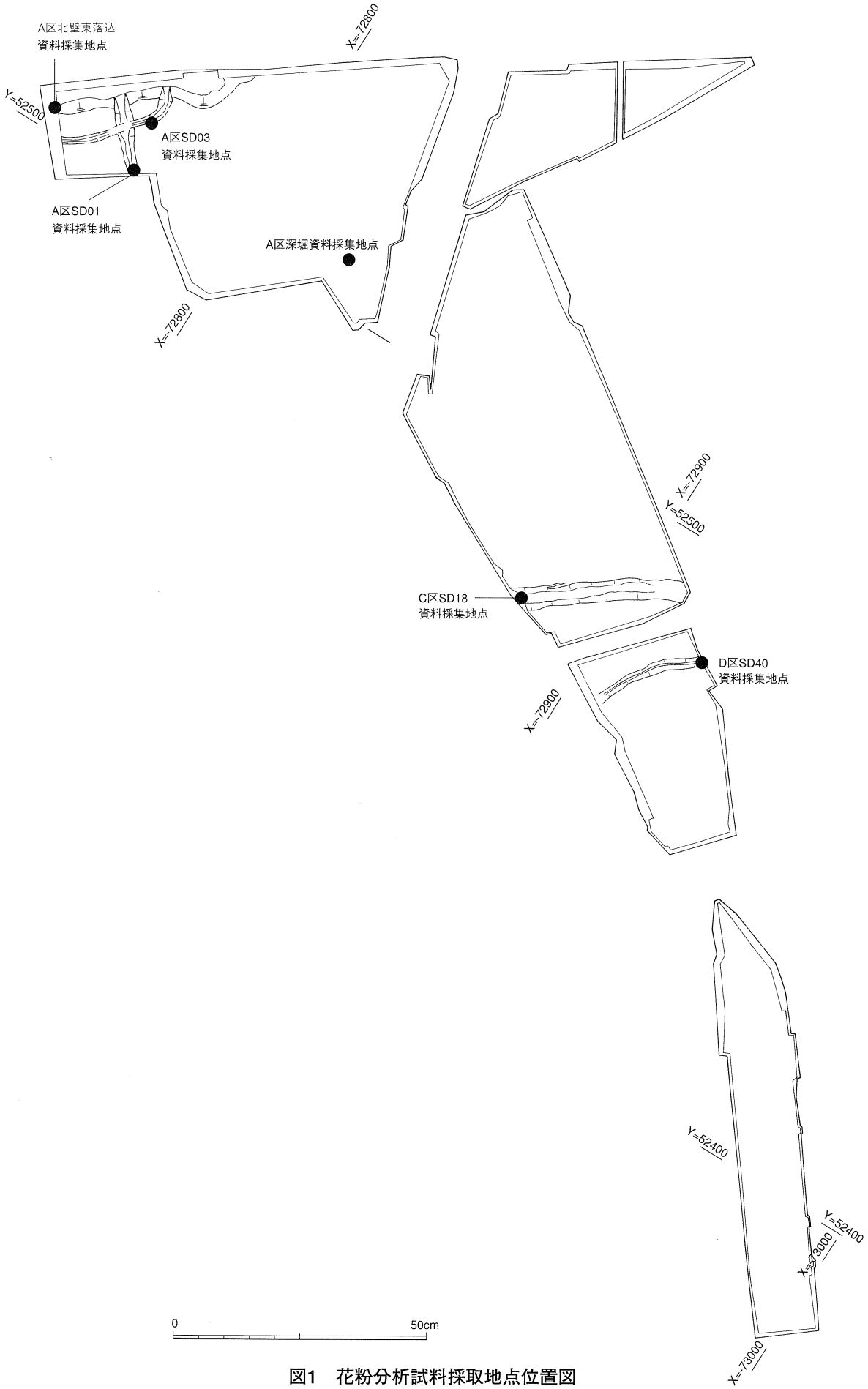


図1　花粉分析試料採取地点位置図

図2　A区深堀　花粉柱状図

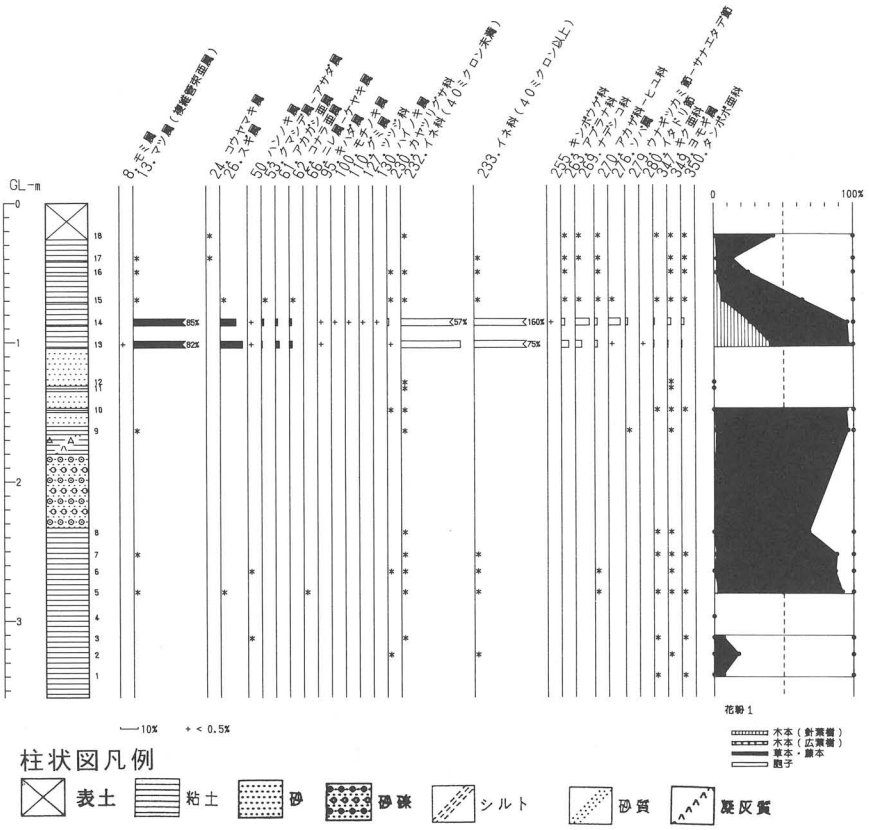


図3　A区　SD03　花粉柱状図

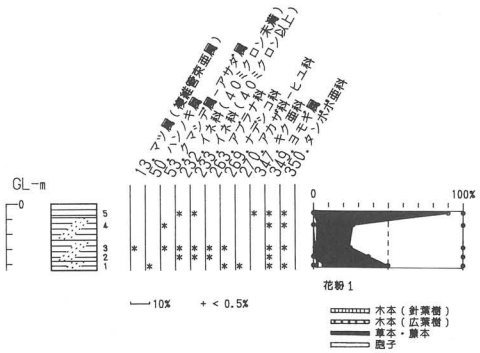


図4　A区SD01　花粉柱状図

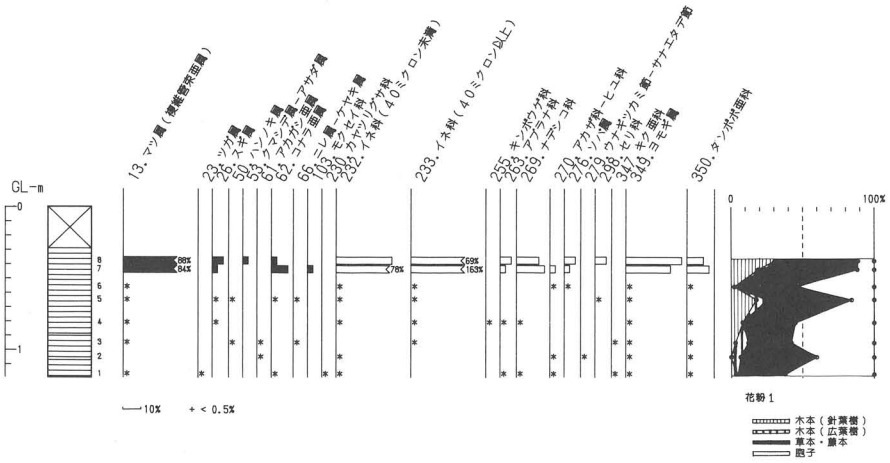


図5　A区北壁東落込　花粉柱状図

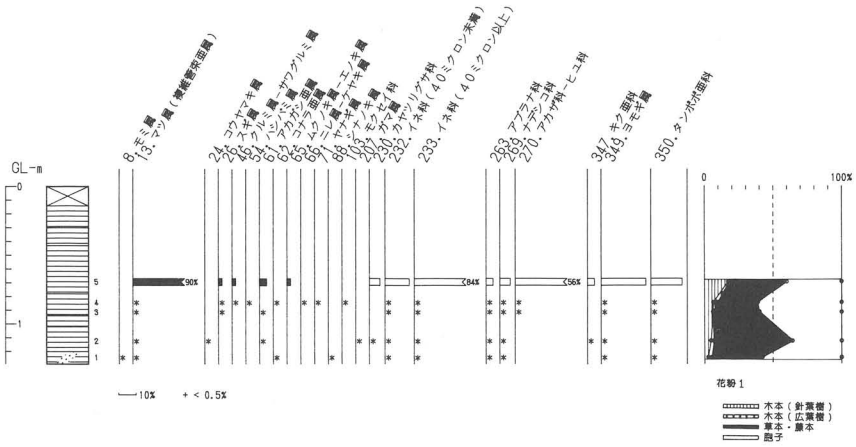


図6　C区SD18　花粉柱状図

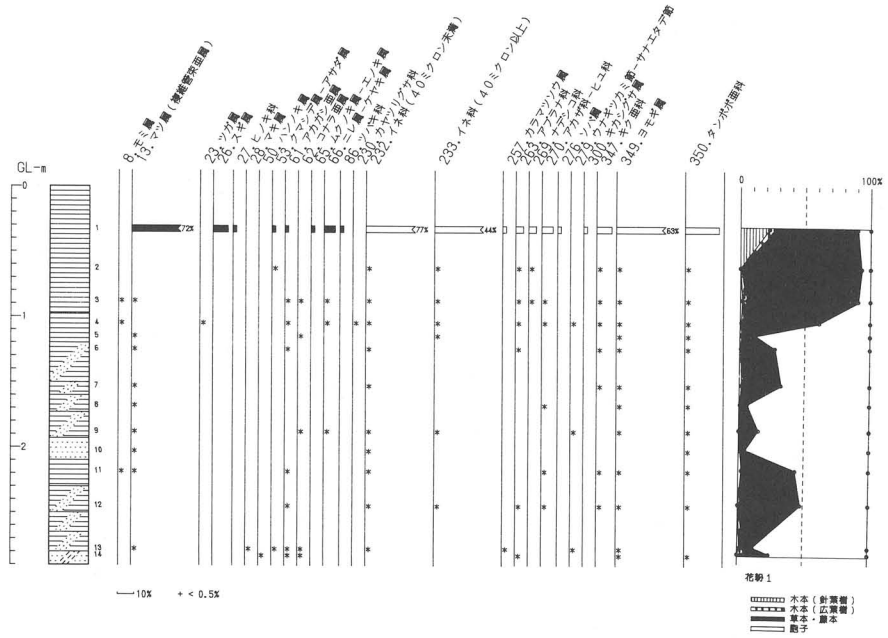
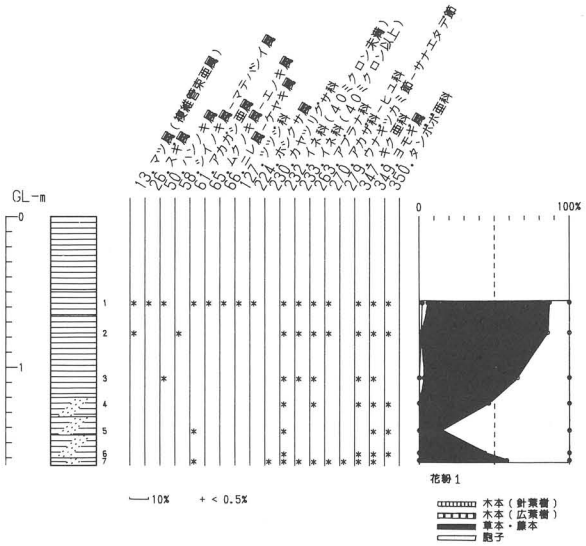



図7　D区SD40　花粉柱状図